Rotary
Youth
Leadership
Awards
Seminar

第18回　RYLAセミナー報告

1996.3.28~3.31

於）神戸YMCA余島野外活動センター

目　次

プログラムのねらいと内容 …… 1
セミナースケジュール …… 2

開講式　ごあいさつ　篠原成行 …… 3
松岡通夫 …… 8
佐藤成俊 …… 10
オリエンテーション …… 12
オープニングパーティー …… 13
キャビンタイム …… 14

2日目講義　松原哲明 …… 15
レクリエーションタイム …… 47
キャンプファイヤー …… 48

3日目講義　渡辺和子 …… 54
フォーラム …… 85

4日目講義　梶浦暲一 …… 125
今井鎮雄 …… 135
閉講式　ごあいさつ　森　滋郎 …… 151
佐藤成俊 …… 153
篠原成行 …… 155

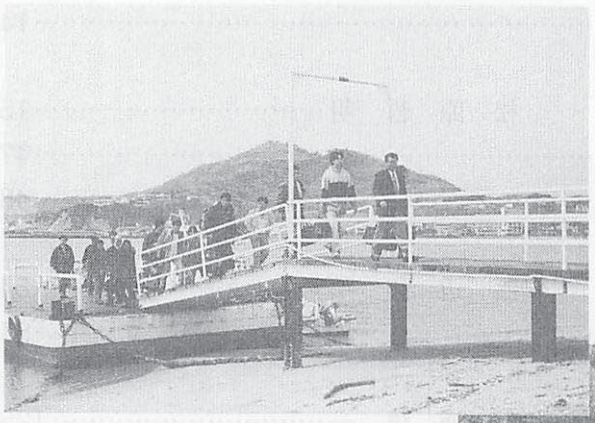
参加者感想文
A　班 …… 157
B　班 …… 170
C　班 …… 182
D　班 …… 192

参加者名簿 …… 204
第18回RYLA委員会 …… 208

プログラムのねらいと内容

RYLAセミナープログラムのねらいは、受講生に5つの特色を味わって貰うことにあります。

1) 高レベルの講義と討論
2) キャビンタイム（親睦の熟成）
3) 自由と規律
4) 余島の自然
5) カウンセラーシステム



セミナースケジュール

	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3月28日									開講式 オリエンテーション			オープニングパーティー	キャビンタイム				
3月29日	朝食	松原哲明師			昼食	●植樹 ●レクリエーション（ヨット・テニス・ソフトボール・アーチェリー他）						夕食	キャンプファイヤー キャビンタイム				
3月30日	朝食	渡辺和子氏			昼食	思索の時間	バズセッション					夕食	フォーラム キャビンタイム				
3月31日	朝食	今井鎮雄氏 梶浦暲一氏			閉講式 昼食 離島												

開講式

ディーン
篠原成行氏
（北条RC）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました今年ディーンという役をおおせつかりました篠原と申します。私の所属しておるクラブは愛媛県北條という所にあるクラブでありまして、メンバーは24人しかいない小さいクラブであります。ですから、何でもやらないかんというクラブでございます。

私なんか、肩書きいっぱいついておりますけれども、委員会なんかほとんどできないですね、人数がいないから。そんなクラブからやってまいりました。

さっそく、このディーンなんていうと難しいといいますか、余り聞き慣れない肩書きがついたわけでございます。これを辞書で引いてみますと、大学なんかで学部長だとか、学生部長だとかという訳がついております。英国では、教会なんかの祭り事をする長、ということを書いてあるんですねえ。ということは、何か皆さんの上に立つような感じでありますけれども、私は、自分で皆さんのお世話役だと思っておりますので、そのようにご認識をしていただいて、いろいろと何でも声をかけ相談してもらいたいと思います。

ライラのことだけと限ったわけではありません。何でもかまいませんから、どんどん話をしてほしいなと、かように思っております。

私の役目は、このロータリー用語の説明と、それとこれからロータリーの皆さんがお世話をされるものですから、ロータリー用語といって特別な用語がいっぱいあります。RIだとかガバナーだとか、余り聞き慣れない言葉だと思いますので、ロータリーの話を少ししながら、それなんかの説明を最初にしておきたいなと、かように思います。

一昨年だったですかね。一昨年から大体、皆さんのクラブでライラに参加される人にはこれだけのことをやってほしいという、講話先生に作っていただいた冊子を送っておるわけでありますので、今度は皆さんは一応、ロータリーの教育といいますか、ロータリーというのはこんなものだという教育はされておるものと大体思っておるんですけれども、なかなかロータリークラブというのは、委員会の話というのは、クラブでやっていただけませんので、おそらくお聞きになってないんじゃないかなと。あるいは、まだクラブ

へ行ったことのない人もおいでるんじゃないかなと思いますので、少しお話しておきたいと思います。

このロータリークラブは、1905年にポール・ハリスという青年弁護士が3人の仲間と始めた、というのが起源になっております。その当時はアメリカのシカゴで始まったわけでありますが、その当時は非常な経済恐慌の中で、血で血を洗う争いが随分あったというぐらいな、その経済恐慌の中で心がすさんでおったわけでありますが、これは何とかせないかん、ということで、自分たちだけでもいい生活ができないかなあ、ということで始まった、ということなんです。

ロータリーという言葉自身は、持ち回りで事務所、あるいはお店で、会員の所を持ち回ってやるローテーションという言葉が訛ってロータリーとなったと、私聞いておりますが。最初にポール・ハリスが始めた時に、なかなかいいことを考えられたと思うんですね。1業種1会員制ということを考えられた。といいますのは、同じクラブの中で業種の違う人だったら、いろいろ腹を割って話しができる。しかし、同じ業種の人が入ると、どうも競争意識が出て殺伐としてくる。ということで、最初に1業種1会員制ということをいわれたということを聞いておりますけれども。

そういうふうにして1業種1会員がどんどん広がっていって、皆さんが仲間うちで商売やる、ものを売り買いする。だんだん仲間うちは非常によくなってきたわけですね。

かなり評判にもなってきたんだと思いますけれども、そうやっているうちに、あるメンバーをそのロータリークラブに入れようと勧誘に行った。その相手がドナルド・カーターという男だったんだそうでありますけれども、その彼が、自分たちの中だけでいいようなクラブへおれは入らないと。それは大変エゴイスチックな団体だと、こういうこと。エゴですね。自我といいますか。エゴイストな団体、そういうようなところへおれは入らない、と言って断られた。

これでポール・ハリスは考えたんですね。これではやっぱり、どんどんこの運動は広がらない。そこで助け合いを、コミュニティーっていいますか、地域社会で助け合いができるような、そういうクラブにならんといかん、ということを言い出した。そこで奉仕の概念というのができてきたわけです。それが一番、このロータリークラブの原点といいますか、大きくなっていく原点になったと思っております。

今、ロータリークラブは親睦のエネルギー、皆さんが集まって例会で、あるいは親睦会をした中での親睦のエネルギーを、世のため人のために使おうじゃないか、という流れの中で、こういうライラなんかもやっておるわけであります。

大きな流れはそんなことでロータリークラブというのは全世界に広がっていったということであります。細かい話は、またあとで今井パストガバナーにお願いするとして、以上でロータリーの流れは終わりたいと思いますが、現在150ヶ国にロータリークラブは

あります。今は共産圏がだんだん少なくなりましたから、ソビエトにもロータリークラブができたんですかね、もうできております。ロータリークラブは世界的に広がっておるわけでありますが、約150ヶ国、広がっております。そしてメンバーは120万人以上おるんだそうであります。

ちなみに日本はどうなんかなといいますと、1920年、大正9年でありますが、三井銀行の重役でありました米山ウメキチさんという人が、東京ロータリークラブを創立しました。そして1921年に認証を得まして、世界で第855番目のクラブとして、日本で初めてこのロータリークラブというのが誕生したということです。現在、クラブが2140以上あります。そして、メンバーが12万8000人といいますから、1ヶ所へ集めればすばらしい人数になっておるわけであります。

そういうメンバーを、どういうふうな管理、管理というのはちょっとおかしいかも分かりませんが、やっておるかと申しますと、一番大本になるのが我々RI、RIと言っておりますが、ロータリー・インターナショナル、国際ロータリーという事務所がアメリカのイリノイ州のエバンストンという所にありますが、これ　が世界のロータリークラブの連絡調整機関というような名称で言っておりますけ　れども、RIというのがあります。

それを、運営を構成しておるのが理事会というのがあるわけでありますが、その理事には、あとでまたご紹介申し上げますけれども、今井パストガバナーが現在、活躍をされておるわけであります。

そして国際ロータリーというのは、全体的にそういうような全ロータリークラブの頂点といいますか、一番上の部分でありますけれども、その下に地区というのがあります。地区には全部、背番号がついておるわけでありますが、このライラは2680地区と2670地区の共同で行っておるということを、この資料にも書いてありますけれども。

2680地区というのは兵庫県であります。そして2670地区というのが、この四国四県が一つの地区になっております。そして、その地区にガバナーというのがおるわけです。これはRI、国際ロータリークラブの役員として、その地区の管理、監督をしておる。監督まではどうかと思いますけれども管理、監督をしておると。それが、ガバナーというのが各背番号のついた地区に一人ずつおるわけであります。

そして、その人たちの仕事というのはどんなことかといいますと、ロータリーの基本的な部分を皆さん、各クラブがきちんとしておるかなあ、ということを管理、監督しておるわけであります。この基本的な部分というのはどういうことかと申しますと、週1回の例会をちゃんとやっておるかなあとか、あるいは、先ほど言いました1業種1会員制をきちんと守っておるかなあとか、こういうことを管理、監督しておるわけであります。

そして、年々にRIの会長がいろんな活動目標を出しますが、その活動目標を各クラブがちゃんとやっておるかなあ、ということを管理するというのが、このガバナーの役目

であります。

この毎年出しておる目標をちゃんとやっておるかなあ、というところが非常に難しくて、私なんかも、じゃあ何年間の間どういう目標でやっておったんかなあ、と言われると、ぱっと思い出せませんので申しわけないんですけど、思い出せませんので、ここのところが、なかなかうまくいってないんじゃないかな、と思いますけど。一応、そういうことをガバナーというのは各クラブがちゃんとやっておるかなあ、ということを管理、監督するRIの役員であります。

そのガバナーには、次にガバナーになられる方、ノミネートされている方というのでガバナーノミニーというのが、来年度、今年の7月から就任されますノミニーというのがおります。そして、ガバナーを終えられた方をパストガバナーといいます。またあとでパストガバナーの方が何人か見えておいでますので、紹介の時にその言葉が出てまいりますけれども、パストガバナーというのはガバナーを一度経験された方ということであります。

それからその下に、ガバナーの活動を助けるために各委員会というのが、地区委員会というのがございます。いろんな委員会がありますが、例えばクラブ奉仕委員会だとか、職業奉仕委員会だとか、あるいは社会奉仕委員会だとか、国際奉仕委員会だとかありますが、その中の一つにこの青少年奉仕委員会というのがあります。それがこのライラを企画運営しておるわけでございます。

最後にこの余島のライラというのはどんなのかなあ、というのをかいつまんでお話し申し上げておきますと、余島のライラは18年前に、その当時は2680地区にショウさんというガバナーがおいでました。そして2670地区がここへ来ておいでますけれども梶浦パストガバナーと、こちらで座られておりますが、あとでまたご紹介しますが、今井パストガバナーと、この3人がここで始められたのが始まりであります。

そして、このライラの特徴というのは、両地区が一緒にやっておるということがまず一つあります。それとカウンセラー制度を取り入れておると。皆様のお世話をされるカウンセラーの方が、各キャビンに配置されております。ロータリアンとロータリアン夫人のワン・ペアずつが各皆さんのグループに一組ずつ配属されておりますが、その方々が皆さんのお世話をするということであります。

この方々は、昨夜も今井先生の方から教育をちゃんと受けておりますので、皆さんも何なりと、皆さんの邪魔は決していたしません。しかし相談ごと、いろんなことがあれば、どしどし言ってサゼスチョンをしてもらいたい。サゼスチョンしてくれるはずですので遠慮なしに質問をしていただきたいなと、かように思います。

特にこの余島のライラは、青少年指導者の技術を教えるのではなくて、心を学んでほしいと、心を勉強してほしいというのが我々の第一目標でございますので、どうか技術的

な手法というのはほとんどありませんけれども、講義の中で、あるいはロータリアンと接する、あるいはカウンセラーと接する中で、心というのを学んでほしいと、かように思っております。

そして、この3泊4日が皆さんの生涯の友をつくる、あるいは、これから地域社会へ帰って、皆さんがここで学んだことを地域社会に伝える、そういう役目をしていただければ、我々のライラの意義があるのではないかと思っておりますので、どうかそんなつもりで、この3泊4日を有意義に過ごしていただきたいなと思います。以上です。(拍手)。

R. I. 第2680地区
ガバナー　松　岡　通　夫
（神戸RC）

皆さん、こんにちは。先ほどディーンの方がご説明なりましたように2680地区、これ兵庫県全県の地区になっております。それのガバナーをしております松岡でございます。所属は神戸ロータリークラブでございます。

ライラというのは、どういうものかというのを、ディーンの方がるるご説明になりましたので、私から今さらとやかく言うことはないと思うんですけど、ただ一つだけ私、申し上げたいと思うんです。

ロータリーって何をするんだ、ということでございますが、ロータリーというのは決して私、思うんです。寄付団体ではない、奉仕団体ではない、と私思っております。というのは、ロータリーというのは、何を目的にしてるんかといいますと、地域社会の中に人間のぬくもりのある社会をつくりたい、思いやりが少しでも分かち合える社会をつくりたい、これがロータリーの基本だと思っております。

したがいまして、こういうライラとか、あるいはいろんなことで、そういう考え方を少なくとも次代の方、あるいは次の青年に、どうしても伝えていきたい。なぜならば、私たちは年いっていずれ死んでしまうんです。そうしますと次の世代、私どものロータリーだけど決して今いい世界はできておりません。やっぱり次の社会に託さなくちゃいけない。そういう意味も込めて、私たちの地域社会の思いやりのある社会、そういうものをつくるという心を少しでもくみ取っていただいて、次の方がやっていただければなあ、と願うのが一番大きな願いじゃないかと私、思っております。

したがいまして、ディーンの方もおっしゃいましたけれども、私どもがやってますライラというのは、こうしたら皆さん方、若い人を上手に育てられますよとか、あるいは、こういうことをやればもう少し指導者としてうまく点数が上がりますよと、こういうことを教えるんではないんじゃないかな、と思っております。と申しますのは、私ども去年、阪神大震災がございまして、私、神戸でございますので、激震地の真ん中にいたわけでございますが、その時、私一番感じましたのは、その時ガバナーノミニーでございまし

たが、すぐガバナーノミニーとしてあちこち、今井先生の所へ教わりに行ったり、いろいろしました。

その時に一番感じましたのは、やっぱりライラの卒業生の方、ライラ卒業生だけじゃございませんけど、特にライラの卒業生の方が、私に言われた言葉があるんです。
3年か4年前にライラでいろんな話を聞いてきたと。でもその時は私、余り印象に残らなかったんですわと。話聞いたけどしんどかっただけやなあとか。あるいは友達ができたのが嬉しかったとか、まず最初おっしゃいました。でも、本当にそれが役に立つかどうかというのは、はっきり分からなかった。でも、こういう大震災になった時に、ああ、あれだ、ということをはっきり思い出したと。本当に私、そういうことを聞いて、ライラというのはいいな、と思っております。そういうことも込めたことで、この3日間、皆さん方どうか、まず最初に友達をつくっていただく。友達になりませんと、言いたいことも言えませんから。本当に出会いを楽しんでいただいて友達をつくっていただく。それと同時に、私どもが用意しております先生方のお話を聞いていただきまして、少しでも、何かでもお持ち帰り願いたい。何か一つでも胸の中に印象を残してお持ち帰り願いたい。そして、地域社会にお帰りになりまして、それを今すぐじゃなくてもいいから何かの機会に、ああ、そうだと、こういうことが役に立ったんだな、というようなことになっていただいたら、非常にありがたいと思っております。

そういうことでございますので、足かけ4日間、十分いろんなことで楽しんでいただきたいと思います。私は勉強せよとは申しません。楽しんでいただきたい。その中で何かを一つでも持って帰っていただけたらありがたいなと、こう思っている次第でございます。

最後に、このライラをいろいろお世話願いました、今年は佐藤さんのところ、2670地区のお世話でやっていただきました。ディーンの方、あるいはアドバイザーの方、カウンセラーの方、本当にどうも、いろいろありがとうございました。(拍手)。

R. I. 第2670地区
ガバナー　佐　藤　成　俊
（徳島西RC）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきましたように第2670地区の佐藤でございます。

きょう、こういう席で、こういうライラを催すことができましたのは、人生の一つの大きな節目じゃないか、というふうな気もいたします。きょうから、今お話がありましたように4日間のライラ・セミナーでございますが、わがこの国際ロータリーの、私たちの誇りとするところの理事でございます今井先生を始めといたします、こうしたたくさんの先生方がご指導していただけるわけでございまして、私たちのこの青少年の皆さんと一緒にいろいろの勉強をさしていただく、という機会を与えていただきましたことを、私は非常にありがたいと、このように思っておりますし、また、たくさんの方々がご参加たまわりましたこと、厚くお礼を申し上げます。

皆さんもご承知のように、このライラというのは、大体兵庫県の関係でございます。ただ今ガバナーのお話がありましたように、2680地区と共催で実施いたしておりますので、今回が先ほど言いましたように18回目でございます。ライラの目的ということは、若い皆さんの、どうリーダーとして養成するか、そういう養成せられる立場になって、あるいはこのセミナーの特色は、ロータリアンと青少年がともに参加するということに大きな意義があるわけでございます。

その場所、環境、そして日ごろのご家庭の問題等を含めまして、社会生活ということから一歩離れて、この孤島でございます余島で青い海を、あるいは緑を、自然の中で勉強さしていただくわけでございます。

このセミナーを通じまして、皆さんには諸先生のお話をちょうだいするわけでございまして、非常に感銘深いお話をいただく。と同時に、また、いろいろの皆さんがお友だちをつくり上げ、こういうことで意義のある4日間じゃないか、と思っております。

特に今回のセミナーは、人間の心というところの問題を取り上げております。人間のいわゆる幸せは何か。即ち世界の平和のすべてが各人間の心が根本であると、このように

いわれております。

私、そういう心という問題に対しまして、一言最後に申し上げたいわけでございますが、幸福になれる心、5つ申し上げたいと思います。

皆さんご存知かもしれませんが「はい」という素直な心。皆さん、よくお使いになると思いますが、「はい」という素直な心。そして二つめは「すみません」というところの反省の心。そして三つめは「おかげさまで」という謙虚な心。そして「させていただきます」というところの奉仕の心でございます。これは、させていただきます。してあげます、というんじゃなくて、させていただきます、こういう心が、いわゆる奉仕の心でございます。最後は「ありがとうございます」という心は感謝の心でございます。

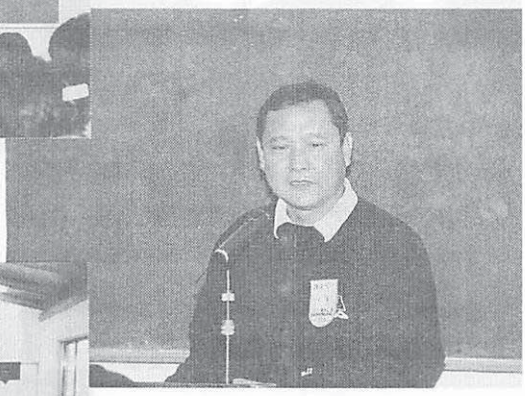
皆さん一人ひとりがお幸せになるためには、こういう、あいさつといえばあいさつ、心といえば心でございます。

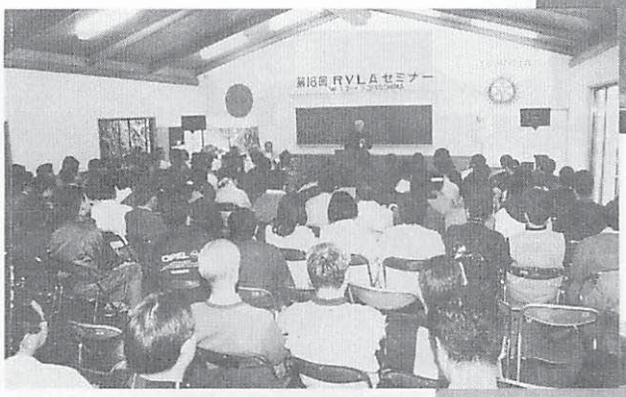
どうぞ、こういうことを皆さんがしっかりと心に勉強していただいて、そしてこれが今後の皆さんの生涯の生活の中に大きなお役に立てることをお願いしたいと思います。

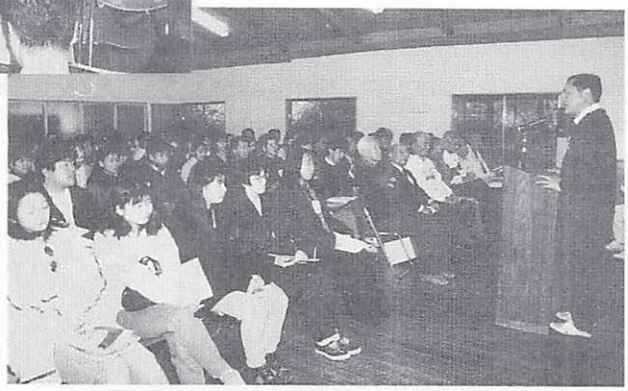
この4日間、皆さんが全員でお元気で実りのある4日間ということになりますように心からお願いを、お祈りを申し上げまして、はなはだ簡単ではございますが、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)。

第18回 RYLAセミナー
'96 3.28→3.31 YOSHIMA

第18回 RYLAセミナー
'96 3.28→3.31 YOSHIMA




第18回 RYLAセミナー



オープニングパーティー

キャビンタイム

2日目講義

「乾かない心」

龍源寺住職
松原哲明師

ご紹介いただきました松原です。まず二つ言い訳がしたいんですが。今、目を患ってるんです。花粉症じゃありません。トラホームでもありません。現在タクラマカン砂漠、ゴビを中心としてあこがれの男、玄奘三蔵法師の跡を追っかけをしておりまして、50回ぐらい行ってるんですが、数年前、強烈な砂嵐にあいまして、カラブランというんですけれども、黒い嵐、前が全然見えなくなっちゃう。それで私も目をやられて、以来、午前中は全然駄目なんです。涙がぼろぼろぼろぼろ出て、止めようにも止められないんですよ。ですから、はっきり言い訳しておかないと、中には言う人がいるの。あいつ、きざな坊さんだなって。泣きながらしゃべってるって（笑い）。そうじゃないんです。止まらないんです、砂のために。

ところが、このお坊さんの涙目っていうのは、案外女心をつかまえるみたいよ（笑い）。東京駅に銀の鈴っていうデートの場所があるんですよ。あそこに日本人の女性なんですけども、40ぐらいかなあ、サリーを着ているんです、インドの民族衣装のサリー。で、手にかごを抱いてる。すごい真っ赤な口紅してるのよ。遠くから見るとね、金魚をくわえてるのかなあって、そんな感じの人なの。かごをこうやってて、本を数冊持ってる。そしてカモがいたら売りつけてやろうって、そういう人相しているわけ。

そういうのにつかまると面倒くさいものですから、なるべく見つからないようにさーっと逃げたんだけど、何せこの格好でしょう。簡単につかまっちゃって皆のいる前で大声で私を呼ぶんだよ。「お坊さん、お坊さん」て。「なんだ」って。「私ねえ、宗教の人間なんですけど、うちの宗教の本を500円で買って」って言う。私言ったの。「おれは宗教ってのは嫌いなんだ」って（笑い）。「グループで何やってるんだ」って。宗教というのは、本当は人生哲学なんだから、自己で哲学することなんだから。それにねえ「はっきり言っておくけど、宗教っていうのは怖いよ」って。だから僕は皆に言ってるんだ。「近づくな」って。だって「下手に入ったら抜けられなくなるぞ」って。「おれなんか抜けられなくて困ってるんだ」って言ってやったの（笑い）。

そしたらあの人、攻め方変えたんですよ。きたない。「それにしても目のきれいなお坊さんね」と言うんで、うれしくなって1000円やっちゃったんですよ（笑い）。そういうちぐはぐなところが禅宗のいいところなんですよ。建て前と本音の違うところがあります。

もう一つ言い訳しますと、私ちょっとぼけているんです。時差ぼけ。実は数日前までパラグアイとボリビアにいたんです。知ってます？パラグアイとボリビアって。皆でこの余島のあとで食事をする時に、ついでにずっと掘ってからにしたまえ。どんどんどんどん掘っていくと、原則的には地球の向こうに出るわけでしょう。そこがボリビアとパラグアイ。そこに200人ぐらいの青年海外協力隊の隊員が、向こうで養護隊員とかね、植林、植樹、野菜隊員、看護婦さん、そういった隊員が200人ぐらいいる。そこをね、視察してこいと言ってJICA、国際協力事業団の委嘱を受けまして、団長で行ったの。本当は団員一人なんですけどね。

遠いんですよ、パラグアイとボリビア。19：00成田発、ロスで一度給油するんですねえ、ここまでが10時間。私は飛行機とか、そういうのは乗るのが苦痛じゃないものですから成田で乗って目を開けたらサンフランシスコの上空だったですからね、楽だったですよ。それから今度、ロスから熱帯のサンパウロへ行くわけです、ブラジル。それからボリビアに入っていく、サンタクルス。これ今40度。だから帰ってきて、この寒さっていうのは、ちょっとこたえるよ。おまけに髪の毛ないしさ（笑い）。

それで、サンタクルスから727に乗って、1時間で恐怖のラパス空港につく。ボリビアの首都ラパス。この空港が山のてっぺんにあるんです。標高が4100メートル。これはきついですよ。これはねえ一気に1時間で4100上がっちゃう。というのは、まず高山病になる。爪の中が真っ白になりますからね。ほとんど皆な倒れちゃう。僕は5000メートル超えた経験があるから、走らない、無駄口しゃべらない、なるべく動かない、水をたくさん飲む、H2OでOが入っているから。そうやってやったから私は大丈夫だったけど、一緒に行った人は倒れちゃった。それから、また200メートル登るんですよ、4300。

降りて富士山の高さの所にオルロという街がある。そこの、僕は小池隊員という隊員に会った時に、女の子です、小池ハルミちゃん、25歳。この子が養護施設で養母をしてるんですねえ。で、僕に全部案内してくれて、こちらが3歳のダウン症の子供です、こちらが4歳のダウン症の子供です。そしてもう少しちょっと大きくなってこちらは心身に重度の障害のある子供たちです。あそこにいらっしゃる一番大きな娘さんは18になりますけど、あの娘さんが実はこの養護施設の園長さんの娘さんなんです。園長先生がお母さんなんですよ。

自分の産んだ子供が障害を抱えてるわけでしょう。そしてお母さんは、当然そのお嬢さんよりも先立たなければいけないわけですよね。その時、自分のもうけたかわいいかわ

いい娘さん、その障害を持ったその子の将来をお母さんは案じたんですよねえ。私は胸一杯になっちゃったですよ。そして、そのお母さんは貧しいものですから、仲間とかいろんな所へ行って、いわゆるお布施をしてもらって、そして養護施設を造ったわけです。

そこに、10名ぐらいのボリビアの心身障害者たちの養護のために、25歳の小池さんが養護なさっている。養護施設ですからお金なんかないですよね。鉛筆だってまともに買えないんだもの。だから僕は、ちょっとお金を置いてきましたけれども。「鉛筆買って下さい」って置いてきましたけれど。

クーラーもない。それから扇風機もありません。しかし、外の気温は40度です。その中で化粧一つしてないですよ、小池さん。うっすらと汗を浮かべながら。日本人の25歳のこのお嬢さんが、ここからここまで2日間かかる、そういう地球の裏側まで行って、日本人の子供じゃないですよ。ボリビア人の子供の心身障害者の子供たちに、そこに自分の青春と自分の人生を投げ出しているという姿は、感動して帰ってきたんですよねえ。これだけは伝えなくちゃいけないと思って。

だって、私の家のすぐそばは渋谷よ、東京の。あそこ、今、ヘソ出しルックで女の子歩いていますよ。どうかなっちゃっていますよ、日本。本当にどうかなっちゃっている。みんないいのは青年海外協力隊で世界へ出て行っちゃったのかもしれない。8000人ぐらい出てますからねえ。そこで、ああ、小池さんというのは、きっと将来、青春を振り返った時に、ああ、自分は案外いい青春してきたなって、そう思うと思ったですね。

実は、きょうはそのことについて、いろいろと皆と勉強したいと思うんですよ。私はね、東京の三田の生まれなんです。芝で生まれて芝で育った、江戸っ子なんです。ちゃきちゃきの江戸っ子です。三代続いてますからねえ。そこのお寺の17世に生まれたわけです。17世。

この世という字はどういう意味かというと、三十という字からきたんです。一世を風靡するというと、30年頑張ればいいわけね。よって、うちの寺は17×30で大体500年の歴史がある。そこのたった一人息子なんですよ。たった一人の御曹司としてお生まれになったわけです。だから蝶よ花よと大事にされたわけ。と同時に囲りの人は、哲明さんは将来はこの龍源寺の跡取りになるんだってみんな思っている。そういうの、すごくいやだよね。

僕だって、せっかくの一生だもの、いろんなことやってみたいよ。いろんなことやってみたい。バスの運転手さんもいいし、船乗りさんもいいし、そして世界を駆け巡ってみたいなと思っているのに、あんた、お寺の跡取りと決められたら、やる気なくすよ。「おれ、お寺跡継ぐのいやだ。すきなことさしてよ」と言って僕が出ちまうと、17世がいなくなっちゃう。そうすると外から17世を補充しなくちゃいけない。

だれでもそうだけど、新しい人が来るのに古いのがごじゃごじゃいたら、新しい人やり

にくいから、新しい人が来るためにうちの両親も寺を出なくちゃいけない。私の夢を実現するとすると、両親まで引っ張り出さなければいけない。そこまでして自分のすきなことやるかっていったら、できないよね、それは。

じゃあ今度、考え方を変えて、お寺継ごう。その時に一つ出会った言葉があるんですよ。これは禅宗ではなくて日蓮宗を開いた日蓮の言葉で「まず臨終の事を習うべし。のちに他事を習うべし」。日蓮さんの言葉ですね。日蓮宗を始めた日蓮さん。まず臨終の事を習うべし。のちに他事を習うべし、と言ったのが日蓮上人。

これは、臨終っていうから、ずばりストレートに言えば死ですよね。まず死ぬことを考えろ。人間は必ず死ななくちゃいけないということを考えろ。そして、そのあとからそれ以外のことを習ったらいいんだ、というんだけど、これちょっとあんまりストレート過ぎない？

そこで私は、自分でちょっとこれをリライトしましてね。「まず自己の晩年をイメージして生きる」と書きかえてみたんです。まず自己の晩年をイメージして生きる。僕はどれぐらい生きられるか分からないけど、体が弱くて5回入院して手術もしているから、そうは長くはないでしょうけどね。その自分の晩年になった時に、私、いつも思うんだけど、ああ、われながらいい人生したなって、そう言いたいんですよ。われながらいい人生だったなあって。

そういう気持ちは中学校の時からあったし、ああ、いい中学時代を送りたいなあって。だから、こういう島に渡って中学1年生でキャンプやったり、高等学校もあとで振り返った時に、いい高校生だったなあって。大学時代も、ああ、いい大学時代だったなっていうようにやっていけば、充実していけるんじゃないのかなあ。

ああ、いい人生だったなって言いたい。そのために他事を習うべし。どうやったらいい人生になるのかなあ。充実してみたいなあ。いや晩年、きらきら輝いていたいなあ、そう思っているんです。いつもきらきら輝いていたいな、と思ってねえ。でも、なかなか輝けないから頭そってるわけです（笑い）。充実して生きてみたいなと。充実という字を分解すると、どうなっちゃう。中が実で満たされるっていうことですよねえ。そうでしょう。中が実で満たされている。じゃあ、実を結ぶためにどうしたらいいんだ。花咲かせりゃいいんだ。一世を風靡する。じゃなくて、花のある、そういう時を迎えたいですよねえ。

花が咲くためには、芽を出さなくちゃいけない。芽出すためには、種まかなくちゃいけない。よって、まかぬ種は生えないから奇跡はないっていうことですよねえ。順番を踏んでいかないと結論が出てこない。一気に解決はしないんだっていうことですねえ。一種類の種をまけば一種類の実しかならない。だったら多種類の種をまけば多種類の実が実って豊かになるんじゃないですか。

そしてロウソクのように燃えてみたいなあ。ロウソクのように燃え尽きていってみたいなあ。そのためには信念を持つんですよねえ。信念を持って、そして灯をともして、汗水たらして、涙のこぼせるような、そういう人間になってみたいなあ。そんなことを、いつも海外協力隊、でしゃべっているんですねえ。

きのう東京で教育委員会がありまして、東京都の教育委員会と港区の教育委員会の今年度の子供の教育指針について、というのが出ていた。そこに出ているのは知性と感性、広い知性と豊かな感性を持った子供たちに育てたい、と言うから私はちょっと大きな独り言を言わせてもらいますよって。だから、こんなことをやってるから日本の教育が駄目なんだって。もっと大切なことが抜けてる。理性だ。しっかりした理性。それから、きちっとした徳性と。

何でもできるかと思って、人間が米一粒つくることができない。天から太陽がそそいで、地がそれを支えて、栄養分を持つ。天と地の力があって、初めて自分たちが生きていけるという、そういう人間の目に見えない力というものを、感謝できる冷静。こういったものをきちっと小学生や中学生に教えてほしい、と言ったんです。

そして、ついでに言っておきました。校長先生もずっといましたがね。昨日は任命式だったか、校長先生に言った。「中学の校長先生、3年間中学生に授業を教えていらっしゃるけれど、3年間のうち、たった10分でいいから僕に時間をくれませんか」って。そして「中学生のための人生哲学っていうものを僕、話してやりたい」って言ったんですよ。

種をまかないと芽が出ないんだ。芽が出ないと花が咲かない。そういった詩を書いた人が四国にいらっしゃいます。「一本の道を」という詩です。坂村真民先生。松山市砥部町に住んでいらっしゃる。現役の詩人ですね。

「木や草と人間と、どこが違うのだろうか。みんな同じなのだ。一生懸命に生きようとしているのを見ると、時には彼等が人間よりも偉いとさえ思われる。彼等は、時がくれば花を咲かせ、実を実らせ、自分を完成させる。それに比べて人間は、何一つしないで終わる者もいる。木に学べ、草に習えと、私は自分に言いきかせる。今日も一本の道を歩いていく」。

すばらしい詩ですよねえ。なぜすばらしいか。難しい言葉を一つも使ってない。そして、物の本質に迫っている。お話でも文章でもそうですよ。難しくしゃべるのは簡単なの。自分の分からないことをしゃべっていればいいんだもの。だから聞いてる者は何が何だか分かんないでしょう。あれは、自分自身が聞いていて分かんないなっていうのは、講師が全然分かってないの。一番難しいのは、こういうやさしい言葉でずきーんと自分の琴線にふれるような、それが本当の力のある人ね。

木や草と人間と、どこが違うんだ。みんな同じだ、一生涯一回だ。ワン・アンド・オンリーなんだ。だから、時がくれば花を咲かせ実を実らせ、自分を完成させようとしてい

る。それに比べて人間は何一つしないで終わる。なぜ、何一つもしないで終わるのか。それは、私は一体何しに生まれてきたのか、を解決してないからですよね。人は何しに生まれてきたんだ。

いや、もっと身近に、私は何しに生まれてきたんだ。それ解決してないでしょう。だから「木に学べ、草に習えと。私は自分に言いきかせ、今日も一本の道を歩いていく」。ああ、そうか。じゃあ一本の道を歩いていきゃあいいんだ。じゃあ、私はお坊さんとしてきらきら輝いて充実して、ロウソクに燃えていくためには、そのように生きたお坊さんの所へ行って、「どうしたら、あなたみたいに燃えて生きられるんですか」って。「どうしたら、あなたみたいに充実できるんですか」って、そこまで行って尋ねて学んで、それを習っていけばいいわけですよね。

じゃあ、私の大先輩でロウソクのように燃えた男、玄奘三蔵の跡を追っかけよう、といって今、タクラマカンとゴビに行ってるんです。玄奘三蔵法師。この人は、西暦602年生まれで、西暦629年、27歳の時に単身中国を出て行った。「うそ、孫悟空がいたじゃない」。あれは西遊記の物語。でも、玄奘さんはたった一人で行ったんですよ。そして16年かかって43歳で帰ってくる。距離にして2万6000キロの道があるんです。

じゃあ、玄奘を追っかけようか。今、追っかけているんです。玄奘さんの、僕ファンですしね。なぜファンになったかというと、テレビで夏目雅子さんがやったでしょう。私、夏目雅子のファンだったから、追っかけやってるんですよ。

それが、ただのコースじゃないんです。平たいコースじゃない。すごいコースなんです。毎年、僕10回ぐらい。ああ、今年は10回以上行くけども。今度、一緒に行きませんか。

まず略図を書きますね。天山山脈。天山山脈の長さはどれぐらいか、2000キロ。分かりやすく2000キロってどこか、というと青森を入った車が熊本の料金所でお金を払うと2000キロ。曲がっている日本列島をぎゅっと伸ばしたような感じですね。幅が400キロ。いやな山よ、この山は。一度登ったら、あと降りなきゃならないんだもの。それが400キロ続いているんです。ノコギリの歯のような山。全部、氷の山でしょう。平均5000メートルですからねえ。とんがっていて、格好いいですよ、あの山。槍ヶ岳よりもずっと格好いいなあ。ガイドに聞くわけです。「あの山なんというんですか」。「先生、この辺は山ばっかしなものですから、5000メートル以下の山には名前がありません」。「何言ってるの、うちのそばには300メートルで愛宕山ってのもあるぜ」って言ったんですけどねえ。一番山、高いのがポペタ山で7600メートル。こちら側にパミールがきます。K2、知ってますか。カラコルムで2番目に高いからいうんですよ。ヒマラヤの次。ナンガパルバット、白き女体、8000メートルですねえ。ディラン、ラカポシ、ムスタガータ、コングールなんて8000の山があります。だから、こっちへは行けないわけ。

2日目講義

ここは中国では葱嶺というんです、玉ねぎの嶺。実際に、こちら側が山脈がきて、ここが有名な楼蘭、ここは今中国の核実験場になっていますから入れない。私、目をやったの、この辺でやられちゃった。この嵐ですよ、核実験の。

ここが、日本がすぽっと入る砂漠です。タクラマカン砂漠。タクラマカンというのはウイグル語で、迷ったら生きては帰れない、という意味です。こっちがゴビ。ゴビは砂漠でも、土漠ですよっていう所です。ですから、こっちもゴビって呼ぶんです。土漠ですからねえ。

かつて明治以前まで日本人のお坊さんで、長安からこっちへ入ったのはゼロでしょうね。死んじゃったシンニョはラオスの方から入ったんですけどねえ。ここ玄奘さん、行ってるんですよ。たった一人でね。ここ敦煌にしましょう。日本人の行くシルクロードは、大体、敦煌ぐらいまででしょう。僕も4月の10日かな、12日かな、敦煌へ行くんですけどねえ。長安からずーっときて、敦煌の手前からゴビ砂漠に入っていく。玄奘さんが入ったのは9月の上旬。私は8月の下旬に入りましたけど。玄奘さんは年老いた赤馬に乗って行くのね。私はランドクルーザーで行きましたけれども。

ここはギネスブックに出ているんですよ。夏の最高気温が摂氏75度って。皆さん方、髪の毛生えてるからずるいよ、絶対。木陰と一緒だぜ。その点われわれ毎月、カレンダーの4と9のつく日のひげ剃りのシックというので頭そってるわけ（笑い）。このさりげないシャレが分からないと。もうちょっと下げなきゃ駄目かなあ（笑い）。

湿度が3％。3％ということは濡れたタオルを置いておくと10分で乾いちゃうということですね。ですから、向こうを旅する人は手首と首しか見せてない。日本の女の子みたいに、ノースリーブなんかで行っちゃったら、完全にミイラになっちゃう。だって年間に雨の方が8・1ミリです。それが蒸発量が3000ミリ。8ミリ降って3000ミリ蒸発していくから、からっからです。

この前、こっちの人、日本へ招待しました。じゃあ梅雨の時がいいだろうって。日本でやったの。そしたら100ミリぐらい降っちゃったら15年分降っちゃった、とか言ってましたよ。

向こうで僕は、へんな物を食べさせられた、ゲテ物を。ロバの手とか、ラクダの何とかとか、いろんなのを。オタマジャクシのスープとか。だから仕返しにウナギに梅干しつけて食べさしてやったの（笑い）。

コルラからクチャに抜けた三蔵法師のルートが分からない。三蔵法師によると、このあたりの　川は東へ流れている、というんだけど、学者先生の説は、ムザルト川を上がってポペタ山の横を抜けてカラコルムに行き、コムソモールを通ってトクマクに行ったという。

だけどこれ、ムザルト川ってこれ南に流れているじゃない。東に流れているって、忠実

に行かなければ駄目だよね。そうすると、トシカンダリアを行って、ペガル峠からトグマに行って、こう行ったんでしょう。これは私、思っているんです。

確認するためにトグマに3回行ったよ。去年も行ったら、ちょうどお昼になったから、ここは今、キリギスタンという国ですけどね。そこへ行ってお昼に何かないかなあって、「ヌードルありますか」って言ったら出てきたよ、ヌードルが。キシメンだった。キシメン、ルーツなんだよ、これ。

酒が大好きで夜、池に舟を浮かべて、水藻に映った月を取ろうとしてひっくり返って溺れて死んじゃった李白のお父さんはトクマクの生まれですからね。こっちから行ったんでしょうね。

これがキルギスタン、カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、アフガニスタン、ここは今、戦争で入れない。カイバル峠を抜けるとパキスタン、ネパール、インド。帰りは、このあたりから、こう入るんですね。クンジュラブ峠、5000メートル。クンジュラブ峠の近くを通って、カラクリ湖っていうきれいな湖があります。それから、真ん中通ったら死んじゃうから端っこを行く。ホータン、トラのいる所から敦煌を抜けて長安に帰るんです。2万6000キロ。これを今、追っかけてるんですよ。母連れて、子供3人いるもんですから、順番に学校休ませて。

ああ、いい人生だったな、と言えるようにね、連れていってるんです。当番制になってる。この前は高校3年のが当番だったから、お前の番だ。今度は法顕ルート、法顕さんという人がいたんですが、法顕ルートで行こう。そうすると、わが松原家は全部で追ったことになる。学校を2週間休め。病名は盲腸だ（笑い）。

学校に行って先生に言ったんだって、せがれが素直に。「あの、おやじと一緒にシルクロード行っていいですか」と言ったら、先生が超いかったって。「超いかったぜ」って言っていた。「お前一体何考えてるんだ。高校3年で学校2週間休んでみろ。数学がついていけなくなる」って。「だから、どうしたって言っとけ。だから、どうしたんだ」って。「うちのお父さんも高校までにサイン、コサインとか、微分、積分ってやったけど、いまだに一度もお布施の計算に役立ってないってことは（笑い）、あれ何だったんだ」って。無駄だったんじゃないか。無駄な時間を費やして。

大体、お寺の数学なんてのは、計算機の足し算と引き算と、電池の交換の仕方だけ知っときゃいいって（笑い）。それにね、世界一大きい滝はどこかとかね、そんなもの暗記したってどうにもならんよって言ってるんです。そんなことよりも僕はイグアスの滝が世界一っていうけれど、そら貯金して出かけていくか、絵はがきとかで見て覚えた方がいいですよ。アマゾン川の長さがどれぐらいなんて、辞書引けば分かるんだもの。覚える必要はないって。

イシククルだって世界第2位の湖です、高い所では。1609メートル。一位がボリビア

のチチカカ湖でしょう。僕も今度、見せてもらったけど、両方見たことになるけれど。言ったんです。「そんなね、家業に役立たない数学やるよりも、おばあちゃんとおれとお前と、松原家親子3代で三蔵法師が歩いた道を行こう」って、連れて行ったんですよ。

おかげで浪人しましたけどね（笑い）。いい人生だったなあって言えるようにね、バックアップしてやるのが、おやじだと思ってね。そしたら、上の二人が学校を卒業して、そのまま今、修行道場へ行ってますよ。行くって言った時、びっくりしましたものね。「お前、大丈夫か」って。「修行、務まるか」って。「大丈夫だ」って。「午前3時に起きるんだぞ」って。「大丈夫だ」って。「だってお前、今午前3時に寝てるじゃないか」って（笑い）。地球の裏側の生活をしに行ってるんですよね。

でもね、ここ病気が流行ってる。肝炎が流行ってるんです。A型肝炎。コルラのオアシス、ここに用事があって、ここ人口20万です。高松がそれぐらいですか。東京都港区が、もう15万切っちゃいましたから、人口がね。港区より大きいんですねえ。

そこの保健所に用事があって行ったら、そこの黒板に今月の肝炎の患者8万、死者500と書いてあった。気をつけよ、あれは気をつけよ。何からうつるか。水からうつるんです。飲料水。もちろん汚いからね、飲めないしね。3回ぐらい濾過しないと飲めないでしょう。でも旅人たちは、流れている泥川の泥の川に腹這いになって、そこへ口突っ込んで、頭突っ込んで飲んでいますけどねえ。泥の水をね。我々はそうはいかないものね。

だから、生水飲めないから、じゃあ日本から水を持って行くんです、いつも。スーパーへ行ったらアルプスの水というのがあったから、ああ、これがいいや。アルプスの水だって。これを飲んでりゃ、絶対大丈夫。何しろ日本の水だから。で、向こうへ持って行くんです。

そして、砂漠へ行って、「じゃあ乾杯」って飲んで肝炎になっちゃった。何でなったかというと、水は日本から持って行ったキャップしてある水だから、新しいから大丈夫でしょう。受けるコップが汚れていたものだから、ものの見事にうつっちゃった。

やっぱり、いくら清らかないい水を持って行っても、いい飲み物を持って行っても、受け皿が汚れていたら全部毒になるんですよ。そうでしょう。だから、こういう研修会もそうよ。いくらいい講師が来ても（笑い）。まあ、それ以上言うと失礼になるから（笑い）、言わないけれど。

だから、それが分かってから僕は講演するのが楽。こっちは全然責任ないんだもの。受け皿が欠けていたり汚れていたり、ちょっと狂っていたりすると、へんな風に受け取るわけでしょう。そら、そっちがいけないのよ、受け取り方が悪いんだから。

そして、このホータンという所でうつったんですよ。地球の果てです。こんな所。僕は、さっき言ったように5回入院して手術しているから病気の通なんです。5回入院するというと、足すと全部で700日ぐらい、2年は入院してますからねえ。

この前も入院して若い医者がきてね、偉そうなことを言うんだよね。偉そうなことを言って、「何でお前みたいな若いのに、おれが怒られなきゃいけないんだ」って言ったの。「大体お前ね、通いだろ。おれなんか住み込みだ」って（笑い）言ってやったんですよ。白い服着てるからって偉そうな顔をして。

ものすごい下痢なんですよ。熱は40度。この病気のありがたいのは、特典があってね。潜伏期間が2週間。だから毎日、熱におかされながらも無事に日本に帰ってきたから助かってるんですね。助かってもすぐに医者へ行けばいいんだけど、僕、海外が大体150日ぐらい、1年に行かなければいけないでしょう、取材で。残り250日のうちに講演が250あるんですよ。だから、ほとんど家にいないのよ。

この前なんか檀家のばあさんに怒られた。「哲明さん住職でしょ」って。「住職ってのは住んでなきゃあ駄目よ」って（笑い）。「これじゃトビ職じゃないの」って（笑い）。それで帰ってきて、沖縄日帰りとか、そういうばかなことばっかりしているわけ。医者へ行く時間がなくなって、とうとう倒れちゃって。キャンセルするってことは絶対できませんからねえ。舞台あけるのと一緒でしょう。ポスターかなんかできていたら、もう駄目です。

それでも、とうとうね、着物が裏表も分からなくなっちゃった。「ちょっとおかしいんじゃないの」ってうちの家内が言うしね。「だれか医者に診てもらったら」って言うが、休みだし、だれもいない。救急車で行くわけにいかないでしょう、下痢ぐらいで。それで「だれかいないかなあ」って言ったら「小学校の同級生が内科部長やってるって言ったじゃない」って言うけど、私はね、あいつにだけは診てもらいたくない（笑い）。私の方が頭良かったからね。

でも、外にいないから診てもらったら、やっぱり駄目、あいつ。「松原、風邪だ」って言うんです。「風邪か」って。「下痢してる」って言ったら「それが特徴だ」って言う。それで「ドイツ製のすごくよく効く下痢止めがあるから飲ませてやる」ってくれたんです。あれがもしも効いちゃったら、僕は死んでたよね。ウイルスの出口がなくなっちゃうんだから。危ない、あの医者（笑い）。絶対。それで、僕は頼んだの。「この前イリヤンジャヤへ行ってるから、血液検査だけして」って言って。してもらって分かったんです、翌日。「ごめん、急性A型肝炎だ」って。「かなり良くないから、すぐ入院した方がいい」って。「うちのベッドが空いてるから来い」と言うから、「いや、もう結構だ」と言って「うちの裏に専売病院があるからそこへ行く」と言って、入院して3日たった平成元年9月29日午後3時半、死んでたんですよ、私。

だって肝臓の破壊度を示すGOTってあるでしょう。あれ普通20。それが僕のは7800になっていた。4桁って珍しいんですって。死んでたって。それで専売の医者が慌てちゃって「松原和尚、これはねえ、ちょっと大変なんです。うちではもうできません。治せ

ません」。なぜかっていうと、血小板を換えなければいけないんだけど、医者の数が足りなくてできない。総合病院じゃ駄目です。大学病院へ行ってほしい。

ところがね、朝から東大、慶応、慈恵医大、あらゆる大学病院に電話してるんだけれども、どの病院も集中治療室が全部満員だと。ところが3時半、金曜日なんです。金曜日の3時半になって昭和大から電話が入って、「今、集中治療室のベッドが空いた」って言うんですね。今空いたって、どういうことを言うの（笑い）。ベッドの上にいた人はどこへ行っちゃったの（笑い）。あれ、医者が慣れだから、ああいうことを言うのね。

それで僕だってねえ、入院する度に手術したらね、その夜っていうのは痛くて寝られないの。麻酔が切れてくると痛いんだよ。それで「いてえ」とか「もっと切ってくれ」とか「早く何とかしてくれ」とか「助けてくれ」とか言いたいよ。だけど、5〜6人一緒の部屋だったら言えないじゃない、そういうことを。言ったら「あいつ、本当に修行したのか」って言われそうだし。

だから、すぐに入院すると、ナースセンターに言うわけ。「個室が空いたら教えて」って。この前なんて午前2時ごろ来たよ、看護婦が。「和尚さん、今空いたわ」って言うんです（笑い）。「2〜3日空けといてくれ」って言ったんですけどねえ。「干してくれ」って。そんなのいやだよ、死んだ人の汁が残っている所へ行くのは。

で、救急車でうーっと行くうちに肝性昏睡、肝臓からくる昏睡状態になった。こっから先、皆行ったことないから教えとくね。昏睡状態といっても患者の耳は正常に働いてるの。心臓が働いているように、腎臓が動いているように、聴覚はきちっと働いている。全部聞こえる。ただし、こっちが言えないだけ。言っちゃ駄目ですよ。絶対駄目だよ。「何か言って、手握ってやって下さい」って。「ああ、ぴくっと動いた」って。動くさ。何か言うんだもの。

僕の時は医者が油断したね。日本語で言ってるんだ。「この患者はあと4〜5日しかもたない」って。私はそれ聞いて「ドイツ語で言え、ドイツ語で。聞こえてるんだ、お前。罪なことを言うな」。聞こえるんですよ。

あとで看護婦さんに言ったの。「ちゃんと患者は聞こえているんだから、ドイツ語で言うように医者に言っておきなさい」って言ったら、看護婦さんがむっとした顔をして「そういうことじゃ松原さん、うちのお医者さんたち、みんな東大と慶応の医学部おっこった先生ばっかりよ」って言うから、なんだ無理なのかと思ってねえ（笑い）。

四国の今治JCで講演したことがありました。そこの時に、そんなばか話をしておりましたら、終わったあと、司会の青年が立ってくれて皆に言ってくれました。「松原和尚の話はうそじゃないよ、みんな聞こえるよ。おれ、野球部の時に頭にデッドボールくらって昏倒して救急車で運ばれた時に、医者の言うのが全部聞こえた。医者が言った。これで吐けばおしまいだ」って言ったって。「だからおれ、吐かないように頑張っていた」っ

て（笑い）。聞こえているんです、ちゃんと。人間は、最後は本音を聞いて死んでいけるようになってるの。

きれいな川が流れているんですよ。きれいな花畑があるんですよ。そこを腰までつかって死んでいくんです。あんな快感ないですね。一度経験しといた方がいいですよ、あれは（笑い）。何か向こうに死後の世界、僕は見たことないけど、何かあるみたいよ。

うちの妹も大きな手術をして、危なかった時があった。その時、やっぱり腰までつかっていった。きれいな花が咲いていたんだって。そこへ行ったらねえ、私の次男坊が今、出家しましたけれども。それがねえ、後ろへ現れて「おばちゃん、そっち行っちゃ駄目だよ」って言って戻ってきたんだって。私の時はだれも呼んでくれなかったねえ（笑い）。行け行けどんどんで、どんどん行っちゃったけど（笑い）。何かあるみたいよ。

「死んだら死んだ時のことよ。死後の世界なんかあるものか。冗談じゃねえ」なんて言うけど、もしもあったらどうする？やっぱり悪いことはやめといた方がいいよ。そしてやっぱり終わってから「ああ、充実していたなあ」と言ったら案外、上の方に連れて行ってくれるかもしれない。

でも僕は、どうも上には行けそうにもないみたい。あの死んでいく時に、必ず僕は下に落ちていくと思うね。下へ下へと。細い管の中をすーっと落ちていくんだよ。あるいは、暗い渕を真っ逆さまになって、頭を下にして落ちていくんだよね。右に旋回しながらね。なんで頭が下なのかなあ、頭が重たいからかなあ、と思ったりしてねえ。

ああ、こうやって死んでいくんだと思った。その時、僕ねえ、思ったよ。3つ発見した。死ぬ時はみんな手ぶらで死んでいくんですよね。知ってますよね、そんなこと。知ってるけど、何で積立貯金するの。みんな置いておくと知っているのに。使っちゃったらいいじゃない、もったいない。

2つ目は、物と金というのは死んで持っていけないと知っていますよねえ。で、さらに欲しがるのは、欲というのかな、違う？何で死んで持っていけない物と金しかもたくさんあるのにしがみつくの。何で一個しかない命にしがみつかないの。そうだ、ここは誰の道だ。商人（あきんど）さんの道だ。人間の目に見えるものを商人さんは中国へ持っていって、売って金に換えた。大切な流通の道だ。

だけど、これだけじゃないんだ。玄奘さんは、ここに何を運んだ。物を運んでないよ、金運んでないよ。経典運んだんだよ。あしこに何が書いてあるの。お金のもうけ方など一行も書いてないよ。物のため方なんて、一行も書いてないよ。物の使い方なんて、一行も書いてない。あしこに書いてあるのは、命の使い方を書いてあるんだ。一個の命の使い方を書いてあるんだ。それを三蔵法師は、中国へ伝えるために自分の命を使ったんだよねえ。

そうだ、坊さんはそれをやりゃあいいんだ。お金とか物については、みんな企業の人た

ちが全部やってくださる。そして、企業の方々がやらない命の使い方っていうのを宗教者がやらなきゃいけないんだ。

「ああ、何でこんな大切なことを、死ぬ間際になってわかったのかな。神様、もう一度、生まれ直すことが許されるならば、私をもう一度、禅宗の坊さんにさしてください。今度こそ本気でまじめに修業しますんで、みんなと一緒に命の使い方を勉強したいと思います」っていってたら話はうまくいくけど、目が覚めた。

目が覚めたら医者がじっと見ていてくれて「和尚、気が付きましたな、いいですか、肝臓のテストをします。よく考えて、答えてください。100－7は幾つですか」っていうんだよ。ふざけるなって。それが、答えられない。頭の中、真っ白になって。毛布かぶったから隣りの指借りて「100－7。93ですか」っていったら「93－7は」ってひつこいんだよねえ。

私、いったの。「先生、そら素面（しらふ）でも無理です」って（笑い）。ただ先生が「こんな大変な時に、そんな冗談いってて何だ、助かるじゃないか。おお助かるよ」って。「握手しましょう」って。そして助けてもらった。4か月入院してGOT20になって帰ってきたですよ。

今度一緒に行かない？シルクロード。今度ね、60人ぐらい看護婦さん連れていくんです。僕、入院してたのが多いから看護婦の友達がいるし、日赤の看護婦さんに話したりするものですからね。「松原を囲む看護婦の会」ってのがあるの（笑い）。そして「シルクロードへ行こう」っていって誘ってるの。

そしたらクレームがついてね。「会の名前が長過ぎる。もっと短くしろ」っていうから「じゃあ、ボーナスの会にしょう」といったの。坊さんとナース（笑い）。ちょっと今回、響きが良くないんじゃないですか（笑い）。18回のあと、人材がちょっと悪くなったみたい。

でも、誘ってるんですけどね。中には看護婦さんで弱いのがいるのよ。「肝炎が怖いからいやだ」って。「何いってるんだ。怖いんなら、今度は医者を同行させよう」って。医者と坊さん付きのパックって珍しい（笑い）。「どっちに転んでも、絶対に大丈夫だ」といってますからね。

でもねえ、一生一回、これ命を使っておかないとね、使わないと後悔しますよ、絶対に。やっぱり命は、どんどん使わなくちゃあ。落とすまでね。いつ落ちるかわからないし。いつ落とすかわからない。

例は悪いけど財布と一緒でね、財布持ってる時は、あまり中身、気にならないよね。普段、しょっちゅう四六時中、財布のことを考えて生きないでしょう。と同じように命持ってるとねえ、しょっちゅう命について考えないんだよ。年老いてきた時とかね、残り少なくなってくるとね、財布の中身が気になるように、人生も気になってくるんですよ。

落としてみないとわからない。僕は一つ落としたんだ。

ここに同じ年の子がきっといると思う。27歳、今生きてると。かわいそうなことをした。かわいい男の子だったよ、本当に。しわ一つなかったもんね。僕、思ってるの。あまり美し過ぎるとね、神様が持っていっちゃうってことを、本当だなと思った。上から見ていて本当にそう思うよ。27だものねえ。

それも死ぬような子じゃないんだよ。医者に保証されたんです。「こんな真っ赤な体の赤ちゃんを、本当の赤ちゃんというんですよ」。大きな声で泣いて「18世誕生おめでとうございます。あとは私たちが見ましょう」といって日本で名医とされる両教授が保証してくれたんだ。安心して家へ帰るよねえ。

そして、その医者の声がまだ耳の中に残っているうちに「容体が急変したから、すぐ来い」っていうでしょう。行ったら、間に合わない。家へ連れて帰ってくるねえ。で、初めて新しい布団に寝かしてやって、私は、彼の左のほっぺたを右手で暖めながら「早くしないと間に合わなくなるぞ、火葬場で燃やされたら元も子もなくなるんだ」って、そういってました。

戻るわけないよねえ。戻ってきたのは、箱に入っていたお骨だよ。それ見て、僕はいったよ。「これじゃお前、死ぬために生まれてきたようなもんじゃないか」って。そしたらおうむ返しに「じゃあお父さん、一体、何しに生まれてきたんだ」って。答えられない。答えられますか。何しに生まれてきたか。

肝腎なことをやってないんです。哲学してないんだ。何のために生まれてきたのか。おぎゃあ、と生まれた。そして、ずーっと生きていって、死んでいかなくちゃいけないんだ。人は何のために生まれてきたんでしょうか。解決しましょうねえ。生まれてきた時、持ってきたものがありますねえ。何もらってきましたか。命もらってきました。命を預かってきました。その命を、使いにきたんですよ。その命を使いにきたんだ。それを使命っていうんですよ。それをどう使うかを、みんなで哲学しなくちゃいけない。それもしないうちに、サイン、コサインやってていいんですか。

僕、それ中学校の校長先生にいってるんだ。私のこの一個の命を、世の中に生かすために我々生まれてきたのと違いますか。与えられたこの時間を流さずに、どう使うか、みんなで考えなけりゃいけないんじゃないですか。

そして体がありますよね。健康な体もらってきた。その体をどうやって使えば自分が満足する、そういうことを考えなきゃいけないんじゃないですか。それもしないうちからX－Y×何とかと、こんなことやったってしようがないと思うよ。もっとも、しようがないというのは、いい方がおかしいかも知れないけど。少なくとも坊さんは、必要ないね、こんなことは。

さあ皆さん、ハッキリさせましょう。おぎゃあ、と生まれたのは、明らかですよねえ。

今、生きているのは明らか。さあ、死ぬのは確実。さあ、そこで、ここでどうやって命を使うか、ここもハッキリさせましょうよ。

おぎゃあ、と生まれて、人生の幕が開いてます。そして、うーんと生きてて人生の幕が閉じます。幕が開いて幕が閉じるっていえば、舞台でしょう。いいかえれば人生劇場ですよね。その舞台の作、構成はあなたよ。主役は、あなたよ。主人公、お宅よ。脚本、持ってますか。脚本、作りましょうよ、きょう。脚本、作ろう。

世の中、おかしなことがたくさんある。小学校へ行って学んで、中学校へ行って学んで、それでも足りないから塾へ行ったでしょう。高校へ行って、僕なんか大学院まで出さしてもらって、ブリジストンの宣伝に勤めた時に、アパート引っ越した時に、今まであった本箱から学校の参考書とか教科書は全部、ダンボールに詰めてごみに捨てちゃったね。以後、企業に入って勉強してないもの。だったら、今までの勉強、何だったんだ。

それで、ここから生きていかなきゃならない時に、人生に落とし穴が待ってる。魔がさす時だってある。しようがない人間だから、魔がさすんだ。でも、できたらそれ避けたいよね。

その時に、ここにコーチがいたらいいじゃない。導師がいて。ああ、あそこへ行ったら危ないぞ、そっち行っちゃ駄目だ。コーチがいてそっちへ行っちゃ駄目だ、こっちへおいで、こっちへおいで、という人がいたら楽だよね。

ところで、人生にコーチいますか。いないじゃないですか。だけど、お琴やお花テニス、サッカー、みんなコーチがいるじゃないですか。なぜいるかっていえば、コーチがいなかったら我流のプレーになっちゃうからですよ。なのに、人生我流でいいんですか。サイン、コサインやる前に大切なことは、この導師を持つことですよね。覚えといてください。人生をいい方向に導く人を導師っていうんですよ。悪い方向に導く人を尊師っていうんですよ。(笑い)。

2番目が道心。道心を堅固にしろ。テーマですね。おれはどうやって生きていくんだ。そしたら最後、「ああ、われながらいい人生だったなあ」っていえるんじゃないかな。そして道友です。良き師と、良きテーマと、良き友を持つんだと。人間に生まれるっていうことは、難しいんですよね。

じゃあ、僕は仏教だから、ここの脚本をご紹介しますね。6つを完成しろ。六波羅密っていうんです。これは、サンスクリットのパーラミターという言葉を三蔵法師は中国へ持って行く時に、漢字の国に行くわけですから、漢字にしてやらなきゃいけないわけですよね。で、パーラミターという発音をこれにやっただけだから、これ意味ない。パーラミターというもともとのローマ字に直すと、(字を黒板に書いている)というこのパーラミター、6つの完成という意味がある。

1番、原典で書いていきます。布施。これは、オウム真理教にいうような、ああいう布

施じゃなくて、どう貢献することができるか考えよう、っていうこと。私のこの一個の命を、どう貢献できるか考えよう。私の持ち時間を、どう貢献できるか考えよう。自分で哲学しよう。どうしたら貢献できるのか考えよう。

だって、絶対に手に入らない命が、こうやって手に入ったんだ。絶対に手に入らない命。それも説明しなくちゃいけない。

詩人で西条八十ってのがいましたね。

母さんお肩をたたきましょたんとんたんとんたんとんとん

の西条八十。お若い方、西条八十、知ってる？この前、九州のある女子高で、高校生のための文化講演会へ行ったの。ああいう雰囲気好きなの、高校生っていうのは。壇上へ上がってしゃべろうと思ったら、前にいた女の子なんか指差して、僕に向かって「いやだ、うそー、信じられない」って。何も一言もしゃべってないのに。で「西条八十、知ってる？」っていったら「秀樹のお父さん？」なんていってるしね（笑い）。

お母さん、徳子。徳子さんは17歳の時に西条家にお嫁にもらわれてくる。そこのたった一人の跡取り息子に、丑之助というのがいた。名前ごついでしょう。ものすごいハンサムでねえ、屏風の錦絵から抜け出たような男だった。小僧がいて、番頭さんがいて、後家の姑さんがいた。女中さんもいた。

そこへ17歳でお嫁にもらわれていくんだけど、婚前、突然、丑さん死んじゃう。そうすると、西条家は跡取りがいない。困ったお姑さんは、そのまま徳子さんを西条家の養女として迎えて、新たな旦那さんをあてがった。その旦那さんというのが、西条家に長く勤めていた番頭さんで、お母さんと年が20も違っていた。37歳。

で、二人の間に7人の子供が生まれて、その4番目が西条八十。ここからわかることは、丑之助が死なずに元気だったら西条八十は生まれない、ってことですよね。そうでしょう。

両親は、特定されてるってことですよねえ。皆さんも両親以外から絶対生まれられない。皆さん方は、産んでくれることのできる父親は、あのお父さんとあのお母さんしかいないんですよ。世界52億、人間がいるんですよ。その中で、あんたを産んでくれるのは、あの父さんと母さんしかいないんだ。世界でたった一人の親父なんだ。世界でたった一人のお袋なんだ。

僕の場合は、父は東京生まれ。母は三重県の生まれなんです。これが一緒にならないと、僕は出てこない。うちの親父と、隣りのおばさんじゃ、僕は出てこないんです。

今でもいうけど、お見合い結婚でね。今、父は88、母は80。お見合い結婚。それがひどいんだって。見合い写真がひどかったって。手紙開けてみて、びっくりした。何と一枚の写真に、坊さんが100人ぐらい写っていた。坊さんの研修会の記念写真を送っちゃった。そして手紙に「自分は、前列の左から数えて5番目にいる」っていうけど、よく見

たら3番と4番の間から顔を出してるのが一人いる。この人、果たして前の列に参加する意志があるのか（笑い）。よくわからないっていうから変でしょう。一回の見合いで決まった。感謝してますよ。この星が出会わなかったら、僕は生まれなかった。

で、結婚して夫婦交合して子供ができるでしょ。男性の精子が約5億だってね、習ったけど。その中のたった一個が一個と結びついて、お宅よ。5億のトップって実感してる？（笑い）。それがトップだから、ビリは相当ひどいと思うよ（笑い）それがトップだもの。ビリはひどいと思うよ。

これも5億分の1でしょう。これも5億分の1でしょ。どうなの。これも5億分の1でしょ。これも5億分の1でしょ。（黒板に書きながら）つながってるからいるんだもの。きちっと書かなきゃ駄目だよね。

ルーツがあって、こっちもルーツがある。500万年昔。ここが、どっか一か所でも切れていたら、ここにいないんだよね。つまり、皆さんは500万年の伝統を持ってここに生きている、ということよね。そうだよね。きちっと認識しておこう500万年の命、預かってるんだよ。

うちのせがれが、僕にいうんだ。「お父さん、うちはどうしてこんな顔をしてるの」っていうから「ばかいうなお前。この手の顔は、500万年続いてるんだ。伝統の美というんだ。いじるんじゃない、すぐ元へ戻る」って（笑い）。だから、誇りを持たなくちゃいけないんです、顔にね。伝統なんだ。

親の数、数えようか、先祖の。1代で親が2個流れ込んでいるよね。片っ方っていうこと絶対にないよね。2代前で6だよ。3代はその数が14になる。4代でその数は32になる。たかだか30代前にさかのぼった時に、皆さんの体の中に流れてる白い丸の数が、単純計算すると幾つになると思いますか。6億6000万だよその一つひとつが5億分の1。

生まれなかったんだよ。絶対に生まれることができない。それが、ほんのわずかの可能性で生まれてきた。僕は仏教だから、仏教を使わして。釈迦は、こういってる。「あんたの命は、大海の一針なんだ」。広い海があるとしよう。いや、瀬戸内海でもいいや。その中に、たった一本針が落ちているとしよう。生まれたのは、その針を拾い上げたようなもんだ。

皆様方一人ずつ全部、一生一回の血を受けて生きてるんだ。一本の花だって、一個の虫だって、みんな一生一回で一個なんだ。ワン・アンド・オンリーなんだ。

それを、どうしていじめるんだ。そこから入っていかなければ、駄目なんですよね。命から入っていかないと。うちのせがれにも、こういうことを教えているんですよ。

「この前、お前の辞書がいる必要ができて、お前の部屋へ黙って入った、わるかったけど。しかし、本箱見たけど辞書一つもない。申しわけないけど無断で引き出し開けたら、エッチな写真が出てきた。お前最近、すけべじゃないか」「そうだ」「でも心配するな。そ

れは、お前のせいじゃない。そういうじいさんがいたんだ」(笑い)。「これが今、騒いでるだけだ。おれもこれには、ずいぶん悩まされたもんだ」(笑い)。

生まれるというのは、難しいんですよ。僕なんて、本当に生まれなかったんだからね。僕は、お母さんのお腹の中にいた妊娠5か月の時に、私の母は、妊娠性腎炎と腹膜炎を併発して、ほとんど目が見えなくなってる。お医者さんが診察した結果「このままいったんでは、母子ともども助からない。おまけに、こんなに母体が悪い時に赤ん坊産んだって、ろくなやつが出てこない」っていうんだって。当たっているけど。だから今回、お腹の子供を堕ろせ。で、母体が健康になった時に、いい赤ちゃんを産んだらいいじゃないかって、全員で私を堕ろすことに決定。僕も、降りるほうに賛成ですよ(笑い)。

だって「私が生まれたために、母が死んだのよ。お母さん死んじゃったのよ」とあとで聞かされるぐらいだったら、僕は生まれたくなんかないよ。降りますね、自らね。だけど、この命は自ら降りられないんだ。いい、自ら死ぬこと許されないんだよ。なぜ許されない。自分だけの命じゃないからですよ。見てください。全体を含んでるじゃないですか、この命は。全体を含んでいるこの命。

自殺したくなったら、先祖の全部に相談しなさい。あんたの命じゃないんだものただ預かってるだけだ。降りられない。この命は望んだって生まれられないんだ。望んでも降りられない。降りろ、降りろといわれた命が生きてるんだよ。何で生きてると思う。母が、母が祈ってくれた。祈り続けてくれたんだって。月の中のウサギさんに祈り続けた。なぜ月の中のウサギか。僕がウサギ年なんですよ。昭和14年のね。お宅のパパと一緒ぐらいだ。

私の母は、大正のウサギなんです。二羽のウサギの物語があるんですよ。毎晩、月の中のウサギさんに歌ってくれた。

お山のお山の細道を　だれだれ通るだれ通る　月夜にウサギの通る道
坊やと母さんの通る道

意味は、あの暗い田舎の山道を、お母さんのウサギと坊やのウサギが歩いています。お月さん、お願いですから、足元を照らしてやってください。そうしないとお母さんのウサギと坊やのウサギが谷底に落っこって、死んでしまうんです。って毎晩祈り続け、歌い続けてあなた、生まれてきたのよ、って。生んでもらったんだ。ありがたいことに母健在で、片方、目が見えるから砂漠の月、見にいくんですけどね。だからねえ、私は小さいころから母に抱かれて寝付くでしょう。その時、いつもね、ささやき戦術やられたよ。いつも抱っこして寝てくれる時に

お山のお山の細道を　だれだれ通るだれ通る　月夜にウサギの通る道
坊やと母さんの通る道

って必ず歌うんだよね、母ね。そして、そのあとで必ずいうの。「哲っちゃんはお母さん

の大事な子だから、大きくなったらいい子になるのよ」そういうんだよ。僕はあの時、思ったもの。ああ、僕はお母さんの大事な子なんだ。だから、お母さんを大切にしようと思ったもんね。お父さん、どうしようかなと思ったけど（笑い）。だから、やっぱし、両方ささやかなきゃ駄目。これからお父さんやお母さんになる方々だから。ささやいて、ささやいて、いいことをささやいていくと、それが励みになって、いい子になっていくと思うよ。

この前も有名なおじさんがいてね。そのおじさんから電話かかってきて、「うちのせがれのことで相談があります」「何ですか」「うちの子は和尚の後輩で早稲田大学を出まして、6か月たって9月がきた。ある一流企業に入りました」「ああ、 それはおめでとうございます」

「ところが配属先がユーザーの苦情処理係なもんで会社に行くたんびにユーザーからの苦情が電話でくる、手紙でくる、ファクシミリでくる。だんだん会社へ行くのがおもしろくなくなった。一人息子で。ところが去年の9月に入ってから、私の家内に暴力を働くようになりました。『おい、おれの人生がおもしろくないのは、お前の責任だ』って母に、家内を責める。『お前が、おれを産んだからだ』」そういうんですって。「体が180センチあるものですから、大き過ぎて誰も手出せない。最近は家内を殴る、蹴るするんです。和尚、何とかしてください」って。

私、行って、そいつに「お前は卑怯な男だなあ。いじめるんだったら、もっと強い者をいじめろ。一番弱い母親いじめやがって。お前なんでお袋、殴るんだ。お前を産めるのは、このお母さんしかいないじゃないか。世界で、たった一人しかいない母親を、なんで殴るんだ、お前は。しかもお前、生まれる前に、お袋の腹の中に10月10日ただで居候しやがって。この春就職した時に、なんで最初にもらったサラリーのほんのわずかでもいい、お前ここまで育ててくれたお袋たちに、一泊で山の温泉にでも連れて行くというのなら話わかる。それを殴りやがって。よし、おれ、9月の15日にNHK・BS2で1時間番組もらっているから、その収録の前日までに、お前の生き方を変えないと、番組の中で、お前の家の郵便番号、住所、氏名、年齢、すべて実名ばらしてやる」といっていったんですけどね。

知性と感性だけじゃ駄目なんだ。徳性を持って、理性を失っちゃいけないんだきちっと主体性を持って、育ててもらった恩に対する冷静というのを持たなきゃいけない。それについての前半の部分を、少し休みましょう。

（15分間休憩）

先にお寺の17世っていいましたけども、小学校の時は将来は、お坊さんになろうかなって多少、思ってたんです。それが倒れかけてる僕を支えてくれる先生がいまして、女の小学校担任の先生で、いい先生だった。私の人生劇場の脚本の粗筋を作ってくれた先

生でね。「松原君はお寺の子だから、大きくなったら三蔵法師の歩いた道、行くのよ」って。

山本周五郎さんも、中学校の時に、韮崎中学の担任の先生から言われたんでしょう。「お前は将来、小説家になるんだ」って。そうやって見抜く人がいるんですよね。私の先生はそうだったなあ。

そしてね、「先生がもしもその時、元気だったら、松原君、一緒にシルクロード連れて行ってね」って約束した。以後、ずーっと守ってますよ。この前もネパールへお連れしたら喜んじゃってね、「こんなにいい子になるんだったら、もうちょっと通信簿よくしときゃよかったね」(笑い)。といったけど遅いんだよ、あの人。中学校へ行ったら中学校の担任の先生、これがいやなやつでね、日教組ばりばりの男でね、いやなやつだった。毎日、僕いじめるんだよ。「おい松原、おれは世の中で何がきらいかというと、坊主がきらいだ。坊主は法事、葬式丸もうけといって何の役にもたたない」って、本当のこというんだ。いやなやつだ。だけど、どうして子供の家の職業の悪口いうんだろうね。どうにもできないことを言うなって。最低だよ、あいつ。

しかも、小学校の子供の心って、何にも書いてない黒板とホワイト・ボードみたようなものじゃない。ご自身、赤が好きだからって勝手に入ってきて、人の心に赤塗りたくって、帰って行くというのは傲慢と思わない？ひどい男だよ、あいつ。僕が学校へ行くと毎日「坊主、坊主丸もうけ」って。登校拒否だ。家で泣いてて。ある晩、どうしても我慢ができなくなって、ぐっすり寝ている母の部屋に行って戸を開けて、電気つけて布団ひきはがして「起きろ、座れ、畳の上に正座しろ。何であの時、おれを産んだ。なぜ、おれを寺の子に産んだんだ」ってやっちゃった。かわいそうに母、ぽろぽろぽろぽろ涙出して「あなたにはあなたの人生があるんだから、自分の好きな道を行ったらいい」「寺、出て行っていいのか」というと「いい」っていうんですよ。「跡取りの心配いらないのか」「いらない」「うそじゃないね」「うそじゃない」と。

もう、それ以上いじめられないから「お休みなさい」って寝て(笑い)。翌日、ちょっと程度の低い友人に電話して聞いたわけ。「たった一人息子が寺出て行っていいっていうけど、あれは一体どういう意味かな」っていったら、そいつが「ばかだな、お前。出家という字を見ろ。家を出ると書くじゃないか」(笑い)。だから変な道心につかまっちゃったら、変なところへいっちゃうんだよね。もしも変な所を歩いてたとしたら、変な人に連れられているのかも知れないよ。

で、僕はお寺飛び出して、企業、ブリジストンに勤めた。販売促進部宣伝一課勤務を命ずる。3年間。アパート住まい。万年床。会社へ行く。終わると2、3軒、赤ちょうちんで瞑想して帰る(笑い)。そして家へ帰ってもチョンガーですから、駅前ラーメン食べて、電信柱でおしっこして、アパートへ着いて靴脱いで、靴下脱いで、背広脱いで、ネクタ

イはずし、ワイシャツ脱いで、ズボン脱いで、寝る。

翌朝ぎりぎりまで寝て、「あ、間に合わない」。今度、脱いだ順に拾っていきゃあ、また会社へ（笑い）。これで生きてるんですよ。何の疑問もはさまない。こうやって時間だけ過ぎていく。そういう私を、ガラッと変えた人が出てきた。

宣伝に一通の回覧板が回ってきた。それは人事課の回覧板で、「本日午後1時から3時まで、会社の会議室において、年1回の文化教養講座を開く。本日の講師は鎌倉の円覚寺の管長朝比奈宗源」。亡くなりましたけど、大変有名な禅僧でした。その人が、ブリジストンの企業研修に来る。暇なやつがいたら出てこいという文書が回ってきた。

私はそれを見て「なに、会社に坊主が来る。何しに来るんだ。坊さんは寺で法事と葬式してりゃいいじゃないか。欠席」ハンコついて回していった。しばらくしたら部長が例の紙を持って、私の所へ来て言った。「君、大変困ったことが起きた。今日の朝比奈さんの講演会、わが宣伝はみんな仕事が忙しい、といって全員欠席だしかし、そういうわけにいかん。各部に割り当てがあるから、うちでも誰か一人は犠牲者を送り込まにゃいかん。聞くところによると、お前、寺のせがれっていうじゃないか。この宣伝の危機を救うのは、お前しかいない」（笑い）。

「僕いいです。家で親父の話聞いてますから。部長行かれたらどうでしょう」。そしたら部長が「いや、おれはもう人間ができているから（笑い）今さらあんな話を聞かなくともわかっとる。行け」「行きたくありません」「部長命令だ」「勘弁してください」「行きたくないのか」「はい」「じゃあ仕方がない。ところで話は変わるが、君も学校を出て、やがて3年経つなあ」「はい」「実はさっき札幌支店から電話が入って、一人欠員ができているらしい（笑い）」「札幌転勤ですか。それなら、会議室行きます。ずっと近いですから」といって、僕は一番後ろで寝ていた。

こういうの駄目よ。大体こういうフリーの自由席でね、最初から真ん中から後ろへ下がって座るようなのは、もう駄目。人間的に将来性ゼロ。だって最初から引き潮的人間って駄目よ。若いんだったら、何でもいいから前へ出てきちゃう。それぐらいな上げ潮じゃなければ駄目なんですよ。座る席で大体、人間わかるんだから。それで僕は寝てるんだもの。人の背中に隠れて。パチパチパチパチって見たら、拍手されて壇上に上がった朝比奈先生、衣（ころも）と袈裟つけてるんだよ。何で現場の衣装で来るんだって。僕、衣じゃないよ、これ。いっとくけど和服ですからねえ。羽織じゃない、被布っていうんですからね、これ。和服です。衣じゃありません。

と思ってるところへ、今度、人間は仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を閉じよ、と講演始めたんだよ。衣と袈裟つけて仏教語使ったんじゃ、仏教講演じゃないか。文化講演にならない。何でこれを現代語に置き換えないんだ。

もっと腹立ったのは、わがブリジストンの社員一人ひとりに「仏心起こせ」っていうん

だよ。そんなことしたら、ダンロップに抜かれちゃうんだ、うちは（笑い）何いってる、聞いてられるか。デスクへ戻って、たばこ吸って、コーヒー飲んでたの。

そこへ今度、人事課から電話が入って「今、朝比奈先生、貴賓室へ戻った。こっちに人事部長がいて、こっちに人事課長がいる。部長と課長が、偉い坊さんを前にして、緊張でこちこちで気の毒で見てられない。そこでこれから部長と課長の救出作戦を行なう。とにかく当社において寺出身というのは、お前しかいないから、ここへ座われ」（笑い）。「仏心のインタビューしろ。その間に部長と課長は脱出する」（笑い）。

「いい話ありがとうございました。もうちょっとお聞きしたいところですが、若い社員がインタビューしますので、われわれ二人はちょっと席を中座させてもらいます」といったら、朝比奈先生にっこり笑って「待ちなさい。そんなにさっきの話はよかったかな。まだ続くから座わってなさい」（笑い）。脱出失敗。

僕はインタビュー。「あの仏心がよくわかりません」といったら、あの方が「お前さんは幾つじゃ」っていうんだよ。何が「じゃ」だと思ってねえ。格好つけやがってと思った。こっちも格好つけて「25じゃ」（笑い）といおうと思ったけど、そうはいかないから「25です」「25か。25ならまだ仏心はわからん」「なぜわからないんですか」「お前さん、わしの話を聞く時、わしのどこを見ておった」「目と顔です」「じゃあ、お前はつまり人のツラの皮一枚しか見てないのか」「じゃあどこ見たらいいんですか」「そうだなあ、人間の目に見えないものでも見ろ」っていう。

お化けかな、と思ってねえ。命とか時とか心っていう意味がわからない。「そんなものは見えません」っていったら、朝比奈先生がすっくと立ち上がって、「わしゃ、お前としゃべっておるだけで退屈だ」「なぜ退屈ですか」と聞いたら「お前さん、本当に一生涯に一回、命が一個しかないということを実感して生きてるか」。私は笑いました。「そんなことは、一生涯一回なんてことは幼稚園の子だって知ってます」

すると朝比奈先生「おう、そうか。じゃあ聞くが、その二度とない人生を、お前さんは一体どういう命題を持って生きていくつもりか。お前の人生のテーマ、いってみろ。何しに生まれてきたか言ってみろ」。もうそうなったら「はい、その日の気分でやってます」なんていえなくなって、困ったと思って、答えられない時どうする？下向くしかないよね。

下向いて嵐の過ぎるの待ってた。そしたら気の毒にも部長に当たった。「お前が部長か。お前の人生のテーマは何だ」。部長、息が詰まって「はい。以前は清く正しく美しくと思っております」（笑い）。「おい、若いの、下向いておっちゃわからん。お前の人生のテーマは何だ」「忘れました」

「忘れた。お前は生まれてきて、この命を使いにきたのと違うか。覚めなきゃならん時間がきても寝ておって、ええ、時間を流しよって、何に命、使ってるんだ。もう一つ聞く。お前の人生のコーチは誰だ」「いません」「師もなく、テーマもない男と、なぜわし

が人生論たたかえる。わしは忙しい、わしは帰る」と怒って帰っちゃった（笑い）。脱出したのは朝比奈老師のほうなんです（笑い）。

やばいっていうので、追っ掛けて行って、エレベーターの前まで行ってつかまえて、皆でぺこぺこぺこぺこ謝った時に、うちの課長が余計なことを言ったの。「先生、許してやってください。この男、もとはといえば寺のせがれで‥」（笑い）そしたら怒ったねえ、朝比奈の和尚。「なに、貴様も寺のせがれか。何宗だ」「一緒です」「名を名乗れ」「松原です」「どこに住んでおる」「三田の古川橋」

そしたら朝比奈老師が「三田の古川橋の松原といえば、わしの友人で松原泰道というのがおるが、まさかお前、あれのせがれじゃあるまいな」「いえ、そのせがれなんです」（笑い）。怒ってね。「貴様みたいな若い者が今の宗教界にいなくて困っているというのに、お前までがこんな所へ勤めておって。お前も早く頭の毛そって修業道場へ行け。わしや親父の手伝いをせえ」って叱ったんだよねえ。

だけど、この人、叱る資格はないと思うんだよ。男の子、二人いるんだ。二人ともサラリーマンなんだよね（笑い）。そのちぐはぐさが、禅僧のいいところなんです。

今度、部長が叱られて「おい、お前が部長か。ブリジストンの人事の者ともあろうものが、寺のせがれを採用するとは何ごとだ」。目茶苦茶（笑い）。

課長が叱られて「いいか、よく聞け。この男は小さなころ、よく円覚寺へ来て、わしのひざの上で遊んだもんじゃ。いいか、本人はサラリーマンのような顔しとるが、内心は出家で燃えとる」。勝手に決めて、「本人が辞めたいといっている以上気持ちよく辞めさしてやれ」（笑い）って、辞めさせられちゃったんですよ。

だから、何かこう人に喜ばれるような人間になりたいなあ、何かお役に立てるような人間になりたいなあっていうのは、朝比奈老師の教訓ですよね。さあ、後にああ、いい人生だったな、っていうためには、決まりを守らないかん。自戒、決まりを守る。

3番目。忍、耐える。耐えることを学ぶ。中島萬里委員長も、神戸の所で修業なさいましたけれども、僕は静岡ですけど、大体、朝4時に起きるんですかね。うちの子供の行った所は、大体3時に起きるんですけど。朝6時までが座禅。それで、僕らの時は修業僧が30人いたけど、朝おかゆですけど、米は全員で3合よ。1人3合じゃないからね。

3合の米を30人分のお湯で割るんだから、米のお湯割りってやつよ。薄いんだ天井うつってるよ。天井がゆっていう。冬なんて、6時って裸電球がぽつんと一個あるだけでしょう。そこで、おかゆをもらう。寝呆けてるからね。ああ、シジミかな、なんて見ていると、目の玉がうつってるんだよね（笑い）。シジミがゆっていうんだよ。本当だよ。

タクアン二切れに梅干し一個。お昼は麦ご飯。麦飯に一汁一菜。一椀の汁に一椀の菜っ葉。夜は夕方4時におじや。夜10時に寝て、あるいは11時に寝て、朝3時に起きる。これ丸3年やらないと、資格が取れない。

それで毎月1週間、座禅がある。座禅集中期間というのがあって、12月の1日から12月の8日までは絶対に寝かせない。一睡もさせません。そうやって修業するんですよね。

で、入門のテストって。庭詰めってあるんです。お寺の玄関の上がりかまち。草履を脱いで、上がる所ありますよねえ。あしこへ履歴書と誓約書を置いて、そして誓約書には「この道場で少なくとも3年以上修業しますが、もしもその間に命を失うようなことがあっても、一切文句はいいません」って書いて、なぜか一枚収入印紙を張れっていうんで、張ります。

それで玄関に、こう横座りして、一休さんのような格好して「頼みましょう」といったまんま、このままの格好で大体5日間、座っているわけ。起き上がる時は、食事にいく時とトイレの時だけ。

もちろん、途中でいやになって帰ってもいいのよ。帰ると、その人の名簿の上に赤い字で逃亡者と書かれて、二度と出家許されない。玄関で座ったあと、今度は壁に向かって1週間座る。それタンガ詰めっていうんです。まあ、場所によって違うんですが、大体これが基準になるんじゃないかな。それが終わると、3年間の修業が待ってるわけです。3年以上ですね。

一度遊びに来ない？そしたら本当に来たアホがいるんだよね。「ご免下さい」って来ましたよ。「どちら様ですか」っていったら「おれは毎日新聞の社会部の記者で、佐藤健という」「どういうご用件ですか」って聞いたら「いや毎日新聞で座禅の取材してるから先生、インタビューしてくれ」って言う。

「なに言ってるのお前。修業というのは見るもんじゃない、やるもんだ。自分で座禅すりゃいいじゃないか。人に聞きやがって。もっといい方法教えてやろうか。まあ座禅もいいけど、お前、会社1か月休みもらってこい。僕がお前の頭きれいにそってやる。衣貸してやるから、鎌倉の円覚寺でもいいや。そこ行って庭で5日座れ。壁に向かって1週間座れ。残り18日ワラジはいて、カサかぶって行脚しようじゃないか。そして、自分の体で感じたものを記事にしたらいいじゃないか」って言ったら、あいつが「そら、いいアイデアだ。いっちょうやってみよう」って。

「やってみよう、ってお前、頭そって大丈夫か」と言ったら「また確実に全部はえてくるだろうな」って言うから「当たり前だ」。どうしてもやる、って言うけど普通3年やらなきゃいけないものを、1か月でできるわけないでしょ。「だから、今のは冗談。忙しいから帰ってくれ」って言ったら、あいつが急に玄関に横座りして、私に向かって「師匠」って言うんだ。私、めまいがしましたよ。

だってそうでしょう。今、会ったばっかりの、そんな短い時間の間に、私の優れた人間性を見抜くなんてことは（笑い）。大したもんだ。「じゃあ、まあ上がれ、出家の祝いだ。乾杯しよう。お酒で乾杯しよう」。ただし、お寺でお酒なんていうことは許されない。だ

けど、飲みたい。

そこで、酒とは言わずに、隠語で言ってる。皆様、当ててみて。一応、家では般若湯といってる。二種類目に泡般若というのがある。三種類目に洋般若と呼んでる（笑い）。相当、通が多いようですねえ（笑い）。「どれでも好きなものを所望しろ」といったら、あいつが「はい、洋般若の水割りが飲みたい」っていうから洋酒を持っていってやったら、「すみませんけど、その前に一本冷えたキリンの泡般若が欲しい」っていう（笑い）。

「ずいぶん飲むね」「サントリーの角だったら1本飲む」「たばこ、よく吸うねえ」「ハイライト、1日80本」「あのねえ、酒とたばこ、修業中駄目だよ。ところで、さっさから、私のことを師匠と言ってるけど、だいぶん酔っ払ったようだから、ちょっと佐藤健さんの本音が聞きたい。宗教観」。そしたら「本当のことを言っていいか」って言うから「ああ、いいよ、言ってごらん」っていうと言いましたあいつ。

「おれはねえ、あんたみたいに頭そってるやつ見るとねえ、その頭をぴちゃぴちゃ叩きたくなる。おれのあだ名は傲慢の佐藤健、無宗教の佐藤健、俗の権化佐藤健という。おれは世界数十か国、特派員で歩いてる。だから世界数百の人種を知っている。その世界数百の人種の中で、一番いんちきな人種は誰だと思う」と言うから「知らねえ、そんなのは。誰だそれは」って言ったら「それはてめえだ、坊主だ」って。

いやなやつを弟子にしちゃったな、と思ってねえ。翌朝、きれいに頭をそって。山梨県の道場が引き受けてくれたものですから。佐藤健、玄関に横座りして、「頼みましょう」と言ってるのを見届けて帰ろうと思ったら、そこの師匠さんが、これが酒好きな人で「松原さん、一杯やりませんか。剣菱の般若湯が入った。ああやって玄関で苦しんでいる修業僧をつまみにして飲む酒は、またうまいもんだ」って言うから「じゃあ、乾杯」。

飲んで帰って3日目にそーっとのぞきに行ったら佐藤健、玄関で泣いてる。あとで聞いたの。「なぜ泣いたんだ」ったら「自分の中の、自分がいった。ばかだなあおれ。何も頭までそることねえじゃないか」（笑い）。「これ取材の行き過ぎだ」って泣いてるわけ。

それから今度、壁に向かって1週間。座った3日目。「無理だよ。絶対無理だ」。遂にあいつ脱落。とうとうお寺を出て、毎日新聞に帰ることになった。ぼろぼろ泣いてねえ。泣いたらしいよ。遂に挫折。立ち上がろうと思ってふっと横向いたら、庭に面した障子が一枚破れてた。その破れた障子から見えた庭の雑草の緑が、すごかった。世の中に、あんなにきれいな緑があるのかと思った。よし、おれも雑草に負けないって、また前向きに座っていったら、なんとその雑草の緑の美しさに人生を学んだ、という記事が、その年の菊地寛賞受賞ですよ。

それから今度、旅に出たんだけど、あいつナルシストっていうんですか、街のショーウインドーに自分の衣姿写して歩くんだよ。「格好いいね、おれね」（笑い）なんて言ってるわけ。あれで、ちょうど1か月たったから、じゃああす、毎日新聞へ帰さないかん。じ

ゃあ今晩は、最後の晩餐会をやろう。秩父の温泉場におりました。

何せ酒が強いでしょう。だからねえ、夜始めたんじゃ朝までかかっちゃうから、「じゃ昼から始めよう」って言って。それで終わったのが午前2時だった。佐藤健こちらへ座って、お銚子36本ですよ。ここに酒好きの師匠が来て、私がここに来て、それからこっちに毎日新聞きっての名カメマン。シャッターチャンスを逃がすことで有名なカメラマンがここにいて、飲んだ飲んだ。20本ぐらいまでは、私のことを「師匠」。20本過ぎたら、もともと酒乱のアル中だから「はげ、飲め。おめえなんか、にせものだ。おめえなんか、くそくらえだ。何が松原哲明だ。ふざけるな」って言う。「まあ飲め、まあ飲め」。

今度は、泣き上戸になった。うわーんと泣いて「おれにはもう何が何だか、さっぱりわからねえ」わーんとそのまま寝ちゃった。

翌朝5時に起こした。「起きろ。これから6時発の電車で毎日新聞に帰る。ただ駅までぶらぶらぶらぶら行くのいやだから、駅までほーっとお経を読み、托鉢して行くぞ」って言ったら、あいつが「お経読むの勘弁してほしい」「なぜだ」「だって、史上最大の二日酔いで天井がぐるぐる動いてる。むかむかして気持ちが悪い。そんな時にほーっとお経読んだら、げーって出ちゃう」。

「しようがない。酔いをさましに風呂へ行ってこい」。なかなか出てこない。浮かんでるんではないかと思ったら、あいつライオンの口から出るお湯があるでしょう。あれを新しい湯と信じて飲んでるの。「ばか、循環式だ」(笑い)。

それから街へ出ていったら一軒、お寺へぶつかった。そこでわれわれは、お経読まなくちゃいけない。佐藤健真ん中、酒好きの師匠こっち、私かここ、例の名カメラマン、これも激しい二日酔い、フィルムを巻いてる真っ最中、カメラマンがフィルムを巻く、いやな予感よ。

と、突然、佐藤健、お経の本がばたんと落ちた。こっちにいるお坊さん、やさしい人だから「あら、また健ちゃん、昨晩のように感激のあまり泣くのかしらと思った」。私は違う。あ、こいつ吐くな、と思って避けた。幾ら無宗教の男でも、観音様に吐くわけにいかない。そこで彼は、180度振り向いて、下向いて吐こうとしたけど、下が駄目なんです。両手に経本持ってるから。下が駄目ならどうしたと思う?

上向いたんだ、あいつ(笑い)。私、初めて見た。竜が火を吹くっていうのをね空中に向かってばーっと。霧になっちゃった。それ見たカメラマン、一緒になって吐いて(笑い)、またシャッターチャンスを逃してしまったんだよ。今じゃスター記者になりましたけどねえ。宗教のことなら佐藤健。やっぱり耐えるという心さえあれば、何か生まれるのかも知れない。

4番目が生死。これ前向きですから。前向きっていうけど、人間の体っていうのはみな前向きにできてるんだよね。そうでしょう。見て。目だって口だって鼻だって手だって

足だって、みんな前よ。なぜ前になってると思う。一生一回しかないから、前向いて取り組めるようにちゃーんとつくってくれてるのじゃないかな。

だけど、みんな前に付いてるのに、どうして耳を横に持ってったんだろうね。こっちがあいてるのに。犬だって猫だって、みんな前だよ。だから、みんなキャッチするから、いうこと聞くんじゃない？耳を横へ持っていったから、みんな流されるか、曲がって伝わるか、どっちかじゃない。「言ったじゃない」「聞いていません」となっちゃう。

耳は、なぜ正面にないのか。重大な問題だと思うよ。僕なんか、昭和大に入院中に悩んじゃったもん。何で耳、正面にないのかな、と思ってね。たまたま、総婦長っていうのが来たから聞いたんだ。真剣に聞いたんだよ。「すみません。あのなんで耳は正面にないんでしょうか」と言ったら「デザインの関係でしょ」だって（笑い）。「お大事になすってね」だって。あほかと思っている。

次に、ギャル看護婦が脈とりにきますね。聞いたわけ。「ねえねえ、何で耳は正面にないと思う？」って言ったら「電話かける時どうするの？」だって（笑い）。「もしもしもしもし、いつまでたってもメモが取れないでしょう」だって。「あんた、入院したほうがいいんじゃないの」って言ったんですけどね（笑い）。

5番目、禅定。これはひたすら。一心でもいいですねえ。今どんな本読んでますか。この本読んでくれませんか。「別れの日まで」。著者は尻枝正行。お仕事はバチカンの日本人唯一の現役の司祭、神父さん。発行所・新潮文庫。現役の神父さんですよ、バチカンの。日本人ただ一人。

正行さんが6歳の時、鹿児島に住んでいました。お父さんが中国で、戦争で亡くなります。お母さんは、正行さんの弟さんと、正行さんのお姉さんと、この3人を日雇い労働の荷車引きをしながら育てていくんですねえ。

ところが、戦争が激しくなって鹿児島が空襲で焼かれました。焼けだされたこの4人は、宮崎県都城に住んでいるおばあちゃんの家に転がり込むんですけど、家が狭くって住みきれません。ちっちゃな小屋を建てたいんだけど、お母さん日雇い労働でしょ。お金なんて、余ってるわけないもん。

でも、何とかしなくちゃいけない。そこでどうしたかというと、6歳の正行少年が泥棒に出掛けるんですねえ。当時、都城にアメリカ軍の援助でもって建築中だった教会に、真夜中に釘泥棒にしのび込むんです。真っ暗な釘置場に行って、アメリカ製のぴかぴかに光る釘を、音のしないように袋に入れてた。

そしたら、いつの間にか正行少年の肩に手が置かれた。びっくりして見上げたら黒い衣を着た外人神父が立っていた。つまみ出される、叱られる、と思っていたら外人神父さんが、正行さんの肩から手を離し、正行さんのそばに一緒に座って、今度は外人神父が両手でもって釘を袋の中に入れ始めた。そして、袋一杯にして、正行さんの手をつない

だ外人神父は、教会の扉を開けて、その時、初めて口きいてくれた。「ぼく、また釘が欲しかったら取りに来るんだよ」って、帰したんですね。

家へ帰って寝られない。普通なら怒られるのに何で？午前4時にもう1回飛び起きて、2キロあるんですけどね。2キロの道のりを走って行って、そして教会の扉を開けた時に、外人神父に向かって言ってる。「先生、どうしたら先生みたいな人間になれるんですか」って。「僕に教えてください」って。教会に通ってくるんですね。竹の下の坂道というのがあしこにある。そこをお母さんは荷車を引いて行く。後ろから正行さんが押していく。「母さん、重たいねえ」「正行、ちょっと休もうか」といって腰を降ろした時に、正行さんは胸の内を打ち明けるんです。「母さん、僕、将来ねえ、神父になりたいんだけど、母さん許してくれるかな」って。その時のその質問が、お母さんは一番怖かったんですねえ。

そういった時に、こう答えようと思った。「あなたねえ、うちは浄土真宗よ。神父になんかなっちゃ駄目よ」って。「いい、お母さん、こうやって働いているのはあなた家の長男でしょうが。あなたに将来ね、面倒を見てもらうその日を目的に、お母さん働いているのに、大きくなって、ハイさようならってあんまりじゃない」って言おうと思ったけど、なぜ母親がわが子の人生の脚本を破かなくちゃいけないんだ。そんなエゴな母にはなりたくない、って。お母さんは別のことを言う。

「母さんのことは何も心配いらないから、うんと勉強して、立派な神父になってね」って励ますんですねえ。立派な神父になられて日本人で唯一の神父さんでしょう、バチカンの。バチカンに行くと、もう日本へ帰らないんですよ。結婚もできない。お母さんも連れていくことができないですねえ。

そこで神父さんは、老いた母に都城に行って別れを告げるわけですねえ。それが「別れの日まで」ですねえ。

それをお母さんが先に見抜く。「正行、ヨーロッパに行くんだって？」「うん」「どれぐらい行くんかい」「4年かな」「4年も行くんかい。ずいぶん長いね」と言って、私も二度ほどお家へ行ったことあるけれど、小さな台所がある。そこで米粒を数える。365個。そしてまた365個。これを4つの山にして、4年分ですねえ。その箱の中に入れて持って来て「じゃあ、母さんはね毎朝、一粒ずつこの箱の中から米を食べることにしておく。それで、これが空っぽになった時に、あんた帰って来てくれるんだね」と言って別れるんですね。

4年の予定が十余年になっちゃった。母は、ただひたすら待ち続けるわけです、帰りをね。十余年後の昭和53年、神父はアジアの5か国を公式訪問したのちに、10日ばかり日本に立ち寄った。その時、母は九州の片田舎からわざわざ東京に上京してまいりました。公用を総て果たし終えた1日、私は八王子に住む姉の家に母を訪ねました。

母に会うと歓びのあまりでしょうか、安心したのでしょうか、そのまま私の腕の中で死んでいきました。あっという間の出来事でした。かねがね母は「正行が日本にいるときに死にたい」と申し、そのように神に祈っておりましたから、この待ち続けた長男坊神父の腕の中で死ねたのは、あるいは母の本懐であったのかも知れません。

臨終の苦しみの去ったあとの母の顔は、この世のものとも思えぬほど美しいものでした。あの美しい死顔を刻むために母の一生はあったのでしょうか。私の一生も母の待つところで終わるのかと思うと、死がさほどつらくなくなります。母は、私の腕の中で息絶えました。今度は、私の死に際には、母が両腕を広げて私を迎えてくれそうな気がします。その日がくるまでマリアにならって、清風が地を払って吹き過ぎるように生きてみたいなア、と思っています。死んだ母の分まで生きてみたいです、と。

これ、わずか1頁。素晴らしい本ですよ。僕、会う人に配ってますけどね。コンピューターによると、尻枝正行の「別れの日まで」では出てこないんだそうです。曽野綾子さんと、ローマのバチカンと東京の往復書簡で、曽野綾子の「別れの日まで」と注文すれば、本屋さんが取り扱ってるらしいですね。

最後の6番目の感性。知恵の感性。心が乾かない。心というのは、絶対乾いてはいけないんだ。私のいとこで鈴木孝子という人がいます。それは東京の五反田という所でダンボールを商っているんですが、旦那の富雄と二人で細々とやっております。それが一昨年の8月に結婚20周年を迎えたものですから、思い出の山中湖に一泊旅行をしようといって、思い出のホテルを予約しておいた。

ところがついてなくて、台風が接近してきた。「ついてないね。でも天気予報はずれるかも知れないから行こう、行こう」といって中央高速道路、車を走らせたんだけれども、本格的になってきた。台風に直撃されちゃった。中央高速道路は通行止めになっている。そして下に降りたら、道は雨でもって冠水して、田んぼのようになってる。ごうごうたる嵐の中をようやくのことで目的地の山中湖のホテルに着いたのは、もう真夜中になっていた。

フロントでチェック・インをしていたら、そこへ1台の大型のオートバイが着いて、ドアが開いて、若い恋人たちが入ってきた。二人はずぶ濡れで、男の子がヘルメットを脱ぎながらフロントに近付いて言ってるのが聞こえる。「すみません。僕たち、こんな天気になると思わなかったものですから、お金の持ち合わせがありません。ナナハンのオートバイで2人乗りなものですから、スリップして危ないので必ず東京からあとでお金お送りしますので、どんな小さな部屋でもいいですから、泊めてください」。

そしたらフロントがすげなく「満室なんですよ」と言って断った。そこでしようがないから、若い恋人たちは表へ出ていこうとする。それを見たタカコちゃんが、旦那のトミさんに言った。「あんたねえ、あの子たち帰しちゃ駄目だよ。こんな土砂降りの嵐の中を、

スリップして大けがしたら、かわいそうじゃない。あたしたちは部屋があるからいいけど、あの子たち部屋がないっていうのだったら、私たちの乗ってきた車のキーをかしてあげよう。そこへ今晩泊めたげたら、いいじゃない」「わかった、いいアイデアだ」。

トミさん、表へ出て行って「おいお前たち、おれたちの車で今晩泊まっていけ」と言ってキー貸してやった。

翌朝、うそのように晴れ上がっていた。決められた時間にロビーに降りたら、若い恋人たちがにこにこ笑ってカギを返してくれた。そして、男の子がいみじくも言った。「ありがとうございました。お陰さまで、本当に助かりました」。そして一言付け加えた。「このご恩は、一生忘れません」と言ったって。

そのままくるっと背中向けて、若い恋人たちが、表へ出ようとしたのを見た孝子ちゃんが、また旦那の富雄に「あなた、あの子たち、昨日からご飯食べてないよ。けさだって、まだオープンしてない。お腹すかして帰すわけにいかないじゃない。あんた悪いけどねえ、あの子たちに1万円貸してやって」って。こいつ養子に来たもんだから、一言もしゃべれないんだよ（笑い）。

「お前なあ、いくらなんでも見ず知らずの人にそこまでする必要はないんじゃないか」「いいから貸してやって」「わかった」。またトミさん表へ出て行って「おい、お前たち途中で飯でも食っていけ」って言って1万円札貸してやった。

一泊旅行して帰って、五反田のお家で、夜ご飯を食べていたら、外にオートバイの音がして、あの男の子と女の子が1万円札に小さな小さな菓子折りを添えて「ありがとうございました。おじさん、おばさん、ありがとうございました。お陰さまで、本当に助かりました」と言って、また男の子が付け加えた。「このご恩は、一生忘れません」。

その年の暮れ、あの子たち一体どうしてるのかなあ、と思ってたら、また夜、ナナハンのオートバイに2人でまたがってきて、男の子と女の子がそろってやってきて「おじさん、おばさん、お陰さまで僕たち結婚することになりました。つきましては、小さな小さな披露宴をしたいと思うんですが、仲間の会なんですけど、おじさんとおばさんに、ぜひとも出てきてほしいと思います」と言って披露宴の招待状を置いていった。

開けてみたらトミさんは男の子側の主賓なんだって。孝子ちゃんは、女の子側の主賓でスピーチしたそうですよ。いい話だよねえ。こんないい話、わずか2人で隠しておくのもったいないと思ってねえ。当時、「女性セブン」に連載中で、ちょうどネタの切れたのがあったものですから、この話を載っけてやったの。そしたら孝子ちゃん喜んじゃって「セブン」100冊ぐらい買って（笑い）近所に配りまくったっていうけど、いいですよ。

私たちの修業で、托鉢というのがあるんです。ほーっといって、神戸の街の中を歩いてる修業僧の姿、見たことあるかも知れませんが、あれ最初、恥ずかしいんだよ。変なカサかぶって、大きな衣着けて、わらじはいて、はだしでしょう。それで人からお金もら

うっていうのは、なかなか難しいんです、気分的にね。

生まれて初めて熱海に連れられて行って、先輩の坊さんが「お前、あすこの大きなホテルへ行ってこい」と言う。有名なホテルでねえ。そこへ行って、お金もらってこい。

あんまり大きいから、そばへ近付くの怖いですよ。だから遠くに離れて、ほーっていってたら先輩の坊さんが来て「ばかだなあ、お前。もっと前へ出なきゃ、中まで声が通らんだろう、前へ出ろ」。そらそうと思って前へ出て、ほーっというと、自動ドアになってるものだから、がらがらがらって開いてしまった（笑い）。

中に100人ぐらいのお客さんがいて、バッグ持ってこれから観光バスに乗り込もうとしているところへ、ほーっとやったから、あわてた番頭さんが飛び出してきて「しっ、しっ」と犬や猫じゃあるまいしねえ。

女中さんが出てきて「あんたねえ、朝8時半といったらねえ、旅館が一番大事な時間だ。これからお客様ご出発という時間に、玄関に衣着て立つやつがあるか。早く出ていきなさい」。そんな言い方ないじゃないか、と思ったら涙が出てきた。修業僧、涙見せるの恥ずかしいから、下向いて一生懸命こらえていたら、別の女中さんが出てきて、前の女中さんに言ってる。「あんた、ばかだね。ああいうのにはね何を言っても駄目なんだ。金やんなきゃ出ていかないよ」（笑い）。

そらそうだけど、そうハッキリ言うもんじゃない。それでポケットへ指突っ込んで、そして指の上へお金を乗っけたその女中様。私に向かって「ほれ、持っていきな」と投げた。ちゃらん、ちゃらんと落っこったお金が1枚の5円玉でした。「拾え、拾って持っていきな」って。拾いましたよ。「ああ、とうとうおれ、こじきになっちゃった」と思って、ぽろぽろ涙が出てねえ。こんなはずじゃなかった、と思った。

ぽろぽろ涙流しながら、私は熱海の坂を駅に向かって歩いて行った。そのまんま私は、当時の国鉄に乗って東京へ帰るつもりであったんでしょうね。修業やめてね捨てて。で、坂の途中まで来たら、横丁から声がかかった。「お坊さん、待って」って言うんだ。ぱっと見たら、年のころ3歳。真っ赤なセーターに真っ赤な毛糸のスカートをはいた女の子が、私を追っ掛けてくるんだよねえ。

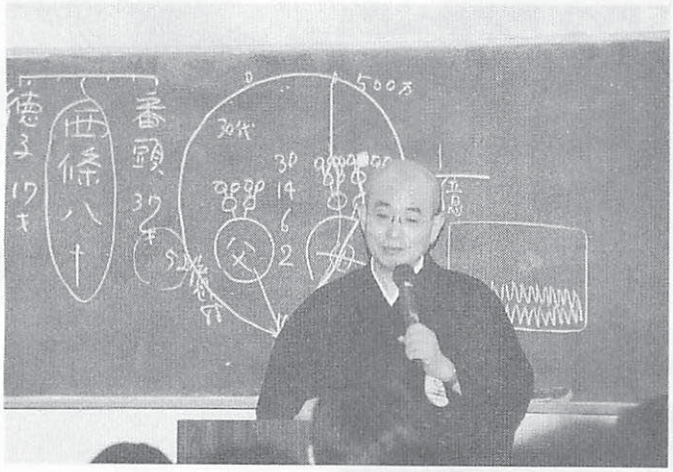
そして、立ち尽くしている私の所へ飛び込んできたその3歳ぐらいの女の子が、小っちゃな小っちゃな手を僕のところに差し出して、「お坊さん、あげるね」って僕の手の中に温かい1枚の10円玉くれたんですよ。参っちゃった、あの10円玉には。温かい10円玉ね。あの子のお小遣いだったんでしょうね。私は、その10円玉をもらった時に「ああ、あの子は見ててくれるんだ」と思った。「おれ、一人じゃないや」と思った。

そして、その10円玉もらって、私は三島の自分の修業道場へ戻った時に、師匠に言ったんです。「きょう、大きな旅館で朝、5円玉投げ捨てられて、こじきになっちゃったと思って、これは修業と違うと思って、僕は黙って東京へ帰るつもりでした。そしたら、坂

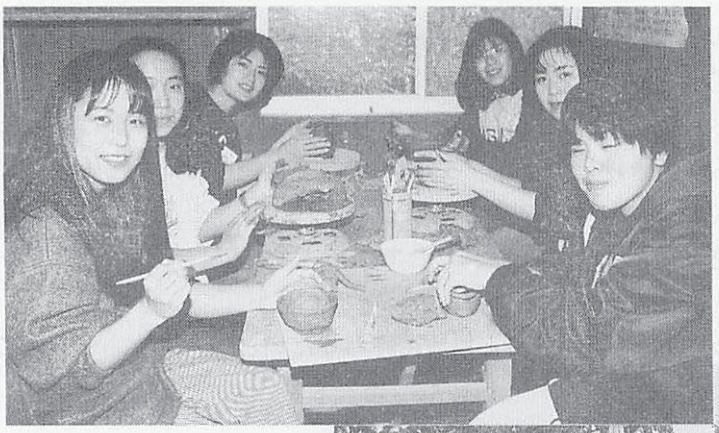
の途中で名もない小さな女の子に、温ったかい10円玉のお小遣いもらって、僕はよみがえりましたよ」って言ったら、師匠いわく。

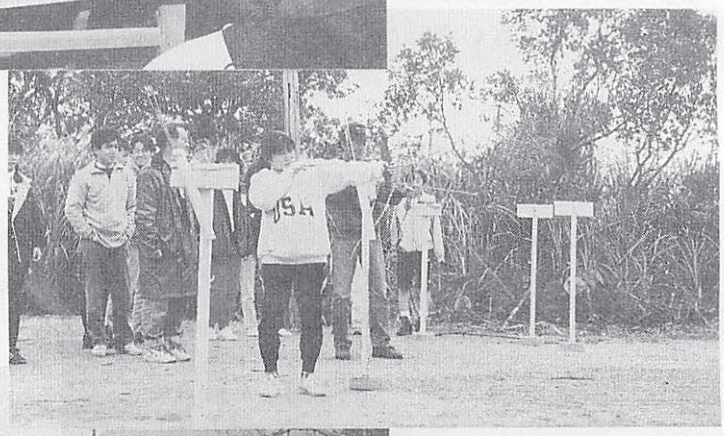
「その心を乾かない心というんだ」って。「いいか、忘れるんじゃない。お前は坊さんとして、乾かない心をずーっと説き続けていけ」って。「ただ説き続けていっても、世の中は乾いていく。乾いていくけども、さらに説き続けるんだ」って。そういうように言われた。師匠との約束を、きょう果たすことが、ここでもできまして、そういうチャンスを与えていただきまして、ありがとうございました。

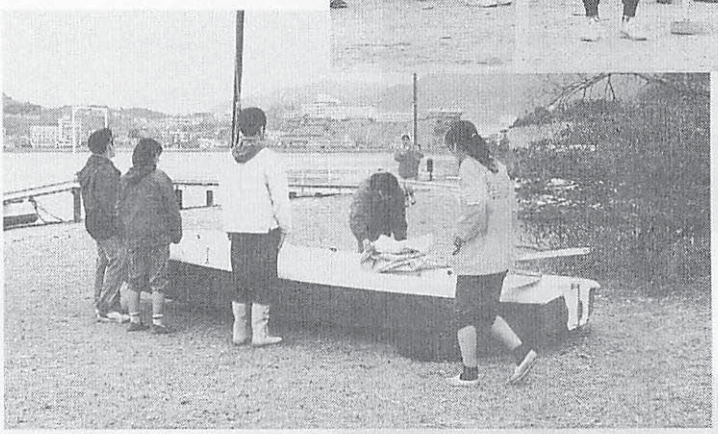
ちょっと早めに始めたものですから、ちょっと早めに終わりたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。(拍手)



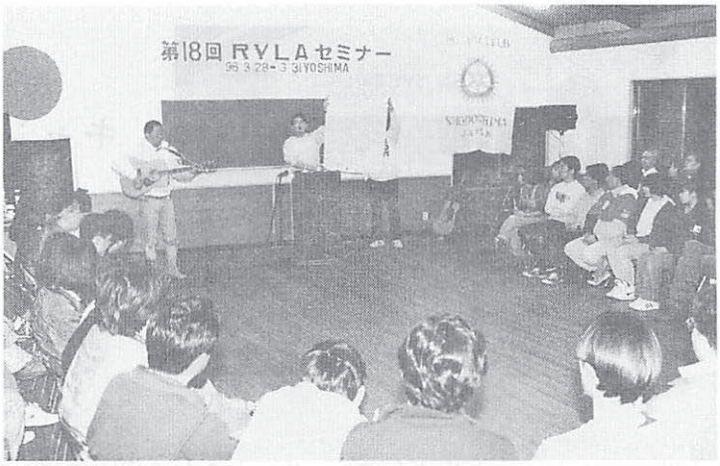
レクレーションタイム







キャンプファイヤー


第18回 RYLAセミナー
96 3 28~3 31 YOSHIMA

第18回 RYLAセミナー
96 3 28~3 31 YOSHIMA

キャンプファイヤー

ライラ委員（神戸RC）
山口　徹

人間は、オギャーと生まれて、一生、どこかの集団に属しております。家族、友達、学校、会社、地域など、どこかの集団に必ず属しております。ある人は複数に属しております。ほとんどの人がと言っていいかも知れません。私はどこにも属していないということは、誰も言えないのです。

人間というのは、いろいろなものや事柄に出会い、それを共有することによって他の人との関係を深めていくわけでございます。そこでいろいろなものや事柄、そして行動、とりわけ人というのが重要な媒介となっていくのでございます。

ところが、今の子供たちは、3間がないと言われます。時間、空間、仲間であります。それは言うまでもなく、この教育体制の中では、子供たちにとって、なかなか時間がない。遊ぶ空間がない。あるいは仲間がない、と、よく言われます。

時間、空間、仲間がないということは、人と人との関係を生み出していく、いわゆる出会いというものが、極めて少ないということになります。

したがって、そこには、相手の気持ちになってあげるとか、あるいは相手の気持ちを察するとかいう、いわゆる相手がどんな気持ちを持っているのか、そのために自分がどうなければならないのかを考えて、多くの人が行動できなくなっている現実が、今、日本の社会には特にございます。

私は、たまたま小学校5年生の時に、友達に誘われまして、キリスト教会の日曜学校というところに行きだしました。私はクリスチャンホームで育ったわけではないんですけれども、本当に、たまたま友達に誘われて、キリスト教会の日曜学校に行き始めました。

ある時、日曜学校で友達とケンカをしました。その時に、教会学校の先生が来られまして、事情を聞かれました。皆さんも経験があると思いますが、自分を正当化しないと負けてしまう。自分が怒られることは決まっている。ですから先手を打ちます。

「どうしたのですか」と聞かれて、「こいつが悪いんや」と激しく責めます。すると、教会学校の先生は「山口君、今、君は、どんな手の格好をしましたか」と言われました。「そ

れを、もう一度やってみてください」と言われました。

仕方なく、私はもう一度やってみました。このように手を出しました。すなわち右手の人差し指を前に、そして親指を上に、ちょうどピストルのような形をして、「こいつが悪いんです」と、もう一ぺんやりました。やっぱり怒られるの嫌だし、負けたら嫌だから、堂々と「こいつが悪いんです」と言いました。

先生は「山口君、自分の右手をよく見て。君の人差し指は彼のほうを向いているね。彼が悪いんだろうね。だけど君の親指は、どっちを向いていますか。神様は、まず、どうおっしゃっていますか」。すなわち親指は天を向いているわけです。

そして更に先生は「残りの君の3本の指は、どっちを向いているか見てごらん」ということを、私におっしゃいました。私の中指、薬指、小指の3本は、折れ曲がって自分のほうを向いておるのを発見したのでございます。

「山口君、君は、彼が悪い。そして神様も悪い。しかし一番悪いのは自分だと言っているわけだよね」ということを先生は言われました。すなわち、相手を責め、神様も悪いと言いながら、実は残りの3本は、自分を指差しているということを、指摘されたのです。

その時、私は、ハッと自分に気が付くものを発見いたしました。もっと言うならば、その時、私の生き方は変えられたと言っても過言ではないと思うのでございます。

先ほど申し上げますように、私たちはどこかの集団に属している。そしていろんな人間関係がある。その中で自分をいつも正当化しておきたい。そして相手を責める。その姿勢を問われたのだと思います。

じゃあ、どのような人間関係を、私たちは作っていったらいいのでしょうか。皆さん、壁打ちのテニスをしたことがございますか。多くの人は経験があると思います。あるいはボールを持って、壁に向かって、一人でキャッチボールといいますか、やられた経験があると思います。

思い出してみてください。壁打ちのテニスに、強く打てば、ボールは強く返ってきます。弱く打てば、弱く返ってきます。人間関係における心のキャッチボールとでも言いましょうか。私たちの人間関係も、どうあるべきか考えなければならないと、私は思います。

私は、その後、関西学院という、中学、高校、大学を出ました。そして大学時代にYMCAのボランティアのリーダーとして、グループ活動のリーダーであったり、キャンプのリーダーをさしていただきました。そして今井鎮雄さんという、その当時の総師に出会いました。多くのことを私は教えられました。

私も、できたらYMCAで働きたいと思いました。幸いYMCAに一緒に働くかとおっしゃっていただきましたので、お願いしますということで、私はYMCAのスタッフになりました。

最初、担当させられましたのは、体育のできない子供たちの教室でございました。いわゆる虚弱児であったり、軽い身体的にハンディを持った子供であったり、肥満児であったり、あるいは友達と遊べない子供たちばかりを集めた、体育が好きになる教室というものでした。

私は、多くのことを学ばしてもらった大学時代の経験を生かして、多くの子供たちと共に歩みたいと思ってYMCAに入りました。

ところが、4月の終わり頃に、ある青年に出会いました。体育館の公衆電話の所で、一人の青年に出会いました。それは私の関学の後輩であり、教会に来ていた後輩でもありました。井上君といいます。井上君が公衆電話の所にいたので、「おお、久しぶりやなあ」と言いましたら、「今度、YMCAの専門学校のホテル学科に入学しました。また、よろしくお願いします。」「そうか」と言って、その時、私は忙しくしていたのか、それだけでした。

その後、彼が、真っ赤なトヨタスポーツに乗って、YMCAに通っていることは知っておりました。しかし、その後、話をする機会もありませんでした。

2週間ほどたって、私の所属します教会の前に、赤いトヨタスポーツが停まっておりました。あっ、井上君、久しぶりに来よったんやなあ、ということに気が付きました。

教会の礼拝堂に入りますと、後ろから2番目に、井上君と彼女らしい人と、2人座っておりました。礼拝がすみまして、井上君にまた顔を合わせましたので、また「久しぶりやなあ」と言っただけでした。私も教会の役をしておりましたので、ばたばたしていたのです。

ところが、その日曜の、その週の土曜日、彼は甲山という所が西宮にありますが、その公園の一角で心中をいたしました。それはトヨタスポーツの排気筒から中に入れて、彼女らしい女性と2人、心中をいたしました。

あとで聞いたのですが、19歳と18歳でした。結婚がしたいと両親に打ち明けたところ、まだ若いからと止められて、それを苦にして心中したということを、あとで聞きました。

私は井上君を殺してしまったと思いました。私は、何のためにYMCAに入ったのかと、自分を問い詰めました。一人でも多くの人に出会い、何かお役に立ちたいと思って入ったのではないか。しかし、あの体育館の公衆電話のところで井上君に久しぶりに会って、「おお、久しぶりやなあ」と声は掛けた。そして彼が「また、よろしくお願いします」と言った言葉が、彼が亡くなってしまったあとで、わかりました。「また、よろしくお願いします」。

更に、教会に久しぶりに来ていた。二人で神様に祈るような気持ちで来ていたんだろうと思います。しかし、たった1分でもいい、2分でもいい、ゆっくり話すことをしておれば、ひょっとしたら「山口さん、彼女です。僕たち、実は、こうこうこうこうで悩んで

いるんです」ということを言ってくれたかも知れない。それを、忙しさにかまけて、「久しぶりやなあ」。声を掛けてあげたつもりです。しかし、本当に彼らのためには全くなっていなかった。

その自分を見た時に、私はYMCAの指導者になれないと思いました。本当に彼に申しわけないと思いました。しかし、これでYMCAの指導者を辞めては、彼の死が無駄になる。だから、彼の死を無駄にしてはならないという思いで、その後、歩んできたつもりであります。

私たち、いろんな人たちに出会っていきます。ある時には励まされ、ある時には支えになってくれる方が多いでしょう。しかし私のように、人を殺してしまうことさえあるということであります。私はそういう意味で、人間関係を作り上げていくことは難しいなということを実感しています。

素晴らしいことも、私も今までのYMCAのスタッフとして、30年のスタッフ生活の中で、多くの人に出会いました。教えられました。励まされました。素晴らしい出会いを知っています。しかし、本当の出会いとは何か、ということは永久に追求していかなければならないと思っております。

ある有名なマラソンランナーが、歩くことと走ることという、その姿は似ているけれども、決定的に違うものであるということを言ったことを聞いたことがあります。なぜなら、歩いている時はどちらかの足が必ず地についていますが、走っている時は両方の足が大地から離れている瞬間があるからだと言うのです。

大した違いには思えないかも知れませんけれども、少なくとも2本の足で不安定な姿で立っている人間にとって、その両方の足が大地から離れるということは、本当は大きな決断と勇気のいることなのかも知れないと思うのです。歩くということが日常的な安全な行為とするならば、走るということは反対に極めて非日常的な、冒険的な行為と言えるかも知れません。

私は先ほど申し上げるように、30年、YMCAで働かせてもらっています。しかし少なくとも、今52歳ですが、少なくとも私が歩んできた道は、必死になって走ってきたんではないかと思います。それは日本の高度経済成長と全く同じ成長というか、その中で走ってきました。世の中が、物とお金というものを求めて必死に日本の国が走ってきたように、われわれ日本人も、私も含めて、必死に走ってきたのではないかなということを思うのでございます。

しかし、私はこの度の大震災によって、多くのことを学ばしてもらいました。ご承知の方もあるかと思いますが、YMCAは、西宮と、三の宮と、あの長田において、3か所において、YMCAのネットワークによる日本のYMCA、あるいは海外のYMCAの皆さんの協力を得て、また市民ボランティアの協力を得て、ボランティア活動を続けて参りま

した。その中で、人間にとって何が大切であるのかということを教えられました。

その話は、昨日も、今井さんがおっしゃっておりましたけれども、数々のことを私たちは学ばせてもらいました。今、申し上げる、相手の気持ちになって何がしてあげることができるんだろうか。自分の力は本当に足らない、弱い無力なものしかないなというようなことを、人間関係の中で、あるいは自然との対応の中で、私はそう思いました。

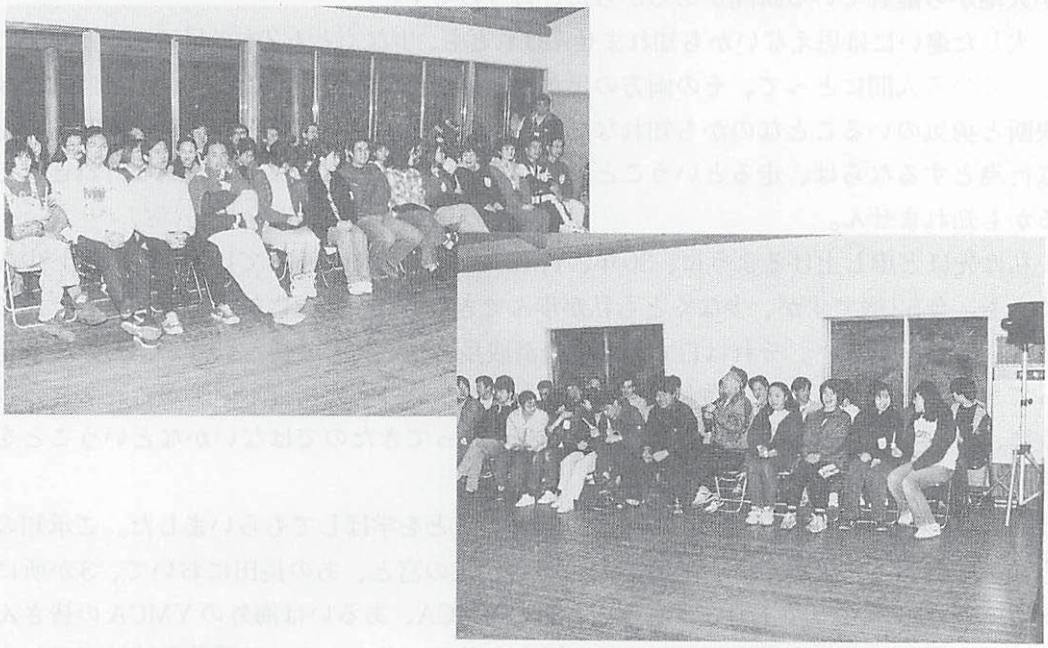
しかしこれからは、今、走ることではなくて、ゆっくり、ぼちぼちと、地に足をつけて歩くことが、私たちにとって極めて大切ではないかなあという具合に思います。

今朝ほどの松原先生のお話、あるいは、明日も渡辺先生のお話をお伺いいたします。そうすることの中で、あなたは今どこにいるのですか、どこに向かって行くのですかということが、問われるだろうという具合に思います。

私も、ここにおいでになる諸先輩に比べれば、本当にまだ若輩者です。しかし今述べましたことも含めて、もう一度、私自身も、今どこに立たされているのか、どこに向かって歩いて行くのかということを考えていきたい。あした、あさって、まだ続きます、このライラセミナー。

本当に何が大切であるかということを共に考え、感じあい、そしてスタートになれたらなあと思っています。

特に、この参加者の皆さんに、受講生の皆さんに、そのことを切に考えていただきたい。なぜなら、21世紀はあなたたちのものなのだからです。



3日目講義

「“こころ”とは」

日本カトリック学校連合会理事長
渡辺和子氏

第2670地区P・G　梶浦　暲一 氏

待ちに待った渡辺和子先生をお迎えして、皆さんと一緒に、心の洗われるような良いお話が聞けるチャンスをいただきましたですね。

渡辺先生はご存知のように、これは内緒ですけどね、昭和2年に旭川でお生まれになったんですね。お父さんは陸軍の大将、教育総監をやっておられたんですね。ところが昭和11年の2月26日ですか、2・26事件というのが、皆さんご存知でしょうが、その時に悲惨な殉職をされたわけですね。先生の目の前で、お亡くなりになったんですね。そういうご経歴があります。

それから、学歴を簡単に申し上げます。

東京の聖心女子大学をご卒業ののちに、上智大学の大学院の修士課程を終了されまして、後にボストンカレッジの大学院で哲学博士の学位を取っておられます。

そしてお帰りになってから、ノートルダム清心女子大学の学長を1963年から90年まで、最近までお務めになっていますね、学長さんを。

それからその後、東京のほうにお移りになりまして、ノートルダム清心学園の理事長を現在、続けておられます。それからノートルダム育英財団理事長もお務めになっておられますし、また日本カトリック学校連合会の理事長。この連合会というのはね、北海道から沖縄まで、900の大学から幼稚園まで施設があるわけです。その一番の理事長として、皆さんを指導しておられるわけですね。

現在も昭和女子大学の客員教授、あるいは自由学園の講師、あるいは、また昔のノートルダム清心女子大学の名誉教授として、各地でご講演活動をやっておられます。

本当にお忙しい方でしてね、本当にこのタイミングに、よく合わしていただいたと、有り難く思っております。どうか皆さん、先生の良いお話を、しっかりと心にとめていただきたいと、こう思います。

どうか先生、よろしくお願いいたします。

3日目講義

日本カトリック学校連合会理事長　渡辺和子 氏

梶浦先生、ありがとうございました。

梶浦先生から、簡単な履歴を出すようにとおっしゃったので、簡単なものをお出しいたしまして、わざと生年月日を省いておりましたら、今朝になりまして、昭和2年ですよね、とおっしゃって、まあね、シスターでも女ですから、やっぱり、こんなことを言われて、嬉しいはずはないのでございます。(笑い) まあ、私のボーイフレンドでいらっしゃいますから、お許ししようと思っております。

きょうは、ライラにお招きいただきまして、「“こころ”とは」というテーマで今年はなさるということでございます。選ばれて来ていらっしゃる若い方たち、そして私よりも本当に経験の豊かな方たちを前にして、何かお役に立つことができればと思って、喜んで伺いました。

20世紀のイギリスに、数学者、また哲学者として、ブイッツローという人がおりました。そしてこの人は、国際時間学会の初代の会長をした人なんですけれども「時間、その性質」という本を書いて、日本語にもなっております。

その中の一つのエピソードに、一つの笑い話として聞き流せる話が載っております。ただ笑い話としてだけでなくて、考えさせるものも持っているかと思います。

ある日のこと、一人のロシア人、詩人がロンドンの街を歩いておりました。詩人ということもあって時計を持っていなかったのか、周りの人に「今、何時ですか」と時間を尋ねようと思いました。

英語を、皆さん知っていらっしゃると思いますが、「今、何時ですか」ホワット　タイム　イズ　イッツ　というのが当たり前の質問です。ところがロシア人であるということ、そして詩人だということもあったのかも知れませんが、その言葉を、ちょっと間違えまして、ホワット　イズ　タイム　と聞いてしまったそうです。ホワット　イズ　タイム。時間とは何ですか。

それを聞かれたイギリスの見知らぬ紳士、通りがかりの紳士は、びっくりしただろうと思います。ちょうど私たちが街を歩いていて、見知らぬ外国の方から「ちょっと伺いますけれども、時間とは何ですか」と聞かれたらば、戸惑ってしまうと思うんですけれども、同じような当惑がイギリス人にあっただろうと思うんです。

このエピソードは、英語、それも非常に簡単な英語を間違えた。同じ単語、ホワット　タイム　イズ　イット　と　ホワット　イズ　タイム。ほとんど同じ単語の並べ方、それを間違えたことによって起こされたエピソードですけれども、私どもに、いかに時刻というものと、時間というものを、ミックスしがちな、しかも時刻にとらわれ過ぎて、時間そのものは何だろうということを忘れがちな事実を教えてくれていると思います。

きょうも9時半からということで、皆時間どおりにお集まりになっていらっしゃいます

し、私どもの1日を振り返ってみると、何時に起きて、何時に出掛けて、何時までにどこどこへ行って、何時から何時まで何があって、という、その時刻、日本語ですと幸いなことに、異なった言葉を使いますけれども、英語ですと同じタイムという言葉を使います。日本語でも、何時からという、時間と時刻というものを、ミックスしている場合が多々ございます。

ある方が、お年を召してからおっしゃった言葉ですけれども、私は木を切るのに忙しくて、斧を見る暇がなかった。一生を振り返ってみると、たくさんの木を切った。次から次へと木を切った。ご自分を樵（きこり）に例えていらっしゃいます。朝起きてから夜寝るまで、夜寝てからも、次の日にどういう木を切るか。人よりも多く、上等な木を、しかも上手に切って、たくさんのお金を手にする。木を切るのに忙しくて、その木を切っている斧、自分自身を見る暇がなかった。

今、考えてみると、もっともっと、木を切る合間に手を休めて、自分という斧に油を付け、磨き、いたわってやるべきではなかっただろうか。今、木を切り終えた時に、自分を見つめてみると、斧の歯がボロボロに欠けている。使いものにならないほどに摩滅している。これで果たして私の一生は良かったんだろうかという述懐をしていらっしゃいます。

そして、私にとって、これは人ごとではありません。今年も、もうすぐ4月になります。1年の4分の1が過ぎようとしています。それなのに私は、本当に木を切ることに追われてしまっていて、斧を見る暇がなかった、暇を作らなかった。

この暇というのは、皆さん、レジャーとして考えていらっしゃると思いますけれども、休暇の暇という字を考えていらっしゃるかも知れません。大言海という辞書がございます。暇というところを引いてみてくださると、実はレジャーとしての休暇の暇という字でなくて、一日、一日という日という字ね。それと間という字が書いてあって、日の間と書いてあります。太陽の光線が、陽光が差し込むにつきて言うという、そういう解釈ができているんです。

私は、このことはとても大事なことだと思いました。ゴルフをする暇だとか、またはディスコに行く暇だとか、ボーッとする暇だとか、もちろんそれも大事なことだと思うんです。旅行をする暇、有給休暇というようなことも大事なことだと思いますけれども、暇という言葉の元の意味は、お日さまがカーテンの間からでも差し込むことがございますね。真っ暗なお部屋に、お日さまがカーテンの隙間から漏れて入る。そういう隙間が、果たして私たちの、びっしりと詰まった日常の中にあるだろうか。なければいけないのではないだろうか、ということを考えさせる言葉です。

つまり、心にゆとりがあるかないかということで、必ずしもこれは時間的にゆとりがあるかどうかということではありません。病気で一日中、ベッドに伏していらっしゃる方、その方たちには、時間は十分におありになるかも知れない。しかしながら、本当に心の

ゆとりを持っていらっしゃるかどうか。これは、とても忙しい方でも、持ち得るものなんです。

忙しいということは、有り難いことです。たぶん、ここに選ばれていらっしゃる方々は、会社にせよ、学校にせよ、必ずといっていいほど、忙しい生活をしていらっしゃると思います。忙しいということは有り難いことですけれども、あの字が、りっしんべんに亡ぶと書くように、忙しさの中には心を亡ぼす忙しさがあります。心を亡くしてしまう。

忙しくなかったらば、ゆったりと受け止められることが、受け止められない。ゆとりがあったらば傷つかない言葉に、傷ついている。ゆとりがあれば、考えないですむような小さなことに、くよくよしている。それは結局、私たちに心の暇、心のゆとりがあるかないかということにかかっています。

今、平均寿命は、日本は世界一になりました。これ以上、私は寿命を延ばす必要はないのではないかと思っています。それよりも大切なのは、時間の量ではなくて時間の質を考えること。

私たち、1分1秒を争って木を切ってます。忙しい忙しい。そして本当に私も、井の頭電鉄によく乗りますけれども、快速と普通があれば、必ず快速に乗ります。確かに10分くらい早く着いてくれます。どっちかが3分早く出るといえば、必ずといっていいほど、私は3分早いほうに乗ります。それほどに時間の量というものに気を使っている私は、果たして時間の質に心を配っているだろうか。

今、ご覧の通り、私はカトリックの修道者でございます。でも生まれは浄土真宗の家でございまして、18歳まで門徒として生活をいたしておりました。思うところがあって、18歳で、たまたまカトリックのミッションスクールに通っておりましたので、洗礼を受けました。

それから、家庭の事情があって、7年間ほどキャリアウーマンをいたしましてから、30歳近くで、自分としては大変おもしろかった、続けたかった仕事を捨てて修道院に入りました。何もかも、家族も、財産も、すべてを捨てたわけですけれども。そして、すぐにアメリカに派遣されました。というのは、家族が反対したということもあってか、たった一人だけ、日本人としてアメリカに参りまして、いわゆる修業を1年間いたしましてから、今度は勉強をするようにと言われて、そこで学位を取って帰りました。

ところが、その修業の1年間というのは、それまでしていた7年間の仕事、キャリアウーマンとしての仕事と、非常にコントラスト、対照的なものでございまして知的なものが少ない。

朝は5時という、まだ朝といえないような時間に起きまして、それからチャペルに入って黙想、メディテーション。皆が集まったところで朝の祈り、ミサ、食事、草取り、洗濯、アイロンがけ、掃除。そして、その間に講話がございまして、また昼食。昼食後は

料理の下ごしらえ、それから同じようなことをして、ちょっとお昼寝があって、というような、そういう生活が1年間ございました。

アメリカの東海岸のボストンという所にいたんですけれども、そこは結構、冬は寒くて、夏は暑い所です。修道服を着て、夏のある8月の暑い昼下がり、130人ほどのシスターたちが食事をしたあと、後片付けをいたしました。

きょうも私たち、お食事をいただきましたけれども、結局、私たちが汚したものを洗って、拭いて、また並べてくださる方がここにもいらっしゃるわけですよね。それを私たちが自分自身でしておりました。130人ほどのシスターたちのお皿を拭き上がってきたのを並べる仕事が、その日の、私の与えられた仕事でございました。たくさんですから、皆に仕事が割り当てられております。お掃除をしている人もいれば、お皿を洗っている人、拭いている人、私はお皿を並べる人だったんです。

一生懸命、一心不乱に並べておりましたところが、後ろから、年崇の、アメリカのシスターが、肩をお叩きになって「シスター、あなたは何を考えながら、お皿を並べていますか」と、お聞きになりました。私は「別に、何も考えておりません」英語で答えたわけです。すると、その方が厳しいお顔をなさいまして「あなたは、時間を無駄にしています」ユー　アー　ウィスティング　タイムとおっしゃったんです。

私は、7年間のキャリア、その間もアメリカ人のところで働いておりましたし、アメリカに来てからも数か月たっておりましたから、その位の簡単な英語はわかる人間でした。にもかかわらず、その言葉が解しかねて、わかりかねて、その方のお顔をまじまじと眺めておりましたらば、今度は笑顔におなりになって「同じお皿を並べるんだったらば、やがて夕食にお座りになる一人ひとりのために、祈りながらお皿を置いていったらどうですか」とおっしゃってくだすったんです。

私のそれまでの生活というのは、いかに早く上手に木を切るか。何かをする。 ドゥイング　ツゥ　ドゥ　という言葉で表わされて、評価されていた生活でした。ところが、今やビーイング、どういう心で、どういう気持ちで仕事をするか。同じ木を切るにしても、お金のためだけに切るのか、それとも、それをもって何か自分が変わっていくために、もっと広い心で、もっと深い心で、その木を切るのか。そういう違いを、その時に教えていただきました。

つまらない、つまらない、つまらないと、一枚ずつお皿を置いていても、お皿は並びます。そのそばにコップも並びます。フォークも、ナイフも、スプーンも、置けます。そして外から見たらば、全く同じに見えるわけです。

ところが、その同じものを、お幸せに、お幸せに、お幸せにと、心を込めて置きました時に、外から見たらわかりません。かかった時間も同じでしょう。15分なり20分なり。しかしながら、その20分か15分という仕事の量は同じであっても、仕事の質が変わって

いる。時間の量は同じであっても、過ごした時間の質が変わっている。

果たしてそこにお座りになった方が、私が、お幸せにと祈りながらお皿を置いたので、お幸せにおなりになったかどうかは知りません。しかし唯一ハッキリしていることは、お皿を置いた私が変わったということです。つまらない、つまらない、つまらない、という20分を過ごした私と、お幸せに、お幸せに、お幸せに、と、人のために祈りながら、20分を過ごした私とは、変わったということです。その20分の間に、20分の後に。そして、その後の私が、徐々に変わっていったということです。

時間の使い方は、命の使い方です。このことを私は忘れてはいけないと思っています。私たちの命の使い方というのは、ただ生きたということではなくて、または何かしら大きなことをし遂げたということだけでもなくて、それももちろん関係していますけれども、究極的に命の使い方は、私たちの時間の使い方だということ。

不平一杯の時間を過ごしておりますと、私たちの命は不平が多い命になります。感謝の多い時間を過ごしておりますと、まず、お顔が変わって参ります。そして生活が変わって参ります。一生、それは何十年か、人によって違いますけれども、その一生を振り返ってみた時に、その一生は何で埋められていたか。不平とか愚痴とか、悪口とか、そういうものが一杯、敷き詰められた人生か。感謝とか、感動とか、謙虚さとか、そういうものの散りばめられた人生か。それを分けるのは、私たちの時間の過ごし方です。だから、時間というものは大切にすごさないといけません。

もちろん、大切にといっても、いつもピンピン張りつめて過ごすわけにはいきませんけれども、時たま、自分の斧というものに油をさしてやるような暇をつくる時間。または自分がつまらないと思う仕事に意味を与えて、意味のある時間に変えていくこと。

この世の中に雑用はございません。私たちが用を雑にした時に、雑用というものが生まれます。この余島にも、たくさんの草が生えております。その草は、私たち皆雑草が多いと言うと思いますけれども、雑草という名前の草はないんですね。あの昭和天皇が、どこかのご用邸にいらして、侍従に「この草は何という草か」とお尋ねになったら、侍従が「陛下、これは雑草でございます」と答えたそうです。そしたらば、昭和天皇が「そんなはずはない。雑草という名の草はないはずだ」とおっしゃったと言いますけれども、私たちの生活の中に、雑用という用はございません。

椅子を並べるという用はあります。コピーを取る、お茶を入れる、文書を持って行く、そういう用はございます。しかし雑用という名前の用はないはずです。もしあるとしたら、それは私たちが用を雑にした時に、その用が雑用と呼ばれても仕方がない。そして、そういう時間を多く過ごすということは、私たちが自分の人生を雑に過ごすということだと思います。

幸せというものは、人にしてもらうものではないんです。お皿並べのような一見つまら

ない仕事、お手洗いのお掃除、草取り、そういう、本当に、学歴がなくてもできる仕事、そういう仕事しか与えられないから、私は不幸せだと言っている方があるとしたならば、私はたぶん、その用を価値あるものにすることも、しないこともあなたにかかっていましたと、人生は答えるだろうと思います。

私たちの生きていく世の中は、思うままにならないことがたくさんございます。その思うままにならない人生を、いかに明るく、いかに有意義に、人さまにやさしく生きていくことができるかどうかは、人を非難していて始まることではなくて、私が、この思うままにならない人生を、どう生きるかということに、かかっています。

人に変わってほしいと願っても、人は思うままに動いてくれません。確かに思うままになってくれる人もいるかも知れません。ですけれども、人間というのは、皆別人格ですから、決して自分と同じに考えて、同じに動く人というのは、いないわけですね。

もっと皆が優しかったら、私も優しくなるのに。もっと両親が、わかりが良ければ、私もこんなに突っ張っていないのにとか、上司が物分かりが良ければ、仕事がおもしろいのに。あの同僚がどっかへ行ってくれれば、職場は明るくなるのにと思う時はございます。

私も、今までずっと仕事をしてきて、よく思いました。あの人、転勤になってくれないかなと思ったり、あの子供の父親が転勤になって行ってくれたら、どんなに楽だろうと思うようなこともありましたけれども、人に変わってもらいたいと願っても、その人が変わらない限り、私は不幸せなわけです。

家族の反対を押し切って、修道院に入ったものですから、出るに出られなかったこともございますけれども、それでも一度、二度、私は修道院を出ようかと思いました。というのは、自分が期待していた場所でなかったというか、期待していたとおりの場所でなかた。天国でなかった。私みたいな人間が入る所ですから、天国であるはずがないんですけれども、それでも、ああ、こんなことならば、修道院をやめようか。私はキャリアをそれだけ持っておりましたから、出ても何とか食べていける。そんな気持ちがあって、自分のアドバイザーをしてくださってた神父さんのところへ、相談に行ったことがあります。

「神父様、私は修道院を出ようかと思います。私が思ってたような所でありませんから」

そしたらば、その神父様は、その頃、もう60位の方でしたでしょうか。ご自分も修道生活を長いこと送った方でしたけれども、ご自分の生活をずっと振り返るような深い目をなさって、その挙げ句の果てに私に「あなたが変わらなければ、どこへ行っても同じだよ」とおっしゃいました。出てはいけないとはおっしゃらなかったんです。「あなたが変わらなければ、どこへ行っても同じだよ」。その言葉を私はきょうも自分の心の中にしっかりと植え付けています。私が変わらなければ、どこへ行っても同じ。

つまり、周りの人に変わってほしい。優しくなってほしい。物分かりが良くなってほしい。何とか変わってほしい、と思っても、なかなかうまくいきません。大事なのは、私が変わるということだ。それが結局、私たちには心があるということと無関係でないと思います。

アウシュビッツの収容所で、九死に一生を得て、終戦を迎えた人に、ビクター・フランクルという人がおります。「夜と霧」「死と愛」というような素晴らしい本を書いて、みすず書房から、フランクル著作集として出しております。今も、お年を召しましたけれども、お元気で、私も一、二度、お目にかかったことがありますけれども、この方が、確か「死と愛」という本の中だったと思います。

人間の自由というのは、諸条件からの自由ではなくて、それら諸条件に対して、自分の在り方を決める自由である、ということを言っていらっしゃいます。諸条件からの自由ではない。

ヒューマン　フリーダム　イズ　ノット　フリーダム　フローム　ドクン　ディシュンス　バット　フリーダム　ツーティクスターンド　トゥ　ディシュンス

という言葉だったと思います。つまり諸条件からではなくて、諸条件に対して自分の在り方を決める自由だということ。

頭が痛い。今朝起きたらば頭が痛い。お腹が痛い。きょうは、例えば寒い。そういう条件から逃れることはできない。しかし、その頭が痛い自分が、頭が痛いということを、皆に知らせる自分なのか、自分だけに納めておく自分なのか、それを決める自由を持っている。

嫌いな人と自分は会っている。私はこの人が嫌いだという、その条件、嫌な人だという条件を変えることはできない。しかしながら、その嫌な人とどういう会い方をするかは、私の自由だ。その人に辛く当たることもできれば、その人に優しくすることができるかも知れない。優しくすることができないまでも、せめて仕事の話だけは、きちっとする。その自由は私たちにあるわけです。

強制収容所の中で、あらゆる自由を奪われて、そして強制労働を強いられて、なけなしのパン、本当にぎりぎりの、生きるに必要なだけのパン、スープしか与えられない。お互い同士、自由に話すことも許されない。そういう諸条件から逃れることはできなかったんです。

しかしながら、そういう諸条件の中で、なおかつ希望を失わないで、きょうがすめば明日がある。きょうの苦しみを、私の愛する人のために、神様、使ってください、と祈ることによって、苦しみを堪え忍ぶことができたということをフランクルは書いています。

自分が死ななければいけないとしたら、私は喜んで死ぬ。でも、その分だけ、この収容所のどこかに生きているかも知れない私の愛する母親、妻、子に命を与えてください。そ

うすることによって、自分の死は、無意味でなくなるわけです。私が一日早く死ねば、その一日分、愛する人の命が延びる。

私が苦しむ、いわゆる重労働のもとで、または、いつガス部屋に呼び込まれるかわからない死刑囚の恐怖という、その苦しみを、喜んで堪え忍びますから、どうぞ私の愛する母親、妻、子の苦しみを、その分だけ、私が我慢する分だけ、和らげてください。

それは和らいだかどうかわかりません。ちょうど私がお皿を並べる時に、お幸せに、と言って、そこにお座りになった方が、お幸せにおなりになったかどうか、わからないのと同じです。しかしながら、私が幸せになった。強制収容所の中で、いつでも死がくるとしたら、従容としてその死を受け取ろう。どんな苦しみも、その苦しみから逃れることはできないけれども、苦しみに対して女々しい態度をとるまい。苦しみを意味のあるものにしようという自由が人間にはある。本当のヒューマン　フリーダムと呼ばれるもの。

人間の自由というのは、犬や猫の自由と違います。鳥は空を飛べます。犬や猫は私たちが走れないほど走れます。そういう自由と異なった、ある意味で不自由な人間の、しかしながら、人間しか持ってない自由は、諸条件に対して自分の在り方を決める自由だ。ほほ笑み難い状況の中で、ほほ笑むことができる自由。相手を罵ることができる条件の中で、罵らないですませる自由。諸条件に対して自分の在り方を決める自由。

失敗とか挫折、そういうものを味わって、それは条件ですね。ある大学に入学できなかった。自分が思ってた会社に就職できなかった。自分がしたい仕事を今させてもらっていない。そういう条件のもとで、なおかつ生き生きと生きることができるかどうか。できる。それが人間の自由なんです。そして時間の使い方は、命の使い方ですから、もったいないです、余り不平、不満が多くて生きていたら。

フランスの山登り、いわゆる登山家の一人に、モリス・エリツォークという人がおりました。この人はなぜ有名かというと、8000m以上の山に初めて登頂成功した人だからです。アンナプルナという山ですけれども、その八千数百メートルの登頂を、初めて成功した人です。この人は、登頂に成功した代わりとして、代償として、手足の指を凍傷で失いました。霜やけで失いました。

しかし、下山いたしますと、祝賀パーティーが開かれ、快挙として祝賀パーティーが開かれたわけです。そしてシャンペンが抜かれて、このことに対して、確かその時のフランスの大統領を始め、多くの人たちが集まったんだと思います。

人々がモリスのところへ来て、口々に、おめでとう。しかし、そのあとで必ずといって付け加えたのが、というのは、モリスは指を凍傷で失っておりましたから、掌でシャンペングラスを握ってたわけです。その姿を見て「でも大変でしたね。指を無くして、ご不自由でしょう」と言ったところが、このモリスが笑顔で「ほかの人たちは失ったものに目を向けますが、私は得たものに目を向けて生きています」と言ったそうです。

3日目講義

世の人々は、失ったものに目を向けて生きるけれども、私は得たものに目を向けて生きます。霜やけで手足の指は失った。そのことを見て、ふさぎ込んで生きていくのも、人間の一つの生き方なら、失った代わりに得たもの、自分は8000m以上の山に登ったという、その得たものに目を向けて私は生きていこうと思うということを言ったそうです。

曹洞宗の在家の方で、会田光男という方がいらっしゃいました。数年前、お亡くなりになりましたが、この方の「人間だもの」とか、いろいろな本がよく売れております。「人間だもの」という本の中に「つまずいたおかげで」という詩が納められています。

つまずいたり転んだりしたおかげで、ものごとを深く考えるようになりました。過ちや失敗を繰り返したおかげで、少しずつだが、人のやることを温かい目で見られるようになりました。何回も追い詰められたおかげで、人間としての自分の弱さとだらしなさを、いやというほど知りました。だまされたり裏切られたりしたおかげで、ばか正直で親切な人間の温かさも知りました。そして身近な人の死に遭うたびに、人の命のはかなさと、今ここに生きていることの尊さを、骨身にしみて味わいました。

この詩は、もう少し長いのですけれども、私自身、36歳の時から管理職をいただきまして、風当たりの強い、ある意味でいろいろな難しい目に遭いました。そして、今まで数えきれないほどの失敗、過ち、転んだり、つまずいたり、人から裏切られたり、騙されたり、いろいろな目に遭って参りました。

その私にとって、今、お読みした部分、つまずいたり、転んだりしたおかげで、物事を深く考えるようになりました。もし私が、つまずいたり、転んだり、失敗したり、病気になったり、人から裏切られたり、騙されたり、していなかったら、きょうの私はないと思います。鼻持ちならない、高慢ちきな人間だったと思います。そのおかげで、少し人さまのなさることが、やさしく、温かく見られるようになりました。

自分がどんなに卑怯で、いざという時に人のせいにしたり、時には嘘をつく、そういうこともあるかがわかりました。物事を、ああ、表面だけで見てはいけないんだ。じっくりと見ていかないといけないということも習いました。

そして、先ほど梶浦先生がおっしゃってくださいましたが、私は、父と朝、一緒にやすんでおりまして、30数名の青年将校と兵士たちが入ってきて、ほんの数分の3分か4分の間に、43発の弾を父の体に、私の目の前で撃ち込んで、引き揚げて行きました。

それまで元気だった父が、陸軍の最高の立場を占めていた、私にとって強い父が、頼りになる父が、アッという間に死んでいきました。本当に身近な人の死に遭って、私は、人の命のはかなさ、そして今、自分が生きていることの尊さ。

人というものは、ここに兵庫県からおいでの方が、たくさんいらっしゃると伺いましたが、私とたぶん同じように、アッという間に、あの20秒の揺れの中で、人が死んだり、怪我をしたこと。それまで、強くて、お金があって、たくましい人がどれほど脆いかとい

うことをお感じになったと思います。

私たちは、人生を生きていく上で、たくさんの条件に遭ってしまいます。父なし子になったという条件、その条件をどう使おうと、それは私の自由です。神戸の震災にお遭いになった方、あれも与えられた条件。そこから逃れることはおできにならなかった。でも人間の自由というのは、その条件からの自由ではなくて、そこからは逃げられません。しかし、その条件に対して、自分の在り方を決める。そこに自由があります。

その在り方さえも決められないほど、打ちのめされた方がいらっしゃることも、私は知っています。しかし少なくとも、きょう、このライラに集まっていらっしゃる皆様方は、それら諸条件に対して、自分の在り方を決める自由を持っていらっしゃる方。そして人々を助ける側に立つ方になっていただく、そういう方たちだと思います。

人間には自由があるんですよ。失ったものに目を向けて生きないで、得たものに目を向けて生きましょう。あの震災が与えてくれたものに目を向けて生きましょうということが考えられない方たちに、おっしゃることができるお立場に皆様方は、おなりにならないといけないと思うんです。

一人のプロテスタントの牧師さんが、私に詩をくださいました。

「天の父さま、どんな不幸の息を吸っても、吐く息は感謝でありますように。すべては恵みの呼吸ですから。天の父さま、どんな不幸を吸っても、吐く息は感謝でありますように。すべては恵みの呼吸ですから」

私たち、この世に生きておりますと、不幸という黴菌がうようよした空気を吸わざるを得ません。吸わなかったら死んでしまいます。吸い込む息の中には、不幸という要素が一杯入っております。お小さい時には、そして今も、多くの方に守られて、あまりこの息を吸っていらっしゃらない方が、あるかも知れませんけれども、一生の間には、思いがけない病気に見舞われることがあります。本当に不慮の災難に遭うことがあります。その時に、それをしっかりと吸い込んで、心で受け止めて、それをいつの日か、おかげさまでと、お返しすることができる。すべては恵みの呼吸ですから。

これは一つの信仰だと思います。非常に深い信仰をお持ちの牧師さまが、私のようなものにくださったわけですけれども、この世の中にいろいろなことがあるけれども、すべては恵みの呼吸なんだ。そして、その恵みであると悟ることができる心を私たちはいただいております。すべてを呪うこともできます。私たちは選べるわけです。私たちには自由があります。その自由をどう使うか。そこに私たちの生き方が、かかってきています。時間の使い方は、命の使い方ですから、もったいないことをしないで、すませていきたいと思います。

有り難い、感謝、有り難いという字は、有ることが難しいと書きます。私たち、とかく有り難う。最近はワープロが発達しておりますから、皆様方、余りご自分の手で書くこ

とがおありにならないかも知れませんが、時に、有り難いと書いてください。有ることが難しいと書きます。めったにない、尊いことなんです。

だから、会田さんが言っていらっしゃるように、つまずくことも、失敗することも、裏切られることも、人の死に遭うことも、確かに悲しいこと、辛いことでもありますけれども、悲しいこと、辛いこと、つまり失ったものにばかり、目を向けている。人のいうことではなくて、それを有り難い、ああ、私はこれを与えられたんだ。

神様は、力に余る試練は決してお与えになりませんが、試練はお与えになります。というのは、私たち皆不完全ですから、交通事故に遭う。それは後ろの方が前方不注意だったからかも知れない。よそ見、わき見運転をしていらした。または寝不足で、居眠りをしていらしたかも知れない。それまで神様のせいにしては申しわけないと思います。

人間の不注意で、または人間の不完全さで、今、皆様方、職場で人間関係で苦しんでいらしゃるかも知れない。それはあの人が意地悪だから。どうしてあの人はあんなにひねくれてしか、ものをとらないんだろう。あの人に言えば、必ずそれは悪口になって言い広められるとか、いろいろな方がこの世の中にはいらっしゃいますよね。いらっしゃるから、おもしろいのかも知れないけれども、時にはおもしろくないこともございますけれども。

その不完全な人間、私たち自身が、まずそうなんです。地震にしても、作られた宇宙というものが、時がたてば活断層が起きたり、プレートが動いたりして地震が起こります。完全な世の中ではないんですから。その不完全な世の中、そこに神も仏もあるものかと、あの阪神の大震災の時に、多くの人が思ったと思います。地下鉄サリンにしても同じです。

しかし、神も仏もいらっしゃる。じゃあ、神様、仏様、何していらっしゃる。私たちの力に余る試練を、お与えにならないということ。もし私たちに試練が降りかかってきた時に、その試練に耐える力を、恵みを、お慈悲を添えてくださるということです。おすがりすることによって、そしてそれがどんな不幸を吸っても、吐く息は感謝でありますように、という謙虚な祈り。神様、仏様、どうぞお助けください。今、私は、こういう試練をせおっております。こういう思いがけない病気をいただきました。こんな災難に遭っています。どうぞ一生懸命にいたしますから、助けてください。その時に、必ず助けてくださる。人を通して助けてくださる時もあるでしょう。または私たちの気持ちを変えて、ああ、これにはこういう意味があるんだ。

この世の中に、無駄なものはございません。父が死んだことも、私は無駄でないと思っています。その後、いろいろと私が遭遇した本当に悲しいこと、苦しいこと、全部これは私の栄養になっていると思います。栄養になっていないとしたら、それは私が使わなかったからです。私が、つまらない、つまらない、つまらない、そういう気持ちで生き

ていたからであって、それを実は、有り難い、有り難いという気持ちで生きていたとしたらば、全部それは有り難い栄養に、滋養になっていると思います。

今、日本の国を見渡してみますと、不機嫌な顔をしている人が多いですね。きのう、それこそ高松空港で、梶浦先生と中島先生のお出迎えをいただいて、それから船着場で迎えてくださった方、車をこちらまで運転してくださった方、そしてこのキャンプに来てから、セミナーに来てから、お目にかかる皆様方、お一人、お一人が、本当に気持ち良く挨拶をしてくださる。

私は、ああ、さすが選ばれて、いらした方たちだ。さすがロータリーの方たちなんだと思いました。そして今も思っています。それはやはり、私たちが生きる生き方というものが顔に出てくるんだと思います。挨拶に出てくると思います。ほとんどの方が、立ち止まって挨拶をなさる。今どき、ないことです。

もちろん東京駅で、立ち止まって挨拶をしていたら大変なんですけれども、今どき、本当にうちの学生たちを見ておりますと、もう、お辞儀はこっちのほうが先にいたしますね。そして向こうはうなずいて、よく挨拶したと、うなずいて返してくれる学生が多うございます。

この間も、寒い時に私、大学で教えておりまして、授業が終わって廊下へ出ましたらば、まだ一年生位の人たちでしょうか、歩いて参りました。で、私いつも自分のほうから先に挨拶をするんです。相手がしたらしようなんてこと思ってないので私のほうから「お早ようございます」と挨拶しました。

そしたらば何人かの学生たちがうなずいて、よく学長、言ったというような顔をしてくれまして、しかも、その一人はオーバーに手を突っ込んだままで、うなずいてくれましたから、私、割にそういうことをきちっと言う人間なので「手を出しなさい」と言ったんですね。そしたらその学生が私に何て言ったかといいますと「寒いんじゃ」と言いました。(笑い)

そりゃそうでしょうね、冬ですから寒いのはよくわかっているんですけれども、「寒いんじゃ」と言って、「ああそうですか。ごめんなさい」なんて、私が、つい言ってしまって、なんて私は人がいいんだろうなんて思っているんですけれども。そういう私たちの生活の中で、やっぱり自分というものをしっかりさせておりませんといけない。

皆様方とお目にかかって、皆様方が、不機嫌な顔をしていらっしゃる方がいらっしゃらないということは、とても素晴らしいことだと思います。そして不機嫌な顔をするかしないか、これは私たちにかかっておりましてね、確かに、介護しなければならないご老人が家にいらっしゃる。朝から晩まで、どうして私がこの年をとった、中には自分と血も通っていない老人の世話をしなければいけないんだろうとか、中には卒業生で重度の心身障害者を産んだ人もおります。そして、どうして私が、こういう子供を育てなけれ

ばいけないんだろう。私どもが聞いても本当に大変だろうなと思う人もいれば、私だから、こういう人をいただいたんだ。私ならこの子供の世話ができるというので授かったのだ、という考え方をして、この子は私の宝です、と言ってくれている卒業生もおります。

幸せとか不幸せというものを、とかく、周りの人が悪いとか、どうして私の生活の中には、もっと刺激のあるものがないんだろう、毎日、毎日、同じことの繰り返し。人は旅行に行っているのに、私は行けない。車を買い替えることもできない。良い家にも住めない。ブランド商品も持てない。もうマイナスの、失ったものと言いましょうか、つまり自分が持ってないものに、いつも目を向けている人と、自分がすでにいただいているものを、有り難いと考えている人、そこに心の違いというものがあるのだろうと思います。どちらにしても同じことだとすれば、人生、明るく、楽しく、人様に笑顔で生きていくことが、とても大事じゃないだろうか。

今、もう三十数年、教育に携わっておりまして、どんなふうに子供たちが変わってきてますかと、よく尋ねられるんですけれども、本質的には、私は学生たちが大好きで、とても素晴らしい学生たちだと思っていますが、やはり安楽な生活に慣れて、物質的な豊かさというものに飽かされて、非常にひ弱になっております。これは、ここにいらっしゃる皆様方、そして私たちにも、ある程度いえることかも知れません。かつてのハングリー精神、物がない時に、持たざるを得なかった、たくましさというものがないんですね。

確か、レイモンド・チャンドラーという人の言葉でしたか、「人間たくましくなければ生きていけない。優しくなければ生きる資格がない」という言葉がございます。皆様、両方お持ちくださいませ。

たくましくなければいけない。と同時に優しさというものも、思いやり、自分への優しさ、他人への優しさ、自分をいじめないこと、他人をいじめないこと。一人ひとりを大切にすること、そういうことがとても大切だと思います。

たくましくなかったら、今、生きていけません。私も、修道者でございますけれども、管理職というものを、もう三十数年いただいておりまして、たくましくなかったら生きていけません。修道院の中でさえ、たくましくなかったら生きていけません。なんて言うと誤解を招きそうですけど、まあ、そういうことです。

と同時に、優しくなかったら、生きる資格がありません。人への思いやりを忘れて、人を許すことを忘れていたらば、人が自分と違ってかまわないことを、寛大な心を忘れていたらば、生きる資格はありません。人間としての自由、それを放棄したようなものです。私たちが、他の動物と同じようになってはいけないと思うんです。

アメリカの大統領選挙が近付いてきていて、ドールだとか、ブキャナンだとか、クリントンだとか、いろんな名前が出ておりますけれども、歴代のアメリカの大統領の中で、たった一人、カトリックの人がおります。カトリックというのは、アメリカでは、どちら

かというと、貧しくて、移民、アイルランド系の人が多くて、見下げられたところがあるんですね。プロテスタントの方のほうが、アメリカでは、高い地位におつきになる方が多いんですけれども、唯一、カトリックの大統領に、皆様もご存知の、J. F. ケネディーという人がおりました。ダラスで凶弾を受けて、この人も暗殺された人ですけれども、この人の就任演説で、覚えていらっしゃるでしょうか。

「諸君は、アメリカが諸君に何をするかということを期待するよりも、諸君がアメリカのために何ができるかということを、まず考えてほしい」と申しました。これは皆様方にも当てはまることだと思います。

会社が、学校が、皆様方に何をしてくれるかということよりも、あなたが、あなた一人が、会社のために、学校のために、または、とにかくお仕事のために、何ができるかということを考える生き方をお持ちになること。それは結局、幸せは人にしてもらうものではなくて、自分がなるものだ。そして自分がなることによって、周りの人も幸せにするものだという原則に基づいております。

このJ. F. ケネディーが好んだ言葉でございますが、祈りと言ってもいいかも知れません。安楽な生活を求めるよりも、コンフォタブルという言葉を使っています。安楽な生活を求めるよりも、むしろ強い人となれるように祈りなさい。自分にふさわしい、または自分の力に見合った仕事よりも、むしろ、与えられた仕事を果たすに必要な力を祈り求めなさい。

私たちが求めるのに、安楽な生活を求めがちです。お金が十分にあって、良い家族に恵まれて、立派な家に住んで、車を乗り回して、その安楽な生活、楽な生活、それを祈り求めることもかまわないけれども、それ以上に、どんな生活が与えられたとしても、たくましく、笑顔で生きていくことができる、強い人になれるように祈り求めなさい。生活よりも人でございます。外から与えられるものよりも、内から湧き出るものです。

自分にふさわしい、自分の力に相当した仕事を求める。今年は超氷河期と言われて、私どもの大学でも七割何分ぐらいしか就職をしてなかったかと思いますけれども、そして就職をしたにしても、必ずしも自分が求めたところに就職しておりません。例えば、スチュワーデスになりたいと思ったのになれなかった。または何とか証券に勤めたいと思ったけれども、だめだった。

とにかく自分にふさわしい、自分がしてみたい、自分の力に見合った、その仕事に就きたいと願うのは、人の常でございますけれども、それよりももっと大切なことは、今、自分が与えられた仕事を果たすのに必要な力を祈り求めるということ。仕事を祈り求めるよりも、力を祈り求める。これまた、外から与えられるものよりも、中から湧き出るもの、力を祈り求めなさい。

きょう、「“こころ”とは」というテーマをいただきましたけれども、結局、私たちは、

体と心と、両方を持って生きております。そして私たちが、とかく求めがちなのは、体の安楽、または体を着飾るもの。寝るところ、住むところ、食べるもの、着るもの、もちろんそれを求めてかまわないし、そういうものを十分に持つことに越したことはございません。

ただ、聖書の中に、「人はパンだけで生きるには非ず」と書いてございます。人はパンだけで生きるのではない。また、神の御言葉によると書いてございますが、つまり、私たちは、どれほどたくさん食べるもの、立派な住むところ、または人も羨むような家庭を持ったり、職業に就いていても、だから幸せになるとは限らないわけです。

その与えられたものを有り難いと見ることができるかどうか、感謝して過ごせるかどうかに、かかっております。家庭を持ったばっかりに、苦しんでいる人たちが今たくさんおります。お金がたくさんあるばかりに、どうしたらば取られないですむかと思ってる人がおります。

私どもみたいな、修道者というのは、実は三つの誓いを持っておりまして、自分の私物を持たない。つまり、お金も物も持っておりません。

それから、自分の家庭を持たない。だから、自分の配偶者とか、子供に縛られることがない。

そして自分の自我といいましょうか、わがままを持たない。従順と申しますけど清貧、貞潔、従順、三つの誓いを、私も今から三十年ほど前に立てました。

その誓いがあるが故に、失うものがないですね。お金を持ってないから、お金を取られる心配がない自由を持ってます。自分の配偶者とか子供を持っていないので寂しいことはあります。寂しいことはありますけれども、その人たちに縛られることがない。どこへでも、誰のためにでも、手を差し伸べることができる。

そして自分のわがままを捨てて、目上の言葉に従う、命令に従う。そこに、いわゆる名誉欲とか、そういうものがないので、私も今、幾つかの役職を兼ねておりますけれども、明日から、その役職を全部はずして、台所で一日中、じゃがいもの皮をむいて、大根を切っててくださいと言われたら、はい、と言って、喜んでお仕事をするつもりです。

そういう自由さというものが与えられているわけなんですけれども、私たち、とかく、物を持つことが幸せだ。それも上等なものを持つこと。そのために一生懸命木を切ってます。朝から晩まで、寸暇を惜しんで。しかしながら、果たして、だから、木をたくさん切ってお金を得た、地位を得た、名誉を自分のものにした。そして人も羨むような家に住んで、家族を持っている。だから、本当に幸せなのか、わかりません。それこそ雨漏りがするような家に住んでいても、病気を持っていても笑顔でいらっしゃる方がいらっしゃいます。

前者のような生活をしていて、もっと物が欲しいと、物欲しげな顔をしていらっしゃる

方もあれば、そういう物を持っていなくて、持ってる物が有り難い。もう、これだけあったら、本当にもったいないほどですと、笑顔で生きていらっしゃる方もあるわけです。

ですから、私たちは心というものがあることを、とかく忘れがちでございますけれども、幸せっていうものは、必ずしも外から与えられるものではなくて、自分が作っていくものだ。自分がしている仕事に愛を込め、心を込めて、お皿を一枚置く時にも、草を一本抜く時にも。私たち、広い庭で、よく草取りをさせられました。私たちのことですから、上をずっとむしって参りますと、目上の方がおいでになって、「草というものは根から取るものですよ。あなた方、根を取るのは面倒だろうけれども、一本、一本、抜く時に、この世の中から、非行の、非行少年、少女が今、多いですね。この間も小学生が麻薬を吸っているということで、問題が起きておりますけれども、右を見ても、左を見ても、今、非行がございます。その非行の根が根こそぎ取られるようにと願いながら、祈りながら抜きなさい」と、教えていただきました。そして、その時から、いい加減に草を抜かないですむようになりました。また草を抜く時に、無意味だと思わなくなりました。無意味にするのも、意味ある草抜きにするのも、私次第でございます。

お手洗いのお掃除、特に私は、割に学歴を持って修道院に入りましたので、これでもか、これでもかというほど、皆の嫌がる仕事をいただいたんですけれども、お手洗いのお掃除をする時に言われましたのは、「このお掃除をすることによって、自分の心が清められるようにと祈りながらしなさい。どうして私がこんな仕事をしなければいけないのか、と思ってしても、お手洗いのお掃除はするんだ。同じするんだったらば、自分の心を清めるようなつもりでしなさい。草を抜く時には、非行が減るように、根こそぎ取りなさい。」

私、今でも、朝早く、チャペルに入ります。6時前に入りますけれども、その時に冬場でございますと、カーテンが閉まっております。私どものチャペルは割に大きくて、12枚のカーテンが下がっているんですけれども、一番に参りますと、まずそのチャペルに暖房を入れて、そして12枚のカーテンを開けます。

今、私ども7人で共同生活を修道院で営んでおりますが、自慢じゃないんですけど、私が一番、年上でございます。そうすると、吉祥寺の修道院に戻りまして、初め思ったことは、なぜ一番年上の私が、一番最初に来て、暖房を入れて、カーテンを開けないといけないんだろう。どうして私がと。

その時に、私の心によみがえったのが、今から30年前の、そのお皿並べの時だったんですね。何を考えながらしていますか。どうして若い人が、もっと早く起きてこないんだろう。どうして私が、という気持ちでなくて、祈りながらカーテンを開けたらどうですかと。

その時から、1枚は非業の死を遂げた父の魂の安らぎのために。1枚は子供のようになって、年をとって死んでいきました母のために。1枚は突然に死んでいった兄のために。

1枚は今、病院で苦しんでいる卒業生のために。とにかく、その時、その時に、私が、このつまらない仕事を誰かのために使ってください。そうすることによって、その仕事に、ただカーテンを開ける、じゃがいもの皮をむく、草を取る、お掃除をする、お皿を並べる以上の意味が与えられて参ります。

つまり、人間の自由というのは、諸条件からの自由ではなくて、与えられた条件に対して、自分の在り方を決める自由なんだということ。このことを心にとめて、幸せは自分がつくるものだということで、この75分のお話を一応、終わりたいと思います。

今から15分ほど、お休みをいただきまして、11時から12時まで、次のお話をさせていただきます。ご静聴いただいてありがとうございました。（拍手）

木を切るのに忙しくて、斧を見る暇がなかった。つまりツゥードゥーイングということに忙しくて、ツゥービーイングということを忘れていたということを申しましたが、心にゆとりを持つ、ゆとりを持って生きるということは、私は、奉仕の原点だと思っています。自分自身のためにも大切ですけれども、人様に奉仕をするためには、自分がしっかりしていないといけないと思っています。

そのためには、自分が自分を愛すること、大切にすること。私は私でいいのだという、自分の自信を持って生きること、そういうことが大切だろうと思うんです。

とかく私たち、人と自分を比べがちになります。今、情報時代でございますから世界各地の情報が入って参りますし、北海道から沖縄まで、同じコマーシャルが、同じ時間に流れている。人間の幸せというものは、こんな家に住んで、こんなものを食べて、こういうものを着ることだ。ある意味で個性を大切にと言いながら、非常に画一化された幸せ像というものが、出来上がっているかも知れません。

私は、好きな言葉の一つに「小さきは小さく咲かん」という言葉がございます。私自身が劣等感というものにさいなまれておりました時に、一人の方が私にくださった言葉でございます。

その方は、いわゆるその当時の、一高、東大と申しましょうか、エリートコースを歩いて、敗戦後、まだ留学が、ままならない時に、日本人の中から選ばれて、ヨーロッパに留学をなさいました。戦争中、語学は禁止されておりましたし、学科にしても学徒動員などで十分に修められていなかったために、日本では秀才だ、エリートだと言われた、その方が、ヨーロッパ人の間に混じりました時に、劣等感の固まりに、おなりになりました。

恥を忍んで、皆で送ってくれた日本に帰ろうかと、ある朝早く学園の庭を歩いていらしたところ、一本の小さな花が、一生懸命に咲いているのが目にとまりました。足を止めてその花を見ている間に「小さきは小さく咲かん、小さくも小さきままに神を讃えて」と

いう境地を得て、自分の肩の荷が下りたような気がして、小さな花は小さいなりに一生懸命に咲けばいいんだ。精一杯、咲けばいいんだ。

今までの自分は、人と見比べて、なぜ自分は小さいんだろう。なぜ自分は香りが少ないんだろう、見栄えがしないんだろうということが、主になって生きていた。私は私のままで、小さきは小さく咲かん。小さくも小さきままに神を讃えて。とにかく咲くことが大事なんだ。たとえタンポポであろうと、バラと見劣りすることはないじゃないか。

確かに社会は、特に今の日本人は、バラのような値段のつくもの、商品価値の高い人を大切にしております。利潤を上げる社員、能力の高い人、良い学校に進む人、偏差値の高い子供。しかしながら、私たちにとって大切なのは、人と比べて自分の価値を決めることではなくて、私本来の価値というもの、かけがえのない自分の価値というものを大切にして生きていくということです。このことが、私は今の日本に非常に欠けていると思います。

何かといえば、偏差値、学歴、幾ら取っている所得、地位、家柄、身分。もっともっと、人が人として尊ばれなければいけない。反対から言えば、一人ひとりが、胸を張って生きなければいけないと思います。また胸を張って生きられるような生活をしないといけないと思う。こそこそと生きないこと。人と比べて肩をすぼめて生きないこと。

威張って生きることではなくて、人にも、その人の価値を認めながら、私は私、人は人という、ある程度、割り切った、一人格としての生き方というものが、今の日本に一番欠けていると思います。

いじめが多いのもそうだと思うんですね。人は人、自分は自分。それなのに人のことを気にして、自分たちと違うからといっていじめる。また、いじめられたほうも、一人格として一人でも生きていくということが少ない。

もちろん、いじめの中には陰湿なものがあって、なかなか今、言った言葉で片付かないものがあると思いますけれども、国際化している日本の国で、非常に遅れているものは、一人格としての人間の尊厳だと思います。男も女もございません。

人格という言葉は、英語でパーソンという言葉で表わしますが、これは性別を超えたものでございます。昔、チェアマンと言っておりましたのが、フェミニストのキーに触れまして、チェアウーマンという言葉ができました。しかしチェアマンでもチェアウーマンでもないのは、チェアパーソンでございます。そこには性別を超えた一人格がある。このことを、私は教育を通して、子供たち、学生たち、生徒たちに教えていきたいと思いますし、教えてきたと思います。

つまり、人間にとって、人と比べて自分の価値というもの、それは確かにございます。人と比べての自分の価値というものもございますけれども、人と比べられない自分の価値もあるということ。価値があるということ。そのことをしっかりと心の奥底に秘めて

生きること。そしてタンポポはタンポポなりに咲くことが、バラがバラとして咲くことと全く同じく尊いのだということ。このことを私たちは忘れたくないと思います。

岸田劉生という洋画家がいらっしゃいます。「麗子像」というような絵で有名な方ですけれども、あの方が珍しく小さな詩を書いていらっしゃるんですね。

「エンドウでも、バラでもなく、ひたすら自分として育つが故に、ネギは天才だ」という詩でございます。アトリエの中に、エンドウ豆、あのエンドウと、バラと、ネギボウズがあったのかも知れません。とにかくその方は、エンドウにも、バラにもなろうとせず、ひたすら自分として育つが故にネギは天才だ。私の好きな詩の一つです。

最近の親は、自分たちがネギであるにもかかわらず、子供たちにエンドウになってほしいと思ってます。バラになってほしいと思っている。そこに大きな間違いがあります。バラになれるか、エンドウになれるか知りません。ただ、私はこの詩の中で一番大事な言葉は、ひらすらに自分として育つ、ということです。人を見て生きない。

確かに、エンドウは実をつけます。バラはきれいな花を咲かせます。それに比べると、ネギは見栄えがしない。にもかかわらず、エンドウにも、バラにもなろうとせず、ひたすら自分として育つが故にネギは天才だ。本当に今の世の中、天才です。こういう人は少のうございます。

そして、私たちは、そういうネギはネギとしてネギらしく、精一杯、咲くことを良しとする人たちを育てて生きたいと思う。置かれた所で咲くということが、私の心情の一つでございます。

思いがけず、東京で育ちました私が、岡山という土地に置かれました。今から、34年前でございますけれども。神戸から、ここに神戸の方がいらっしゃいますが、神戸からは船に乗って旅をしたことがございましたが、神戸から西に行ったことのない私が、岡山という、朝凪、夕凪のひどい所で、そして行ったこともない所。

しかも、あろうことか、赴任した翌年に、三代目の学長に任命をされました。初代も二代もアメリカ人だったんです。私たちの修道会は、アメリカのシスターたちが始めておりますので。元をただせばフランスなんですけれども、日本に来たのはアメリカ人でございます。したがって初代も二代目も学長はアメリカ人でございました。初代の人は70歳代、二代目の方も60代の後半でございまして、非常に尊敬されていた方です。

その方が、急にお亡くなりになったものですから、私が初めて日本人として、しかも36歳、30代の半ばで、岡山の人間でもない、その大学の卒業生でもない、すべてマイナス要因しか考えられない、その立場で学長になりまして、ある意味で苦労いたしました。

さっきのアイダミツオさんの詩が、私にとって人ごとと思われないのは、つまずいたり、転んだり、裏切られたり、騙されたり、悪口を言われたり、いろいろしたから、それだけに、そのお陰で、という言葉が、身にしみるのだと思います。

私は、置かれた所で咲くという言葉が好きです。岡山に28年、置いていただきまして、その間、一生懸命に咲こうとしました。咲いたかどうかは知りません。でも、咲こうとしたことだけは、私は言えます。有り難いことに言えます。しぼみそうになった日もあります。枯れそうになった日もございました。しかしながら、やっぱり咲かなければいけない。

先生たちっていうのは、都合がいいんですよね。学長は諸悪の根源だということを、ぬけぬけと私の目の前で言います。かと思えば一方で、管理職はいつも笑顔でいてくださいと、これまた虫のいいことを言うわけです。ですから諸悪の根源でいながら、笑顔を忘れないようにすることを習いました。これもお陰さまだと思っています。

咲くということは、私は今、申し上げましたように、明るく、笑顔で、人様のためを思って生きることだと思っています。難しいことは私にはわかりません。ただ私は簡単に、咲くということは、明るく、笑顔で、人様の気持ちを暗くしないように、困っていらっしゃる方があったら手を差し伸べる。そして神様がここに置いてくださったのは間違いではない。置かれた所で咲くということだと思っています。

決して人目を引くことでもなければ、大事業をすること、何かに成功することではなくて、本当に自分らしく、どなたがご覧になっても、ああ、シスターは幸せなんだな。物を持ってなくても、家族を持ってなくても、言われたことをそのままやっていても、あれでも結構、幸せになれるんだったら、私もなってみようかなと思う位の、それが咲くということだと思うんです。小さいか、大きいかは、問題でないんじゃないか。

マザーテレサという方が、インドのカルカッタで仕事をしていらっしゃいます。日本に今まで何度かおいでになりまして、確かノーベル平和賞をお戴きになった翌々年くらいに、岡山にもお立ち寄りになりました。私、たまたま通訳をさせていただいて、お側におりまして、私どもの修道院にお泊めして、朝、お見送りをしたんですけれども、その時に学生たちにも話をしてくださいました。学生たちは感激をいたしまして、カルカッタへ行きたい。

いわゆる、路傍で生涯を終わろうとしている人たちを、死を待つ人の家に連れていって、最期を見取ってやりたい。または、ハンセン病の人たち、今でしたらば、エイズの人たち、そういう人たちの看護に当たりたい。孤児を拾って育てていらっしゃる。それも私たちがしたい、ということを申し出て参りましたので、マザーテレサに私が、「学生が、こんなことを言っておりますけれども、受け入れてくださいますか」。受け入れてくださらなかったら、しようがないですから、受け入れてくださいますか、と言って伺いました。

そしたらば、あの骨張った手で、マザーテレサという方は、皆様、お写真でご存知だと思いますけれども、きれいな方ではありません。本当に、しわくちゃのお顔です。イン

ドの灼熱の太陽のもとで、しわくちゃの顔で、目は鋭いです。死をたくさん見ていらっしゃるからだと思います。それも、ある意味で悲惨な死を。

その骨張ったゴツゴツの手で、私の手をしっかりとお握りになって「シスター、サンキュー、ありがとう、カルカッタまで来なくても、インドまで来なくても、周辺のカルカッタで、喜んで働く学生を育ててください」と、おっしゃいました。

周辺のカルカッタ、この言葉を、私たちは心に刻みたいと思います。私たちの周辺、家族かも知れません。同僚かも知れません。学校かも知れません。道端かも知れません。寂しい思いをして、きょう生きている人。生きていても生きていなくても同じ。生きがいを失っている人たち。むしろ生きていないほうが、世のため、人のためではなかろうかと自信をなくしている人たち。その人たちに優しさをかけてあげられる、そういう学生を育ててください。

それから私も学生たちをインドに送ることを諦めまして、学生たちに授業をずっとして参りました。

そして今から、もう7年ほど前になりますでしょうか、私が学長をいたしました最後の年か何か、その年に、一通の手紙が、3月の中ごろに参りました。前の年に卒業した卒業生の一人で、岡山の県立の商業学校か何かで、国語の教師をしていた人です。

昨年の今ごろ、シスターから卒業証書をいただいたのを思い出しています。今年初めて卒業生を送り出す身分になりました。

卒業生の中に一人、家庭的にも、学業的にも問題のある女生徒がいました。その子が、卒業間際に、私に向かって、「広瀬先生だけは、私を見捨てないでくれた」そう言い置いて卒業していきました。私は一瞬、何のことだかわからなかったけれども、考えてみたらば、授業中にその子がボーッとしているわけです。家庭的にも学業的にも問題がありますから、ボーッとしている。その子に目が合った時に、私は努めて、ほほ笑んだと思います。もしかしたら、そのことを言ったのかも知れません。

そして、そのあとに、こう書いていました。4年間、私はシスターから、耳にタコができるほど、ほほ笑みの大切さを聞きましたけれども、右から左へと通していました。初めてわかりました。ほほ笑みというものが、どれほど人を勇気づけるかということ。

つまり、その広瀬という新卒でございます。ほかの先生たちにとってお荷物だった女子生徒。勉強をしてこない、授業中に指しても、答えをすることができない。その、いてもいなくても同じ、先生たちにしてみたらお荷物で、いてくれないほうがよかったかも知れない。その子供が、広瀬という新卒が、にっこりとほほ笑んでくれた。

その、ほほ笑みの中には、ああ、きょうも来たのね、来てくれて、先生うれしいわ、そこに座ってるだけでいいのよ、という、そのメッセージが入ってたと思うんです。つまり、そこはカルカッタだったんです。その子は、自分が生きる自信を持っていませんで

した。他の先生たちは、自信を持たせるどころか、奪っていたと思います。

そして、今の日本の教育の一つの大きな問題が、これでございます。いじめについて、たくさんの会議が開かれています。でも、そこで話し合われていること、それも私は大事だと思いますけれども、先生一人ひとりが、もう少し、心に愛をお持ちにならなければ、子供たちは救われないと思います。

子供たち一人ひとりが求めているものに、答えてやってほしい。子供たち一人ひとりは、今、機械化の時代、自動化の時代に住んでおります。そして、インターネットで無機質な人間関係を作って、それさえも有り難いと思っている。

または、バーチャルリアリティーという、ある意味で仮想現実の中で生きています。だから、あの子たちは、現実感が乏しくて、どこまで子供を殴ったら、どこまでいじめたら、相手が死んでしまうかがわかってないんだろうと思うんです。またどうせ生き返ってくると思っているのかも知れません。その意味で、このシミュレーション、バーチャルリアリティーというものは、本当に、その他方で、私たちがよほど肉付けをしていかないと、恐ろしい世の中を、私は作っていくと思います。

インターネットだとか、マルチメディアだとか、素晴らしいと思います。ですけれど、ちょうど自動車の性能が良くなって、そして高速道路が整備されて、私も、かつて運転が大好きで車を運転しておりましたけれども、その性能が良くなって、高速道路が良くなった。だから、すいすいと、非常にある意味で、快適にドライブができます。それだけに、ドライブをする人のマナーが、道徳心が、そして、更に言わせていただければ、宗教に裏付けをされた道徳心、人が見ていようと見ていまいと、ほめてもらおうともらうまいと、人としてするべきことを、神の眼差しのもとでするかしないか。この高い道徳心。

これは確か、クリストファー・ドーソンという人が「現代文明の危機」という中で言ってたと思いますけれども、高い道徳心に裏付けられなければ、近代文明は大きな危機を迎えるだろう。

言うとおりだと思います。物が発達すればするだけ、機械化し、合理化し、効率化すればするだけ、私たちは心の問題を忘れてはいけないんだと思うんです。

子供たちは、どれほどそういう世界の中に住んでいたとしても、認めてほしい、愛してほしい、理解してもらいたい、話を聞いてほしい、この気持ちを持ってます。それを人間が充たさないから、ファミコンに向かうわけです。

そこに私たちが大人として、子供たちに対しての責任を持っていると思いますし、それを得られない子供たちが、自分たちの寂しさをまぎらわせるために、少なくとも自分をグループに入れてくれる暴走族に加わっても仕方がないと思うんです。学校で無視されている、お荷物にされている、その寂しさを、盛り場でまぎらわせても、とがめだてが

できないと思います。

また、非常に冷たい、お金だけ渡して、何か買っておいで、それですませている親のもとにいる子供たちが、肌の温もりを、男性とのセックスの中に求めても、私たちは責められないと思います。アメリカのカウンセラーの方がおっしゃっていました。最近の若者たちは、唯一、セックスの中に温もりを感じているんですよと。これは悲しいことだと思います。

私たちが、周辺のカルカッタに気づいていく。そして、そのカルカッタで、きょうも働くということです。インドに行かなくていい。この余島にもあるでしょう。皆様方がセミナーが終わって、それぞれの場にお帰りになる。どうぞ、置かれた場で咲いていてください。そして咲くということは、ご自分が明るく、笑顔で、人に優しく、カルカッタにいる人たちにほほ笑みをかけること。思いやりをかけることだと思います。思いやりというのは、自分がしてほしいことを相手にすることなんですね。自分の思いをやることなんです。

その意味で、私は修道者でございますけれども、未だに自分の中に、傷つきやすい心を大切にしています。悔しい、腹立たしい、時には憎らしい、嬉しい、優しさを受けた時の嬉しさ、そういうものを自分で失いたくないと思っています。なぜ。それを失ってしまったら、その思いを差し上げることができなくなってしまうんです。私が、あの言葉で傷ついたから、あの言葉を人様には、あげてはいけないという、その思いやりが、傷つかなかったらば、できません。

それだけに私は、ある意味で人間臭さといいましょうか、人間らしさと言っていいと思うんですけれども、軟らかい心を大事にしたいと思っています。カサカサの枯れ木のような、何を言われても、何にも感じない、そういう人に思いやりはできないと思うんです。思いやりというのは、自分も傷つくから、相手も傷つけたくない。とかく私たちは、自分が傷ついたから、相手も傷つけてやる、というふうになります。私には、そういう気持ちが一杯あります。それといつも闘っています。

星野トミヒロさんでしたか、ハッキリと言葉は覚えてませんけど「誰でも刺を持っています。その刺が外を向いているか、内を向いているか。それだけの違いです」という詩を書いていらっしゃいました。誰でも刺を持っているんですよ。その刺が外を向いて人をチクチク刺しているか、内を向いて自分を刺して戒めているか、それだけの違いです。ただそれだけと言いますけど、それが大変なんです。でも、それが私たちのチャレンジでございます。

私たちに心のゆとりがないと、人様のことを思いやるゆとりが失われます。というのは、自分が満たされていないと、満たすことしか考えておりません。そして、人様とお話をしていても、ああ、この方は私を褒めてくれるか、愛してくれるか、理解してくれ

るか、慰めてくれるか。愛してくれない。じゃあいらないと、人を自分の道具にするわけですね。そして相手の人の価値は、私を満たしてくれるか、くれないかにかかっている。

ところが、自分が満たされていれば、相手の不足が、相手の持っていらっしゃるニーズがわかるわけです。そして自分を傍らに置いて、相手の方のニーズに、相手の傷に手当てをして差し上げることができる。そのためには何が必要かというと、本当は、愛されていることが必要なんです。

愛されていないと、人を愛することは難しいです。だから、今の子供たちが、いじめに走るのは、自分たちが愛されていないからです。優しくされてない子供に、人に優しくすることはできません。私たちは、持ってないものを人に与えることはできないんですから。大原則です。自分が持ってないものを、他人に与えることはできません。

人に優しくすれば、その人は優しくなってくれます。子供を愛すれば、その子供は、他の誰かを愛することができる子供に育ってくれます。今の親の多くは、お金しか愛してない。名誉しか。自分のエゴで子供を進学させたり、お入学、お受験、そういうことをさせています。そうじゃなくて、子供が、ひたすらに自分として育っていく。ネギはネギとして育っていくことを、よくやったと褒めてやる。そして抱き締めてやる。その愛情が、子供たちがやがて大人になった時に、または今のままでも、今の時代でも、自分と違う、ネギにせよ、エンドウにせよ、バラにせよ、それをご大切に思うことができる子供に育っていくわけです。

私が若くて学長になりました時に、さっき言いましたような状況の中で、それこそ頭を、たくさん打たれました。鼻をへし折られて、そして涙を流したことも何度かございます。その時に、ある方が、ほほ笑みという詩をくださったんです。

「もし、あなたが、誰かに期待したほほ笑みが得られなかったら、不愉快になるかわりに、あなたのほうから、ほほ笑みかけてごらんなさい。実際、ほほ笑みを忘れた人ほど、あなたからのそれを必要としている人はいないのだから」と書いてございました。

それまで、挨拶をしてくれない、慰めてくれない、感謝してもらえない、お詫びを言うべきなのに相手が言わない。そういうことで悶々とする日が私にあったわけです。だって、もらって当然なんですから。

助成金をあげたのに、先生、会っても何にもおっしゃらない。この間、あれほど大きなミスをしておきながら、会って一言のお詫びもない。廊下ですれ違っても、お早ようございますも言わない。なぜ、ああ、私が若いから、バカにされているんだ。腹を立てた私を、ガツンと、本当に頭から殴りつけるような詩でございました。

もし、あなたが、誰かに期待した感謝が、優しい言葉が、お詫びが、ほほ笑みが得られなかったら、不愉快になるかわりに、むしろ、あなたのほうから感謝し、お詫びを言い、

ほほ笑み、褒めてあげ、ほほ笑んであげなさい。なぜなら、それができない相手のほうが、あなたよりも必要としているんだと。

読んだ時に私は、ああ、これじゃ、私が損するばかりだと思ったんです。ところが、この最後の一行、それができない人のほうが、あなたよりも、それを必要としているんですよと。

ああそうかと思いました。ああそうかと思ったら、できるようになったんです。私は、挨拶をなぜしないんだろうと思ってたけれど、私のほうから、すればいいんだ。ありがとうと、なぜ言わないんだろう、なんて無礼な人だろうと思っておりましたけれども、ああそうか、私が今度、小さなことでもいいから、先生、この間、ありがとうございましたとか、学生さんに向かって、この間ありがとう、お陰で助かったわと、一言いえばいいんだ。そうすると相手の心が和んでくる。そして、その和んだ空気が、だんだんと広がっていくわけですよね。

皆様も、キャンドルサービスをなさったことがおありになると思います。私は、いつもあのキャンドルサービスを見て思うんですけれども、自分のキャンドルの灯を隣の方に差し上げて、私のキャンドルの灯は減っていません。そして世の中は2倍、明るくなっている。私たちは皆、すでに灯のともされたローソクです。燃えるより仕方がない。

そして、燃えるということは、痛むことです。だから、人生には必ず痛みがございます。でも、その痛んでいる間に、できるだけ多くの灯を、温かさを、輝きを、喜びを、人様に分けて差し上げられる。そういうキャンドルになりたい。そういうローソクでありたい。どうせ燃えるんですから。燃えないローソクは、ローソクの意味がありません。

燃えるということには、必ず苦しみと痛みが伴います。しかしながら、燃えてよかった。時間の使い方は、命の使い方なんです。だから、燃えている間に、くすぶらないで、輝いて、温かさを人々に与えて生きていきたい。それがローソクとしての私たちの生き方だと思います。

だから、皆様方も、たぶん今までもそうだと思います。この余島に来てから私が感じたことは、皆様方のほうから挨拶をしてくださる方が、圧倒的に多うございました。素晴らしいと思います。むしろ、私が負けてしまうくらい、私よりも先に、お早ようございます。よろしくお願いしますと、そうおっしゃってくださる。

でも、それをどうぞ忘れないでください。そして、時には、こんな人に言いたくないとお思いになることがおありになると思うんです。こんな人に挨拶したら、本当に損だと、お思いになることがあると思います。その時に、刺が外を向いているか、内を向いているかが問われるんですよね。

私がアメリカにいたのが1958年から62年でございました。まだその頃は、黒人と白人の差別が存在して、しかも、少し差別をなくそうという時でございましたので、ある

日、黒人の講演会が開かれたんです。私も、ある意味で有色、ある意味どころか、私も有色人種でございます。黒人ではございませんけれども、白人にしてみたら有色人種。そして結構、差別を感じました。修道院の中でも。

その私に、一人のシスターが、シスター、黒人の方のお話があるから、今は、アフロアメリカンという言葉を使いますけれども、その当時は黒人という言葉を使いました。黒人の方のお話があるから、聞きに行かない？ 私も喜んで、その頃学生でしたから、伺いに行きました。

その方が、壇上にお上がりになって、口をお開きになるやいなや、聞くに耐えないヤジが飛んだんです、聴衆の中から。その方のお話を伺うために来たはずなのに、その中に混じっていたんですね。今もちょっと人種差別が、また世界中で起こり始めております。ただ、その頃のアメリカは、相当ひどいものがございました。

どうなさるのかと思って講演者を見ておりましたらば、その方は、短いスピーチでしたけれども最後まできちっと終えて、壇をお下りになったんです。私は、偉い方だなと思いながら、そのまま修道院へ戻りまして、あとから伺ったことでございますけれども、主催者たちが大変、恐縮をいたしまして、講演者に、あなたは、なぜ、あのひといヤジに対して、応酬しなかったのか。つまり、やり返さなかったのか。または壇を下りて、講演をやめてもよかったのに、最後までなさったのか、と尋ねたところ、その黒人が笑顔で、穏やかに、私は、彼らのレベルまで身を屈めることができなかったと言ったそうです。私は彼らのところまで身を屈める、屈することができなかった。

これは決して相手を見下げて言ったことではありません。つまり自分のプライドを落とすことができなかった。私には私のプライドがある。相手のレベルまで自分を下げることができなかった。小さきは小さく咲かんなんです。何を相手から言われようと、自分が相手から期待したほほ笑みが得られない時に、不愉快になるかわりに、自分のほうから、ほほ笑みかける。これは気高い魂にしかできないことだと思います。ある意味で高貴な、ノーブルな魂の証しだと思うんです。つまり、人に振り回されない、人の出方に振り回されない自分。難しいですね。これは本当に、難しいです。

私は、今、こうやってお話をしておりますけれども、だからといって、私が、100％しているとお思いにならないでください。しようと思っています。したいと思っています。しかし、時に、自分で、ああ、きょう私は負けたと思います。相手の出方に呼応してしまう。

例えば、相手の方が無礼なことをなさった時に、こっちも、それ相応のことをしてしまう。または、相手の方が挨拶なさらなかった時に、私も知らん顔をして通ってしまうことが今でもございます。本当に恥ずかしいですけれども、正直なことを言ってございます。それは心にゆとりがない時です。

つまり、相手の方のことが、私を超えて考えられなかった時。ああ、あの方は、ああいう態度をおとりになる理由があるんだな。あの方は、きょうはほほ笑むことができないんだ。あの方は挨拶ができないんだ。だから、私のほうから挨拶をしなければいけないんだという心のゆとりがない。そういう時が私にも、私にもなんて言ったら偉そうですけれど、私にもございます。

そして、それはそれなりに、私は有り難い、自分が思い上がって、自分はもう、できた人間だなんて思わないですむために、とても必要なことだと思うんですね。私はまだまだ修行しないといけない。私も疲れた時には、本当に自分の嫌なところが一杯出る人間だ。気をつけていないと、自分との闘いを忘れて、つい人のすることが気になることしか考えてない。

例えば、修道院に、あした戻ります。きょう、ここを出させていただいて、あしたちょっと岡山で仕事をしてから、修道院に戻ります。修道院に戻った時に、シスターたちが「ああ、シスター渡辺、お帰りなさい、お疲れさま」と言ってくださったら「ただ今、留守をしてて、ご迷惑をかけました」と、スラッと出るんですね。ところが、帰ってきても何にもおっしゃらないかも知れません。その時に、私のほうから「ただ今、留守中、ご迷惑をかけました」というのには、気高い魂が必要でございます。高貴な魂を求めます。

この気高さとか、高貴さというのは、家柄とか、生まれとか、育ちとか、そういうものとは関係ないんです。自分が、自分とどれだけ闘っているか。そして自分がどれだけゆとりを持って、相手の不足していることを、相手が求めていることに、思いがやれるかということです。

そのために、私は心のゆとりというのは、奉仕の原点だと思っています。私たちは、一人よがりのための奉仕をしてはいけない。つまり、奉仕をすることで自分が満たされている。ボランティア、神戸の震災の時にいろいろございました。そして、それはとても素晴らしいことだったんですけれども、やはり私たちはボランティアの原点というものを考えてみないといけない。そこには、やっぱり本当に相手の方のことを考えたボランティアの在り方というもの、それを、だんだんと考えていかないといけないと思います。

今、ボランティアをすると、入学試験に有利だとか、ボランティアをした経歴が就職試験で有利に働くとか、全くボランティアと次元の異なることが、罷り通っております。それだけに、私たちは、特にこのロータリー、またそれに関連した方たちは、本当の奉仕とは、何を指しているのか。

英語で、サービスという言葉を使います。サービスというのは、実は礼拝という言葉と同じなんですね。人間の分際をわきまえた人の在り方でございます。サーブ、奉仕する。仕える。

聖書の中で、キリストが、私は、仕えられるためではなく、仕えるために来た、とハッキリ言ってます。そして弟子たちの足を自分が洗って、タオルで拭っているんです。そして私たちに対して、私が、あなた方の先生と呼ばれる私がしたようにあなた方もしなさい。お互い同士、愛しあいなさい。お互い同士を、ご大切にしあいなさい。相手の身分とか、性別とか、年齢とか、立場とか、そういうものと無関係に、相手の人を、ご大切に思う心を育てていきなさい。そのためには相手の足を洗いなさい。相手に仕えなさい。相手がほほ笑めないのなら、ほほ笑みかけてあげなさい。相手が、お礼が言えない、挨拶ができない人には、こちらのほうから、この間ありがとうと、にっこりと、ほほ笑みかけてあげなさい。そういうことを言ってます。

この前、新聞を読んでおりましたらば、一人のトラックの運転手さんが投書をしておりました。簡単な言葉で、非常に平易な言葉で書いていらしたことは、自分は長距離トラックの運転手です。夜っぴて走り続けて、もうすぐ目的地の到達する。その手前で、ある所で、横断歩道にあった。もう朝も7時半ごろ、もうちょっとで目的地に達するのに、その横断歩道を、こともあろうか、一人の小学生が、黄色い旗を手に持って、渡り始めている。

そこで自分は、非常に心中いまいましく思って、急ブレーキをかけた。つまり、なぜトラックを待たないかというわけです。自分は夜っぴて、夜も寝ずに走り続けて、もうちょっとで目的地に達する。そのトラックが行きすぎてから渡ればいいのに、旗を持って渡り始めた。思い知らせてやりたいと思って、急ブレーキで停まった。

すると、その黄色い旗を持った小学生が、道を渡り終えてから、つまり、押したわけでしょうね、通行者の押しボタンを。そしてトラックの運転台のほうを見上げて、小さいですから見上げて「おじさん、ありがとう」と言ったそうです。笑顔でおじさん、ありがとう。と運転手が書いていました。

私は、それを聞いて、穴があったら入りたかった。そして一つの決心を立てた。自分は、どんなことがあっても、これから急ブレーキで、横断歩道の前は停まるまい。必ずスピードを緩めて、横断歩道を運転して通ろう。

私はその、本当に運転手さんがお書きになったものですから、難しい哲学的な言葉なんか何にも書いてなかったんです。ですけど、その投書を読んだ時に、さっきのローソクの話を思い出しました。愛は溢れゆくということです。ほほ笑みは溢れていきます。ありがとう、という感謝の言葉も、溢れていきます。ちょうどローソクの灯が、あげたからといって減ることなく、この世の中を明るくしていくように、心の平和も増えていきます。世の中は暗いと不平を言うよりも、進んで明かりをつけましょう。心の灯の、これは標語でございます。でも本当にそうなんです。

だから、自分が進んで、まだローソクの灯のともってない、そのローソクに灯をつける

ことによって、誰かが来て、つけてくれないかなと思ってるローソクに、進んで、損をするのを覚悟の上で実は損をしないんです。損をするのを覚悟の上で、この灯をどうぞお使いくださいと分けること。

それが結局、その小さな小学生が運転台を見上げて「おじさん、ありがとう。僕が渡るのを待っててくれてありがとう」。そのお陰で、交通事故は減ったでしょう。たぶん交通事故にあった人の数も、お陰さまで減っていると思います。どこかわかりませんけれど。

心っていうものは、そんなに大事なものだと思うんです。心は、もちろん言葉になって、形になって、ほほ笑みになって、ねぎらいの言葉になって、表れるでしょうけれども、その、底にある優しさ、相手への思いやり、そういうものが、とてもとても大切なんだと思います。

さっきの黒人が、どんなにひどいことを言われても、なおかつ高貴な魂を保つことができた。これは本当に難しいことだと思います。私たちは、つい目には目を、歯には歯を、と考えます。時には、一つ殴られたら、二つ殴り返す。それが当たり前だ位のことを教わって生きてきたと思います。

一度お礼を言ってもらわなかったから、私も今度は言うまい。もう一度、言ってやるものかという、そういう気持ちを私も持ちます。そこに、やはり刺を自分の中に向ける、自分と闘う、本当に血みどろの闘いです。人は誰も知らない。ですけれども、そういうほほ笑みにだけ、カルカッタを癒やす力がございます。

物事がうまくいってる時のほほ笑み、誰にでもできます。そうでなくて、私たちの周辺のカルカッタで、きょうも自信をなくして生きている人たちに、あなたは、生きてていいのですよ。あなたが生きてて嬉しい。どうぞ生き続けてくださいね。人間、価値があるから生きるのではなくて、生きているから価値があるんですよ。使命という言葉が、命を使うと書くように、命をどうぞ使い切ってください。途中で死んではいけませんよという、その力を与えるほほ笑みは、自分との闘いを経たある意味で苦しみの土壌にのみ咲く花の美しさだと思います。笑いとは違います。テレビ番組とか、マンガとか、私はよく知りませんが、そういうものが醸し出すものではありません。これは、ほほ笑みです。

そして先ほど、ローソクの灯は無駄にならない、ほほ笑みは無駄にならない、ということを申しましたが、ある人がこういうことを言っています。「一生の終わりに残るものは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」永遠につながっていくもの。

私たちは、死んでしまいますと、どれほど生きている間に、たくさんのお金、土地、珍しい物を集めたとしても、人手に渡ります。私たちと共にあるものは、与えたものだということ。

皆様は、レントゲンに必ずかかったことがおありだと思います。大恋愛をしている最中

にレントゲンにかかっても、愛は写りません。有り難いことに、と言ってもいいかも知れません。大恋愛をしている最中に手術をしていただいても、愛は出てきません。

マザーテレサのように、愛の固まり、愛の権化のような方が、もしお亡くなりになって、解剖に付されたとしても、あの方を80数年、生かした愛は、出てきません。目に見えません。だから、ないと言えるでしょうか。私は、目に見えないけれども、あるものは愛だと思っています。

星の王子さまが「大切なものは目に見えない。肝腎なことは、心の目で見ないと見えない」ということを言っています。私たち、今、余りにも、目に見えるものに惑わされて、目に見えるもの、数で数えられるもの、それを追い過ぎて、目に見えない大切なものを忘れています。心に愛を持つことを。

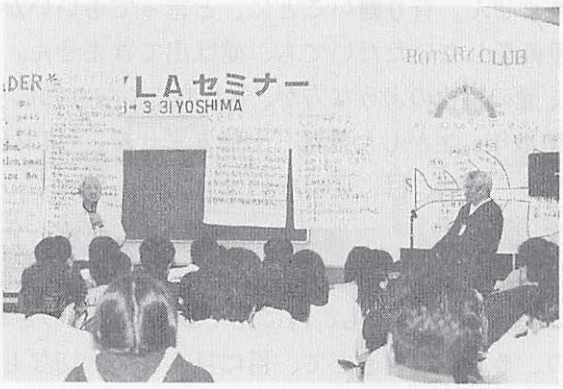
そして、レントゲンで見えたものは、全部、1200度のあの焼き場で燃えてしまいます。私は、父のお骨も、兄のお骨も、母のお骨も、全部、拾いました。全部燃えてしまいました。ですけれども、レントゲンに写らなかったものは、母の愛、父の愛、兄の愛、これは今も私と共にございます。見えたものは全部、燃えます。見えなかったものは燃えることはありません。不滅です。私たちは、この燃えないものを大切にしたいと思います。

たぶん皆様も、きょう、これからも、時刻に追われて、スケジュールをこなしていらっしゃると思う。あしたも時刻で、私も、きょう、4時48分という、マリンライナーに乗ります。そういう時刻、これはもう、私たちと切っても切れない縁にございます。だから、時刻も大切です。時間を守ることは、とっても大事です。

しかし、どうぞ皆様は、ホワット　タイム　イズ　イット　という問いかけを忘れてください。または間違えてください。そして、ホワット　イズ　タイム　今、私が、この切り詰めた3分間は、私にとって何なのか。今、私が、人に思いやりをかけようとした、この無駄に見える5分間は、私にとって何なのか。せかせかと、木を切りまくっている私、その暇に斧を見つめる、その、一見、無駄に思えるその時間は何なのか。ホワット　イズ　タイム　ということを、時に英語を間違えて考えてくださったら、それが結局、皆様方に、心のゆとりというものを与えてくれるのではないかと思います。

どうぞ、皆様方の、ご生活の中に、いわゆる太陽の光が差し込む暇、単なるレジャーとしての暇だけでなくて、どれほどお忙しくても、その間に、太陽の光の差し込む暇をお持ちになりますように。

そして、このライラが、最後まで有意義で、また、そのホストでいらっしゃる、ロータリー、またYMCA、そういう関係者の方々が、本当に実りの深い会を終えて、この余島からお離れになることができますように、心からお祈りし、皆様方のお幸せを心から願って、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。　（拍手）



フォーラム

司会（深川純一氏）

きょう昼に大体の概略は申し上げておきました。昼から一杯かかって皆様方の各班の意見がまとまったと思いますが、これを今からA班から順番にここの前で皆さんに発表して下さい。

発表した後でディスカッションに入りますが、ディスカッションに入ったらどんどんご自分の意見を言って下さい。自分の班と違う意見が、他の班で出ておる、それについての意見で恥ずかしいと思わないでね。恥ずかしいと思って言った意見が大変、皆のためになる意見もあります。だから、どんな意見でも結構であります。くだらん意見でも何でもいいですが、それが意外にくだらなくない場合がございますので、どんどん意見を言っていただきたいと思います。

ロータリアンの方は、補足的にご意見を求めることがあるかもしれませんが、できれば受講生の方の意見を優先してしゃべっていただきたいと思いますので、一つよろしくお願いいたしたいと思います。

それじゃA班から、どうぞよろしくお願いいたします。

A班

A班の山下です。よろしくお願いします。

きょう昼からのバズディスカッションを続けてきまして、テーマ「リーダーの心」ということについて議論を続けてきたわけですけれども、最初は3グループでバズセッションという形でディスカッションさせていただきました。それで、その考えていく方法として、ここは小豆島余島という瀬戸内の中の島の中で、この場所の地理的なこともあり、魚に例えて考えてみました。

左の方から見ていただいたら分かるんですけれども、大きな骨を、大きな要素5つに分けて僕ら自身、考えていきました。

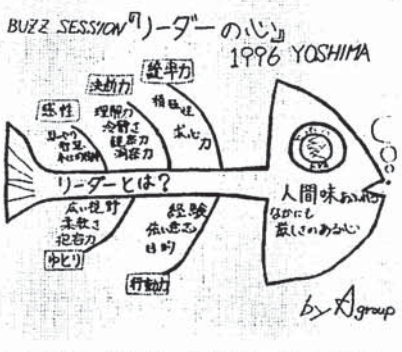
1つは感性であり、1つは決断力であり、1つは統率力、1つはゆとり、行動力と、そ

ういうもので考えていった次第です。

それぞれの項目をこまごまと見ていくのもいいんですけれども、この中にのせてないようなこと、それは、否定的な意見として、望まれるリーダーの資質として、そうでない例として多少あげたので、お聞き下さい。

1つは、マイナス面としての思い込みであったり、偏見であったり、先入観であったり、固定観念とか、そういうことです。あと欲であったり、物欲であったり、金欲であったりと。あと統率力の方にまた関係してまったく逆のロジックの方になってくると思うんですけど、傲慢さであったりとか、あと自己中心的なことであるとか、利己的であったり、協調性がないとか、そういうことは当然、統率力も欠けていると。そういう形でリーダーの心に方に向って考えていきました。

結果から言わしてもらいますが、結果として人間味あふれる中にも厳しさのある心と。これは最初は、厳しさもあるけれども人間味があふれる心というふうな形にしようかと思っていたんですけれども、そうではなく、あえてこういう形にさしていただきました。



そしてリーダーの心として、何が一番重要なのだろうかと、一番大切なのは何なのかなと考えた時に、魚の目とそれをかけているわけですけれども、無償の愛ですね。

一応こういう形で3時間、4時間のディスカッションをA班は続けてきました。私自身、一番ちょっと余りこのことについて上手に説明できないんですけれども、外の班員の方々も助けていただけると思いますので、また質問がある方は、このことについてまた質問して下さい。以上でA班の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会

ありがとうございました。今、A班の発表をしていただきましたが、これについての意見は後で伺います。ただ、この意味が分からない、とかいうことはございますか。この点はどういう意味ですかと、それがあったら今おっしゃっといて下さい。大体分かるような気がしますが。それぞれの文字の意味するところ、今大体ご説明いただきましたので分かると思いますが、よろしいですか。

ロータリアン

ちょっと待って下さい、いいですか。この議題ですが冷静さとか、観察力とか洞察力が、決断力にそういうのが含まれるのか。

司会

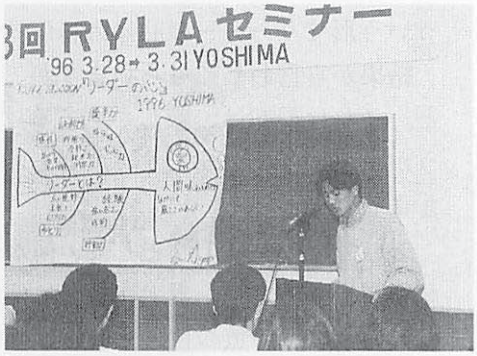
そういう質問ですか。ちょっと答えて下さい。

A班

先ほどの質問ですけれども、こういう形で考えていく上で、5つにポイントを絞ったわけです。それで感性とか決断力、統率力、ゆとり、行動力を持ち合わせる人間がリーダーとしてはふさわしいんじゃないか、資質として望まれるんじゃないかという話で、その中の小骨ですか、大きな骨の中の小骨ですか、そういう形で理解したわけです。

ロータリアン

その中身です。もう一回質問します。例えば、感性とかありますね。ただ奉仕的精神というのが感性なのか。それとも感性というものの中にそういうのが含まれているのですか、という質問です。



A班

おっしゃられることをロジックで表したら一緒でしょう。

司会

そういうことでよろしいですか。

ロータリアン

それと、A班ではどういう意味での無償の愛と理解しているのでしょうか。何か具体的な例があれば挙げて下さい。例えばこういうことです、といったような。

A班

端的に言わしてもらいますと、見返り等を要求しない愛っていうんですか。

司会

よろしいですか、今の。分かりました？　大体意味が。中身のことだと思うんです。構成要素っていうんですかね。

それから、これから質問なさる方、立って、マイクを渡しますから、マイクでしゃべって下さい。後ろの人が聞こえないらしいので。お願いいたしておきます。外にございますか、意味について。ディスカッションはあとでします。

今おっしゃったように、これが感性とこころの関係がどうかとか、こういう、どういう趣旨でおっしゃっているかということの質問を今、受けてるわけですが、外にございませんか。よろしいですね。ありがとうございました。それじゃ次、B班お願いいたします。

B班

今晩は。B班です。B班はぎりぎりまでさしていただきましたけれども、ここのリーダーとしての心についての大体ディスカッションして、バズセッションやって、出て

きた意見をどういうようにしてまとめようかと話したら、大体出てきている意見が資質と心構えに分かれるんではないか、というふうになりました。ただ、見たら分かるように、非常に重複しているところもありますけれども、そこは我慢してB班の意見として聞いて下さい。

大体、主に言った班の班長がしゃべって、ちょっと補足説明しますので、ばらばらになっていますので、最初に、例えば1番やった人が何番か後に飛びますので、そこはちょっとご了承して下さい。お願いします。

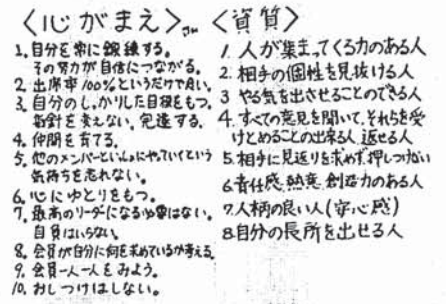
それでは私、一番B班で歳をとっていますので先に言わしていただきます。

まず資質の3の方、やる気を出させることができる人。読んで字の如く分かりますけれども、このやる気を外の人に、もちろんリーダーがやる気を出さなければいけないというのは当たり前ですけれども、一緒にやっている人がやる気を出すにはどのようにしたらいいんだろうかということで、その皆への言葉がけですね、特に励ましの言葉。どのようにしたら仲間が頑張ってくれるかという言葉がけ。そして時には上に立つリーダーとして叱咤激励、叱咤しなくてはいけない叱り方、その叱り上手でもなくてはならないという意見も出ました。

そして、私が担当したのは7番目ですけれども、人柄の良い人、私を見てもらったら分かります、というのが一番いいんですけれども、この人格、人間性が大切だということ。外の言葉で言い替えたら、その人を本当に信頼できる、信頼感の持てる人。そしてその人に付いていきたい、また資質の1にも関係がありますけれども、人が集まってくる、あとから説明がありますけれども、その人に付いていきたいと思われるほどの人柄を持つということが大切ではないか、ということです。以上2つです。あと代わります。

B班

失礼します。続きまして資質の1の人が集まってくる力のある人、ということについて説明させていただきます。



これは、まずカリスマ性、カリスマ性と申しましても独裁者ではないということです。独裁者の場合は、力による抑圧になってきますので、受け継ぐことが当然できませんので、リーダーとしての資質には不適なんじゃないかなと考えております。

続いて4番の、すべての意見を聞いてそれらを受け止めることのできる人、またかえせる人、というのは包容力があり、視野が広い、という資質を持ち合わせている。会合もしくは団体等において発言をできない、また発言しにくい方というのは当然いら

っしゃると思うんです。その方についても発言できるだけの環境をつくってあげて、少数意見も聞き、より良い方向に導くだけの力を持ち合わせている人。というのがこの4番の、すべての意見を聞いてそれらを受け止めることのできる人、かえせる人、というのに該当するんじゃないかなと。

続いて6番の責任感、熱意、想像力のある人。この3つにつきましては読んで字の如く、責任感が当然ないとリーダーたり得ることはできない。当然、大なり小なり皆さん責任感というのはあると思うんですけれども、リーダーとなる場合、当然その人の下に何人、人数の問題じゃないんですけれども5人、また100人とか1,000人と付くと思いますので、それだけ責任感が出てくると思うんです。その責任感を当然、持つこと。

また熱意。それだけの人数を引っ張れることができる熱意。

続いて、それだけの人を引っ張れる、同じ方法では人を引っ張ることはできませんので想像力、独創力が当然、必要になってくると思いますので、この3点をあげております。

B班

そうしましたら、資質の最後3つを発表させてもらいます。まず2つ目の相手の個性を見抜ける人ということなんですけれども、これはリーダーがグループ員と話すことによって、そのグループ員の一人ひとりの良さとか、それから価値観などを適切に判断して、その良さとか価値観をリーダーは引き出し、引き出すだけではなくて、さらにそれを引き伸ばす力を持っていなければならない、ということです。

で、個性を大切にできる人、個性を大切に考えられる人がリーダーとしては最適なんではないだろうか、ということです。

それから5つ目の相手に見返りを求めず押しつけない、ということなんですけれども、例えばですけれども、リーダーが私はここまでやったんだからとか、私がこれだけやったんだからとか言って、グループの人にこれだけやってほしいなどというような感情は持たないようにすることが大事ではないかということ。

それから、もう1つ出ている押しつけないというところなんですけれども、自分がきょうのシスターの話の中にもありましたけれども、自分が挨拶をしたからといって、その挨拶の返事を相手に求めない。自分自身のこととしてとらえるだけでいいんじゃないか、ということがこの意見です。

それから、最後に8番目の自分の長所を出せる人、というところなんですけれども、

これはリーダー自身が自分の人格とか、いいところを殺すことなくグループを引っ張っていくことです。で、リーダーがつくらない自分、自分をつくって自分を殺してしまわないということと、自分らしさをなくさないようにすることが大切ではなかろうか、ということになりました。

B班

それでは後半の心構え、リーダーとしてはどういう心構えが必要であろうか、ということです。重複している点も多々ありますけれども、お許し下さい。

時間がなかなかありませんでしたが1番、自分を常に鍛錬する、その努力が自信につながる、ということですけれども、まず自分を向上させるように自分自身を鍛えなくてはいけないということ。コーラス部の指揮者がおったんですけれども、その分野における勉強とか、そういう自分もその分野に対してもっと深く知らなければいけない、そういう専門分野も一生懸命努力して勉強する。そして、その向上心が皆に伝わっていく。もちろん口でしゃべること、またその姿を見てもらうということ、いろいろ出たんですけれども、その姿を皆が感銘を受けたりして、皆がそれで心を開いて付いてきてくれる。それが、自分がこれからやっていくという自信につながるという意見も出ました。

飛びまして4番目、仲間を育てる。この4と5項、他のメンバーと一緒にやっていくという気持ちを忘れないという、ひっついて大体同じようなことなんですけれども、すべてリーダーとなりますと、すべて自分がやろうという気持ちで、下手したらなる場合があるんですけれども、そうではなくて自分でも、リーダーとしても、リーダーがぱっとやろうと思ったらできる仕事もあるけれども、それを一つおいて外の人たちにやってもらって、そしてその仕事を通して外の人も、自分でもできるけれどもそれではいけない。外の人も育てなくてはいけないのでその仕事をやってもらって、もちろんその時にはリーダーがおごりたかぶって、自分では簡単にできるけれども、というおごりたかぶった気持ちではなくて、その仕事を任せて温かく見守って、その人の力を伸ばしてもらおうという気持ちも大切だということです。

でありますので、5番目に外のメンバーと一緒にやっていくという、リーダーだけがぽんと出てもこれいけませんで、リーダーという立場は外の皆の中の一員であって、自分だけが高い立場にいるのではなくて、全員で一つの目標に向かってやる、という謙虚な気持ちが大切である、ということです。

B班

2番の出席率100％というだけでよい。これについてはちょっと言葉が適切じゃないかもしれませんけれども、というのが資質の6番で話しました責任感、熱意及び想像力のある人がリーダーになり得る資格を持ち合わせていると。当然そういった人がリー

ダーになっているので外部団体、またその外のグループとの交渉というのは当然出席するべきでないかと。出席しているからリーダーなんじゃないかと。当然、仕事とか及び家庭とかの事情で参加できない場合も当然出てくると思うんですけれども、その際にはサブリーダーとして、そのサブリーダーを育てておいて、そのサブリーダーを代理者として参加させるぐらいの心構えを持つことが必要なんじゃないか、と思っております。

続いて3番目の自分のしっかりした目標を持つ、指針を変えない、完遂する、ということなんですけれども、一本筋の通った会またはグループの趣旨、概念を理解した意思を持ち、目標を持ち、結果を伴ったプロセス、ここでいうところのプロセスというのは、次につながるものです。これをもって良い意見を取り入れ、監視するというものです。

リーダーが独りよがりで、例え良くても外にもいい意見は当然あるわけですから、進めながら付け加えて、会に意見を聞いて、グループの中の一員に話を聞いて、どんどんいい方向に。当然、結果に向かって進んでいくというのがリーダーの心構えじゃないかなと。

7番の、最高のリーダーになる必要はない、自負はいらない、ということなんですけれども、リーダーっていうのは、唯一のリーダーである、また最高のリーダーになる必要はない、というのがうちで話し合った結果なんです。

というのが、リーダーであるということを謙虚に考え受け入れ、会の一員であるということを理解するのが必要なんじゃないかなと。普通のリーダーでいいんじゃないかなと。リーダー一人ですべてをやり遂げるわけじゃないですから。会員を動かして、グループ員を動かしてするべきですから、普通の平凡の、誰にでもリーダーになり得ることは、ある意味でできるんですから、条件が変われば誰がリーダーになるか分からないんですから。こういったことも一言加えております。

続いて、8番の会員が自分に何を求めているかを考える。これちょっと抽象的すぎて、話の方がしにくいんですけれども、あらゆる場面でグループの一員が何を考えて、欲しているのかを、たえず考えておかなければ、会の趣旨、グループの趣旨、概念というのが、方向性が曲がるんじゃないかなと思います。

10番の押しつけはしない、ということなんですけれども、資質の5番で重複していますけれども、傲慢なリーダーっていうのはよくない、心構えができてないんじゃないかなということで、ちょっと付け加えております。

B班

そうしましたら、6番の心にゆとりを持つ、という点なんですけれども、リーダー自身にゆとりがなかったら、そのグループを統率することができない、ということです。で、自分のことに精一杯な時に、皆さんもそうかと思うんですけれども、周りの人に目を配ったりとか優しさを分けるというようなことはできないので、常に心にゆとりを持てるように、そして持つようにすることが大切なんじゃないかということです。

で、例えばなんですけれども、震災の時とかでも、まったくゆとりのない人にとっては外の人を考えるだけの余裕がなかったわけですから、例えば被災地でもリーダーにはなかなかなれなかったし、教員なんかでも、自分の余裕のない時に生徒と話をするような時ができてしまったら、それは片手間なものになってしまって、十分なものにならないということが考えられます。

それから最後に、9番目の会員一人ひとりを見ようということなんですけれども、会員というかグループの人が皆良いところも悪いところもあるわけなんですけれども、それをよく見て、資質のところにも書いてあったんですけれども、個性を大切にでき、そして、それを理解しようという気持ちをリーダーが持ち続けることが大切なのではなかろうか、ということです。

B班

すみません。ちょっと先ほど資質のところで一つもらしておりまして、1番の人が集まってくる力のある人というところで説明、カリスマ性ということを話したんですけれども、そのカリスマ性というのがリーダーの日ごろの行動、日常生活というのに由来していると思うんです。当然、リーダーに惹かれてその会、グループに入れば、その団体に所属すれば離れない、もしくは離さないだけの気配りっていうこともリーダーとしての資質になってくると思います。ちょっと誤解されるといけませんので、一言付け加えておきます。

B班

はい、B班ではリーダーの心を今、説明したように話し合いました。ここで私たちのリーダーの活躍をご覧いただきましょう。

「説明者」　：B班村はホストガバナー2名を入れて19人の村です。ウエダケイスケ村長は若者の村離れに頭を悩ましています。

「村　長」　：おらの村の若者は、皆いい子ばっかりじゃけど、もっと活動してもらう方法はないかのう。

「若者A」　：過去の花火大会すごかったよねえ。

「若者B」　：マチ高のリーダーがめっちゃ格好ええわ。

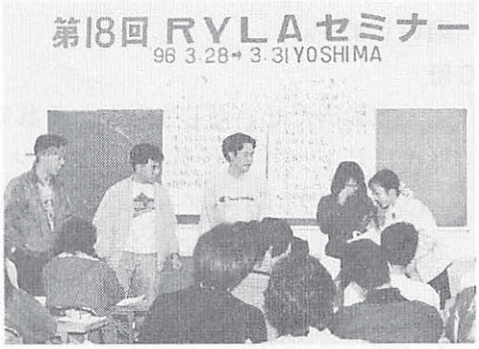
――― ひらめきの音、カーン ―――

「村　長」　：うん。おらが村でも祭りをやるだ。若者のリーダーをつくるだ。娘さん、ええリーダーの若い子はおらまいかのう。
「若者A」　：マエカワさんなら皆のやる気を出させてくれると思う。
「若者B」　：ドイ君は意見を聞いて受け止めてくれる人よ。
「若者C」　：カサハラ君は相手に見返りを求めないし、押しつけるところがないわ。
「若者D」　：コマキさんは人柄がええよ。
「若者E」　：ミヤタケさんは責任感があるし、熱意も想像力もあるしなあ。めっちゃ格好ええ。皆呼んでこうか。
「村　長」　：ようし、祭りをやるだ。
「若者A」　：何するの？
「若者B」　：花火大会。
「若者C」　：過去村と同じやん。
「若者D」　：コンサートや。
「村　長」　：そらええなあ。
「若者E」　：リーダーを決めないかんねえ。
「若者F」　：リーダーか、難しいねえ。祭りもせないかんこっちゃし、ほなリーダーやろうか。
「説明者」　：リーダーも決まり、祭りの計画に入ります。
「若者A」　：コンサート、だれ呼ぶん。
「若者B」　：岡山大学合唱団。
「若者C」　：いやあ、シャ乱Qがいいよ。
「リーダー」：いや、皆分かっとらん。芸能人いうたら天地真理しかおらん。オレの意見で決まりや。
「若者たち」：帰ろ、帰ろ。
「リーダー」：ガーン。村長、出てきて。
「村　長」　：リーダー、悩んどるか。皆で話し合って、もう一回頑張ったらええが。
「若者A」　：こちらも悪かった。もう一回、ミヤタケ君と話し合って頑張ろう。
「若者たち」：そうしよう、そうしよう。
「説明者」　：リーダーは村の青年団と話し合いました。いよいよお祭りの日です。
「天地真理」：（歌をうたいながら）今晩は、天地真理です。よろしくお願いします。
「若者A」　：よかった。大成功やなあ。
「リーダー」：皆のおかげですよ。やっぱりチームワーク大切ですねえ。

「説明者」：B班村の繁栄が目に浮かぶようですね。

以上で終わりです。（拍手）

司会



B班、ありがとうございました。今B班から意見を出していただきましたが、あの中で先ほどと同じように意味の分かりにくいところ、それがあったら質問して下さい。意見ではなくて。意見はあとで伺います。はい、どうぞ。

○○氏

資質と心構えと番号ふってあるんですけど、これ特別に優先順位とかがあるんでなくて、どれも対等な意味にとってよろしいんでしょうか。

B班

はい。そうです。

○○氏

便宜的に分けてるだけで、全部対等な、同じだけの要素があるということですね。

司会

はい、ありがとうございます。外にありますか。意味の分からない、どういうことを意味しているのか分からない点があったら、おっしゃって下さい。はい、どうぞ、どうぞ。

○○氏

本当にすばらしい、楽しい劇を見さしていただいたんですが、劇の意図は、リーダーは皆の話を聞かなければいけない、というところに集束されるんでしょうか。ちょっと劇の意図が分からなかったんですけど。

司会

そういう質問ですが、B班の方いかがですか。どういう趣旨であの劇をやられたのか、ということです。

B班

おもしろかったでしょう。（拍手）ほとんど、ぎりぎり30分前に本を書いたんで、ちょっとややこしくなったので、分かりづらかったとは思うんですけど、基本的に最後、宮竹リーダーが言ったように、チームワークが大事だと、リーダーになったからといって気負い込まずに、皆で仲良くやることが村長の望みなんだよ、ということを、メッセージとして伝えたかったのですが。

司会

ありがとうございました。よろしいですか、今ので。外に何か、意味の分からない方おっしゃって下さい。今のように。ありませんか。ございませんか。それじゃC班、お願いします。

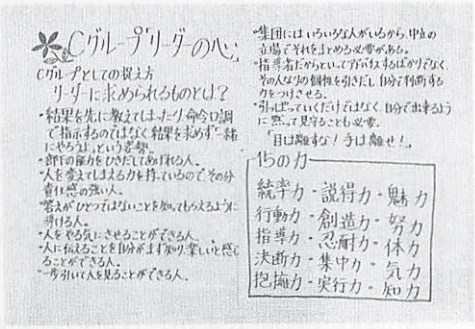
C班

大変お待たせいたしました。それではただ今からC班の発表をさせていただきます。発表は私ヤスリンです。アシスタントはシホリンです。

Cグループのリーダーの心ということで、Cグループとしましての捉え方ということで、非常にテーマが広いということもございますので、リーダーに求められるものとは、ということに内容というんですか、絞りまして、われわれ意見を出しました。上から順にご説明いたします。

結果を先に教えてしまったり、命令口調で指示するのではなく、結果を求めず一緒にやろうよという姿勢。次に部下や子供の能力を引き出してあげれる人。次に人を変えてしまう力を持っているので、その分責任感の強い人。答えが一つではないことを知ってもらえるように導ける人。

次に人をやる気にさせることができる人。人に伝えることを自分がまず知り、楽しいと感じることができる人。一歩引いて人を見ることができる人。集団にはいろいろな人がいるから、中立の立場でそれをまとめる必要があります。指導者だからといってアドバイスするばかりでなく、その人なりの個性を引き出し、自分で判断する力をつけさせる。引っ張っていくだけではなく、自分でできるように黙って見守ることも必要です。目は離すな、手は放せ。



以上、このような形で最初にわれわれはリーダーに求められるものとは、ということでいろいろな意見を出しました。そういう中でわれわれでは、じゃあリーダーに最終的なまとめとして、結論づけたわけですけども、15の力ということで、われわれはリーダーに必要ではないかというふうに結論づけました。

その15の力とは、1つ統率力、2つ説得力、3つ魅力、4つ創造力、5知力、6努力、7指導力、8忍耐力、9体力、10決断力、11集中力、12気力、13抱擁力、14実行力、そして最後15行動力。以上でございます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

司会

ありがとうございました。今ご説明いただきましたが、意味の分からないところがあったらご質問下さい。

C班

ないようですね。ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。それじゃ次にD班お願いします。

D班

これからD班の発表を行います。私、司会並びに進行を務めさせていただきます。夏はマリンスポーツ、冬はスキーのインチキラクターを務めさせていただいております森田といいます。よろしくお願いします。

わがD班ではリーダーの心について4つのテーマをもって話し合ってきました。まず第1にリーダーって？　第2にリーダーというアルファベットを分析してまいりました。第3にこんなリーダーになりたいな。そして、まとめとして第4に最後ぎゅっとつかんでいきたいと思います。

まず、リーダーって？　というところですけれども、個々のグループをいい方向に導いていく人でなければならない。未熟な者同士教育する。ちょっと教育難しいですから、ちょっと書かしてもらいます。普通の教育、私2年ほど高校で講師をしておりましたので黒板慣れておりますんで。教育、教えるっていう字。ここの教育は教えるではなくて、共に育む。お互いで育っていくという。あと、あこがれの存在の人。子供の場合ではガキ大将で、今の子供、ファミコン世代と言われるほど外で遊ぶ子供が少なくなったため、ガキ大将と呼ばれる人間がいなくなりました。ドラえもんでいうジャイアンみたいな人がいなくなりました。その役目をするのがリーダーの役割というふうに、うちのD班では考えてまいりました。

2番目のリーダー。リーダーをアルファベットで分析したいと思いますで、私少々横文字が苦手なものですので、英語の堪能な松本さんによろしくお願いします。

D班

ちょっとこちらを見てもらえますか。

D班

黒子の渡部君です。

D班

私たちは立派なリーダーになるために、伸ばしていかなければならない能力が、この文字の中に含まれていると考えました。まず一つひとつ追っていきたいと思います。

最初にリーダーのL。「Listen」。まず聞く。これはまず最初に人の話を聞いて相手を

知るということからリーダーの能力が始まります。

では次にリーダーのE。「Explain」。説明するということで、自分の意思を相手に伝えるということです。

次にリーダーのA。「Assist」。これは援助するという意味です。

次にリーダーのD。「Discussion」。これは意見を出して話し合うということですね。

で、次はリーダーのE。「Evaluation」。これは評価です。評価する。相手を認めるということ。

最後のR。リーダーのR。「Responsibility」。これは責任ということで、自分の行動に責任を持つという能力、それぞれ含まれております。

このように振り返ると、以上のそれぞれの能力は、今回のセミナーにすべて生かされているといえるのではないでしょうか。ということで、一つひとつ見ていきたいと思います。

まず、リーダーのL、Listenは、きょうときのうの松原先生や渡辺先生の貴重なご講義を聞くこと。またキャビンタイムにおいて互いに自己紹介をし、仲間づくりに励むことができました。

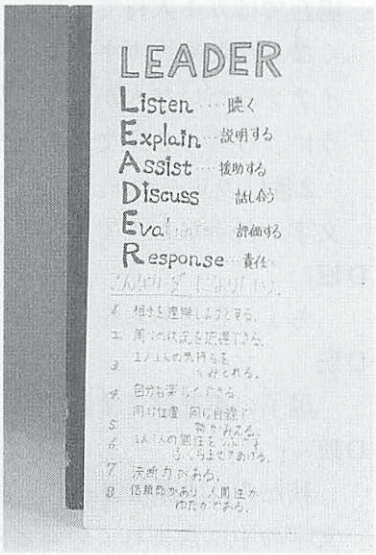
次にEのExplainでは、キャビンタイムやレクリエーションを通じて自分を表現する、伝えることができました。

次にリーダーのA、Assistは、班ごとに分かれての共同生活の中で互いに助け合えたということがあります。ディスカッションでは、バズセッションやこのフォーラムの中で意見を出し合うことができました。

Evaluationの中では、いろいろ話し合うことで自他を評価し合いました。

Rでは、時間の厳守や健康管理、また自分の行動に責任を持って過ごすことができました。

このように、私たちはこの4日間のセミナーの中で、今まで漠然としていたリーダーの意味を再確認することができました。以上です。



D班

続きまして、ボーイスカウト等で、いろんな現場で活躍している宇加ちゃんと、専門学校のインチキ先生であります大久保先生に説明してもらいたいと思います。

黒子はおなじみ渡部君。よろしくお願いします。

D班

それでは、こんなリーダーになりたいな、ということ

で1番から。相手を理解しようとする。これについてちょっと補足をしておきます。相手を理解しようとするというのは、相手を理解しようとするということです。（笑い）すみません。気を取り直しまして。この相手を理解しようとするというのは、客観的、主観的な両方の立場からということです。両方の立場から相手を理解しようとする。鋭い突っ込み、ありがとうございました。

盛り上がってきましたところで2番、周りの状況を把握できる。これは常に広い視野をもって全体を見ることができると。

3番、一人ひとりの気持ちをくみ取れる。これは一人ひとり差別なく、平等に気持ちを受け止めてやることができるということです。

続きまして4番、自分も楽しくできる。これは楽しくできなければ苦痛になり、また周りも楽しくなくなるということで、自分が楽しくできれば周りも楽しくなるんじゃないかということです。

はい、5番いきます。同じ位置、同じ目線で物が見える。これは外でも意見が出ていたと思いますが、上から一方的に命令するんじゃなくて、同じ視点で物が見えるということです。

6番いきます。一人ひとりの個性をつぶさず、ふくらませてあげる。標語お願いします。

D班

して見せて、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かず。

D班

ありがとうございました。それでは7番、決断力がある。これは自信を持って正しい方向に進む。勇気があるということです。

はい、最後いきます。8番、信頼感があり、人間性が豊かである。これは当然のことです。以上。

D班

最後、まとめとしまして、徳島市にありますメンどころ・まこと、よろしくお願いします。

そちらのまことの専務取締役の三谷さん、よろしくお願いします。

D班

もう少しの間、お付き合い下さい。私たちは、これまでリーダーということについてもう少し広い意味で考えてみました。確かに人の上に立つ人、肩書きのある人、また指示を出す人、確かにリーダーではありますが、それ以外のグループのメンバーも、そ

れぞれ全員がリーダーでないかな、というところで話を進めていきました。

で、やはり同じグループにいて、ある、例えば班長なりリーダーなりがいろんな指示を出します。その指示に従う、そういった気持ちもリーダーとしての立派な心掛けというのがなかったら、なかなかうまくグループっていうか、組織が運営していかないのではないだろうか、というふうに考えております。

会社においても社員それぞれが、一人ひとりが自分がリーダーだという自覚を持った、そういう会社がどんどんと伸びていっているのではないだろうか、というふうに思います。

で、私たちは、このセミナーでたくさんのことを学び、またいろんなことに気づきました。そして、まだ明日半日ありがたいお話を聞かせていただくという時間があるわけですが、明日それぞれ自分の家に帰って、また実生活へと戻っていくわけですが、あのセミナー楽しかったなあと、ただそれだけで終わらせるのではなくて、学んで気づいたことを自分に実際に生かせるようにしていかなければ、そういうふうに考えなければいけないのではないだろうか、というふうに感じております。

そして、最も大切である本質を考える、即ち一体自分は何のために仕事をしているのだろうか。そしてまた、一体自分は何のために学校生活、学校に通っているのだろうか。何のためにYMCA活動をしているのだろうか。何のためにボーイスカウト活動をしているのだろうか。そういったことを十分に考えて、そしてここのセミナーで学んで気づいたことを生かしていきたいものだなあ、というふうに考えております。以上で終わらせていただきます。(拍手)

D班

これでD班の発表を終わります。どうもお騒がせしまして、ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。今、発表いただきましたが、意味の分かりにくいところとかがあったらご質問下さい。ありませんか。この点はどういう意味ですか、というような質問があったら、おっしゃって下さい。

ありがとうございました。あと2時間しかございません。ディスカッションに入りたいと思いますが、今D班まで一応ご意見を出していただきました。リーダーの心として共通性のあるものがありますから、これ一応省いて、あとでまたいろんな意見があればお聞きしたいと思いますが、B班がカリスマ性ということを言っておりますが、これはただし独裁性ではなくって、日ごろの生活に由来するんだと。メンバーを離さないだけの力のある人という、資質のある人、そういう意味でカリスマ性ということを使っておるんだということをおっしゃっています。

外の班ではカリスマ性というのは出てないんですが、実は、例えば統率力がカリスマ性の意味なんだとか、そういうアレがありましたら、ちょっと補足をしておいていただきたいんでありますが、ございますか。

それでは、リーダーにはカリスマ性はいらないんだという意見ございますか。外の班では特にカリスマ性言ってないけど、やっぱりリーダーの心、心っていうか資質の問題だろうと思うんでありますが、そういうものがいるんだという、そういう認識で一致しているというふうにうかがってよろしいんですか。何かご意見ございましたら、何でもおっしゃって下さい。

受講生の方ございませんようでしたら、ロータリアンの方でも何かあったらおっしゃって下さい。ありませんか。はい、それじゃこの問題は打ち切ります。あとでまた私がまとめで何か例を出すかもしれませんよ。とりあえずは次に移ります。

B班ばっかり言いますが、B班の心構えの3番目のところで、自分もしっかりした目標を持つ。そのあとで指針を変えない、完遂するという意見がございますが、これについて、いやそうじゃないだろうっていう意見があったら出して下さい。ありません？

B班

誤解があったらいけないんですけど、指針を変えない、完遂するというのをあえて付けたのは、途中から話をころころ変えると、オピニオンリーダーというのは、いわゆるああ言ってみたり、こう言ってみたり、例えば同じような現象でどういうふうに指示をするか、分からないというふうになるといけない、ということで、いっぺん決めたら間違ってるよ、と皆が言うのに変えないと、そういうものじゃないんです。あくまでも一般についている会員とかが、このリーダーだったら大体こう言うだろうと、分かるような一貫した、ロウソクのシンのような一本通ったものを持つべきだと。それで指針を変えないの後ろに完遂するのをプラスして付けております。

司会

ありがとうございました。今のような趣旨であります。私はこれを論点の一つに取り上げましたのはね、ある問題をやっている場合に状況が変化していきます。その時には指針を変更しなければ目的を達成できない場合が出てまいりますね。そういう意味で何か意見があるかなと思って取り上げたんです。

今のような、そういう趣旨でおっしゃっているんですが、それについてまだ何か、いや、それじゃ自分はもうちょっと異なった考えを持ってる、という方があったら意見出して下さい。どんな意見でも結構です。皆がワーっと笑うような意見でも結構でありますが、それが意外にいい意見である場合もありますし。じゃあ、この問題は打ち切ります。

同じく7番の、最高のリーダーになる必要はない、自負はいらない、っていうアレが

ありますが、これについてご意見ございますか、何か。ありません？ ロータリアンの方。加納さん、どうぞ。

ロータリアン

意見ではないんですけれども、最高のリーダーになる必要な私はないと思うんですね。最高のリーダーになる必要はないと思うんですけど、自負はいらないですよね、それ。

司会

自負？

ロータリアン

自負はいるんじゃないかな、と思うんですけど。

司会

ああ、そうですか。分かりました。その点いかがですか。自負はいらないという意見が出てるわけです。最高のリーダーになる必要はないけれども自負はやっぱり持つべきだ、という意見ですが、いかがですか。B班の方どうぞ。趣旨が違いましたか。どうぞおっしゃって下さい。

B班

すみません。それ急いで書いたんで言葉がおかしかったかもしれないんですけれども、自負はいらないというよりも、気負いはいらない、という意味なんですけれども。

司会

ああ、気負いはいらない。加納さん、そういう意味ですが、どうですか。

ロータリアン

分かりました。

司会

分かった。はい、ありがとうございました。外に意見ございませんか。最高のリーダーになる必要はない。この最高というのは、どういう意味の最高なんですか。ちょっと質問したいんですが。完璧なという意味？ 神様に近いと、そういう意味ね。なる必要はないけど、なるように努力する必要はありませんか。

B班

それは必要です。

司会

必要ですね。その点、皆さんご意見ありますか。そこまで努力してたらリーダーやっとれん、という意見があってもいいんですが。はい、おっしゃって下さい。

B班

自分は常に向上心を持たなければいけませんですわね。自分を常に鍛錬するという

中に、そこは入ってB班としては話し合ったつもりなんですけど、やっぱり最高って本当に今日出たのを全部しよったら対称になりますけれども、それと努力はしなければいけないというのは、皆の意見ではあります。

司会

分かりました。外にこの点について、ご意見ございますか。はい、どうぞ。

B班

ちょっと、いいわけになるかもしれないんですが。

司会

言っといて下さい、誤解がないように。

B班

ちょっと誤解の多い表現を使っているんで、B班は責められやすいんですが。最高のリーダーになる必要はない云々のことは、先ほど質問があった時に、これ順番で1番から大事にっていうのでなくて、ランダムに出しているわけなんです。で、リーダーが、逆に言えば、リーダーに皆がなろうと言って、よし、なってくれ、と言われる人間はほぼリーダーの資質についてはあるんだろうと。まあ人気もあるし、実行力についても問題がないであろうと。ただ大まかなリーダーの陥りやすい危険というものが気負いすぎによる、リーダーになったから偉いんだと。リーダーになってるってことで、仕事を完遂することよりも、リーダーになってる位置っていうものによってしまうことがあるんじゃないかと。

だから、リーダーとして伸びるんではなくてチームを伸ばすと。名監督になるよりも、チームを優勝させる監督になってほしい、というような意味のことなんですけど。

何分、難しい書き方ができないもので。すみません。

司会

分かりました。いいんですよ。分かりやすくしゃべっていただいたり、分かりやすくしゃべることほど認識の深さを示すことがありますから、できるだけ分かりやすい言葉で言って下さい。それでは外にありますか。今の点。

それじゃ一度、私の方から論点を出すんじゃなくて、皆さん方、各班発表なさいましたね。それについて、自分の班では、それについてちょっと考え方が違うというようなところがあったら出して下さい。ご自由に。他の班の意見についてね。はい、どうぞ。

ロータリアン

Cグループの中で、引っ張っていくだけじゃなく、自分でできるように黙って見守ることも必要ということで、非常に私も仕事をしていて、黙って見守るという言葉のつらさ。必要性は思うんですけど。黙って見よっても事は進まんという時があって、どうしたらいいんでしょうか。黙って見守ってやっている人が、そこまでの力を持って

るから任せてできればいいんですけど、無理かもしれんけど、ちょっとやってくれんかなあ、という場合、黙って見とっただけでは絶対、事が運ばんという時もあるんですけども、そういう時、どうしたらいいんでしょうか、と思うんですけど。C班の方、その黙って見守る、という時の状況ですね。どうしたらいいんでしょうか。その心をちょっと説明してほしいんですけど。

司会

いい質問だと思いますが。黙って見守っておっていいのか、ということ。黙って見守ることの内容ですね。意味を、実はこういうことだというのをおっしゃっていただいたら。どうぞ。

C班

引っ張っていくだけではなく、黙って見守るということは、このごろの若い人によく報連相、報告・連絡・相談がないという、よくそういうことを聞くんですけど、黙って見守るということは、その報連相をリーダーが心掛けて、相談があったりとか、連絡があったりとか、そういうヘルプという声が出た時に、初めてそういう、その場その場で判断をしていくような、そういうことで黙って見守るということで、何も意思表示がなくって、お互いに離れるんじゃなしに、どこかで意思表示が出た時点で、その時に的確な判断力ですか、決断力、ということで書いたつもりなんですけど、いいでしょうか。

司会

よろしいですか。もう一つ、はいどうぞ。

ロータリアン

発言の時に、班と名前だけは言ってほしいと思います。

B班

B班の村長であります上田です。その黙って見守ってる時に、やってる人も明らかに自分で何とか努力しようとしている、やりたいからアドバイスを聞かずにやろうとしている。けども私が見ていたら、明らかに全然違う方向にいって、時間がかかるだけだったらまだいいんですが、まったく違う方向にいっている。これはどうしてもやばい、という時、声を出すべきか、やはり黙って相手が本当に一苦労してもいいけれども、待てばいいんでしょうけれども、私の性格とすると、ついつい口が出てしまって、ああ駄目だなあ、と思うんですけれども、その時どうしたらいいんでしょうかね。本当につらい時、そういう時、ご先輩のロータリアンの方もおられるんですけれども、私も仕事上、そういう外の人に任せることが多いんですけれども、本当に苦しいんですよね。その時の何かいいアドバイスでもありましたらと思いまして。外の班の方、またご年輩の方に何かアドバイスがありましたら……。

司会

今のようなご質問が出ていますが、何かありませんか、外の班の方。はい、ロータリアンどうぞ。

角元氏

カクモトいいます。黙って見守るということは、その下に書いてある、これはちょっと私、目を離すな、手を放せ、ということを書いとんですけど、これは、私やが習ってきたことは、手を離しても目を放すな、という言葉の使い方です。これは、親が子供に例えてのことですけれども、子供に自転車を練習さす時に、自転車を練習するためには親はこういうふうに乗るんだ、ということを最初言いますよね。それから後ろで手を持って、そしてあと押しして、それからある程度走るようになると手を放しますよね。けれども親は、倒れたらいかんとか、心配だから目を離さないわけですよ。そういうことを私は、皆さん、黙って見守るということは、そういうことでなかろうかなと、そういうことを言っとんじゃなかろうかと思いますよ。どうですか、C班の皆さん。いかがでしょうか。

C班

ありがとうございます。その通りでございます。

司会

よろしいですか。外にありますか。何か、黙った見守るということについて。はい、山口さん、お願いします。

山口氏

私もう52歳でいい年なんですが、20代の人たちと一緒に仕事をしていて思いますことは、私も23歳の娘と20歳の息子がおりますが「ほうっといてくれ」と。何か私が言っても「ほうっといてくれ」と言います。ところが、全部ほうっといてええかと言うと、やっぱりどっかかまってほしい、というところがあると思うんですね。「ほうっといてくれ」「かまってくれ」「かまってほしい」症候群じゃないですけれど、その時に「ほうっといてくれ」と言った時に、本当にほっといていいことに、変に大人がかまってみたり、リーダーがかまってみたり、それから、かまってほしいと思っている時に逆に手を差し伸べるんじゃなくて、ほったらかしてる。

ということは、要は気がついていない、親が。ということは、その子供あるいはメンバーの人成り、性格とか、能力とか、それを私たち指導者がどう把握しているか、ということが大切だなあ、と私は思います。

司会

ありがとうございました。今のご意見いかがですか。私はこう思う、という意見があったら出して下さい。黙って見守るという中には、メンバーが困っている時にみだり

に助けを出さないっていう意味があるだろうし、さらには、もう少し厳しく鍛えて鍛えていくっていうようにして、その人を育てていくっていうこともあると思うんです。いろんな意味が含まれますが、例えば禅宗のお坊さんなんてのは非常に厳しく弟子を鍛えていきますよね。で、上師はうらみにつくっていう言葉があって、それは本当の弟子に対する愛情があればこそ徹底的に痛めつけていく。それもやっぱり一つの人間を育てることの条件じゃないかなと思うんですが。

それから上師というのは上の師ですね。その下の中師は情けにつくっていう言葉もあります。これは、一段下でのランクになると、情けをかけてあげる。だから情けをかけられると師匠ありがたいなあと思うんだけど、師匠が上師だと思っていない、っていうふうな非常に厳しい世界もありますね。

皆さん方がリーダーやってる時に、そういうことも頭に一つ入れておかなきゃならないんじゃないかなと思うんでありますが、これは中島萬里さん、ちょっとそのへんの鍛えられ方を。実は禅宗のお坊さんで、きのうの松原先生をご紹介なさった方なんでありますが、この指導性とか、リーダーの心について何か。中島さんの立場から思っておられることがあったら。皆さんのご参考になると思います。今の黙って見守る、厳しく鍛える、そのへんのところで何かご意見があったらお願いしたいと思います。

中島氏

中島です。ヒントになるかどうか分かりませんが、今、深川先生が言われたように、禅宗の修業道場には、英語でゼン・マスターという、お師家さんという方がいるわけですね。そしたら全国に十何人しかそういう修業道場のお師家さんというのはいないんですけど、2つのパターンがあるっていわれるんです。

1つのパターンは、一生懸命、何から何まで手足の一挙手一頭足を厳しく文句を言って、日常ずっと小言を言い続ける師匠。それともう1つは、何にも言わない放っておく師匠と、両方あるわけなんですね。ですから今、指導ということを先生いわれましたけども、この2つの両極端というところが表しておると思うんです。

それが、どちらが良いかというのは、例えば20人いる雲水に対して結果というものはすぐには出ません。ただ、その雲水の20人いるというものに対して一人ひとりを見るという目を持っているのが私どもの師匠です。それがどういう結果になるか分かりませんが、それが自然に出るということ。その時々に応じて指導力っていうものが、その2つのパターンに出てくるということがあります。ですから、それは人間というものに対して、誠実に見つめているということの根本からくるわけです。

ですから、黙って見守るということに対して、今、私は誠実に見守るという言葉を使いました。ただ両極端というのがあります。ただ人間によってそれは違ってくると。ただし、人間であることがつながりであると、根本であると、そういうことしか言え

ませんけど。少しはヒントになるかと思います。

司会

ありがとうございました、貴重なご意見を。一応、今の中島さんのご意見なんかもお持ち帰りいただいて、また地域でいろいろ考えていただきたいと思いますが。それじゃ次に移りますが、外に何かご覧になって他の班の意見について自分はこう思うっていう意見があったら出して下さい。ありませんか。何でも結構です。

まだ分かりにくいというところもあっていいんです。出していただいて。これどういう意味ですか、ってきいていただいても結構です。それからまたきっかけができて、論議が進展しますから。どうぞ。

D班

D班の関です。今回のテーマということでリーダーの心なんですけど、A班、B班、僕たちの班もすごく悩んだことなんですけど、他の班の方々、心っていうのは、心構えとしてとらえられたんですか。どういうふうにとらえられたか、ちょっと抽象的でもいいから教えていただけたらと思いますけど。

司会

そういうご意見が出ています。心っていうのは、どういう視点からとらえられたのか。いろんなとらえ方があります。心構えっていうとらえ方もあるし、資格の問題もあるでしょうし、そのへんのところ、A班の方いかがですか。他の班の方、ちょっとおっしゃってあげて下さい。心っていうものをどういう視点から分析したかっていうことです。ありませんか。

じゃあ一応、それぞれある時は資格の面で見ているし、ある時は心構えで見ているし、そういうふうに受け取っていいんですか。あるいはリーダーとして、これは絶対に逃がしてはならない。例えば統率力とか、包容力とか、いろんなのがありますね。大体そういうふうにとらえられたんじゃないかと思いますけど。外にございません？じゃあ質問者、どうも外の班の方はそのへんのところ、お答えがないようですから、両方の面でそれぞれに考えて出てきた意見をここへ出した、というふうにご理解下さい。

外に、それじゃこの意見で他の班の意見について、ご意見のある方出して下さい。ございません？

そしたらまた私の方から論点出します。D班のまとめのところで、一人ひとりがリーダーとしての自覚を持て、ということなんであります。この言葉は誤解されやすい面があるかもしれません。といいますのは、先ほどのカリスマ性とちょっと相いれない面も出てくるかもしれないし、同じレベルになるっていうことは大変必要なんでありますけれどもね。その点について何かご意見があったら。一人ひとりがリーダーとしての自覚を持つ、それは結構だと思います。

例えばね、会社を経営しておる社長さん、一つのリーダーです。だけどもこれ、会社を経営しておる社長さんというのは、法律上は会社の代表者なんであります。そして、社長さんを頂点にして、その下に部下がずっとおるわけなんですね。全部、雇用契約で上下の関係で命令、服従の関係に立っています。そういうリーダーもおられるけれども、その時に、そういう法律論的な権限論でみないで、社長さんも社長という役割をやっているにすぎない、それから部長さんもおられれば電話の交換手もおられれば運転手もおられる。それぞれがそれぞれの役割をまともにこなしていって、初めて会社というものは円滑に運営されるんだと。

そういうふうにみますと、だれが欠けても会社はうまくいかない。ということは、上下の関係ではなくって、横の関係っていいますか、会社を機能的にみていく。みんなが役割を分担して一生懸命にやっていくから会社が発展していくんだ、という考え方。で、会社だけとらえても、そういう2つの大きな見方が分かれます。

皆さん方がグループをつくって、グループのリーダーになった時に、このD班のご意見は、おそらく機能的にみて、リーダーが偉いんじゃなくて、お互いに皆やっていこうよ、という形のことを考えておられると思いますが、それで現実にはうまくいくんだろうか、という疑問がありませんか。

統率力とかカリスマ性とか、そういうものとの絡みであります。ございませんか。質問の意味が難しいですか。はい、どうぞ。

B班

B班の小野です。非常に近いというか、まったく同じD班の意見を持っているので、僕もそういうふうに思うんです。ただ機能的というのではなくて、時間的にみて、この人はリーダーに一生ならないという人ではないので。例えば会社の中にいれば、今の社長がいなくなれば次、やがて新しいリーダーが出るわけです。その段階で僕はリーダーにならないんだと決めてしまうんではなくて、皆がリーダーとしての気持ちを持つと。

もしくは、だから大きいリーダーが率いる会があった時、例えばロータリーにしろ、よそで何らかのリーダーの経験者が集まっているわけでして、まったくリーダーの経験をする気もなければ、したこともないという人間は、非常に団体生活で交わりにくいものですから、自分がリーダーの気持ちになるというような感じで、人と自分を分けない。お互いが分かり合うという中に、リーダーも人間として見てほしいという、そういうような気持ちの取り方もあります。

もし、そう取るのであれば、私は機能的と、時間的に見て、皆リーダーだと。リーダーの気持ちもリーダーでない人はやっぱり分かってあげてほしいと。リーダーもか弱いものですから。そういうふうに思います。

司会

ありがとうございます。いいご意見だと思いますが、例えば会社の場合も、電話の交換手も社長である自覚を持って会社のことをいつも思っている。で、自動車の運転手も自分が社長だっていう気持ちで働く。そういう意味でおっしゃっているんですね。外にご意見ございますか。

だけど、そんなこと皆が考えていたら会社がまとまらない、という意見があってもいいと思いますが、いかがです。牟禮さん、どうぞ。

牟禮氏

私、牟禮と申します。今晩のA、B、C、それぞれ出ておるところのものは、一つとしておろそかに考えられるべきものはないと。それぞれ非常に立派な項目が出ておると思います。人間が何人か集まれば、1つのグループをつくれば、いかなるスポーツであろうと娯楽であろうと、あるいは汗を流して仕事をすることであろうと、必ずそこの場合にはリーダーが必要であろうと、その場合に、リーダーとして具備すべき条件、これ一つひとつ非常に大事であるが、しかし完全な人間はないので、大事な条件をすべて具備するということはできませんが、私は、結論からいったらA班の、あの絵を書いておる、魚の頭のところに書いてある人間味がある、上が愛、下が厳しさがあるですか。

本当のリーダーというのは、人格であると。難しくいえば倫理性である、ということが結論的にいえると思うんです。

と申すのは、いかに立派なことを言っておっても、もし一つ間違ったことがあれば、メンバーは面従腹背というか、リーダー偉いこと言ったって、ああいうことをやっとるじゃないかと、一言によってリーダーとしての資格を失う。そういう点について考えてみると、リーダーの道徳性というか、リーダーは人格であると、倫理性である、というように考えられると思うわけです。

それはリーダーの問題であって、ロータリーでは職業奉仕ということが強調されておりますが、職業についてはリーダーをどう考えたらいいかと。職業については、何の職業であろうと経営者は最高のリーダーぶりを発揮しなければならないが、この場合にも大事なことは、社長は社長としての倫理性、道徳、人格。倫理性を持たなければいけないと。

職業というのは、ここで若い皆さん方は現に職についていらっしゃるし、あるいは、これから職につく方もあると思いますけれども、社長は会社の最高の倫理性を備えなければならないが、一人ひとりが取り組んでおる仕事、それはその人にとってやはりその人の職業であるという考えを強く持つことが大事であると。

したがってその場合は、各人がリーダーになるという気持ちではなくて、与えられた

仕事、自分がやっておる、これが自分の職業であるとするならば、やはりその方は、その仕事に取り組む倫理性、精一杯やると。人に指摘されるようなことはないようにやる、というような考え方が必要ではないかと思います。

余談になって恐縮ですが、現在の日本に起こっておる行政上の諸問題、あるいは政治に関する諸問題、金融に関する諸問題で、問題は何か。最高責任者がいかな倫理性を持っておるかです。倫理性を欠いておる。だから、最高責任者は事故が起こった場合に、国民の皆さんにご迷惑をかけて申し訳ありません、以後そういうことがないように気をつけます、の一言で終わってしまっておる。

一般論のリーダーとしてのものと、職業に関するリーダー、それは最高のリーダーは社長であって、それぞれの立場において倫理性の高さは違うと、こう思います。お分かりいただけたかどうか。一般論のリーダーとしてのなすべきことは、今晩は申し分のない何一つとして、そんなことはしてないが、というようなものじゃありません。私、そういうように感じました。以上です。

司会

ありがとうございました。外に何かご意見がございますか。この前に出た意見を見て他の班の方。それじゃA班の方にちょっとお尋ねしたいんですが、統率力の中の求心力というのは、具体的な例、何かありますか。求心力ということの具体的な中身、できたらご説明いただきたいんですが。

A班

まず求心力の説明ですが、求心力というのは読んで字の如く、中心となるべき一方方向に向かって集束していく、集束していく方向に向かって働きかけていく力ということで、全体が個々としてばらばらに向かっていくものを、方向性をみつけて一つの方向に連れていく力ということで書きました。

ちょっと私の意見なんですけれども、立ったついでに言わさせてもらいますが、すべてからく議論をする時には、最初の命題の定義をしっかりしてからかからなければいけないんですが、本日の議題がリーダーの心というふうに漠然性を与えられたのは、特定のリーダーではなく、いろいろな場面におけるリーダーですね。ですから具体例を挙げましたら、資本主義社会と社会主義社会のリーダーでは大きく違いますよね。和を尊んで全体の意見を集約するリーダーと、あるいは全体的に進めていく集権的なリーダーも必要ですし、少なくとも私たちのグループで意見もあったんですけれども、考えているのは特別な、何か二言目には会社の社長とか、上司とかいう言葉が出てきますが、そういうことではなくって、それも含まれますが、例えば遊びをする時に中心となって遊ぶ人、皆を取りまとめて盛り上げてくれる人ですね。さっきのD班の司会した人ですか、あんな感じの人から、また別の場面で、奉仕活動をしようとする時に

中心になる人、何かをする時に、だからいろんな場合があるわけですね。

ですからリーダーとしての総合的な性格がそこに書いてあるようになって、それを一人の人が担う必要はまったくないわけですね。万人がそのある局面において、その場その場でリーダー性を発揮すればよいのであって、全部備え得れば、それこそおっしゃられた神様になってしまうので、人間味があふれるという中には不完全性ですが、完全な人間は私はきらいです。少なくとも完全な上司には部下がついていきません。やっぱりどこか抜けているところがあるから、ああと思いながらついていけるんであって、それを補っていくことがチームワークの一つでないかということを、ふと思ったんですけれども。蛇足ですけれども付け加えさせていただきます。

司会

ありがとうございました。今のご意見、何か異論がございましたらおっしゃって下さい。ありませんか。何でも結構ですが、大変いいご意見が出てますが。それが唯一、絶対ではありません。皆さん、いろんな考え方があるはずですから。

ちょっとつなぎましょうか、何か例を出して。

今、和を尊ぶという言葉が出てまいりましたね。ですから今の話では求心力というのは、ある人間が中心におって、全部いつもそこに人が外部からも集まってくるというような求心力じゃなくって、グループの方向性を、ある方向に確かに導いていくという意味の求心力なんですね。今のご意見はそういうことなんですが。外に何かご意見ございませんか。

今、和を尊ぶとおっしゃいました。その場合に、そしたらそのグループの中では異なる意見はどうなんでしょうか。あってはならないと考えられますか。皆同じ意見のようにリーダーがまとめていくっていうふうに。

グループですからね。一人ひとり皆意見が違うと思うんです。で、10人寄ったら10人10色で必ず意見が違ってまいります。だから議論しますとね、同じ意見が、全員一致の意見なんてあるはずがないんで、ですからユダヤのルールにはね、全員一致の審決は無効とするっていうルールがあるぐらい。なぜかっていうと、全員一致の決議ができるっていうのは、これは神様の境地です。あるいはよほど不真面目な人間がすること、つまり、そんなことはどうでもいいや、という気持ちがなければ全員一致はできないんです。ですから真面目に議論をすればするほど、あるいは真面目に何かグループ活動すればするほど、いろんな意見が出てきて当たり前。最高裁判所の意見だって少数意見もあるし、反対意見もあり、そういう形で全体の、15人の大法廷の判決が出てくるわけですね。

ですから、そういう意味では一つひとつの異なった意見を一つに方にまとめるんじゃなくって、一応、今ちょっとおっしゃっていましたけど、最大公約数的な考え方で一

つひとつの異なった意見を尊びながら、そして全体の和を求めていく、という形でなければファッションになっていくし、先ほどのカリスマ性というとらえ方も独裁的になっていくと思うんでありますが、外に何かご意見がございましたら。

A班

A班の大中です。僕は大学生で、学校で一応ボーイスカウトのクラブの部長をやっているんですけれども、B班はあすこの4番に仲間を育てる。そしてC班は上から3つ目に部下の能力を引き出してあげれる人、とありますけれども、A班で問題になったんですけれども、リーダーといってもいろいろあるでしょう。会社のリーダーというのか上司というのか分からないんですけれども、そういうふうに指導していく人と、僕たちみたいにクラブで部長ですね。だから僕らのA班のところは部下とか仲間とかは言葉に全然出てないです。だから、例えばB班だったら仲間って出ているけど、C班やったら部下、だから僕らクラブの仲間は部下なんていいませんし、だからリーダー、どういう範囲のリーダーをいっているんですか、っていう質問なんですけど。

司会

はい結構です。分かりました？ ご質問の意図は。簡単に言うとね、縦型社会か横型社会か、そういうことなんでしょう。縦型構造か横型構造か、どういうグループを考えてそれが出ているか、ってことなんでしょう。何かございますか、外の班の方。

一方では仲間っていう、これ横型社会の考え方です。部下とか会社というのは縦型ですね。先ほど私が、会社を機能的にみるっていうのは、権限論的に見ると縦型になりますね。命令、服従。だけども機能的にみると横型になるんです。上下ないんですから。一つの会社でも縦にみたり横にみたりすることができますからね。で、ただ、B班は仲間っていうんで横型で考えているけれども、Cグループの方は縦型でそれを考えている。それどっちだという、そのへんの質問なんですが。C班何かありますか、答え。どういうグループを頭に置いてこういう意見が出ているかっていう質問なんです。具体的に。

C班

C班の萩山です。自分は自営業なんでね、やっぱり経営者の立場のことで言うたんですけどね。

司会

分かりました。それ結構です。C班はそういう形で考えられた。じゃあB班はどういうグループを頭に置いてこういう意見が出ているんですか。

B班

B班の上田ですけれども、B班で仲間と出たのは、教員が多かったということとかボーイスカウトなどのクラブもあったんですけれども、例えば教諭がおって校長がお

ってという考えがあるんですけれども、ただ教員の場合は、皆が同じ教員という肩書きにありますので、どっちかというと役職上は肩書きとしてあるけれども、同じ教員として皆一緒にやらなければいけない、というのがありますので、お仲間という意見がうちの場合はあったわけです。

司会

分かりました。よろしいですか。D班はどうですか。D班の方。どういうグループを念頭に置いてこのようなリーダーの心を出してきたか。

D班

D班の永井といいます。私たちは先ほど関さんとか、発表した方が言われたんですけれども、私たちはグループというのは本当にいろんなグループがあると思うんですね。おっしゃったように自営業の方のグループもあれば、ボーイスカウトのようないろんなグループがあるんですが、私たちが考えたのは、いろいろなグループがあるので特に限定せずに、いろいろなコミュニティーで小さいグループもあれば大きいグループもあるというふうな形で、特に決めずにリーダーとしての心というのを話し合いました。

ですから私たちは、特に具体例がそういうふうにないのは、特に決めてなかったというのが理由です。

司会

分かりました。よろしいですか。ありがとうございました。外にございますか。

C班

C班の福岡です。今、上から2つ目の部下のところは社長さんのイメージで言われたんですけど、一番上のところは、上から4つのところは、ある程度のイメージ、団体をイメージしているんです。一番上はガールスカウトのリーダーをやっている者が発言したものです。3つ目のところは先生がイメージされたものです。それから4つ目は学生さんが地域のリーダーをしていて。すみません、この4つが抜けておりました。

司会

分かりました。皆さん、それぞれご自分の属しておるグループを頭に置いて意見を出されておりますので、そのへんのところご了解下さい。外、何かございますか。

大村氏

高砂の大村と申します。たぶん、今の問題と関連してくるんじゃないかとは思うんですけど、無償の愛、とA班ありますね。例えばプロフェッショナルな世界で、野球の監督とかリーダーの場合、これをぽんと一番ヘッドのところへ持ってこられると。ちょっとつらいんじゃないかな、という気がするんですけど。それにちょっとお答えいただきたいと思います。

司会

ここの無償の愛の意味、ご説明いただけますか。有償の愛があるのかどうか。

A班

野球の監督の場合、まず結果を、特にプロ野球の場合、結果を出さなければならないので、そのことは考えなければいけません。ただ、一番最初にチームを優勝に導こうという言葉ですね。まず結果を出すために努力をするんですが、その監督がどれだけ努力をするのかというのは12球団いろんな監督がおりますが、それぞれの個性があります。だけど、その監督が払う努力というのは決して、例えば、お前にはこれだけ教えるけん、必ず4割を打てとかね、成功したら、お前最近ようなったけん2億円くらいよこせやとか、そんな見返りを、相手を向上させようとする愛であって、決してそれを相手が向上したことを見返りととられるとつらいんですけれども。相手を向上させようとするために何も下心ない心ということで、無償の愛という言葉に使っているつもりです。

司会

分かりました。よろしいですか。分かりにくいですか、まだ。

大村氏

チームのためには切り捨てるという行為が、無償の愛などといっておられない事態があるんじゃないかと思うんですけど。それはどうなんでしょうか。

司会

その質問は、ですから有償の愛がある、ということなんですか。切り捨てるっていうことでしょう。チームのために。

大村氏

個々の指導っていう立場の場合と、リーダーっていうのは目的のためのリーダーってありますね。そのへんのところに無償の愛っていうのは、あくまでも個人に対するイメージが強いような気がするんです。だからチームの無償の愛というのが、それがちょっとどういう形で出てきたのか、ちょっとはっきりとさせていただけたら、と思うんですけど。

司会

分かりました。いかがですか、A班の方。無償の愛ということの概念内容がもう一つはっきりしないというんですが。具体的にどういうこと。例えば、こんなことを考えてこういう言葉が出てきたんだ、というのをおっしゃっていただいたら分かると思います。

A班

例えばですか。まず一番最初にご理解いただかなければいけないのは、切り捨てると

いう考え方をしていません。リーダーたる者、マイナス的思考ではいかんので、全体をよくするために上から取っていった結果もれる、ということはあっても、決して個人に対して、あきらめてその個人を捨てるということは、リーダーとしてはやってはいけないことだと思います。

で、無償の愛ということなんですが、要はアガペーですね。それを置いています。

司会

ありがとうございました。切り捨てるということは考えていない、ということなんですが、大村さんの質問はね、切り捨てなければグループ全体が駄目になるぞと。その時には切り捨てなければならないんじゃないか、というご趣旨なんじゃないですか。そういうことなんですね。だからリーダーが一つのグループをまとめておる時に、その人を排除しなければグループ全体が駄目になるという状態になった時に、リーダーは一体どうするのか、ということらしいです。いかがですか、この点についてご意見があったら。

B班

B班の上田ですけど。私も働いておりますけども、無償の愛で、要するに利潤を求めない普通の非営利団体でやっていくような場合としては問題ないと思いますけれども、それが経営者、やっぱり金銭が絡んでくる、会社としての立場としては、昨今のリストラですけどね。やはり切り捨てなければいけない場合もありまして、私も歳くってますのでそういうことも言わなくてはいけなかったこともあるんですけれども、非常に全体としてその人を雇っておってもいいけれど、その会社の金銭的なこと、経営上のことを考えれば、いらないという場合、非常に苦しいですけれども、そういうことも全体から見たらば言わなくてはならない時もあることは事実です。

司会

分かりました。その場合に、そうするとそういう人が出てきたっていうことは、リーダーの指導の仕方に問題があった、っていうご意見ありますか。リーダーとしてそういう人が出てこないように持っていかなきゃならないんじゃないか。あなたのおっしゃるのは、そういうことなんでしょう。そうでもないの。切り捨てることはないっていうのは……。

A班

ですから、その図の基本ですが、会社関係に束縛してないので、根底に流れるものは無償の愛であろうと。それで出しているだけです。で、確かに資本主義社会ですから、会社なんか最大多数の幸福を求める場合は、全体のマイナスになるようなことはリーダーとしてはですよ、会社とか縦割り型の社会もしくは、どういえばよいかよく分かりませんけれども、やっぱり無償の愛というのは、愛とは反しますけれども最大多数

の最大幸福を思う場合には、そういうことも必要ですね。それは仕方がないですね。

司会

分かりました。

A班

A班の武智です。ちょっと先ほどご指導いただきました牟禮さんの話までさかのぼる必要があるんじゃないかな、と思って発言さしていただきます。要は無償の愛っていうことで今、議論していますけど、あの巨人軍が9連覇した時の川上監督ですか、あの人が9連覇した。今のプロ野球で9連覇するところはないと。その時に川上監督は一番だれを怒りよったか。能力の低い人を怒っておったのではないんですよね。あの人は長嶋を怒んりょったんです。長嶋はすばらしい選手でしたけど。そのすばらしい選手を怒った。そしたら、周りの選手はどう思ったかというと、あいつが怒られよんやけん、オレはもっとせないかんと。というふうにやって、あそこまでチームを導いてきた。まあ簡単にいって、分かりやすくいってしまえば、そう取っていただければ一番いいんですけど。

それと切り捨てる、切り捨てないの議論が出てきます。先ほど牟禮さんがおっしゃったB班の発表にありましたね。皆が社長やと思わないかんと。私は牟禮さんの意見に賛成なんです。経営判断というのはわれわれ下っ端では全然駄目ですから、それで商法上も監査役の規定が変わり、今度、株式会社の法律が変わって大変難しい社会に入っていきますけど、その中で要は、だれが責任を取るんですかっていうことを考えた時に、皆が社長ですいうて、交換手のお姉ちゃんが責任や持てるわけないんです。それは、株式会社というのは取締役で責任を取らないかんって法律で決まってますから、それは仕方がないんです。

それで一般の企業で考えた時には、おる人間でやらないかん。それで一流の会社というのは組合もあるし、小さな個人商店とかは別でしょうけど組合もあるし、「お前駄目だ、明日から来なくていいよ」ということには、なかなかならない。ということは、おる人間でやらないかん。ということは優秀なやつもおるし、全然駄目な者もおる。給料泥棒みたいなのもおる。その中でやっていかないかんという時に、リーダーっていうのは長い目で見てやらないかんし、そいつがむいている職場へ送り込んでやらないかん。切り捨てるっていうことは、やっぱり難しいと思います。

そこで牟禮先生の話ではないんですけれども、一人ひとりが社長なんて思う必要はない。ところがリーダーっていうのは大きなピラミッド型の企業の中で、トップが確かにリーダーです。ところがその中には一つひとつのセクションがあって、一人ひとりがその歯車として動いているから物事が前へ向いて進んでいくんですよね。その中には係長がおり、課長がおり、部長がおり、担当部長がおり、常務がおり、専務がおり

と、こういう縦社会の中ですからね。その中で社長として考えるんでなくて、係長はオレが課長やったらと、課長はオレが部長だったらと、いうふうに考えていけば問題ないと思うんです。

ですから牟禮さんの言うことの方が正しいと私は感動しているんですけどね、その話にね。B班の意見というのは、ちょっと個人的には反対。それで無償の愛ということは、今うちの石井さんが言よったことを発端にして、私が先ほど申し上げた部分になってくるんじゃないかなと。ですから切り捨てることはない、という前提で考えております。

司会

ありがとうございました。今井先生どうぞ。

今井氏

私も牟禮さんがおっしゃったように、皆さんがすばらしいリーダーの心をお書き下さって、このことに何も申し上げることはありません。一つだけ、さっきから出ておることで、ちょっと混乱をしておるだろうというのが無償の愛という言葉だと思いますので、その整理だけを一つしておきたいと思います。

私たちが愛という言葉で呼んでると、大変ほんわかとしているんですけれども、実は愛というものの意味というものは随分たくさんな概念を一緒に含んでおります。したがって同じ愛という言葉を使うだけでは、なかなかそれが区別がつかない、ということがあって、それをA班の人たちは知っているために無償のという言葉をつけた。だれかが大変難しい言葉をいいました。アガペーという言葉をいいました。これはギリシャの言葉でありますけれども、私たちがその言葉を使います時に、3つの段階を分けました。

一つはエロスということ。それは人間的な愛。男女の愛というふうなことを考えた時に、エロスというものが、エロという言葉がそこから出てきますから、お分かりになると思います。それも愛の中に入ります。もう一つはフェリオという言葉です。これは友情、男の友情といいますが、これも愛という言葉で私たちは表現をいたします。その次にもう一つ言われるのがアガペーという言葉でありますが、アガペーという言葉はむしろ神が、あるいは仏が、人間を愛したように自分に報いを求めない、そういうようなことの意味で愛という言葉を使う時にアガペーという言葉を使います。たぶんそのような意味をさっきお使いになったんだろうと思います。

したがって私たちが愛という言葉を考えた時に、愛というものは基本的には、原則的には非常に利己的なものであります。哲学では可能的自己なんていいます。自分のためになる。お母さんの愛ですら、実は自分の産んだ子供に対する愛情であるということにおいては、利己的である。鬼子母神の話がありますが、鬼子母神は自分の子供を

愛するけれども人の子供は取る。取って食ったかどうかは知りませんけれど、取って食ったんですか、話の中では。それをお釈迦様が大変おそれた。「お前は自分の子供を愛しているのに、他人の子供は取って食うのか」といって、ある時、自分の子供を隠した。そしたら鬼子母神は、もうそれこそ走り回って自分の子供を捜した。最後にお釈迦様のところへ行った時に「お前は自分の子供だけを愛して、外の人の子供を愛さないのか。それは本当の愛ではないよ、無償の愛ではないよ」。「わかりました」といわれて、それからこの女の人は子供の守り神になったために鬼子母神という名前をつけてもらったという話を聞きますね。

だから、私たちがここでいいますのは、そのような意味において、人間ですからどうしても人間としての自分にとって自己的な欲望を増やすような愛があるけれども、リーダーというものはできるだけそれを排除して、そして純粋にその人のことを考えていくような愛を大事にしようやと、こういう意味で使われたんだと思います。違いますか。いいですか。

そういうふうにして考えて下さい。そうすると愛という言葉を私たちが使う時に、実はそういう段階的なものを日本の愛という言葉では一つに含まれてしまっておりますがために、時々「あなたはあの人を愛していますか」という時に「あの人のこと一生懸命考えてあげてますか」。男に言う時「お前。お前の友人を本当に愛してないのか」と言われた時に「愛してます」っていう言葉と「あの子を愛してます」ということとは、雰囲気が本当に違うんですね。

だから、あの人はなんでそれじゃ。その一番愛している人があれに背かれた。かわいさ余って憎さが100倍だ、こういういい方になります。それは自分のためにあの人を愛する。その証拠に諸君がラブレターを書く時になんと書くか。「私のあなたへ、あなたの私から」。これはまさに自分のための彼女である。そういう言葉があることがわかります。

そこのところを考えていきますと、無償の愛と書いて下さった意味の重大さということを私たちは考えていただけたらありがたい、と思います。(拍手)

司会

ありがとうございました。ほかご意見ございますか。今、今井先生が貴重なコメントつけていただきましたが。

お母さんの愛情も結局突きつめると、お母さんは自分自身しか愛していない、っていう考え方もあるかと思いますが、それにもかかわらず自分以外の人を愛するっていうことを説くわけですね。ありません？

今、それじゃ今井先生がおっしゃったことについて、一つの物語を紹介しておきます。

無償の愛に関連するだろうと思うんでありますが、今の天皇陛下が皇太子殿下の時にうちの大蘗山の万福寺をお訪ねになりました。その時に案内にたたれたのが鈴木雄司さんという和尚さんであります。

鈴木和尚は、自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建ったとか、この扁額はだれが書いたとか、そんな愚劣な話をするわけにはいかないので、皇太子殿下に一つの物語をなさったのであります。

それはどういう話かといいますと、韋駄天という仏様の話なんであります。皆さん、この言葉ご存知だろうと思います。大変速いということの形容詞に使われております。

仏様にもいろんな種類があります。一番位の高い人が下に如来という言葉がつく仏様。大日如来とか阿弥陀如来とか、その下に菩薩という名のついた仏様。勢至菩薩だとか普賢菩薩だとか。そのもう一つ下に天の字のついた、この韋駄天のように、帝釈天とか毘沙門天とか、そういう天の字のついた仏様の一群がおられます。

この天のついた仏様は、どういう役割を果たされるかといいますと、私ども日常万般のことをつかさどる仏様なんであります。で、その中で、この韋駄天という仏様、これは夜のとばりに終わりがまいりまして、東の空が白んでまいります。やがて太陽が山の端にちらっとのぞきます。さーっと大地に太陽の光が差し込んでくる。その一瞬をとらえまして、仏様の懐から出て、仏様の御使いとして全世界の家庭に飛んで行くんであります。今井先生のお宅に行って扉を開けて「この今井家に今日一日、仏の幸せがありますように」。お祈りをして扉を閉めて、そして隣の牟禮さんのお宅へ行って、やっぱり同じように扉を開けて「今日一日、この牟禮家に仏の幸せがありますように」とお祈りをいたします。そして、この山の端に太陽がちらっとのぞいて、さーっと大地に太陽の光が差してきたその一瞬の間に全世界の家庭を訪れまして、その仏の幸せを祈って、直ちに一瞬の間に仏様のところへ戻ってきて「ただ今、全世界の家庭に仏のメッセージを送ってまいりました」ということを復命する役目を持った仏様のことを韋駄天というのであります。だから非常に速いことの形容詞に使われておるわけであります。

鈴木和尚は、皇太子殿下に「あなたはやがて天子様になられる方だ。天皇陛下になられるわけですから」、今なっておられます。で「今日の老僧との出会いを大切になさって、毎朝、すべての人の幸せを祈る韋駄天という仏様がいるってことを心にとめておいていただきたい」ということをおっしゃったそうであります。

これ皆様方、お聞きになったように、帝王学の根底に流れる思想を説いております。人間でありますから好きな人もいます。嫌いな人もいる。憎たらしい人もいます。いろんな人がいるんだけれども、憎い人も嫌いな人も、そのすべての人の幸せを毎朝祈る心。これは、天子様にはなくてはならない心だろうと思うのであります。

私は、この話をよくロータリーでもするんでありますが、実はこれは、天子様に限ったことではありません。会社の社長さんでもそうであります。社員なんてのはできるだけやすい給料でこき使って、自分の所得が増えればいいと思っている社長さんと、いつも部下の幸せを祈りながら会社へ出てくる社長さんとでは、会社の在り方が違うんだろうと思います。特にこういう不況期になってきた時に、会社の在り方が変わってくる。

で、毎朝、社員の幸せを祈っておるかどうか。今日の渡辺先生の、お皿を並べる時にお幸せに、と心の中で祈っているかどうか、ということは外から見えません。同じように会社に出勤してくる社長さんの中で祈ってるか祈っていないか。時間に愛を込めておるか、仕事に愛を込めているかどうか、ってことが大変大事なことなんであります。

社長さんも、これ縦型社会では長たる立場であります。だけども皆様方だって、リーダーって一つのグループをリードしていく人の長たる立場に立つ。これが横型社会であれ縦型社会であれ、一応リーダーと名のつく立場に立つ人は、やはりこの韋駄天の心というものをいつも持っていなければならないんじゃないかなと。これ非常に広い意味の愛という言葉であろうと思います。

そういう一般論としてリーダーの心といった時には、そういう物語が一応当てはまるんじゃないかなと思います。その点、ご紹介いたしておきたいと思います。

だから、この無償の愛というのは、そういうところに大変近い言葉だろうと思いますし、今の具体的な例である程度ご理解いただけるだろうと思います。

外に何かご意見ございますか。はい、牟禮さんどうぞ。

牟禮氏

先ほど、どなたかが質問なさったのは、リーダーも非情さがいる、ということをおっしゃったんですか。

ロータリアン

一番前の目の部分にきているからどうかな、と思ったんです。リーダーとはといって無償の愛がある、といえば問題ないんですけど、目の部分にきているのでどうかなと思ったんです。

ロータリアン

それはね、目のEyeとひっかけているんですよ。

牟禮氏

小さい字で愛と書いてあります。私は、リーダーとあれば非情さもいるというように、ちょっと聞き間違えたのかもしれません。であれば、言葉を置き換えてリーダーであり、厳しさを持たなきゃならんということで、時と場合によっては“泣いて馬謖

を切る”ということも必要かな、というようなことを考えていたんですが、これは的外れですね。

司会

よろしいですか。外に何かご意見ございますか。はい、今井先生どうぞ。

今井氏

今の話で、もう一つまたこんがらがるといけませんので、ここではグループリーダーの心というのが書いてあると思いますね。C班のところを見るとよく分かります。グループリーダーの心と書いてあります。

リーダーというのはいろんな意味の……。ごめんなさい。Cグループリーダーか。それじゃ僕が間違いました。僕はグループリーダーの心。ここでもって恐らくリーダーと考えた時に、皆さんはボーイスカウトやガールスカウトや、いろんな青年団のグループのことを考えながら、お考えになったんだろうと思います。

リーダーシップというものの中には、いくつか分類があります。例えば、ある仕事を仕上げていくことのために必要なリーダーシップとはどういうリーダーシップか。この中には非情なものも入ってまいりますね。

それから、私たちはそれをリーダーというかどうか分かりませんけど、ディクテーターというかもしれません。例えばヒットラーというのはドイツをあれだけ大きなものにしました。大変大きな間違いをしたにもかかわらず、その時の彼のリーダーシップというものは、すべての人たちがびっくりしたほどのリーダーシップを持っておりました。一つの仕事を仕上げるというような意味においてのリーダーシップの中には、そういうディクテーターシップのようなものがあります。

私、海軍の中尉でしたので、仕事をする時に皆と相談するわけにいかないんです。「右向け右」といってスコップをかつがせて、そして塹壕を掘りに行く時に「おいお前、どっちから掘った方がいいと思う」なんて相談する間はありません。そういうような時のリーダーシップというものの決断性であるとか、あるいは非情性であるとかいうものも、ある意味においてはリーダーシップの部分であります。

しかし、私たちが一人ひとりの仲間を育てるという時、あるいは私たちの会社の中の一人ひとりの人間のことを大事に考えるというた時には、そういうリーダーシップが一番いいとは限らない。むしろ一人ひとりの人が自分でやる気を起こしてやる、そういうことをうまく導くのがリーダーシップであります。

例えば有名な心理学でホーソン工場というのがあって、どういうふうにすれば工場の能率が上がるかっていうので、電気を明るくした方がいいとか、あるいは壁の色を緑色にした方が心が落ち着くだとか、いろんなことをやった結果のその効率よりも、仲間の人たちが皆が一緒になって力を合わせてやろう、という気持ちになった時に、そ

の工場の生産性が一番上がった。これが有名な経営学のホーソン工場の実験の中の大変大きなものであります。

その時に経営学においてはリーダーシップというものは、こういうふうに皆にやる気を起こさせるというリーダーシップであると。こういうふうに考えました。

そして今度は、私たちがグループのことを考える時に、一人ひとりの人間がどれだけ立派な人間になってくれるかなということを考えながら、このリーダーが皆と交わってくることが大事になってきます。

私たちは、恐らくそういうことを考えられたために、今ここで書いた、こんなどれもすばらしいものができてきたんだと思いますけれども、これも三つ今、分類しましたけれども、リーダーシップのことを考える時に何かの参考にしていただけたらありがたいと思います。

司会

ありがとうございました。あと40分です。意見があったら出して下さい。疲れてませんか。疲れたら早めに切り上げてもいいし、休憩を入れてもいいし。何かありませんか。

先ほどの会社の例を出されて、運転手さんが社長になれるわけがない、というのをおっしゃった。社長の気持ちで動いていただくということで、何も権限を与えるわけでも何でもない。そのへんのところはご理解下さい。

今、今井先生が元軍人だったものですから、軍の例も出されましたけど。

C班でしたかね、リーダーの魅力っていうのが出ています。それから、これはやはり似通ったもので同じところで統率力、指導力、包容力っていうような言葉がでています。それからリーダーには大体一般的な事柄なんだろうと思いますが。

何かご意見ございません？ ないようでしたらもう一つ物語を紹介しておきます。ご参考になればと思います。

源義経が鞍馬の山で兵法を学んだ時に、三略の兵法というのがあるんです。これ六韜三略といいます。三略というのは上略、中略、下略、三つに分かれます。上略というのは戦争の起こる前の兵法なんです。中略は戦争中の兵法であります。下略は戦争が終わったあとの兵法のことを説いてあります。

このリーダーのところでいい例があるのが中略であります。戦争中のことで、ある中国の将軍が百戦百勝の、向かうところ敵なしという偉大な将軍がおられた。その将軍があつ村に駐屯したんであります。で、村人たちが敬意を表しておいしいお酒を一本持ってきた。その将軍は、自分のところへ持ってきたんだから、自分で飲むのかな、と思ったら、皆裸になって前の川に入れ、オレも一緒に入ろうと。だれかこの酒を川上へ行って、川の中へ全部流せと。みんなで一緒に飲もう、と言ったんであります。

これは、そんな水を飲んだって酒の味も何もしないのでありますが、そういう美酒を献ずる者あり、皆で飲もう、というその心。そういう、いつも部下、将兵とともにあるという心が、その隊員たちを、その将軍のためなら命もいらない、という形で求心力という包容力、魅力、そういうものを持っておった。だから百戦百勝で向かうところ敵なしであった。

これが軍隊での一つの指導力という意味では参考になるだろうと思いますし、そのことが皆様方のグループでも、いつも皆と同じ、皆の心をきっちりつかんでおる、そういう魅力あるリーダーは大事なんじゃないかな、ということでご紹介しておきます。また何か考えれることがあったら、地域に帰って考えていただいたらと思います。

外に何かございませんか。はい、どうぞ。

ロータリアン

C班のグループの中で15の力と書いてある中に、能力というのはいらないんですか。一番下に書いてある15の力と書いてありますが、能力だとか技術力だとかっていうのは、リーダーにいらないんでしょうかね。それをちょっとお聞きしたいです。

司会

リーダーとしての能力。

ロータリアン

はい。リーダーとしてではなくて、専門的な能力、その人について行けるだけの能力がその人にあるかどうか。一つ例を申し上げますと、私は酒屋ですので、今、最近、吟醸酒というのをやっていますね。どうしてもその吟醸酒をつくる能力のない人に、いくらついていっても、いくらその人が能力のない人についていっても、結局意味がないわけですよ。じゃあそのリーダーとしての資格はその人にはないのかも分かりませんけれども、いくら人柄が良くても、その気力があっても資力があっても、その吟醸酒をつくる、本当のいい吟醸酒をつくる能力のない人にはリーダーはつとまらないんだと思います。だから、ちょっとそういうものはいらないのかな、と思って質問をしておきます。

司会

ありがとうございました。リーダーの能力について。はい、どうぞ。

A班

A班の小林です。今おっしゃっていた能力というのは、才能のことですか。

ロータリアン

技術力です。

A班

それは努力すれば身につくものなのですか。

ロータリアン

努力しても、本当の師匠がいない限り、まず駄目でしょう。

司会

いやね、努力しても努力しても能力のない人をどうするんだ、ということをおっしゃった。そうでしょう。何かございますか。どうぞ。

D班

D班の三谷です。専門的な能力はなくても、その人に人間的な魅力があって、この人のためだったらついて行くわと。そういうふうな男気っていうか気持ちがあれば、その専門的な能力を持った人に見込まれてっていうか、能力がなくても能力のある人がその人間にほれてついてきたら、それでうまく回っていくんではないかな、というふうに感じます。

司会

はい、どうぞ。次。

C班

C班の西口です。一応15の力と書いてありますけれども、15になった経過だけご説明しておきます。

思いつくまま、いろいろ統率力であるとかを出してみて、ふと数えますと13でして、あっこれは数字が悪いなと。まだ何かないかということで、じゃあ、あと二つ足したら15でちょうどきりがいいなと、こういうことで15の力に結果として落ち着いたということです。

先ほどおっしゃっていました能力等もいるかと思いますが、一応事実をちょっと述べさせていただきました。

司会

ありがとうございました。大変ユニークな発想で結構でございます。外に何かございますか。大体いうべきことはおっしゃってると思うんですが、特にこれ、おかしいとか、これ、こういうことも必要なんじゃないか、っていうようなことがあったらおっしゃって下さい。

先見性とかね。先を見通す力っていうのは、C班ではどこに入るんですかねえ。想像力ですか、そうでもない。まあボーイスカウトのリーダーの場合は先見性はあまりいらないと思いますが。はい、どうぞ、森先生。

森氏

リーダーで一番大事なことが抜けとるよ。ということはね、いい背中を持つ人ですよ。その人の後ろ姿でついて行こうかという、いい背中を持つ人が本当のリーダーですね。そのいい背中を持つためには、皆さん方のこれだけのいろんな努力とか切瑳琢

磨とか、それが必要なんですね。結局、いい背中を持つこと。終わり。

司会

ありがとうございました。大体まとめが出たような感じがいたします。ちょっと30分早いですけど、あまり意見ももう出ないようですし、大体もう皆さん方、4時間考えて意見は出尽くしていると思いますので。

それじゃ皆さん方、これでねえ一応閉めますが、きょうディスカッションしたこと、それからロータリアンの皆様方といろんな意見が出てまいりました。どうかこれを大切に地域に持って帰っていただいて、頭を整理して下さい、時間をかけて。それがまた必ず皆さん方、将来役に立つだろうと思います。皆さん方の年齢で考えたことは必ず50歳、60歳になったら自然に必要な時に脳によみがえってまいります。これ人間の脳の不思議なアレでしてね。

私は66歳ですが、いまだに中学校で習ったこと、それから司法試験通る前にやったことなど、若い時の記憶というのは、その間全然なくても必要な時にさーっと全部よみがえってまいります。だから、今日いろんな議論をした、あるいは出た。地域へ持って帰って一応考えていただければ、あとで忘れてしまいますよ。忘れてしまうけど、必ず50歳、60歳、あるいは40歳でも、必要な特によみがえってまいります。皆さんの頭脳というのは非常に今、柔軟でありますから、そのことだけをお願いしておきまして、これで閉会いたしたいと思います。ご協力ありがとうございました。(拍手)

4日目講義

第2670地区P・G
梶浦暲一

司　会

梶浦暲一先生を、ご紹介申し上げます。それと、あとでお話をいただく今井先生ら3人が、このライラを始められたという経歴であります。ご職業は外科医で、松山で開業されております。現在は、もう3人の息子さんが、それぞれ医者になっておりまして、後継ぎをされております。今はロータリーのことで、われわれを指導していただいております。

先生は、趣味がロータリーという、ほかに先生の趣味を聞いたことがないんですけれども、ただ、たばこを随分、吸われます。それと麻雀が好きです。この2つだけ、私が知っておる先生の内面といいますか。で、何を聞いても、先生は、まず答えてくれるなあ、ということが1つあります。それと、物を頼んで、いやと言ったことが、この先生はありません。

しかし、人使いは非常に荒いです。先生に、ものを、ほかの人が頼んで、ああ、あいつができるな、と思ったら、すぐ電話がかかってきます。その経験は、われわれ松山地区だけじゃなくて、2670地区の連中で、先生から直接、電話がかかった連中は、かなり多いと思うんですが、あいつができるなあと思ったら、すぐ電話して、「おい、お前やっとけ」と。そういう人使いの荒い面もあります。

こんな、非常にわれわれにしたら頼もしい、ユニークなロータリー指導者であります。

じゃあ、先生、お願いいたします。

第2670地区P・G　梶浦暲一 氏

皆さん、お早ようございます。ただ今、ご紹介いただきました梶浦暲一と申します。私、松山ロータリークラブに入りましたのが、昭和28年でした。38歳の時です。今日まで、42年間、ロータリーを楽しんでおります。

私の生まれたのは兵庫県なんです。兵庫県の姫路の山奥のほうの一宮という所で揖

保川の上流で生まれました。4歳の時に、山崎という町に下りてきまして、そこで揖保川で溺れたんです。その時に通りかかった人が助けてくださった。そして、同時にまた山崎幼稚園というのが、キリスト教の幼稚園ができましたので、そこへ入園いたしました。

5歳ぐらいまで、そこで教えを受けまして、それからまた家庭の都合で、大阪へ替わりました。そしたら、その年のクリスマスの時に、山崎校長先生の奥さんが。手袋を編んで、その頃、手袋というのは非常に貴重なものでした。そしてクリスマスパーティーのプレゼントに贈っていただいたんです。

それから、また1年ほどしてから、その先生ご一家が、大阪の私の家の近くに、移ってこられたんです。そこでまた、これは有り難いと思って、日曜学校に通うようになりまして、そのコバヤシ先生とおっしゃるんですが、その先生の教えをずーっといただきました。それで、小さい時に助けられたことを、キリスト教の精神で教わったこと、それで大体、人間形成が私の心には植わったと、こう感謝しております。

そういうことで、ロータリーに入りました。で、坂村真民さんという松山近郊に住んでおられる漢学者ですが、詩人なんですね。この方が「念ずれば花開く」という句碑を、あっちこっち、たくさん日本中に建てておられますね。それからもう1つ、私のいただいた色紙には「巡り合いの不思議に手を合わせよう」と、こういう詩をいただいたんです。

ロータリーは、日本だけでも、もう何万人かおりますね。その人たちは、皆な私たちの友達なんです。心を打ち明けて話ができる、何にも遠慮も会釈もない友達なんです。初めて会っても、もうすぐにお話ができるんですね。

そういうことで「ロータリーは人間銀行だ」と、こうおっしゃった方があるんです。それは東京南のメンバーでありましたヤスノジョウジさんという方でした。この方と17年ほど前に金沢でお会いしました。すぐにその人が「一人のために」という詩集を、詩人ですから、詩集を出しておられるんですね。それをいただいて、勉強いたしました。

その中には、良い詩がたくさんあります。頭が悪いから、よう覚えておりませんが、いろんな詩があります。「光の子」という詩がありまして、私は、それを「奉仕の子」と替えまして、一筋に努力して、一隅にでも光が輝くような人間になれよ、というふうな趣旨の詩をいただいたことがあります。

で、そのヤスノジョウジさんと出会ったこと、この方が「ロータリーは人間銀行だ」と、こうおっしゃったんです。普通の銀行は、自分の預金をどんどん引き出したら、残高がゼロになったら、その銀行とは、もうご縁が切れるわけですね。ところがロータリーでは、友人をたくさんたくさんつくることによって、残高がぐんぐん増えまして、

そして人間銀行の富豪になると、こうおっしゃったんですね。なるほど、そうだと思うんです。

で、私、42年間の間に、もちろんドイツ、アメリカ、それからブラジル、ネパール、それからフィリピン、たくさん友人ができました。お陰で、いろんなことを教えられまして、だんだんと視野が広がったというんでしょうか。何か仕事を与えられた時には、パッとひらめいて、ああ、これは篠原さんに頼んだらいいなあ、これは菊澤君に頼んだらいいなあ、あの人は能力を持っとる。そういうことですね。

それから、もちろん日本中の、姫路のメンバーの方々にも、電話で、ぱんとお願いすることがあるんですよ。というのはね、昔、侍という映画がありましたね。それが姫路城で主に撮影されたんですね。そうしたら、オーストラリアから長期交換で1年間、学生を松山へ送ってこられたんです。その終わりの頃に、ご両親が松山へ来られたんです。で、お会いしましたら、その姫路城を見たいと、こういうわけですね。

そこで、姫路の心安いパストガバナーにお電話しまして、この方が姫路城を見たいというんですが、一つご案内願えませんかと、そうしたら早速OKと。そして、姫路城を、汽車が姫路に着く時間をお知らせしたら、ちゃんとお迎えくださって、姫路城を見せていただくし、それから、またゴルフが好きな人でしたから、ゴルフ場にも連れていっていただいて、大変、喜んで帰られました。

そういうことが、しょっちゅうあるんです。人使いが荒いなんて、さっき言われましたけど、私はゴルフ、ようしませんから。で、麻雀が好きや言われましたけど、私は酒を飲んだらあかんのです。顔が真っ赤っけになるんです。それで、毎日毎日外科ですから、盲腸が多かったですね。胃潰瘍、直腸ガン、胆石、それから手足の骨折、いろんな患者が毎日、来るんです。だから、1年に750人ぐらい手術したことがあります。

したがって、正月も、祭日も、日曜もないんです。だから、顔が赤くなりますから、お酒は一切、飲めません。赤い顔して患者さんに接したら、不安を与えますからね。酔いはせんと思うんですけど、飲んだことは経験がないから、言えませんけど。

それで、夜中にでも、手術した患者さんを見に回らないけません。したがって、寝巻は着たことがありません。それまでに、胃の手術をした人なんか、夜中に一遍回診に回らなければいけません。そうしたら寝とるわけにいきませんので、その仕事が済んでから、昨日会った友達と、しばらく麻雀して、時間を過ごすわけです。

それで、ゴルフ場が松山にできた時今から30年ほど前でしょうか。その時にも会員になったんです。道具も買いました。それから車も買って、運転免許証も取って、さあ行ってやろうと思ったんですが、土曜日、日曜日が余計に、よそから患者さんを送ってくるんです。内科からね。それまで引っ張っておったやつを。

そんなんで、お正月もくそもないんです。正月は、正月1日から、今年の切り初めと

称して、患者さんは、いい迷惑ですな。切り初めやるんです。息子らが皆な、大学から帰ってきておりますから、手術場に放り込んで、私のやっとることを見せたわけですね。そんなんで、ゴルフも結局、会員にはなったんですけど、一遍も行く機会がなかったです。

それから、街に出て、夜、飲んだりして遊ぶというようなことも一切できませんでした。まあ、片一方で言えば、哀れな人生ですが、しかし、ロータリーでたくさんなお方と心安く接することができるということは、人間銀行の私は大富豪になったと、こういうふうに自負しておりますので、81年の人生を振り返ってみて、私は幸せな人生を送ったなあと、こう思うわけです。

私が4歳の時に川で溺れましたので、それからキリスト教の精神で教わったものですから、せっかく助けていただいた命だから、、世の中の人のためにお役に立とうと、こういう気持ちで、それじゃ、自分に合うたことは何かと考えましたら、周囲の者にも、そう言いましたら「お前は医者になれ」と、こう言われたんです。

私はね、中学校は、大阪の天王寺中学というんですが、そこの体操の選手だったんです。こんな小さいけれど、したがって府下対抗の体操の大会とか、あるいは、体育の走ったり何かする競技がありますね。あれのリレーの選手。それからハードルの選手。そんなので体操だけは100点いただきました。ほかの点数は、いい加減なものですが、まあ、そういうようなことで、体もある程度、鍛えることができました。

私が生まれた時には、一昨日お話し願った禅宗の方ですが、私のお寺は禅宗なんです。その坊さんが、私の母親に「この子は30までしか生きんで」と、こう予言されたんです。そのことを、私も小さい時から聞かされて「お前は30までしか生きんのやぞ」と、こう言われとったんです。だけど、何の気もなしに死ぬというようなこと、わかりませんからね。

というのは、お坊さんは、禅宗坊さんは、結婚しないんですね、昔はね。したがって養子をとって、私、二男ですが、後継ぎにしようと考えて、そういうふうなことを言われたんじゃないかと、今にしたら思うんですが、そういうこともあって、それで医者になろうと、こう思ったわけですね。

中学、高等学校の時はラグビーをやりました。花園で走ったり、あるいは最後にはレフェリーで笛を吹いたこともあります。そういうことで体を鍛えました。また幼稚園の先生を始め、小学校、中学校、高等学校、大学、まあ、先生に非常に恵まれました。

外科医者になって1年目に、小沢先生という門に入ったんですが、非常に可愛いがられましてね、一人、ワキガの手術を、両方あるんです。そしたら先生がね、「お前が片一方やれ、わしが片一方やる」と。そして「競争しよう」と、こういうふうに言われるんですね。だから、クソッ負けてたまるか、と思って、一生懸命、私も及ばずなが

らやりました。そしたら、ほぼ同時に終わったんです。

そしたら先生がね「おお、ようやったなあ」と、簡単なことなんです。皮を切って縫うだけですからね、毛を生えたところをね。そんな簡単なことです。今ごろ、そんなこと、せんかもわかりませんが、60年ほど前ですね、医者になったのは。ですから、そういうことで非常に良い先生に恵まれました。

それから、私、支那事変の時でした。大阪の陸軍造兵廠という兵器を造る工場、大阪の城の東側にあるんですね。そこへ1人、欠員ができた。そこで小沢先生が「あそこへ、お前、行け」と命令されたんですね。私、大学に、もうちょっと残りたいと思うとったんですが、その時ちょうど私の父が胃ガンの手術を小沢先生に受けたんです。その頃の胃ガンは、大体、手術して2、3年目で、あの世に行くのが多かったんです。

ですから先生も、まあ、あそこの造兵廠へ行ったら、軍の病院ですから、召集がないやろうと、こう思われたんです。その時は支那事変でしたから、じゃあ、先生の温かいお心ざしだと思って行ったんです。そしたら、そこでは7万人の工員が一昼夜兼行で働いています。家族を入れたら30万でしょう。ですから、そこで、毎日、手術です。夜、家へ帰っていても、また夜中に患者が飛び込んできたら、車で迎えに来るんです。そういうことで、外科医としては、非常に実地に勉強することができました。

もちろん、その時の医長は、水野正太郎といいまして、阪大の整形外科の教授になったり、あるいはまた、ここの岡山の何とかいう病院の学長になったりしておりました。その人と一緒に、また研鑽を積んだわけですね。その人が扁平足痛傷の整形外科で、学会で、終戦後、発表することになりましたので、私、その頃松山に帰っておりましたので、松山で一生懸命データを整理して、その先生のお役に立てた。学会で発表される資料を、半分ぐらいは私が作って、大阪へ送ったんです。そういうようなことで、いろんな先生との巡り合いで、今日まで、きております。

ここに皆さんに、「新鮮」という雑誌から、有間重喜さんという方が書かれた「詩について考え、老いを生きる」と、こういう文章と、それからもう1つ「困難や不遇に耐えてこそ生まれる力」と。ヘレンケラー、チャーチル。ほかにもナポレオンとか、ニクソンとか書いてあったんですが、これはいいとして、この文章だけコピーしてきました。

これは最近ね、有間さんに私、普段から非常に親しいんです。で、有間さんの文章が、この新鮮に出たというので、これを私に読ませてくれというて頼んだら、本をぽーんと送ってきたんです。その中にこの文章があって、それから、ほかの文章をずーっと見よりましたら、ヘレンケラーの「困難や不遇に耐えてこそ生まれる力」というのがあったんですね。これは一つ。私しゃべるの下手ですから、皆さんに少しでもお役に立てようと思って、コピーして持って参ったわけです。

ヘレンケラーは、三重苦の人ですね。その方が、サリバンという方の温かいご指導によって、ここに、ずっと、それ書いてありますね。によって世界的な福祉の方面で働かれた非常に立派な方ですね。だから、これをしっかり読んでください。

それからチャーチルですね。これも余り頭は良くなかったらしいんですが、学校の成績は悪かったけれども、伝統のある家に生まれてますから、そして、この方も私と同じように、子供の時に池に入って、溺れておったんですね。それで農夫の方に助けられたと。そして、それにお礼を持って行かれたら「いらん」と言われて、その子供さんのフレミングさんという方の学費をお出しになった。

そしたら、フレミングさんがロンドン大学で細菌学の教授になられて、そして、初めて1929年にペニシリンをおつくりになった。戦時中、チャーチルが首相の時に、肺炎になったところ、ペニシリンを使って治った。この話は、私、終戦後、松山で開業してから、聞いておったんです。

ところが、終戦の年の暮れに、進駐軍が松山に入ってきまして、飛行場の爆弾処理をやったんです。そしたら、小さい小山を越えて、石のかけらが、バーンと飛んできて、農場で働いておるお百姓さんの上に降ってきたんです。そして腎臓に当たって、腎臓破裂を起こしたんです。で、私の所へ、すぐ担ぎ込んできました。それで診ましたら、小便から血が出よんですね。これは腎臓破裂だと。そこで手術をして、腎臓を取ったんです。破裂しているほうをね。片一方、残っておったら大丈夫ですからね。

そしたら、進駐軍が、すぐとんで来ました。「えらい悪いことをした。しかし、一般の人を軍の病院に収容することはできないので、あなたの所で頼みますよ」と。「いや、頼むもへチマもない。もうちゃんと、こうやって手術すんどる」。しかし彼らは好意的に、終戦後で何も医薬品がありませんから「要るものがあったら、何でも言うてくれ」と、こう言うたんですね。

ところが私は「もう、こうやって手術すんどるから、あなた方に迷惑をかけることはいらん」と言って断わったんです。

そしたら翌る日にですね。こんな紙包みを持ってきてくれたんです。開けてみたら、ペニシリンが入っておったんです。ほう、これがペニシリンというものかと。それでチャーチルが肺炎で治った。これがペニシリンかと。それで、5本入っていました。こんな小さいボトルに5万単位の結晶があるんですよ。こいつを蒸留水で溶かして注射したんですね。

終戦後は、化膿の患者さんがたくさん来ました。それで、5本いただいたんで、5本だけ使ってみたんです。もちろん金は取りません。ただでいただいたんですから、ただで注射してみたんです。

よく効きましてね、丹毒の人やら、いろんな人に、まあ5本しかありませんから5人

だけですけど、全部よく効きました。

その後、日本でもペニシリンができるようになって、それも県庁の薬務課に届けて、いただかないかんと言うんですが、その手続きをして、それからペニシリンをたくさん使いましたね。

そういうようなことで、チャーチルさんという、立派な人で、皆さん、ご存知のとおりですが、そういう因縁で聞いとったものですから、ペニシリンをいただいて非常にお役に立った、という印象がありましたので、この文章を持ってきたわけです。

それから有間さんは、終戦後、青年を健全育成のために一生懸命に働かれた教育者なんですね。この方が文章を書かれたんですね。それがきっかけで、こんなものをいただくようになったんですが、今、言いましたように、友人、知人がたくさんありますと、自分にはね。

それから、家庭は非常に円満で、子供さんはないんですけれども。ここに糟糠の妻と書いてありますが、糟糠どころじゃあれへんですよ。有間さんよりもずっと上の立派な人なんですね。私らが行っても、非常に親切にやっていただくんです。だから、家庭はものすごく円満でして、友人が、有間さん、有間さん、といって、慕ってこられとったんです。

ところで、家庭はホームと言いますね。この間、リーダーというので意味を解説しておられましたね。ホームというのは、Hはハーモニー、Oはオーダ、秩序ですね。それからMはミューチュアル、相互扶助、ミューチュアル・エイドとも言いますが、それからEはエフォート、努力ですね。その頭文字を取ってホームと言うんですよと。

これは、私、松山城の城主の久松さんという方と非常に親しくなりまして、お宅を訪問した時に伺いました。その久松さんが、若い時に、銀行員としてロンドンに派遣されたんです。そこで、ラフカディオ・ハーン、島根のほうで、英語を教えにイギリスから見えた方ですね。小泉八雲と日本名をとっておられますね。その方の親戚の方に久松さんがロンドンで会われたそうです。そして親しく「お前、ラフカディオ・ハーン知っとるか」と。「もちろん有名で知っとる」と。そしたら「わしの家へ来い」と言って、非常に親密になられたそうです。

その時に、ホームというのは、こういう意味があるんですよと。ハーモニー、オーダ、ミューチュアル、エフォート。この頭文字を取って、ホームと言うんですよと。家庭ではね、秩序が大事ですし、お互いに助け合い、そして努力をし、その中にもまた、親しい中にも秩序があると。こういうふうな家庭を作れば、家庭円満であり、家庭が円満であれば、地域社会の一つの要因ですから、それがずっと広がれば、地域社会が明るくなるし、お互いに助け合うと。そして、それを世界に広げれば主張・信条を超えてお互いに助け合おうと。

昨日、一昨日と「こころ」について講義をいただきましたね。あのような人間形成の基本になるものができると。その過程というものを、今年のガバナーも、RIの会長も非常に強調されているわけです。アメリカでは、半分くらいの人が離婚するそうですね。私の友達も離婚しましてね、奥さんがロータリーに入って、その人のほうが上になってしまって、ご主人は、しょぼんとしているという話を聞きましたがね。ジョー・サイデルという男ですが、そんなこともありました。

それから私、1983年にブラジルへ行ったんです。サンパウロのロータリーに参りました。その前に、伊丹のロータリアンでありましたナカムラマサミさんという方と親しく付き合うようになりました。そしたら、その方が一昨日、講演していただいた松原さんのお父さん、松原泰道さんという、今88で、まだ元気にしておられるという話ですが、この方に帰依しておられて、そして松原泰道先生の書かれた本を、私に贈ってくれたんです。

そしてまた、一日一話集といって、泰道先生がラジオか何かで、吹き込まれたやつを贈っていただいたんです。それを聞いて、私はブラジルへ行ったんです。サンパウロの、愛媛から移民した人たちが、30年の記念式典をやるからというので、行ったわけなんです。

そしたら、先に亡くなった人、戦没者慰霊塔というのが公園の真ん中にありまして、そして、そこへお参りして、献花をして、地下に入ったら、等身大の仏像と、鎌倉時代の小さいカネで作った仏像とが安置されておったんです。

で「この新しいのは、どなたがお作りになったんですか」と聞いたら、岡山の田中という所から養子に行かれた彫刻家でね、田中という人が作ったんですと。

そしたら、その一日一話集の中に、田中さんが、彫刻を、90歳を超え、100歳近くになっても、まだ2年間の木の材料を仕込んで、毎日毎日、彫刻に励んでおられた。それは「わしがやらねば誰がやる。今やらねばいつできる」というふうな名文があったんですよ。

それを、私がブラジルから帰って、サンパウロのロータリアンに、お礼状を出したんです。日本語でね、もちろん。向こうも二世、三世ですから、日本語が通じるわけです。で、出したら、えらい喜びましてね、こんな有り難い手紙をもらったことは、私は今までになかった。したがって、ポルトガル語に訳して、これをサンパウロのロータリアンに全部、配ると、こう言ってきました。

その詩を、菊澤さん、頼みまっせえ。あの人、上手に詩を心を込めて読んでくれます。こっちへ来てください。

菊　澤　氏

では、ちょっと声が大きいですが、この声の大きさで、どうか背筋をグーンと伸ばし

てみてください。そうです。背筋をグーンと伸ばして、そして、すみません、静かに目を閉じていただけますか。眠らないように、静かに目を閉じてください。この、背筋を伸ばし、静かに目を閉じる、これは、なぜするかと言いますと、この一つひとつの詩を、自分なりに考えていただきたいんです。

ですから、ここにおられる100名の皆さんが、一人ひとり、この意味を考えていただけると思います。その一人ひとりは意味が少し違うかも知れません。だけど最終的には同じ場所に到達するように、この詩は作られております。これは梶浦先生が作られたものなんです。その元々は、平櫛田中さんとか、イワムラ博士とか、それから坂村真民さんとかのお知恵でございます。それを梶浦先生がまとめられたということで、どうか背筋をもっと、ぐっと伸ばして、そして軽く目を閉じて、私が見えるか見えない程度で、よろしくお願いいたします。

わしがやらねば誰がやる。今やらねば、いつできる。

一人では何もできないが、一人が始めなければ、何もできない。その一人になろう。

生きるとは、分かち合うこと。貧しくとも、こころ豊かに、人にはできるだけのことをしよう。

たった一度の人生だから、年々怠らず、良き友と交わり、神に従い、精進して自分をつくっておこう。

春風吹ききたった時、春雨降りきたった時、芽を出すこともあろう。

終わります。ありがとうございました。

(拍手)

梶　浦 氏

松原泰道先生の一日一話集からいただいて、そのエッセンスを取って綴って作ったわけです。ロータリーで心を練って、そして昨日、皆さんがリーダーの心というものを非常にうまくまとめて、お話しくださったが、あの通りでして、自己研鑽に努めると、ロータリー例会においてね。そして、個人としてどうあるべきかという、与えられた状況に対して、パッと手を差し出す。

そういうことがロータリアンの真の目的なんですね。ですから皆さんも、昨日、一昨日、非常に良いお話しを聞かれました。それを皆さんの心として、そして心の田畑にちゃんと植えていただきまして、そしてすくすくと、それぞれに違うようなお花を咲かせられると思うんですが、それを生涯、持ち続けていただいて、振り返ってみて、有意義な人生を送ったなあと、こういうふうに思われるような日々を送っていただきたいと思います。

どうぞ、よろしく頑張ってください。ありがとうございました。

(拍手)

司　会

どうも先生、ありがとうございました。

続きまして、締めの講演になります。今井先生に、お話をいただきたいと思います。先生、どうぞこちらへ、お願いします。

今井先生は、もうご存知のとおり、この島の開祖でございます。あそこの食堂の前の句碑、見ましたか。「友と出会い、神と交わり、愛の火の燃えるところ」と表現された先生でございます。じゃあ先生、よろしくお願いします。

4日目講義

RI理事
今井鎮雄

もうすでに、一番最初に、このライラは、どんな意味を持つんだろうか、皆さんに、こんなことをお願いしたいということを、私から申しましたから、本当は、もうしなくてもいいと思いますけれども、若い方々が、梶浦先生も80歳ですから、私は梶浦先生より、ずっと若いんです。75歳でありますから、やっぱり年寄りには花を持たそうというので、最後の話というので、させられたんだと思います。

実は、今まで私、講義ばっかりして参りました。講義は2時間なんです。大体、2時間ならできるんだけれども、30分ではなかなかできない。けれども、きょうは2つ、3つのことだけを、皆さんにお伝えしておきたいと思います。

それは、今度のこのライラセミナーの中で、皆さんは、お二人の先生を通して、人間の生きざまみたいなものを、お話をよく聞かれたと思います。それから、また今、梶浦先生の、ご自分の人生を振り返ってみられて、どうして80年の人生を送られてきたかっていう、お話がありました。私たちは、今のお話を伺いながらも、一人の方が、どんな生き方をするかということによって、どんな素晴らしいご自分の人生を送ることができるのかということを、皆さん方、しみじみ感じられたと思います。

梶浦先生の一生を振り返られた時に、お医者さんとして成功されたということもある以上に、人間として豊かに生きられた。こんなにお友達ができておる。しかもなお未だに「今やらなかったら、誰がするんだ」とこう言って、未来に向かって、先生、大体、120～130まで生きるつもりでおられると思いますが、その位のつもりのお考えを持っておられることを、しみじみ感じられたと思いますね。

これは大変、大事なことだと思いますが、私、ちょっと、今日は時間が、もうあと50分ほどしかありませんので、皆さんにお願いをしたいと言いますか、ことを申し上げます。

それは、私たちが生きている社会の変化とか、私たちが周りに住んでいる時代というものの認識だとか、そういうものをしっかり持ちながら、あなた方はあなた方の時代の人

間としての生きざまを自分で決めてほしい、こういうふうに思います。

（ちょっと、いい顔しますからね、写真を撮っていただく。ありがとうございました。森先生は、精神科のお医者さんでいらっしゃいますから、何かちょっと困った人は、どうぞ、あしこへ行ってくださいね）

私は、皆さんに、こういうことを知ってほしいっていうのをね。私たちの時代がこんなに激しく動いているにもかかわらず、私たちは余りにも、社会のことについて、よく分かってないことがあるんじゃないか。自分がどうして、自分たちの社会のことを理解するかっていうことを、自分でちゃんと理解しなければいけないということを、まず考えていただきたい。

例えば去年1年のことを考えてみてくださいよ。新聞が何を賑わしただろうか。まず地震。そして地震がワーッとあったら、神戸の人に言わしたら、地震は消えちゃった。東京へ行ったら、もう地震の話をする人はいませんでえ。何でか。オウムが起こったということですね。

地震があったり、オウムがあったり、あるいは住専の問題があったり、HIVの問題があったり、沖縄の問題があったり。私たちは、こうして考えますと、歴史的といいますか、この1年間の間に、どんどこどんどこ新聞が私たちを賑わして、私たちは、それに引きずり回されたんじゃないかと。一体、日本の中で、何が去年、1年、あったんだろうかということを考えた時に、それに引きずり回されて、そして、ああ、これも困ったもんだなあ、あれも困ったもんだなあというふうなことを感じた。

ジャーナリズムの人たちに踊らされて、踊らされたっていう言い方はおかしいですが、その中にある真実の歴史的な状況というものについて、どれだけ私たちは自分の目で、それを分析しただろうか、ということを考えてみなければならない。こういうふうに、一つ思います。

したがって、私は皆さん方に一番最初にお願いしたいのは、そういう皆さんが自分を超えた、あるいは未来を見つめて判断を自分でできるほどの、しっかりした学びをしていただきたいということをお願いをしておきたいと思います。

人生の生きざまということと同時に、あなた方が、どういう自分で今判断ができるのだろうか。判断をできるだけの材料を持ってるんだろうかどうだろうかということについて考えていただきたいと思います。

もちろん、私たちは地震についても、判断をする材料はたくさんあります。例えば、地震が起こった時に、私は、数名の、ほとんど大学の先生でしたけど、大学の先生が集まって「オレら非力やから、あまり後片付けなんてできないけど、何か、やっぱりお手伝いしなけりゃいかんな。知的ボランティアをしようじゃないか」。こういう言い方で、全部ただで、ただでっていうのは、ボランティアですから当たり前ですけれども、手弁当

で集まって、一体、地震という現象に対して、どの角度からこれを分析したらいいだろうか、ということを一緒に考えました。

その時に考えたことは一つ。地震というものは自然現象だけども、この自然現象の中で、都市という人間が造った建物や、あるいはシステムが、こんなに無惨に、ずたずたになった時に、一体、自然というもの、あるいは自然災害というものと、都市の構造ということについて、今まで考えてきた都市工学の人たちや、都市計画の人たちは、これをどういうふうに反省したらいいんだろうか、ということを考えてみてほしい。

若い学者の先生たちに、地震研究所とか、いろいろありますね。そういう所の先生たちに「これ、もういっぺん考えてほしい」。その考えてほしい、ということは、新聞で時々いろんな形で発表されているということで、お分かりになります。これが一つの課題だ。

もう一つの課題はどうか。地震は神戸で起きました。なぜ今度の地震が、これだけ有名になったかというと、あれ位の大きさの地震は、世界中でたくさんあるんです。例えば一昨年、ロスアンゼルスのほうで起こった地震があります。ところが、そういう地震があり、あるいは今度の中国の雲南省で、つい最近、起こった地震がありまして、随分たくさんの方が亡くなってます。

ありますけれども、それらの大きな地震、神戸の地震よりも、もっと大きいと思われるような地震があったけれども、都市の真ん中で起こった地震というのは、実は神戸が初めてです。これが一つ大きな問題だったわけですね。

そうすると、今度はどうなるか。そうなった時に、神戸という街は、痩せても枯れても六大都市の一つでありまして、そして、日本で一番大きな港の一つであります。横浜も大きいんですけれども、この頃はアジアからの貿易量が増えてまいりましたから、神戸に入ってくる貨物の量というもの、そしてまた神戸からこれをコンテナに積み込んで、そしてヨーロッパやアメリカに送るというようなことが、活発に神戸にはあります。ハブ港でありますが、そういう港の機能が全部なくなってしまった。

それだけではなくて、長い細い日本を考えた時に、一体どこを道路が通っているかといったら、あの山陽線なんです。もう、篠山から来た人、申しわけないけど、あんな所を通していたら、いつになったら目的地に行けるかわからんですね。新幹線でパーッと行くほうが早いわけですから、そこには国道がたくさん入っています。それが全部、崩れてしまった時に、実は物資の流通というものが、日本の中でも大変、行き詰まってしまったんですね。港が壊れてしまった。

こうした時に、一体、都市の交通とか、経済とかいうものを考えた時に、これはどんな大きな問題を持つんだろうか、ということを、考える必要があるんじゃないか。二番目の問題として経済学者や、あるいは交通問題、流通学、そういうふうなことをしている学者は、すぐにそのことを真剣に考えてほしい。神戸が、もうかるか、もうからんじゃ

なくて、世界の経済に、それがどんな影響を及ぼすかということについて考えてほしい、ということで考えてもらいました。

三番目に考えようというのは、私たちの領分であります。私たちの領分というのは、私たちのような社会学であるとか、社会福祉であるとか、教育の問題に携わっている者でありますけれども、そういう者が何を考えるか。一体そういう状況になった時に、人間はどういう生活をするんだろうか。それは物質的な生活も大変でした。仮設をあれだけ建てて大変でありました。

PTSDという言葉が流行りました。PTSDという言葉は、外傷性の精神障害というような形の意味です。ポスト　トラマティック　ストレス　ディジィーセスというようなことですね。

それで、そういうような言葉は、大変新しい言葉でありますけれども、その状況はね、今までにたくさんあったんです。どういう所であったかといったら、外傷性、よそから何か大きな衝撃があった時に、その人がストレスを起こしたり、その人が精神的なノイローゼになったり、ある時には障害を起こしたりするようなケースは今までなかったことない。

どんな所であったかといったら、例えば、ナチスがユダヤの人たちを皆な収容所に連れていったというようなことであるとか、第一次世界大戦のことであるとか、いろんなことがあります。あるいは、今度、ベトナムで戦争があった時に、大勢のアメリカ人たちが「この戦争をしていいんだろうか、どうだろうか」と悩みながら戦争をして、悲惨な状況にあった時に、アメリカの兵隊さんたちは、随分たくさんこのストレスを受けて、そして病気になった人たちがいます。そういう所では、たくさん症例がありますけれども、日本では、そういうことについての勉強をする人が少なかった。

慌ててこれをやろうじゃないかと。私たちのグループは、そのことに気がついてユダヤの人、これは主に、収容所に入られたことを勉強したお医者さんでありますとか、アメリカの精神医学の人たちを呼んで、こういうストレス、地震というストレスの中で、子供が、あるいはお年寄りが、どんな障害を受けて、どういうふうにして、その人たちをもういっぺん激励をしていったらいいのか。治療をどのようにしていったらいいんだろうか。子供をどうして遊ばしていったらいいんだろうか。子供と一緒にどんなプログラムを組んでいったらいいんだろうか、ということを考えようということを考えた、そういうグループを作りました。

今、これ例が長くなり過ぎました。長くなり過ぎましたけど、一つの地震という状況があった時に、私たちは、その分析を本当にしていくというふうな作業を一つひとつしていかなければ、本当はならないのであります。

これはHIV、エイズの問題についてもそうでしょうし、実は、沖縄の問題についても、

そうであります。大変、新聞はセンチメンタルな、ジャーナリスティックな形で、いろんなことを書いてありますし、それはその通りでありますけれども、社会的な状況からいうと、いろんな問題が、国として抜き差しのならないような問題もたくさんあって、大変じれんまに陥っているという状況を、どう私たちが理解するかというようなことも必要だと思いますね。

さて、こういうことを考えた時に、私は二つの角度から、皆さんたちにもういっぺん勉強してほしい。一つは、長い歴史がどのように変わってきたか。もう一つは世界的な状況の中で、どういう問題が私たちの中にあるんだろうか。その中で、私たちは公平に日本の役割を、これからは考えなくちゃならないということになってまいります。

去年の11月だったと思いますけど、私の所に、ロータリーの会長さんから手紙が来ました。アラスカでロシアの、特にシベリアのことについて皆なで考えたいから、日本のロータリアンの人と、韓国のロータリアンの人と、カナダのロータリアンの人と、アメリカのロータリアンの人と、それからロシアのロータリアンの人たちが集まって研究会をしたいので、お前、出てきてほしい、こういう手紙をもらいました。

アラスカまで 、私は行ってきました。アンカレジまで行ってきたんです。皆さんどう思います？ 私は、その時に錯覚を起こしてました。アンカレジは昔ね、ここからヨーロッパへ行く時に、アンカレジでもって、ちょっと途中で休んで、それから北極圏を越えて、そしてアムステルダムか、あるいはロンドンか、フランクフルトかに着く。そういう飛行機が日本から行く普通の飛行ルートでありましたから、私はそれでしょっちゅう行っておりましたから、大体6時間もかかればアンカレジまで行くと思ってました。

「ああ、いいですよ」と、まあ6時間ぐらいかなと頭で計算しながら「いいですよ」と返事しましたところが、そのルートはなくなっちゃいました。、なぜかというと、中国が、ロシアが自分の空の上を飛んでもよろしいということになったために日本からは近く飛行機を飛ばすために、真っすぐ中国の上、ロシアの上を飛んで、ヨーロッパへ行くようになりました。2、3時間、早く着くんです。そうすると。したがってアンカレジまで行く必要はない。ノース・ポウル、北極圏を通る必要がなくなりまして、真っすぐ行くようになりましたから、2、3時間、早くなりましたために、アンカレジ行きの飛行機、日本にないんです。

日本がないんだけれども、アンカレジという所はアメリカでありますから、アラスカというのはアメリカでありますから、まずアメリカに行くんです。どこへ行ったかというと、なんとロサンゼルスへ行きましてね、ロサンゼルスから真っすぐ上がって、アンカレジまで上がるんですから。ロサンゼルスからアンカレジだって、5時間ほどかかりますから、こっちから行くのは10時間かかりますから、大変な時間がかかって、しまったと思ってね、乗って行きました。

帰りも同じ方法で帰ってこなければならなかった。それだけでも、私たちは時代が違っておるので、錯覚を起こして間違っているということが分かりますわね。この位の間違いは「ああ、間違いでよかった」ということです。

ロシアにロータリーがあります。ロータリアンの方は、あるということは聞いておられるでしょうけれども、実はロシアにロータリーがたくさんあります。今14、今度は15できるはずです、今年ね。

ところが、ロシアに行って、また気が付いたことがあります。ロシアの人たちがあれ、昔、ソビエト連邦共和国といた時に、大きな大きな国だったのに、ソビエトが解体をして、ロシアになって、ウクライナとか何とかが皆な独立しましたね。そしてロシアになったんでしょう。それでも大きな領地がある。

このロシアの中で、集まったシベリアの人たちは、こう言うんです。「あのウラル山脈から西は、西欧ロシアだ」と。そうです。モスクワや何かでもって、昔、ロシアの王様がおった。ロシアの皇帝がおった。ニコライ皇帝とかいった昔のロシアという時のその王室は、ほとんどがヨーロッパの、いろんな国から来た人たちが、政略結婚をしながら住んでいました、王様でありますから。

大体がフランス系の人が多いんですけれども、フランス系の人が、お嫁に行ったり、いろんな所へ行って、あしこでもって王様になってるんですが、だから、あすこはヨーロッパなんです。オランダの王子様がどこへ行ったとか、ウィーンの女王様がどこの王様と結婚したといって、ヨーロッパはもう、皆な王家が繋がってました、昔ね。彼らは「あれは西欧ロシアだ」と。

それに対して、私たちウラル山脈から東は何かというと「これはシベリア並びに極東ロシアだ」と。「シベリア並びに極東ロシアはアジアだ、太平洋だ。だから、僕らは、日本の人や、韓国の人や、あるいはカナダの人たちと、皆なと一緒に交わって、極東の中のアジアの皆さんと一緒に、仲良くしてやっていきたいと思っているんですから、よろしく」。

ロシアなんて全然、僕は違うと思っていたんだけれども、よろしく、ときただけでなくて、そのロシアから来た人たちを見ますと、モンゴリアンの人たちが、たくさんいます。モンゴリアンの人たちがいますから、日本人のような顔をした、背の小さい人がロシア語でしゃべっているので、この人ロシア語ができるな、と思ったら、当たり前で、ロシア人だったんです。

この人たちのグループと一緒に、4日間、協議しました。題は何というかというと「グッド　ウィル　アンド　デベロップメント　カンファレンス」。皆なの友情、善意と、それから開発のための研究協議会という協議会をいたしました。

その研究協議会で、大きく分けると三つの方法が考えられました。一つはどういうこと

かというと、ロシアについての問題を学問的に研究しているのは、アメリカの学者が非常に多い。この点、おもしろい国ですよ、アメリカという国は。自分の国のことは余り分からんくせにね、ヨーロッパのこととか、日本のこととか、あるいはロシアのことを、非常によく研究している学者がたくさんおりまして、その学者が、ロシアが今、どんな状況かということを報告した。

資源の問題はどうなっているかとか、あるいはチェルノブイリの後遺症、いわゆる、核汚染の問題がどうなっているかということについて、大変詳しい、科学的なデータを示して、こうなってるということを言いました。

それに対して、ロシアから来た人が「そうだ、そうだ、その通りだ。私たちは、こんなことがあった」という事実を、並べました。私は、セカンド　セミナリーセッションというものの司会をさせられました。アメリカ、カナダから来た学者が、チェルノブイリのあとの核汚染の問題について、どんなにひどい状況かということの報告がありました。その報告を聞くと、チェルノブイリと同じような核の汚染はシベリア中に広がっているということです。

今度は、そのことについて、ロシアから来たロータリアンの人が「実は私はチェルノブイリのあるグループの隊長をしていました。私の友人は、皆なこんなふうにして死にました。だけども、チェルノブイリだけではなくて、あのシベリアのほうには、随分たくさんの原子力の、核の製造所が、ちょうどチェルノブイリと同じようなものが、たくさんあるんです」。

ロシアは、西欧ロシアを大事にしたために、シベリアという所を兵器庫に使いました。その兵器庫に使ったものが、戦争が終わった時に、兵器が要らなくなったので、全部、潰すことになったんだけれども、お金がないので、全部、埋めてしまいました。簡単に穴を掘って、埋め埋めと、ぽんぽこぽんぽこ埋めました。

そして潜水艦のようなものは、これも邪魔だから、沈めろ沈めろと、石を積んで皆な日本海に沈めました。これは聞いたことがありますね。日本海へ原子力潜水艦が、捨てられるため沈めたという話は聞いたことがあると思います。

しかし、それは潜水艦ですからね、10年か20年は持つと思いますよ。でも、100年も経ったら、鉄ですから、だんだん海水に浸食されてきます。気の毒やねえ、あんたたちは、マツモトさん。僕は死んでるけど、あんたたち、まだ生きてる時に、もう日本海の中から、みんな核の汚染がバーッと出てくると、これはシベリアの問題じゃありません。私たちの問題になるでしょう。

そういうことについては、ロシアは何と言ってるかというと「お金がないから、すみません。お金がないんだから、仕様がないでしょう。取りあえず、こうして片付けておきました」と、こういう返答であります。「これが実態です」と、言いました。

ある経済界の人たちは、こう言います。おもしろいことに、アダーンとかいう町があるんですって。極東シベリアの一番北のほうであります。カムチャッカのずっと上にあります。私は、そんな小さな町だから、人口が2,000人か3,000人かと思ったら、なんと250万おるっていうんですから、大都会ですね。

そこにロータリーがあるんです。そのロータリアンの中には市長さんも入ってるし、皆な入ってるんです。来ました。そして、その時に言ったのが「私の所では、ダイヤモンドが出ます」羨ましいでしょう。ダイヤモンドが出るんです。石油がたくさん埋蔵されています。それから森林資源、材木の資源がたくさんあります。ものすごく地下資源がたくさんありますけれども、それを加工したり、それを売ったり、それを精製したりするための、お金がないために、今どうすることもできないと言います。

そして、こう言うんです。「恐らくロシアは、近い将来に、もういっぺん共産党支配の国になると思います。なぜかというと、このままでは、私たちが食えないからです。共産党の時代には、とにもかくにも、ある一握りのものでも、それを皆なが平等に分けて、暮らすことができたんだから、それで生きることができたけれども、こんなふうになったら、お金持ちはできるけれども、貧乏人ができて、その差がひどくなるために、どうしても、その被害を食い止めるためには、共産党がもう一度、勢いを得ると思います。ただし共産党が勢いを得ても、昔のようなファッション的な、あの共産党にはなりません」ということを言っていたのが、私には大変、印象的でした。

もう一つのことは、その時に、今お金を使うのは誰かといったら、全部マフィアだそうです。そのマフィアに、このまま置いといたら、もしもロシアがあれしてもマフィアの国になってしまって、本当の意味のロシアという国はできないだろう。民主主義的な国に更生しようと思うならば、どうしても、そのシンボルとしてのロータリーが必要なんです。

「だから、私たちは、ロータリーをつくりなさいと言われた時に、賛成したんです。このロータリーが中心になって、この町の経済の復興を考える時に、よその日本であるとか、あるいは韓国であるとかいう国々から、いろんなものを応援していただいて、私たちのロシアのその町を、立派な民主主義的な社会の一員として、生きてくることのために、一番必要な応援をしてほしいんです。一体ロータリーは今このような世界の情勢の中で、何をしてもらえますか」との質問を受けたんです。

私たちは、そのことでディスカッションをしてまいりました。これは一つの例でありますが、じゃあ、それはどういうようになったんだと。これも歴史的に考えてください。大きな歴史の転換点というものは、皆さんが、ついこの前、経験しました。1989年であります。1989年の春に、どんな事件が起こったか、と思い出してみてください。天安門事件というのが起こりました。

天安門事件というのは、あの大きな中国が、大体、今8億人ぐらいいると思いますね。8億ぐらいの人口を養うために、どうしても餓死しないように。これ、おもしろいんですけど、私は子供の時に中国にいたことがあります。ほとんど毎日のように、小学校に通う時に、あの寒い冬の日に、小学校に通う時に歩くと、捨て子がいて、その捨て子が、朝早く捨てられた子が、早く見つかると、その捨て子は助けてもらえるんですけれども、もう少し昼ごろまで置いてあると、冷たくなっちゃうんです。寒くて、冷たくて。だから捨て子が死ぬ。子供心に、きょうも捨てられて死んでたよ。私は、そういうことを家で時々報告しました。

その時には、凍死した人間というのは、きれいなんですよね。可愛らしい、そのまま眠っているような顔で死んでいるんです。それを警察官が来て「ああ、これはもう死んでいる」と言って、連れていくのを、私、子供の時に見たことがあります。

大勢の人たちが食べられないで、子供を捨てて、そして皆なも死んでいくというふうな、そういう飢餓状態に近いような状況がありました。それを救ったのは、実は共産主義社会の指導者、毛沢東たちを一練とする立派な指導者で、あの8億人という人たちが、とにもかくにも死ななくてすむようになったことは、大変、大きなことです。

しかし、そのような社会主義社会というものは、死なないですむようになったけど、次の発展はなかなかできません。次の発展をするためには、どうしたらいいのかというと、民主主義ということを、もういっぺん考えた新しい近代社会に生まれ変わらなきゃならなかった。

封建的なロシアも、封建的な中国も、そのことに行き詰まった。これが冷戦の解消と言われる状況でしょう。そして冷戦の解消という状況の中で、その事件を、最後のぎりぎりのところで暴動を起こしたのは、中国では若者たちが、自由な民主主義的な社会に、つくり直さなければ、新しい次の発展はない、といって騒ぎだしたのが、あの学生たちの騒動であります。

これに賛成した人と、それを弾圧した人がおりましたけれども、結果は、今のまだいる人たちは、今まだ時期尚早だと考えたんでしょう、戦車でこの青年たちを蹂躙しました。

天安門事件といって大勢の君らと同じような若者たちが、そこで戦車の下敷きになって死んだ悲劇があります、言い換えるならば、そのような歴史の、若者の新しい時代を築こうとすることを失敗した一つの大きな事件があり、未だにそれを世界の人たちが思い出して、中国は人権ということについて十分な配慮がない国だということで、攻撃いたします。

しかし、中国の人たちに言わすと、何と言ってるかというと「私たちの人権は、一人の人の自由を認めることではなく、8億の人たちの命を助けることだ」。人権の概念が違うといって今、頑張っているんですね、まだね。頑張っているんですけれども、そういう

ようなことが歴史の曲がり角の事件として一つあります。

同じことが1989年の11月に起こりました。それがベルリンの壁の崩壊であります。このベルリンの壁の崩壊ということは、何かというと、さっき言ったソビエト連邦共和国というロシアが、もうこれではいけません。私たちは改めて新しい社会をつくっていくためには、今までのような、共産主義社会、社会主義社会ではだめなんだということを手を挙げたために、東欧諸国から解放されてくるようになりまして、あのベルリンにつくられていたところの近代西欧社会と社会主義社会との壁を壊したという事件が、あのベルリンの壁の崩壊であります。

青年たちが、あのベルリンの壁に登って、一生懸命、壁を壊している。それは、一つのシンボル、象徴であります。これによって、私たちは、新しい時代に入るんだ。1989年を区切りにして入るんだと、こういう決断をしたのは、たった今から7年前。まだ7年しかたってないじゃないですか。しかし、その7年しかたってない中で、新しく変わってきたものの中では、1993年、この時代のことを世界が最も大きな変化をした時代だというふうに、歴史家たちは考えます。

そして、恐らく数年たち、あるいは私たちが年を取った時に、この数年間の間に歴史が大きく曲がったな、こういうことを私たちは感じる。

その、曲がったな、という時代に、あなた方が生きてる時に、どれほどあなた方は、そのことを理解したかということを、やっぱり考えておかなくちゃならないと思うんですね。

こうして、この93年から変わってきたものが、今96年でありますけれども、この間に変わった、変化というものが、うまくいったかといったら、いかない。

いろんな問題が起こりました。ヨーロッパ諸国においても問題が起こりましたし、アメリカにおいても問題が起こりましたし、中国においても、いろんな問題が起こりまして、この間は、新しい秩序をつくるための混乱をしております。

それは今、共産主義社会と資本主義社会、、西欧近代社会との、あのぶつかり合いの変化があったというだけではなくて、実は、資本主義社会も、あるいは近代西欧社会も、ここで大きな変化を来たしています。

この大きな変化を来たしているということを、一口に言うと、こういうことを言います。19世紀はヨーロッパの時代、20世紀はアメリカの時代、21世紀はアジアの時代。これ、ほとんどの人たちが、そういう変化がくるだろうということを認めています。

アジアのAPECというようなことがありました。アジアの人たちは、アジアだけでアジアの経済を考えようということを、殊にマレーシアの首相たちは、そういうことを一生懸命いうんですけれども、アメリカはどうしても、これからはアジアと一緒にいきたいというので、オレも入れろ、太平洋も入れろ、太平洋の向こうの端にはアメリカもあ

るよと言って、今、引き合いに出してます。

こうした引き合いに出している時に、つい今年はバンコクでもって、アジアの人たちの首相だけが集まって、ついこの前、会議をしましたね。橋本さんも行きました。行った時に皆な気にしている。クリントンさんに気を使って、アメリカに気を使って「クリントンさん、あなたを呼ばなかったのはね、私たちの内輪の仕事だけすることであって、あんたはまた呼ぶからね」と言いながらでも、このアジアだけの国が集まって、何とかお互い同士、考えようということを今、盛んに言っているでしょう。言い換えたら、そういう激しい動きをしながら、今、変化をしております。

このロータリーでもそうです。この10月にロータリーは、バンコクで、ロータリーアジア協議会というものをいたします。バンコクでアジア協議会があるから来てください。バンコクの人たちは、いろいろ来て、そして日本からたくさん来ていただかないといけないので、日本から6,000人、来てください。

ちょっと伺いますが、後ろのロータリアンの中で、バンコク会議に出られる、出るつもりでおる人、手を挙げてみてください。なんとお二人。6,000人にはもうちょっと足りない。

なぜ私がこんなことを言うかというと、そら、お仕事の都合で行かれんことがあるんです。実はこのことは、ある仕掛けなんです。ロータリーにとっては、ある仕掛けなんです。

この仕掛けの中で、今、一生懸命交渉していることは何かというと、中国の一番偉いトップのリーダーの人、それは江沢氏であるか、李鵬であるか、あるいはそのほかの王震であるか、誰か知りませんけれども、中国には12人の偉いトップの人がおるんですが、この人たちの誰かを呼んできて、このアジア会議でもって話をさせよう。そして中国にもロータリーを、民主主義的な組織をつくるためにはロータリーを開かす。そういうことのために、ぜひそういう人たちを呼んでこよう。そして、いかにロータリーというものが自分たちの問題ではなくて、こういう世界が新しい方向に行くということを考える機会にしよう。

私は、初めにバンコクでやると言った時、バンコク、言い換えたら、タイは、アジアの中心になろうと思って一生懸命、頑張ってるんだなあ、ということを思いました。そのために大きな国際協議場を造りました。

なんと、今度のアジアの会は、4日間あるんですけど、この4日間、学校と会社を休みにするんです。なんで学校と会社を休みにするか。バンコクに行った人は、ご存知のように、もう、あそこは車が一杯で動かないんです。だから、アジア会議をするといった時に、日本の人に言った時に、知ってる人は「もう、あかん、あかん。バンコクなんか行ったら、いつ街に着くか分からん」。行ったことある人、知っているでしょう。

山口さん、何時間かかりました？　あなた飛行場から街の中まで。とにかく、いつ走っているのかわからない。普通ならパーッと行けるところが、行かれない。だから、もうあんな所へ行かん。街の中で走ったら、1時間もかかっても行かんから、もう、あかん。

私のところは全部、休みにします。学校も会社も全部、休みます。したがって、人通りがないから、自動車はすいすいと行きます。ホテルは全部、予約をします。そして、その王立の国際会議場を全部、ロータリーのために解放しますから、来てください。こう言っています。

この意味は何だろうか。それは実は、154か国です今。154か国にあるロータリーが、皆な新しい社会をつくることのために、真剣になって考えてると。去年ロータリーは90周年を迎えました。同時に、国連の50周年を迎えました。その時に、国連とロータリーは、一緒になって応援をいたしました。

なぜかっていうと、国連、ユナイテッド　ネーション　第二次世界大戦が終わったあとで、新しい世界組織をつくろうという、ユナイテッド　ネーションをつくった時に、皆さん、ご存知ですか。新しい国連をつくる時に、各国の代表者を集めて一つの会議をつくる。一つの国の政府の代表者たちが、これが国連大使といわれる人たちですけれども、集まって、そして会議を持って、世界をどのようにすれば、一つの調和をした世界になれるかということを考えたんです。

だけど50年前に、国連はそれを国の代表を考えると同時に、もう一つは、国益だけを考えてはいけないから、人類の益を考えなきゃならないという意味で、それを考えさすために、ガバメントの代表ではなく、人間の善意を考える。ヒューマニズムに溢れた、人類のことを考える団体の代表を国連に加えようと、こう言いました。

どういうところが加わったかといいますと、赤十字、世界仏教連合会、世界キリスト教連合会、そういうものを40ほど一緒にして「あなた方は、国益でなくて、人類の益を考えるサゼッションをしてくださいね」と言いました。この代表のことを、ノン　ガバメンタル　オーガナイゼーション　と言います。国の代表ではなくて、国を代表しない組織の代表に集まってください。これがNGOというものの、本当の最初の意味であります。

この頃、NGOというのは、よその国の応援をしたり、何かする、そういうボランティアの団体を皆なNGOと言います。それは、政府と違う、自分たちで自由にやるんだから、政府と違うという意味で、ノン　ガバメンタル　だという意味で、NGOという言葉を使っていますけど、本来の意味は、国連の中で、国の代表者とノン　ガバメンタル　オーガナイゼーションの代表者が、人類の益を考えて、国連に何をしたらいいかということを考えさしていこう。これには、ユネスコであるとか、WHOであるとか、そのほかのいろいろな組織があります。

今、ロータリーが一番力を入れているのは、ユネスコとWHOと一緒にして、世界から

ポリオという病気を無くそう。小児マヒといわれた言葉です。今、日本ではありません。もう。なぜかというと、ワクチンありませんと、偉そうなこと言うけど、全然なくなったわけじゃないですね。できてくる可能性ありますね。

でも今、日本では、一応ないことになってます。これは伝染病でありますから、もしも天然痘のように全部なくなれば、世界中から全部ポリオが無くなれば、そのような病気は無い。大変みじめな病気であります。後遺症が長いですから、大変苦しい思いをします。体が不自由になった人たちというのは、昔は皆なこのポリオの人たちでした。これを無くそう。

私たちは今、ポリオの募金を、日本中のロータリアンは一生懸命にポリオの募金をしています。大体、世界中で200億ぐらいのお金を集めました。そして、それでワクチンを買って、あっちこっちでもって、それを打つ。難しいんですけれどもインドとか中国の田舎のほうの人たちの子供たちにも、それをしていこうと、努力をしておりまして、何とか2000年までに無くして、ユナイテッド　ネーションに、2000年にポリオが無くなった、という宣言をさして、2005年のロータリーの100年祭に、私たちは、この世紀に一つの仕事をしたな、ということを言いたいな、といいながら今、頑張っているのは、こういうことであります。

さて、こうして考えてきた時に、私は、まだ言いたいことがたくさんありますけれども、私たちはロータリーを通して、実は、世界の新しい趨勢をつくっていくということに、大きな貢献をしているんです。それは、そういう世界的な視野を持ってるからです。

来年度のロータリーの会長さんのテーマは、何というテーマかというと、これは今度の三宅先生が、これをずっとこの1年間、解説をしたり、あるいはそのことで奨励をして、日本中のロータリーの方々に言っていただくんですけれども、ビルザ　フィーチャー　ウイズ　アクション　アンド　ビジョン　というんです。

未来をつくろう。行動と、そして私たちは幻を持って、夢を持って、あるいは、先見の明をもって、つくろうじゃないか。

一つひとつはなかなか難しいから、一人ひとりが一つのレンガになろう。レンガは一つひとつでは何もできないけれども、そのレンガを積み重ねることによって、大きな建物ができるように、私たちは未来をつくろう。行動と、私たちのこのような方向を持って。

このような意味において、ロータリーの皆さん、あるいはライラの皆さん、若い皆さんにお願いしたいことは、私たちの心と一緒に、そういう未来に対して適切な判断ができるようにしてほしい。

余りにも日本のジャーナリズムは、毎日のことばっかり追って、その中の意味ということを、私たちに知らせてくれてない。次から次へと、オウム真理教がどうの何とかがどうの、オウム真理教でも誰が悪かった、これがどうだというけれども、一体どうなんだ

ろうか。何が問題だったんだろうか。若者が科学の世界の中で、人間性を失った時に、あのオウム真理教の中における人間の絆と、あるいは神というふうなものや、仏というものに対する密接な繋がり方というものに対して、大変興味を持った。

それが、あの優秀な、科学者としては大変、優秀な若者を、オウム真理教に走らせたんじゃないか。言い換えたら、時代が持っている一つの問題の病理的な現象が現れたものがオウムであります。私たちは、そういう解釈の仕方を、もう少し、考えなきゃいけない。

じゃあ、住専はどうなんだろうか。住専というのは、一つのバブルの中で考えられましたけれども、私は、それは経済というものが、どのように世界と繋がってるかということについて、疎（うと）かった。そういうことに対する反省。経済は、自分のところだけでできると思っていた反省というものを考えなきゃいけない。

よく笑ったものです。日本中の土地の価格を計算したら、日本はアメリカを買うことができるんです。だってアメリカの都市、土地の値段、全体を合わせたものと日本の土地の値段を全体を合わせたものを考えたら、日本の土地は高いから、日本を売って、日本の土地を全部売ったら、アメリカの土地が全部買えると。そしたら日本を売って、アメリカを買おうかと。

そんなこと、本当はできるわけない。初めから、そんなこと、どっかに無理があるのは分かっているのに、それを誰も言わないで、経済をどんどん進行してきたのは、誰の責任か知らんけれども、しかし、私たちは、そういうことに対して少しも目を向けていなかった。時代について理解し、分析する目を持っていなかったということについては、私たち年寄りも、もちろん責任がありますが、若者にも責任があるということを覚えておいていただきたい。

しかも、それは、将来がこんなふうに激しく、さっきのように時代が変わろうとしている時に、若者は、そのような社会的な、歴史的な観点を持ってくれなくちゃならない。こういうことであります。

もう一つは、社会ということに対する問題でありましょう。私たちの社会はますます機能化してきます。コンピューター　アンド　コミュニケーション　ということが合い言葉です。

はい、ちょっと聞きます。この中で、コンピューターを扱える人、手を挙げてください。3分の1にも達していません。というのは、コンピューター、そんなん、ちょっとしんどいわ。

実は私、きのう失礼して、ちょっと神戸まで帰りました。神戸でもって7通手紙を書いて、外国に返事をしなきゃならんものが溜まっていて、とても間に合わなくなってきたので、申しわけないんだけれども、きのうの朝、早く帰って、7通の手紙を書いて、そして急いでここに帰ってきたんです。

その7通の手紙を書いたんだけど、その次に、やれやれ済んだと思ったら「いや実は先生、向こうから、これだけ、また来てますよ」と、ファックスや何か、たくさん来てね、もう、困っているんですけど、その中に、おもしろいのがあったんです。

「あなたの電子メールのアドレスを世界に公開していいですか。あなたの電子メールのアドレスを、ロータリアンだけに公開していいですか。あるいは、もう、事務局だけに止めておきましょうか」。私、電子メールのアドレスなんか、ないんです。まだ、だけども、それが当たり前なんです。

そして、この6月からは、ロータリーの理事、僕は理事ですけれども、18人の理事は全部、電子メールと、それから全部コンピューターでもってアクセスして、そしてインターネットでアクセスして、これからの話は皆なそれでしてください。今、あわてています。今から6月までに、私、コンピューター覚えて、インターネットやって、WWWに接触して、ポンポンとやって、向こうからの手紙に、こっちからすぐ電子メールで送る。ちょっと、あわててますんですが、だけども、まあ、何とかそれをやらなければいけない。

だけども、これ、一つの現象ですね。恐らく、そうなるでしょう。皆さん、そこで遅れているんです。3分の2の人は遅れとる。遅れてるだけじゃないんです。これが一つ。

もう一つは、このことによって起こってくる現象があります。今、コンピューターノイローゼ、コンピューター自殺というのが、だんだん多くなります。それは私たちの時代の中において、人間というものが、非人間化という現象が起こってくるんです。コンピューターというのは、人間を機械の中に従属させてしまう。効率は良いけれども、人間性そのものは抑圧されてしまう。

きのう私は、ここでもってリーダーシップの話をした時に、ホーソン工場の話を一つしました。心理学者たちが、どうすれば能率が上がるかといって、電気を何ワットにしたらいいんだろうか、壁は緑色にしたほうが目が休まるからだとか、いろんなことを、ずーっと考えて整理したんですけれども、実は、それよりも一番大事なことは、上司と部下との関係、そしてまた、部下がそのことについて、どういうふうにしてチームワークを組むか。

こういう人間関係がうまくいっている所、殊に上司との関係がうまくいっている所のセクションが一番、機能的だったという報告が出たのが、有名なホーソン工場であります。人間関係のほうが、機械よりももっと効果があったということを見つけたこと。この中から、私たちは人間と人間の関係の本当の意味を、もういっぺん知ることができるのであります。

私たちは、こうして考えた時に、だからこそ、グループ、クラブ、皆さんの同じような仲間が集まってくるということは、そこで初めて一人ひとりが、お互い同士を取り戻す機会になるからだ。ですから、新しいコミュニケーションの時代には、もっとその意味

において、人間性回復のための、こういう仲間が必要なんです。

皆さん方は、これから別れるけれども、今までの例であれば、神戸の人と高知の人が、松山の人と豊岡の人が、皆なが仲良くなって、行ったり来たりして、中には結婚した人もいるんですけどね、そういうふうにして仲良くなってくる。この中で一人でおった時に、あの人が私のことを覚えてくれてるな、という、その繋がりが私たちを強める。

しかも、そういう繋がりが、今からの世界の中で非常に大事になってくる、ということを、覚えておいてください。時間がなくなったから、それ以上のことは言いません。私たちのことについて、そういう意味では、ここで考えられてきたことは皆さんが考えている以上に、大きな宿題を皆さんに与えている、ということを覚えておいていただきたい。

私たちは、そのことをこれからも学びながら、一つやっていただきたいということをお願いをして、最後に、ちょうど30秒しか過ぎておりません。終わります。

（拍手）

閉講式

ごあいさつ

森　滋郎

本当は、がバナーが来られるはずなんですけれども、来られないというので、お前代わりに何か話しせえ。

私、実は、きのうから参加しておりまして、本当の話は、今日だけなんですけども、非常に皆さん方も熱心に、レベルの高いライラだなあと思いながら聞いておりました。

私、精神科の医者でして、この間、家庭内暴力で、ものすごく暴れる子供がおりまして、それはテンカンの子なんですね。テンカンというと意思がパッと無くなるんですね。その子は、小さい時に頭を打って、それからテンカンになりました。現在、30幾つになっているんですけれども「オレは何で、こんな30幾つにもなってまだ一人でいるのか。これはケガしたお陰じゃ。お父ちゃんが悪い、お母ちゃんが悪い」。いつも、そう思いながら、テンカンの発作が、月に一遍ぐらい起こるんですね。

私が5年ほど前から、その子の世話をしているんですけど、テンカンというたら脳波を見ると、ピッピッと、トゲがあるんです。大体、300人に1人ぐらい、おるんですよ。この中に、おるかも分からんね。で、発作が出ないけれども、脳波を調べると、怪しいなという人が、300人に1人ぐらいおります。

発作というと、ちょっと意識が無くなるんですね。その、意識が無くなるんですが、薬がありまして、うまく合ったんですけれども、3月か4月に1回ぐらい、ちょっと忘れることがあるんですね。

私は、薬としては、この子は、これ以上、仕様がない。どうしたら、この子、救えるか知らんと思うとったんです。結局、その子がテンカンに対して、こだわってこだわって、こういう子は、こだわるんですけれども、朝から晩まで病気のことを考えては、腹立てとんですね。

「あのなあ、テンカンていうて、君、せいぜい1分もかからへんよ」と僕、言うてやったんですね。そうですよ、何秒でおわるんですよ。その何秒のために24時間、悩む必要はないやないか。これが、その子にわかったんですね。「そうや、オレは24時間、病気と

違うんや。何秒か病気になる。いつ起こるか分からへん。それで年がら年中、悩んでいる」。

そういうので、ずーっと統計を取ると、その子は午前中にそういうことがあって、昼からは何ともない。そこで一つ午前中だけ考えたらいい、悩んだらいいと、そういう発想の転換ですね。

今日、いろいろな先生方の話で、考え方を変えろというふうな話がたくさんありましたけど、その子も、今までの病気というものに対する発想の転換をさしたところが、薬が効いたのか、治っちゃったですよ。

それでも薬だけ取りに来るからねえ。私、結局、精神というものは、すごいもんだなあ、いらいらばっかりしていると、テンカンは治らないけれども、発想を変えただけでも治っていく。こんなことを、きょうの講義を聞いておりながら、皆さん方も、どんな辛いことでも、辛い、辛いと思っていたら、いつまでも辛いんで、おもしろいなあ、今度どないなるやろ、今度どんな災難がくるか待っとれ、というふうに発想を転換すると、うまいこといくんでないか知らん。

こんなことを、ちょっとお土産に、と思いまして、時間をいただきました。ありがとう。

（拍手）

閉講式

ごあいさつ

第2670地区ガバナー
佐藤成俊

ただ今ご紹介たまわりました2670地区の佐藤でございます。皆さんが非常に熱心に、しかも先生方のお話し、私は本当に身の引き締まる思いがすると同時に、これからやるぞ、というような気持ちにもなる。こういう立派なお話しを28日から4日間の間、皆さんがライラセミナーということで、勉強してきたのでありますが、終了することになりました。これに対します、一言、お礼のご挨拶を申し上げます。

まず初めに、4日間を通じまして、終始、熱心なご指導をたまわりまして、また感銘深いお話しを頂戴いたしました今井RI理事さんを始めといたします講師の諸先生、そして、その感銘深いお話しをお聞きになり、そしてまた、そういうものを加えまして、松原先生、あるいは渡辺先生、梶浦先生と、次々と立派な講師諸先生ありがとうございました。厚くお礼を申し上げる次第でございます。

また参加されました受講生の皆さんには、ロータリーの、また皆様方にも4日間にわたります夜、昼となく、非常にご熱心に、お世話をたまわりまして、ありがとうございます。衷心より厚くお礼を申し上げます。

今回のライラのメインテーマは、ご存知のとおり、人間の心を取り上げたものでございましたが、各先生におかせられましては、いわゆる素晴らしいお話しをお聞きいたしまして、皆様も恐らく感銘、感動されたことだと思っております。

われわれ人間社会というものは、平和で幸せな社会がくればいいんだと、こういうことだけでなしに、皆様一人ひとりが、どう、この社会を築いていくかどうかということにあるんじゃないかと思います。

すなわち、この未来を築く人たちは、皆さん一人ひとりの双肩にかかっております。このセミナーを通じまして、受講された皆さんには、これを一つの契機として、また青少年のリーダーとして、そして一層のご活躍をされるのを期待するものでございます。

またロータリアンの皆様の今後のご清祥を、ご祈念申し上げる次第でもございます。

最後になりましたんですが、このライラセミナーの開催に当たりまして、地元、お世話

になりました小豆島のロータリーの皆様の、終始変わらぬご親切なお世話を心から厚くお礼を申し上げまして、本当に感想深いこのライラセミナーであったということを感謝しながら、私は、お礼の言葉とさせていただきます。

どうも皆様、ありがとうございました。

（拍手）

ごあいさつ

第2670地区ディーン
篠原成行

ようやく、私の責任も、ここで終わるわけでございます。どうも受講生の皆様も、またロータリー関係の皆様も、高い所からではありますけれども、お礼を申し上げておきたいと思います。どうもありがとうございました。

さて、3泊4日のライラ、皆様いかがでしたか。かなり、お疲れになったことと思います。皆さんより少し年を召されたカウンセラーの先生方のほうが、もっと疲れておるんじゃないかなと思います。

ちょっと、カウンセラーの先生方、お立ち願いたいと思います。

受講生の皆さん、どうか感謝の気持ちをもって、拍手を送っていただきたいと思います。

(拍手)

どうもありがとうございました。私からも、お礼を申し上げておきたいと思います。

さて、初日は松原先生、そして2日目は渡辺和子先生、そして本日は梶浦先生と今井先生、それぞれの皆様が、いろんな言葉を引用されて、心について、お話がありました。どうか皆さん、皆さんも、このお話をいろいろ聞かれて、今、68名の皆さんは、それぞれ68通りの受け止め方をされておると思います。

それで結構だと思いますが、それを皆さん、地域の社会に帰られて、リーダーとして、このライラでのエネルギーを大いに燃やし続けてほしいと思います。

そして、このライラは、ご存知かもわかりませんけれども、二度、来れることになっております。もう一度、推薦クラブが、もし推薦していただければ、出席できることになっておりますので、もう一度、来たいと思う人がおいでましたら、エネルギーが無くなったら、一度また挑戦してみてもらいたいなと思っております。

もう、これで私、終わりよ、という人も、今ちょっと、こちらから、お顔を拝見していますと、もうワシも年いき過ぎたけん、もう次はないなあ、という感じの人も、おいでるようですけれども。

あるロータリアンで、60何歳だったですかね、ロータリアンとしてでなくて受講生として出席したいという人がおいでまして、この人をお断わりするの、弱りましたです。奥の手を使って、もう満杯ですので、どうもすみませんと、こういう、お断りをした経緯がありますけれども、そういうロータリアンもおられます。ですから、お年のことは余りお考えにならないで、エネルギーが無くなったら、どうか挑戦してもらいたい。

そして、もし許せば、ロータリアンになられて世話を願いたいと、そういう人はお願いいたしたいと思います。

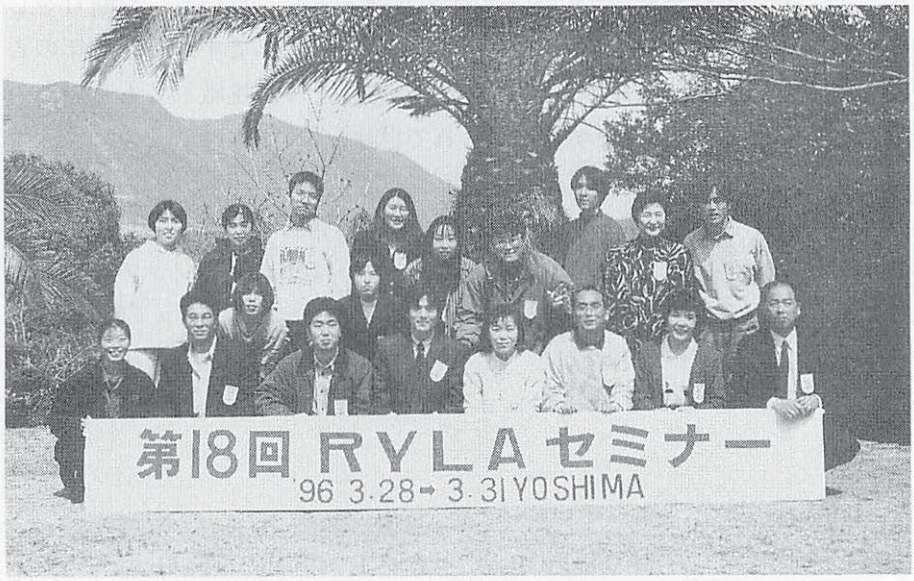
いずれにいたしましても3泊4日、どうも皆さん、ご苦労さんでございました。どうかこれから地域社会に帰られて、地元へ帰られて、大いにリーダーシップを発揮していただきたいなと、かように思います。

どうもありがとうございました。

(拍手)

参加者感想文

A　班



A班カウンセラー　福　井　博　文

この度は、3泊4日のロータリーライラセミナーにカウンセラーとして参加させられ、大変良い経験をさせていただいたと思っております。第2680地区ライラ委員長の小池弘三氏より勧められての参加でしたが、当の御本人がご尊父急逝のために忙しく不参加となり多少心細い思いで当日を迎えました。しかし、小池氏は当日、姫路駅まで見送りに来て下さり、ありがたく思っています。

ライラのスタッフの方々にご紹介いただき共に余島に渡り初日は、ゆったりとした時間の中で心の、又、カウンセラーとしての準備をさせていただきました。2日目から3日間は、受講生諸君とのおつき合いでした。

カウンセラーの私は牧師として、教会関係の青年達のお世話をすることはよくありましたが、ライラの受講生たちは、企業の社員、教員、商店主、福祉関係の施設勤務、学生等の仕事に従事し、宗教もあったりなかったりで、多様な立場の方々でしたので、個性があり大変に楽しいおつき合いをさせていただきました。あとで考えてみると、お喋りの相手をしていた位のことで特別に何かを教えたり、伝えたりすることしかいたしませんでした。これがライラのカウンセラーの基本姿勢ということでした。

30日のフォーラムの後、徳島市から参加された宮崎智史君と香川県三豊郡から参加された大西佐和子さんが、それぞれ1日ちがいで誕生日を迎えておられ、皆で誕生会を企画しました。大事な誕生日を離島で迎えた二人は、きっと淋しい思いをしていたと思いま

すが、新しい多くの仲間に祝ってもらえて、幸せだったともいます。最後に私事で大変恐縮ですが、私は、YMCA理事関係者に随分嫌な思いをさせられたことがあり、個人的には、あまり好きでない団体でしたが、この度ロータリアンの山口総主事や、今井RI理事と接して、少しその思いが薄くなったように思います。お二人には大変感謝をしております。職業、宗教を越えて、一人の人間としての理想に向かって進まれるロータリーのライラセミナーが、今後も益々ご発展されるよう祈っております。

A班カウンセラー　有　光　洋　子

今年もこの美しい余島でのライラセミナーにカウンセラーとして青年と共に受講する機会を与えて下さった事に感謝致します。

いろいろな地区から、職業や立場の違った青年たちが集まり、4日間共に生活する事により、友情が生まれ、今まで歩いて来た人生を振り返り、またこれからの人生に何か大きな光が見えて来た事と思います。

とても素晴らしい講師の先生方のお話を聞き、キャビンタイムでの話し合いを聞いていますと、大変真面目でエネルギッシュで頼もしく感じました。

この青年達が私達の未来をささえてくれるのだと思うと、とても安心感があります。

私自身、何も出来ませんのにカウンセラーとして参加させていただき、松原先生、渡辺先生の話術もさることながら、実のあるお話に心打たれ、これからの人生を充実させる為にも毎日毎日を大切に生きていきたいと思いました。草木に学び、玉ねぎの花でも良い、精一杯生きていこうと！

最後に、このセミナーを企画し、準備して下さいましたロータリアンの皆様に感謝致します。

ありがとうございました。

A班カウンセラー　三　宅　文　恵

昨年のライラセミナーに参加させて頂いた主人より本当に素晴らしい会だった。あの経験をお前にも味わわせてやりたい。是非行こうと誘われ、講師の先生のお話を聞かせていただけたらという気持ちで来させて頂きました。それがカウンセラーの補佐、見習をしてみたらと云われ、ロータリーの世界にNOの言葉はなく不安ながらも貴重な体験をさせて頂きました。

日々胸がふるえる程の感動と刺激的な本当に価値のある4日間でございました。今からでもまだ遅くはない。この経験を胸に秘めてささやかながら人の為に少しはお役に立た

せて頂きたいという気持ちでございます。

今時の若者とよく申されますが、本当にどの方も真面目に、自分の生き方、有り様をしっかり考えていられるのがよくわかりました。

ロータリーにおける奉仕の理想、友情の輪の真の意味がはじめて理解出来一人でも多くのロータリアン、家族の方も参加され、私と同じ様にこの感動を味わって頂きたいと思います。奉仕、サービス、ボランティアの意味が今少しずつ私の気持ちの中に芽生えました。この機会を与えて下さった全ての皆様にどの様に感謝の気持ちを述べたらよいのでしょうか、言葉が見つかりません。

ありがとうございました。

皆々様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

そしてこの7月よりの私達にとりましての仕事にアドバイスとご指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

萩　原　典　久

開講前、私は正直言ってあまりこのセミナーに期待してはいませんでした。しかし、私のこの考えを打ち破るのには、1日とかかりませんでした。大勢の仲間たちと、温かいロータリアンの方々に囲まれて、私は充実した4日間を過ごすことができたと思います。

私がこのセミナーで得られたものとして、主に4点があげられます。第1点目は、職業的にも年代的にも、多種多様の方々が集まるがゆえに、新しい物事に対する見方が芽生えたと思います。普段、会社という集団で生活している私にとって、他の集団に属している人の話や、ディスカッションは、今後の私の視野を広げるという点で、非常に有意義なものとなるでしょう。

第2点目は、自由、自主、自律の意味を、言葉ではなく、体感できたことです。社会人として、自分自身は当然備わっていると思っていましたが、頭の中でしか理解できていなかったことが、判ったような気がします。

第3点目は、諸先生方のお話を聞くことにより、日頃考えてもみなかった事柄に対して考えることができた点です。日常から離れて、心のゆとりを持つことの大切さを実感できました。

最後の第4点目は、新しい仲間の輪を作れたということです。人と人との交わりが、こんなにも自分自身に人間味を付加してくれることに気付くと共に、生き生きとした自分を見い出せたと思います。

今後、RYLAセミナーに興味を持つ人を見かけたら、私はこのセミナーの良さの一部

だけでも伝え、参加させるよう努めたいと思います。そして、自分自身も、人間社会という「セミナー」の中で、少しでも自分を見つめていくよう、努力したいと思います。

大　中　幹　夫

この3日間は、大きかった。自分の中の何かが変わったような気がする。20歳代の若い人から年輩の方々まで多くの人が参加する中で、発表もした。とても、緊張した。しかし終えてみると充実感にあふれてた。僕は、大学でのボーイスカウト部の部長をしているのだが、常々リーダーというのは難しい、とか指揮らなきゃいけないとか、かなり気負っていたと思う。3日目の夜のフォーラムの意見交換は、これからの自分にとって多くのプラスになった。僕が一番いいなと思ったことは、まず1班約15～16名でその中には、カウンセラーも含めると20歳代から40歳代まで、多くの人がいることではないかと思う。それは僕は大学2回生だが、これからの就職などの話や相談、また年配の方々にとっては若い人らのパワーなど、とても新鮮だったのではないだろうか。また職種も、学校の先生や、多くの企業、飲食店経営、福祉関係など、豊富である。いろいろな人らのいろいろな意見、これが一番僕にとって印象的だった。そして忘れてならないのが、松原哲明師と渡辺和子氏の講義である。この講義によって、もともと僕の中にあった一つの考えが、かなり変化した。難しい話とは一つも思わなかった。しかし、奥が深く考えさせられる内容であった。

この3日間、たった3日間でこんなに衝撃を受けたことはない。僕の人生はこれから、今日の経験をたくさん生かして行きたい。

最後にこのRYLAセミナーに推薦していただきまして誠にありがとうございます。ガバナーをはじめ、多くの皆様、お疲れ様でした。

山　下　知　己

私は今回初めてこのライラセミナーに参加させて頂きました。地元ではボーイスカウトの指導者として大学の中では演劇系クラブの部長として過ごして来ました。

そしてこのロータリークラブのお誘いで参加させて頂いた訳ですが、やはり最初に思った事は、「レベルの高いことだな」ということでした。

最初に講演者の松原先生の話にしても平易にお話されることでしたけれど、使命についての考えや六波羅蜜のこと等レベルの高いものだ。そして自分の考えも変わるなと感じました。次の講演者の渡辺先生にしても、私は一番キーワードにしたいと思った言葉、「諸条件からの自由でなく諸条件に対しての自分のあり方を決める自由を求めよ。」

これは今後、私が何をする時も座右の銘としてもちつづけようと思います。

また受講されている参加者の方も各方面から推薦されることもあってか考えをもっておられる人が多く感心しそして自分もより近づきたいとも思いました。

立食パーティーやキャビンタイムでも尊敬しあえる人にも出会えました。

当然受講している時間は大切ですが、こういったディスカッションできる場またお互いが腹をわって話しあえた時間はこの4日間の中で非常に大きい部分を占めているにちがいありません。

これからこの4日間のセミナーを終えて姫路にもどる訳ですが、もう一度セミナー期間に考えたこと聞いたことを自分の意見としてまとめようと考えています。

最後にカウンセラーや開講をお手伝いされた方々にも感謝します。

天羽　甲

青少年のリーダーを養成することを目的としたこのRYLAセミナーに、少年剣道教室の指導者として参加させていただきました。

テーマは「心」という事で、リーダーという立場の人だけではなく、人として最も大切なものではないかと思い、勉強させていただきました。

講演では、先生方がおっしゃっていたように「使命」とは、命を使うものだということだと改めて実感しました。

渡辺先生がお話された中に、人に変わってほしいと思うのではなく、「あなたが変わらなければ、どこへ行っても同じだよ。」全くその通りだと思いました。

実際、子供達にあいさつをしても返事がこないことが多々ありました。

その時は、さすがに腹がたち、もう一度あいさつをするのですが、小さい声で返ってきました。

自分に納得いかない時に腹をたて文句を言うのではなく、何度も何度も根気よく続けていればきっと相手に通じるのだと思います。

バスセッションで話し合い、フォーラムで「リーダーの心」を発表しましたが、あたりまえの様に思っていた事でも、説明する事によって改めに知ったように思います。

4日間の中で、こんなに熱く語れることは、これから先ないように思います。

見知らぬ人から仲間が出来た事に深く感謝したいと思います。

本当に有り難うございました。

河　合　麻美子

このセミナーで、たくさんの人に出会いました。学校の先生や企業で働いている方、学生など、様々な集団に属している人達が、運命的な出会いによって、共に学び共に語り合うことができたことは、私の人生の中で大変貴重な経験となりました。このセミナーで集まった方との討論は、どれも高度なレベルであり、社会人としての様々な経験を生かした視野の広い意見が次々に出されました。一人一人がしっかりとした考えを持ち、鋭い観察力や洞察力を身につけていることを強く思いました。この事は、学生である私にとってある意味でショックであり、自らの未熟さを感じずにはいられませんでした。班の中での討論をはじめとする意見を求められる場で、その中で必死についていこうとする自分がいました。

また、「人生を必死に生きていないじゃないか！」ということを強く感じた4日間でありました。たった一度しかない自分の人生を何となく時の流れに身をまかせて過ごしている、周りの意見に影響され自分は一体何がしたいのか、どう生きていこうとするのか、ということをセミナーを終えて強く感じます。それは講演の中での“命の使い方”や“時間”に関するとらえ方などの影響が大きいです。そして、このセミナーで出会った人生の上での先輩方との話を通して自分の生き方を考えさせられました。

余島の素晴らしい自然の中で、このような有意義な4日間を過ごせたことに心から感謝します。いろいろとありがとうございました。

柏　迫　理　砂

私にとっては、本当に意味のある研修だったように思う。日々の業務に追われ、最近、本当に自分のことについて考える時間を持つことができなかった私にとって、この4日間でいろんなことを考えた。自分のこれからのこと、仕事のこと、恋愛や将来のこと。講演の中で、特に心にしみた言葉「心のゆとりを持とう」。私は本当にゆとりのない生活を送ってたんだなぁと改めて思った。すごい内容の講演を聞くことができ、今まで知らなかった土地の人たちと親しくなり、その中に、いろんなことを考えられる時間を過ごすことができたことを、本当に感謝してるし、こういう研修の場を提供していただいたロータリー関係の方々に感謝しています。

ただ、少し自分に対しての不安な所があり、こんなによかった研修で得たことを、地元、神崎町で、どのように生かしていけばよいのだろうと思っています。公務員という職を選び、かつ今は教育委員会に所属している以上、何か住民の人のために役立てるようなことをしなくては……。これからじっくり考えて、事業を組んでいかなければいけない

なと思っています。

いろんな人に出会い、いろんなことを学び、私自身もっと大きな心が持てるよう、ゆとりのある心が持てるよう成長していきたい。そして最後には、生まれてきてよかった。いい人生だったなと思えるような人生にしていきたい。

本当に4日間いろいろとお世話になり、ありがとうございました。またいつかここ余島に来れるよう、その時は今の自分より、少しでも成長していたいなと思います。

小　林　利　加

私は今、特別養護老人ホームで働いております。福祉の道に進む事になりましたのは、本当に、たまたま選んだ専門学校が福祉系の学校であったために、この仕事の奥の深さにずるずると引きこまれただけ……という理由というには恥ずかしい理由です。たまたまこの道に進むことになった訳ですので、いつも自分の心の中に、「どうして、私はこんな事をしているのだろう。」「なぜ、私は、こうして生きているのだろう。」と、自身の人生などについても考えておりました。生きること、それは、かならずしも良いことばかりではありません。つらい事の方が多いのではないかと泣きたくなります。生きたくて人は生きているのでしょうか。私は、私という人間は、生きたくて生きているのではないと考えています。私は、生きたくて生きているのではなく、神に、人に、生かされているのだと思います。生かされていると思えば、私はなんだか心が楽になりました。福祉の道を選んだのも、実は、選ばれた、という事なのかもしれません。私の人としてのこの役割が、人間福祉という道であるのなら、一生懸命咲いてみたい。ただ、ひたすらに生きなければ……。

命を使いに生まれてきたと、今回の松原導師のお話にありました、命の使い方、人生のテーマ、私の不完全な心をはげまして下さるお話でした。愛をもって、それを育て、芽を出し、花を咲かし、実がつく日まで、ひたすらに生きなければ……と思います。

ロータリアンの皆様の、心あたたまるご奉仕の数は、私の様な者に参加する事を許して頂き、学びの時をお与え下さったご恩は、私は、一生忘れません。

本当に、ありがとうございました。

1996. 3. 30

石　井　紀　雄

冷静に考えてみると、凄いことである。3泊4日という決して短くはない期間、初見の者同士が一堂に集い、協同生活を行う。行動半径は200mを超えることがなかった。その

特異な集団が、今回のRYLAセミナーのメインテーマである「心」に関して、夜を徹して語り合い、親睦を深めることができた。この一度しかない人生で、今回集まった仲間が時を忘れて議論し合うチャンスを想うと、胸が熱くなる。このセミナーがなければ決して知り合うことのない連中と貴重な友人関係を育むことができた。友こそ人生の宝だと私は思っている。この出会いを大切にしてゆきたく思う。

また、日頃仕事に追われ、時間に迫られて我を忘れて生き急いでいる自分を顧みる良い機会ともなった。日常生活と完全に切り離されることによって、思索の対象を自分とすることができたのだ。コギト・エルゴ・スム。自分というものを、自分の生き方というものを見直すことができた。日常の延長にある休日では、自己の想いを馳せることなど決してしなかったであろうから。

今回のセミナーで、初日の講演とカウンセラーの人には特に感銘を受けた。目から鱗が落ちるとはこのことをいうのだろう。とり分け、3泊4日の間、寝食を共にしながら交流したカウンセラーと仲間には、感謝の念に耐えない。教育とは、人間と人間の全人格の接触の中でこそ行われるものだということを再確認させられた。

このセミナーで自分が得ることのできたものを、私は今後の自分の教員生活の中で生かしていきたい。このチャンスを端緒に、自己の変革・鍛錬に努めねばと、心の底から自発的に考えさせられるセミナーでした。

有り難うございました。

武　智　孝　志

心とは何か？

普段多忙な会社人間にとって無縁のことばであった。

ところが、見知らぬ人との出会いを経て、いくつかの収穫があることに気づいた。

まず新しい友ができた。残念ながら最年長者ではあったものの、最低でもこの4日間の寝食を共にした同室の三人とは、一生に近い人間関係が続くであろうこと。

2つ目は、会社人間の自分が見えた。仕事がら、料金回収部門という「つらい」仕事と人間関係の中で、ただ突っ走っていた。

後行程の仕事だけに前行程の人に対して、自分の仕事を正当化し、前行程を責める自分がよく見えた。

サラリーマンである以上、自分に与えられた仕事は完璧にこなすのは当然であるが、そこに立っている自分がよく見えた。

残念ながらその解決策を手づかみにすることはできなかったものの手ごたえはあった。

3つ目は、フォーラムの時間においてロータリアンの方からの発言である。

参加者感想文

オーナー社長等いわゆる地域社会のVIPの方とお話し（議論）する機会はほとんど無いが、突然発表された内容はインパクトがあった。結論は「人格とか倫理」というものだったと記憶しているが、下っ端サラリーマンの私が持っている考えが正当化された手ごたえがあった。

いずれにせよ、短かった4日間は有意義であった。ここに派遣していただいた地元ロータリークラブに敬意を表するとともに御礼を申し上げる次第です。ありがとうございました。

追記

同期のみなさんごきげんよう。

またどこかの街であったなら、酒をのみましょう。

宮　崎　智　史

この度、徳島ロータリークラブの方々の御協力にて、ライラに参加させて頂きました。

テーマが「心とは」という漠然とした言葉ではありましたが、これ程、奥の深い、考えさせられる事はないと感じました。

講演においては、初日、龍源寺の松原哲明の人生経験に基づく内容の濃い講義を受け、今までの自分自身の物の見方に疑問を感じ、また、違った広い視野での考え方を学びました。

松原氏の話の中で「一本の道を」という詩では、人間が生きている、生かされているという上で、草木の様に一生懸命に果たして生きているのだろうか悩まされる詩でありました。

講義においては自分の今後に活かせる内容が殆どですが、やはり今回の一番の経験は人との出会いにあったと想います。

3泊4日という短い期間ではありましたが各班で人との付き合いの中それぞれの人の考え方を肌で学び取る事が出来ました。

4つの班に分かれてのバズセッションでは3日目という事もあり、かなり打ち解けた中で楽しくも緊張する討議が行えていたと思います。

話は前後し、また、簡単にさせて頂きましたが、最後に、ロータリークラブの皆様方の御指導、惜しみない暖かい御協力には本当に感謝し、有り難うございました。

石　井　神　奈

いつも心に太陽をもって明るく生きようと努力はしていても、人とはもろいもので、すぐに傷つき、自分を憎み、さらに他人にも「とげ」を向けてしまう。だから私はそんな傷つきやすい心は必要ではないのではないかと思っていた時に「ライラ」に参加できました。渡辺先生が、そんな心を大切にしている。その心があるから他人を想い、やさしい気持ちになれるからとおっしゃっていた。その後、自分にもやさしく素直さがもどった気がしました。また、他人の言葉や行動で自分に「とげ」を向けそうになったら憎んだり嫌ったりするのではなく、自分を高めるために、私に与えて下さったチャンスだと思って接していこうと思いました。このような行動を続けていたらきっと『かわかない心』をいつも持てるような気がしました。

もう一つ守ろうと思ったことは、言葉によって傷つけられるのなら、私は私の話す言葉には責任を持とうと思いました。『ついうっかり話した一言』でと後で思うのはこれで終わりになるようにと願っています。

4日間で自分の内面をもっと深く考えることを学びました。決して今までもさぼっていた訳ではないけれど多くの人達でテレビにもじゃまされずに一つのテーマを考え話せた時間に感謝します。私の命のローソクを明日から周りの人々と共にともしていきたいと思います。『ライラ』に参加できて良かったと思いました。

大　谷　真智子

3泊4日のセミナーも、アッという間に過ぎてしまい、開講式を終えた今、充実感と、明日からの希望で今、胸が一杯です。

今回のセミナーへの参加に際して、何も予備知識（ロータリークラブのこと、RYLA）がないまま、とにかく日々の忙しさの中で見失いがちな自分を見つめ直すこと、異年齢の豊富な経験をお持ちのロータリアン、受講生の皆さんとの交流が、何よりも今の私にとって必要だと思い参加させて頂きました。

くしくも、第18回セミナーのテーマが“こころ”という、非常に奥深く、私が日頃目ざしている“こころ豊かな人づくり”を推進するための何かヒントが得られるのでは……との思いもありました。

経験豊かな素晴らしい4名の講師先生による講演は、今までにない感動と、これからの課題を私に与えて下さいました。

今回の講演で興味深かったのは、仏教、カトリック両宗教家の立場からのお話が伺えたことです。それぞれの宗教のカラーを感じつつ宗教を異にしても、命の使い方を大切に

するという根底は一緒であることを強く感じました。そして、一人の人間としていかに生きるかの指針を示して下さいました。

また、今井先生、梶原先生には、グローバルな視野から、世界の中の一人である自分自身の目の向け方、世界の流れ、身の回りの流れに流されることなく、立ち止まって分析し課題を見つけ、解決していく力を養うことが今の若者に最も課せられている問題だと思います。

今後、このRYLAで学び、共に語り合ったロータリアン、友を核に、私自身の人間銀行を大きく発展させ、自己を磨く努力をしていきたいと思っています。

今回のチャンスを頂き、お世話いただいたロータリークラブの皆様に感謝しております。

本当にありがとうございました。

大　西　佐和子

あちらこちらで春の息吹の感じられる3月28日、この余島に渡ってきました。美しい海と山の緑に囲まれた素晴らしい環境で、たった4日間でしたが、貴重な体験をさせていただくことができました。

初日から松原先生をはじめ渡辺先生、今井先生、梶原先生の講義を聞き、大変感動いたしました。4日間、「こころとは」をメインテーマに、普段ではじっくり考えないことを時間をかけ、根本から考え直しました。また、キャビンタイム、バズセッションでは、自分とは異なる立場の方のさまざまな意見を聞くことができました。中には胸にグサッと突き刺さってくる意見もあり、余島に来る前と今では、ある物事に対する考え方がガラリと変わりました。これをきっかけに今後の自分が一回りも二回りも成長し、前進して行けたらと思います。

このセミナーの最終日は私の誕生日でした。この日は私が生まれた日であると共に、生まれ変わった記念日として忘れられない日となりました。ほんの数日前に知り合った友人達に囲まれてみつめたロウソクの炎の赤は脳裏に焼きついています。この炎はかけがえのない友情、講義と討論から得た心の栄養のあかしとして、ずっとともし続けたいと思っています。

最後に貴重な体験、楽しい思い出をくださいましたロータリアンの方々に厚く御礼申し上げます。

中　川　　剛

いい天気だ。ちょっと暑いぐらい。…来た日はどんな天気だったかな…ってまあ、どうでもいいけど。これだけ暖かいと眠気に襲われる。昨日は朝5時ごろまで飲んでたし。

昨日今日知り合った人たちと三連チャンで飲んだのは初めてだけど、いや〜、楽しかったあ。酒の種類は少なかったけど。

来る前は何しに行くのか全然分かってなかったけど、で、終わってみても結局何しに来たのかはっきり分からないけど、とりあえず来てよかったな、とは思う。ホントに。言葉が浮かばないけど、何て言うか…一生忘れないってカンジ？みたいな。特にA班の人達。一生忘れませんよ。で彼らに「ホーッとした顔」って言われたけど、実際ボーッとして何も考えてない。でもこの4日間で何かしら得るものはあったと言うか、多分明日からもボーッとした顔は変わらないと思うけど、中身はちょっと変わってくかもしれない。ちょっとね。

今これ書いてるシャーペンは借りモノなんだけど、頼んだらとても気持ちよく貸してくれて、いやあ、ホントにいい人だ。借りた手前、これだけ誉めときゃいいだろ。僕って礼儀正しいなあ。でもホント、そのコに限らずみんなホントいい人で、この人たちと知り合えただけで、来た価値は十二分にあった。

あと松原哲明氏。彼の話にはホントにメチャクチャ感銘を受けた。表現力ないから表現しきれないと思うけど、ホントに、来てよかったと思ってる。他の班の人たちには、グラサンかけた怪しいヤツってイメージだろうけど、結構真面目なんですよ、みなさん。

あとは朝風呂に入れりゃベストだったんだけど。

…支離滅裂で訳分かんない文章だったろうけど、とりあえずみなさん、松山来る時はTelして下さい。案内しますよ。約束しますわ。

坪　井　幸　雄

私は開講前日、期待と不安で眠れませんでした。しかしいざセミナーが始まると不安が全く消え去り、期待が増していきました。そしてオープニングパーティーで私はびっくりした事が有りました。それはロータリアンの方々がまるで同世代の友人の様に親しみ易く会話を交わして下さる事でした。私を“君”でなく“さん”で呼んでいただき、思い出や世間話に花が咲いた事、この様な目上の方との会話は初めてでした。ここでも既にRYLAセミナーの意味が少し分かった様な気がしました。夜のキャビンタイムでは年の違う人々が集まり、例えば「男性と女性の思い、考え方の違い」等日々変えたテーマで夜遅くまで話し合いました。そしてロータリーとは何か、福祉はどう有るべきか。そ

して何が足りないかも話し合いました。

松原師、渡辺氏、今井氏、梶原氏、その他大勢の方々の話も、とても興味深く、感動させられました。

バズセッションでも今まであまり考えない「リーダーのこころ」これも私自身を向上させるのに大いに役立つ事だと思います。

私は以前より世の中の役に立ち微笑みを分けれる様な事をしたいと思っていました。その為に何が出来るかを考え、それをより大きく実現させたいとこのセミナーに参加し、話し合いました。閉講式を終え、今再び考えると、熱意、情熱全ての面で成長し、一回り大きくなったと思います。

今後の生活、活動において、今の熱い心を忘れる事なく、今後生きていこうと思います。

最後にこのセミナー運営委員会の全ての方々、ロータリアンの方々に対する感謝の念は絶えません。誠に有り難うございました。

池　田　やよい

大学3回生の私の春休みは、ロータリーに始まり、ロータリーに終わりそうです。その締めくくりがこのライラセミナーセミナーになります。

2月にの案内を受け、テーマが「心とは」とのことで、少し予習をしようと思いつつ何も出来ないまま当日になりました。予習がない反面、講義を素直に受け取れた様にも感じています。気持ち良くうなずき、笑い、涙して、また一つ幸せになれました。

ほんのりと暖かい風と日毎にふくらむ桜のつぼみの快(ココチ)良い中で、ちょうど1年前の今頃の私を思い出しました。先輩に誘われ、避難所での炊き出しを始めたのが去年の3月末でした。あの時、妙な使命感、義務感を持って料理をしていた様に思います。不安や恐怖もありました。今回のセミナーに参加して思うのは、私はあの時考えるもっと必要な事を忘れていたかもしれません。過ぎた日を悔やんでも仕方ないので次にいかそうと決意しました。

短い期間で、初日のキャビンでの沈黙が嘘の様に語り合える友達が出来、これでまた、一つ幸せになれました。様々な環境の人が集まりそれぞれの視点での語り合いは、私に新たな発見を与えてくれました。

セミナーを終えて、これからの課題に、ここで得た幸せを、他の人にも伝えることではないかと考えます。学生生活に戻った後、私の腕前をためしたいと思います。

B　班

B班カウンセラー　塩　出　卓　一

初めての参加のうえ、また所用のために前日のカウンセラーミーティングにも参加できず、ぶっ付け本番のカウンセラーとなり、B班のメンバー諸君や山路カウンセラーには、大変ご迷惑をおかけいたしました。セミナーを終えた今、私自身が強く感じたのは、参加受講生よりむしろカウンセラーの私の勉強になったということです。私は、リーダーのタイプとして、どちらかというと強引にひっぱっていくアクティブなタイプですが、それが時として社員を萎縮させて意見を引き出せないことも多く経験し、なんとか自己改革を図らねばと考えておりました。一歩引いて受講生の意見を引き出そうとする山路カウンセラーのやさしさや包容力に接し、自分の未熟さを感じました。

セミナーの内容につきましては、講義・バズセッション・フォーラムへの流れが全体として今回のテーマ「こころ」で統一されており、非常にわかりやすくまとまりのあるものであったと思います。ただ、ややテーマが具体性に欠けているため、解釈が広すぎてやや戸惑うこともあったこと、天候不順の影響もありましたが、もう少し余島のすばらしい自然に接する配慮も必要ではないでしょうか。

最後に、個性的で前向きなB班の諸君、また再会できることを楽しみにしております。本当にありがとうございました。キャビンタイムの時にもお話した言葉を再度贈らせていただきます。

「ちょっと無理して出かけてみよう、そこに素敵な出会いがある。」

参加者感想文

B班カウンセラー　山　路　喜代子

第18回ライラセミナーに参加させて頂き、大きな感動と、新たな出会いが出来たこと、本当に嬉しく、有難いことと存じました。

めぐり会いの不思議に手を合わせ
念ずれば通じるということを信じて
今あることに“感謝”して
大切な“命”を使いつつ
精一杯　生きていきたい

B班の皆さん、4日間本当に有り難う。

人と出あい
神と交わり
愛の火の
もえるところ　余島で

また会いましょう。

小　巻　雅　代

私は、セミナーに参加する予定だった人が参加できなくなって、前日に参加しないかと言われて参加することになりました。

最初は、3泊4日なんて長すぎると不安に思いました。でも終わってみると、とても短かったです。

松原哲明師と渡辺和子氏の講演は、「こころとは」というテーマで講演され、自分の心にくるようなことがたくさんありました。松原哲明氏の講演では、「一本の道を」という詩がすごく心に残り、渡辺和子氏の講演では、「人間の諸条件からの自由ではなく、諸条件に対して自分のあり方を決める自由」という言葉がすごく心に残りました。

スケジュールも一つのことについてたくさん時間がとってあり、バズセッションでは「リーダーの心」ということを話し合い、たくさんの意見が聞けたのでよかったです。

夜はキャビンで同じ班の人達と話しをしました。同じ班にはいろいろな年齢の方がいて普段聞けないようないろいろな話が聞け本当によかったです。

最初はとても不安でしたがRYLAセミナーに参加して本当によかったです。

同じ班の人たちと仲良くできて本当によかったです。これからもまた会いたいと思いました。

前　川　純　子

わたしはロータリーの活動の方にはほとんどなじみのないまま、教会の神父さんに勧められてこのセミナーに参加した。参加を決意した理由は、ただ「渡辺和子さんのお話が聞けるから」ということのみであった。参加するという返事をさせてもらって、後に落ち着いてから考えてみると、参加するにあたっての不安がたくさん胸の中に湧き出てきたのであった。知らない人ばかりの中での生活、また高レベルの講義や討論に対する自分の未熟さ。しかし、今となってはそのような不安も、笑い話になっている。

「このセミナーを通して、『何か』をつかんでいただきたい。」パンフレットにはそう書かれていた。セミナーを終えようとしている今、自分の心の内を振り返ってみて、確かな変化を心の内に感じている。わたしは自分なりに「何か」をつかむことができたのだ。

渡辺和子さんの講話。それは期待以上に素晴らしく、心に輝く贈り物を与えて下さった。そして松原先生や、セミナーを運営して下さった皆様も、良いお話ばかりでなくたくさんの親切を与えてくださった。

全てを振り返ってみて、つかんだもの、得たものは何かと自問してみても、それを言葉で表すことは困難である。的確な表現はできないが、強いて言うならばそれは「出会いの奇跡」であろうか。ここで出会い、話し合い、共に過ごすうちにいろんなものが見えてくる。きっかけはただ一言のあいさつかも知れない。そして、徐々に心の内に相手の心が流れこんでくる。「ただのおじさん」「ただの学生」だった相手が、自分にとってかけがえのない人へと変化する。これは一つの奇跡であると思う。

わたしはまた普段の生活へと帰っていくけれど、今までとは少し違う。心でもって、この奇跡を温め続け、伝えていきたいと思う。

黒　井　智　美

今回知人より紹介していただき、このセミナーに参加しました。終了した今思うことは、本当に参加できて良かったという事です。自分自身とても楽しみにしていたセミナーなのですが予想をはるかに越えた充実感と、満足感が得られ、とても満たされた気持ちでいます。

とてもゆったりとしたスケジュールで、普段は仕事に追われて物事を考える余裕ないという事を再認識でき自分にとってとても貴重な4日間になりました。

講義についても、現在いろいろと悩んでいる自分と重なる部分などがあり、心にたくさんの事を問いかけることができました。

「人は何のために生まれてきたのか。」

疑問に思ったり、自分はダメな人間だと思っていたのですが、自分の心が軽くなった気がしました。また、自分は完ぺきな人間を目指さなくても良いんだ、「小さきは、小さく咲かん」それでいいんだと、ただ心にゆとりを持ち、時に自分をじっくり見つめ直す日間を持とうと、そう思えるようになりました。

私にとってもう一つ貴重な出来事、いろいろな仲間との出逢いも、心を軽くしてくれました。4日間共に生活し、たくさんの話、体験を知る事が出来ました。普段はじっくりと自分の思っている事を話せなかったり話さなかったりするのですが、ここでは、しっかりと話を聞いてくれ、率直に意見を言ってくれる仲間に出逢うことができました。

私にとっては、本当にすばらしい時間でした。ここでの講義、自分が感じた事、心が動かされた事など決して忘れないと思います。そしてこの全てを思い直すゆとり、日間を、日々の生活の中で作っていこうと思います。本当にありがとうございました。

宮武　信

私は、このライラセミナーに参加することが決まった時、正直いってあまり乗り気ではありませんでした。それが、この島に渡ってみて、余島の自然にふれ、いろいろな職種、いろいろな年齢の人たちと出会い、話していくうちに、このセミナーに参加して良かったと思うようになりました。

講義では、素晴らしい先生のお話を聞いて心にひびくものがあったような気がしています。「命の使い方」や「ネギはネギに」など、このような言葉を心の中に刻んで、今後の人生に役立てればと思っています。

このーライラセミナーも、終わってみると、長いようで短い4日間だったと思います。このセミナーの内容も素晴らしいものだったと思いますが、やはり、いろいろな人に出会えたことが一番の喜びだと思います。キャビンタイムで親睦を深め、討論し、ふだんは言えないことも言えたような気がします。この出会いによって得たものを、今後に役立てていきたいと思います。

赤穂和美

ガバナーの誰かが「明日から頑張るぞという気持ちになった。」とおっしゃいました。

私は幸せ者です。人の幸せを計る定規はないけれども、私にとって幸せとは何だろうかと考えました。それは、私が幸せだと思うことが私の幸せです。周囲から見れば難儀な奴だと思われるかもしれません。余島の南の浜の海はとてもきれいです。海は大きく、深く、たくさんの生き物がいます。私の命が「大海の針」であるならば、私の悩みはその

針の穴程度でしょう。大した事じゃないじゃないか、もしかしたら海のタコにも悩みがあるかもしれないし、いつ生命が危険にさらされるか分からないプランクトンも大変なのかもしれない、人間もなかなかいいもんだ、。と思いました。

私には悩みがあり、皆にもまたあるでしょう。でも“私は悩んでいる”という自分が恵まれていると思います。悩む時間を持つことができ、何を悩んでいるかが分かっているからです。そう、だからと言って不幸ではないからです。幸せな事を探してみて下さい。家族があり、金銭的に恵まれている、といったことだけでなく、こうして余島で全く知らない人達と出会い友になれた事、自分を見つめなおし機会を手に入れた事など。私って結構、幸せ者じゃないか!!と思うでしょう？

そう思えた自分が好きです。なんだ、私は私のままで頑張ろう、無理しなくてもいいんだ、と思いました。私を幸せにしてくれた余島に、RYLAに感謝しています。余島は、決して余りの島ではないと思います。与えられる島と言う字をこちらの島へゆずって欲しいと思いました。(私は今の今まで与島という字がこの島の名前だと思っていました。)

与島と、この機会を与えてくれたスタッフの方々、そして私の友達に、ありがとうと言いたいです。ありがとうございました。

山　﨑　素　子

ライラセミナーに参加したきっかけは、私が勤務している高校からの紹介であった。ロータリーについては、聞いたことがある程度であったため、このセミナーで、どんなことをするのかについても、よくわからないまま参加した。いろいろな場所から、そして、いろいろな立場の人が来られる、と聞いていたので、友達がたくさんできるといいなあ、とぐらいに考えていた。実際、3泊4日のセミナーの中で、多くの人達と知りあうことができたし、キャビンタイムやバズセッションでそれぞれ違った考え方、意見を聞くことができた。また、4人の講師の先生方の経験豊富で貴重なお話を拝聴することができ、良い機会であったように思う。

私達は、毎日の生活の中で、いろいろなことを考えながら暮らしていると思う。悩みを持つこともある。ささいなことかもしれないが、自分だけで思いつめることにより、深みにはまってしまうことさえある。そんな時に、一歩立ち止まって、今回のセミナーでの講演で聞いたことを思い出すことにより、うまくやっていけるような気がする。今日で3月も終わり。また明日から新しい月が始まる。学校であれば、新しい学期が始まる。新しい気持ちで力強く頑張りたい。

ライラセミナーでは、ガバナーやカウンセラー、ディーンの方々が、私達の世話をして下さった。また、食事や交通の手配等、こちらが何も心配しなくても、細かく留意して

下さり、安心して参加することができ、本当に感謝している。帰ったら、職場の人に、今回のセミナーの内容を紹介したいと思っている。本当にありがとうございました。

上　田　恵　介

初めての小豆島。観光気分と少しの向上心を持ってたどりついた島。いったい誰が参加するのだろうかと不安に思いつつ乗った高速船。余島に到着して気付いた事。それは皆20歳代の若者達であるのだ。40歳の私には何か場違いなところに来たのではないかと思うばかりであった。見も知らぬ者達との共同生活。話が合うのだろうかと不安だらけでの開講であった。

あの不安は何だったのだろうか。とにかくよかった。本当に参加させていただいてよかった。居眠りする気持ちにもなる必要のない松原先生、渡辺先生の講義。ただひたすらに教師の仕事に打ち込（？）んで、自分の生命・使命、そして自分の「オノ」に、忘れかけてしまったものを再発見、再認識させていただく一時をいただいた。年度末の忙しい時「やる仕事も一杯あったのだが」と思っていた気持ちが、この4日間がなかったら、これからの自分はどうなっていたのだろうか。両先生の話はすべての言葉が忘れてしまうにはもったいなくて（まだ頭の中では全く整理が出来ないままであるが)、これから少しずつその言葉を吟味して自分の血と肉にしていきたい。

けど、もっともっとうれしかった事。それはこの4日間を通して出来たB班の仲間達です。B班の受講生として長老でB班村の村長にしていただきましたが、10歳以上の年齢の差も関係なく接していただいた事。本当に有り難う。B班村の皆との会話、ディスカッション、雑談。途中で寝たけど何とか午前3時まで続けることができたRYLAの最後の夜。皆各々に感じとっていた。これから、年賀状を出す先が増えました。余島同窓会開きたいですね。

これからの自分の道。このセミナーが生かされるように命を使っていきたいと思います。私を推薦して下さった仁淀ロータリーの皆様に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

三　切　泰　史

余島で、第18回RYLAセミナーに参加をして、最初に感じ得たことは、余島という自然の中にいることもあってか、時間がすこしゆっくりと流れているような感じがした。しかし、終わって見ると、あっという間の4日間だったと思います。

このセミナーを若さある受講者のみなさんと、4日間共にすごし、共に語り合うことに

よって、日頃はりつめていた生活の中では感じなかったゆとりのようなものができたように思えます。

「こころとは」というテーマで、松原先生、渡辺先生、今井先生、梶浦先生による講演を聞けたことによって、心にゆとりをもつ、そのことによって、いままでと違う回りが見えてくるかもしれない。また違う自分を見つけることができるかもしれない。またそのことによって、自己を一歩成長させることができるかも知れない、そう思いました。

このセミナーで、何かを感じる事は出来ただろうか、今この文を書いている時点では、まだよくわからないけれど、このセミナーで自分を見つめ直す時間、また仲間と語り合う時間、また自然と共にすごせた時間を与えてくれたことに、たいへんうれしく思います。また、このことに感謝します。

最後にロータリークラブのみなさん、また、このセミナーの関係者のみなさん、ありがとうございました。

枝　園　忠　彦

今回RYLAに参加して得たものは思ったよりも多い気がする。常日頃、生活の中で自分は一体、何を得ているのだろうと不思議に思えるほどである。それは、友人であり、見習うべき態度であり、そして本当に多くの言葉であった。

心を熱くする言葉というのは、他の言葉と同じ言葉であることがウリのように、生き生きとして、体にしみこみ、心の中にとどまる。言葉は、さまざまな意志や、映像や、思いをさらりと伝えてくれる。

これから先、医者という職業を選択している自分にとって、多くの人と接し、本当の意味でその人々と交わる為に、今回RYLAで得た言葉が、そして考え方が、役に立つだろう。今、思い返してみると、これらの言葉を知らないで、多くの患者さん達と話をすることが出来ただろうかと、以前の自分が情けなくなってしまう。

普段、自分の意見、本当に感じたり、自分で考えに考えた意見を、人に言う事は、あまり好きではない。でも、このRYLAで、そういった自分の中にわだかまったままだった考えを、話しやすく、そして、学生のたわ言とバカにせずに真剣に受けとめてくれたカウンセラーの御二人と班員の皆さんに、心から感謝します。皆さん素敵な方々でした。自分も、もっともっと大きな人間になって、またみなさんにお会いしたいと思います。

参加者感想文

中　矢　建　章

ブルーの小冊子、数日前に速達で届いた受講案内及び待ち合わせ場所周知文と、この少ない資料しか事前にはなくて、何の予備知識も持たないまま参加したライラセミナー、一体何をするのだろう。どんな方がきておられるのだろうと不安で一杯のまま、船・バス、そして船と乗り継いでやってきた余島。初日、2日目、3日目、4日目とその不安も時がたつにつれ喜びへと変わり、今日4日目である最終日は“あと数日セミナーを続けていただきたいな”と残念で且つなごりおしい気持ちへと傾いています。

私は2日目の渡辺和子さんの講演に深く感動いたしました。時間とは何ですか。この一言に尽きました。全ての物事を価値あることに変えられるのは自分自身の心がけであると。また“失ったものに人は目を向けるのではなく得たものに目を向けて生きていく”と。“安楽な生活を求めるよりも、むしろ強い人になれる事を祈りなさい。自分にふさわしい力に見合った仕事をするよりも、むしろ与えられた仕事を果たすに必要な力を求め祈りなさい”“自分が持っていないものを与える事は出来ない。つまり愛するという事を知らなければ愛を教え、語る事は出来ない”等々グサリグサリと日頃日常生活で思いもしない考えもしない事が胸に響きました。

まだ私自身の中で4日間のセミナーで得た事がまだ整理されず頭の中をグルグル回っています。何を得たのか具体的にはこれから考えてゆこうと思います。そのきっかけを作ってくださったライラセミナー受講生の仲間達及びセミナーの運営委員の方々に感謝します。

臼　杵　佳　恭

このRYLAセミナーを受講して、普通は聞く事のできない貴重な講演を聞くことができました。家でも、いちおうは何か考えながら生活していたつもりだったのですが、諸先生の話を聞いて、もう一度考えなおしてみなくてはならないなと思いました。例えば、生きるということはどういう事なのか、死ぬというのは、どういう事なのか、物理的なことばかり考えていてもよかったのだろうかと、思います。しかし、本当のところ、ここへ来ての一番の財産は講演のことよりも、むしろ、同じ様な悩みを持った多くの友達ができたことだと思っています。僕はボーイスカウトをしているのですが、今、スカウトのリーダーとなっていく微妙な時期です。いろんな不安が、やはりつのっていきます。しかし、このセミナーでいろんな人と話しをしているうちに、もちろん、やることはたくさんあるのですが、そんなにあせる必要はないと知り、肩にのっていた自分には重すぎる荷物を少し降ろす事ができたように思えます。でも、柿の木だって種を植えてから実をつけるまで8年かかるんですよね。

長　尾　陽　子

まず、参加させていただいたことに大変感謝します。ロータリークラブについては、これまでその名前を知るのみで、活動内容は存じておりませんでした。もちろん、直接的にはなんの関わりもない私でしたのに、あるクラブメンバーの方から参加を勧めていただきました。私のような、外部の者に対してもこのようなセミナーを提供してくださるスタッフの方々、ロータリーの方々に、重ねて御礼申しあげます。

私は、京都の大学を卒業後、大阪で就職をしましたが、1年半程前に父が末期癌であることがわかった時に、自宅へ戻りました。しばらくして父は亡くなり、私はそのまま、地元に残って文化ホール職員として働いています。現在の仕事も楽しいですし、人間関係にも恵まれていると思います。しかし、もうすぐ27歳を迎えようとして、これからの自分の生き方を、考えなおしています。結婚、仕事などについて選択を迫られているということもあります。ちょうど、そのような時にこのセミナーにて講義をお聞きすることができました。グループの人達と、様々な話をすることもできました。具体的に、結婚をどうするかとか、これからの仕事をどうするか、ということはまだ決められていません。しかし、どのような立場で、環境で生活しようとも、変わらずに持つべき心のあり方というものを、このセミナーで再認識させていただきました。ここで学んだことを、日常生活で実践しながら、自分の今後の方向生を定めていきたいと思います。どうもありがとうございました。

笠　原　久　義

私はたまたま何かのご縁でこの余島3泊4日のライラセミナーに参加できましたが、正直言って初めて耳にするライラセミナーを受講しようと思った動機は、普段の自分の限られた生活からの脱出と、各地からやって来る同世代の若者との出会い、交流がしたいという安易なことだったと思います。

実際、3泊4日のうちに当初想像していたよりも多くのすばらしい仲間やあわただしい日常生活から離れた落ちついた環境の下で生活できたことに感謝しています。

私たちは普段は文明の発達したおかげで、テレビ・新聞などを通じての情報収集や車・電車等による高速移動が可能となったが、それは本来地球上の一種の動物であるはずの人間にとっては背伸びしたような不自然な体勢を強いていたのではないかと思います。

だからといってこの文明社会を批判している訳ではありません。ただ忘れてならないと感じたことは、時には立ち止まり自分自身の人生の目的、使命を見つめなおす時間の必要性であります。

参加者感想文

私はこのセミナーを通して、時間という誰にでも平等に与えられたものの使い方の大切さを忘れず、これからの社会生活に生かそうと決意しています。

最後になりましたが、ライラセミナー関係スタッフの皆さん、受講生の皆さん、本当にありがとうございました。

藤　本　麻　紀

ライラというものがどういうものか、全然分からないまま、会社の人に聞いても「ええもんやから、ぜひいってき!!」といわれてきたのですが、4日間終わって、めちゃくちゃ来てよかったと思っています。

松原哲明師、渡辺和子氏の講演は、普段、生活してたらあまりというか、まったく考えもしないような事について、わかりやすく、しかも聞いていてたいくつしないようなおもしろさで、あらためて私の今までの生き方について考えさせられました。

キャビンタイムの時間のわりふりは、最初スケジュールを見た時「えっ？」て思ったけれど終わって見ると「ああ納得。」って感じがしました。

思ったより「ガクッ」ってきたのが植樹。想像の中では、みんなで土掘って植える。というのがあったから、みてちょっとショックでした。

バズセッションは「リーダーの心」についての話。バズセッションは、いろんな人たちの意見が聞けてすごくいいなぁと思ったんですけど、フォーラムがいまいちでした。各班が発表するのは、各班個性がでていいなと思ったんだけれども、司会者の話のもっていきかたがいまいちよく分からなかった。せっかく話し合いという形になってるのに、ロータリアンの人が、途中で「結論をいうと……」みたいな答えみたいなものを出したから、私から見ると、結論を出した時点でその話し合いは終わりのような気がするんだけど司会者はまだ話し合いをさそうとするし、時間合わせに関係ない話をしてたから、つまらなかった。というか、テーマが広すぎて話し合いにならなかったような気がした。

でも、4日間めちゃくちゃたのしかったし、いい思い出ができ、いろんなことが学べて、有意義にすごせたと思います。

小　野　清　二

私にとって3泊4日のセミナーは時間の調整をかなり厳しく強いるものだった。車を自分で運転し、行き帰りできるセミナーが多い中、私はこのセミナーに来れるよう自分のスケジュールを調整した。

高松までは電車で来た。船で小豆島へ渡る。フェリーと小舟を乗り継いだ。あいにく

の天気ではあったが、いつもの街並みを離れ、自然に囲まれたことにより、のびのびとする事が出来たように思う。大きく一つ深呼吸。

キャビンへの案内はカウンセラーのロータリアンがしてくれた。気軽に声をかけて下さり、親しみやすさを感じた。

講義はいずれも、そのお顔から人格の高さがうかがえ、2時間を超える話に会場全体がひき込まれていた。

松原老師は、命の使い方を考えよ、命を生かせ！と説かれた。渡辺和子さんは、命の使い方でも、特に時間の使い方を、本人の意識の持ち様という立場から説いた。

「私は、木を切るのに急がしく、斧を見る日間がなかった。」

「世の人々は失ったものに目を向けて生きるけれど、私は得たものに目を向けて生きる。」

有難いと感じる心の大切さ。

受講生は皆、海を越えてセミナーにやって来た。私達が参加した理由は大体が本人でも解らないようなものだった。松原老師の言う、「霊性」に導かれ出遭った私達は、日頃の仕事をする時間を失ったのではなく、新しい友達との出遭いを得た。この自然の中で斧である自分を見つめ直し、（私の名字もオノ）リーダーの心についてバズセッションをもった。望ましいリーダー像について皆が口々に意見を出す。班の理想像から描き出せるのは、カウンセラーのロータリアン塩出さん。

人生の導士、理想のリーダー、私はこの島に着いたときに既に与えられていたのだ。

土　居　裕　和

「お前、RYLA セミナーに行ってみないか？」

親父のこの一言が、全ての始まりでした。「“こころ”？ うさんくさいな。」どんな人が集まるのかもわからない。どんな事をするのかも全く予想できない。どうなる事やら、と最初は思っていました。が、終わりを迎えた今ならはっきりといえます。

「参加できて、本当に良かった。」と。

私がこのセミナーで重要である事を認識させられた事、それは心に「ゆとり」を持つ事です。今までの生活がいかに「ゆとり」もなく、ただギスギスしたものであったか、この島で生活する事により、はっきりとわかりました。特に感心した事は「自由と規律」。入浴、食事、運動、就寝、それら一般の団体生活では事細かに一方的に決められるものなのですが、このセミナーでは全てを参加者それぞれの「意志」にゆだねている。これにより「ゆとり」が生まれるのです。その「ゆとり」を持つ事により、人間の心の壁が取りのぞかれ仲間と共に学び、語り合い、考えてゆくことができるのです。

参加者感想文

3泊4日という短い時間でしたが、とても大きな事を学ばせてもらいました。共に学んだB班の仲間、カウンセラーの塩出さん、山路さん、本当にありがとうございました。

我々が考え、そして仲間それぞれに与えた物は、きっと一生の終わりまで残るはずだ、と私は信じています。

澤　江　由　奈

2年前、私はこのライラセミナーを受講する機会が与えられたにもかかわらず、どうしても参加することができなかった為、この間残念な思いをずっと引きずっていました。

しかし、今回私の2年越しの後悔にピリオドを打つチャンスがめぐってきました。

私は現在、神戸国際大学附属高等学校で教師をしています。とかく閉鎖的になりがちな学校という枠を越えて、ライラセミナーでは様々な立場の受講生と出会うことができました。受講生と語り、集うことができたことは、たとえ、今すぐでなくとも私の日常の中で、はっとする気持ちを与えてくれると信じています。また、多くのロータリアンとお話したことで、私の物事を捉える視野が広がった様に感じます。講演を聞くことで、私の中にある気持ちに光りを与えていただきました。

1年前、初めて教壇に立った私は、生徒に私のできる限りの愛情を注ごう、愛情を持って生徒に接しよう、と心に決めました。それは、私の中に愛情があれば、教育はできるという自論があったからでした。

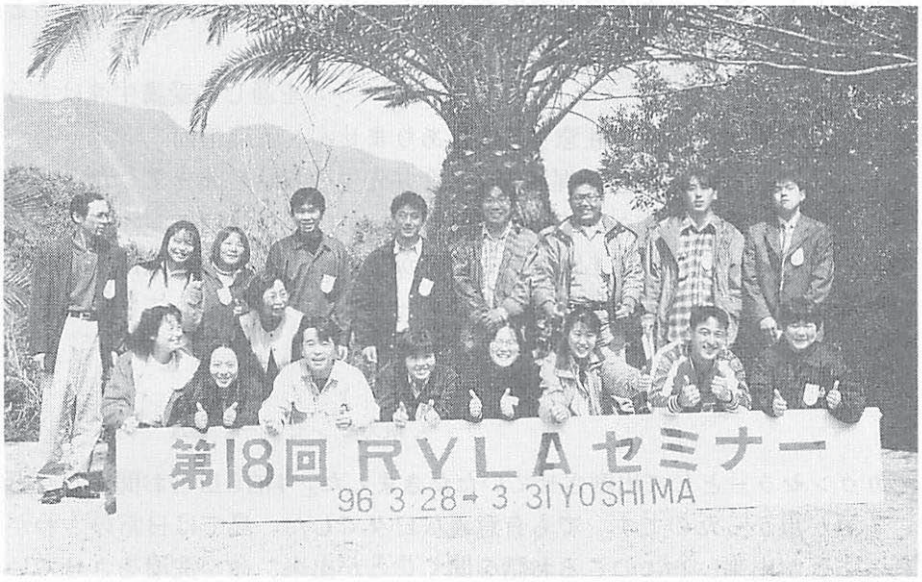
ところが、現実はこの1年間生徒に愛情を注ぐことは、ほとんどできませんでした。自分にゆとりがなく、また、私が注いだつもりになっていた愛に生徒の呼応が私には聞こえず、焦りを感じていたからかもしれません。これは私自身を愛せず、自分に自信がなかったからなのかもしれません。

しかし、講師の先生の「愛は目に見えない。目に見えないものは焼えず、不滅である」という言葉に、私は、焦りすぎて近道をしようとしている自分に気が付きました。教師が生徒に愛情を注ぐことで、二人の間に信頼関係が生まれてくるのです。結果を焦りすぎてはいけない、毎日愛情を注ぎ続けた結果、信頼関係は築かれるのです。

私は今回のライラセミナーで普段忘れがちな、自分自身の心をゆっくり考えることができました。

私にとって、今一番大切な事をライラセミナーで教えられた気がします。このチャンスに感謝し、皆さんに出会えた事を嬉しく思います。

C　班



C班カウンセラー　赤　穂　　哲

ライラカウンセラーの委嘱状をもらった後、三月末にはいよいよ余島に行かないといけないということで、仕事をいろいろかたづけていました。そんな時、3月6日妻が突然入院致しました。病名は急性肝炎でした。GOTの数値が高くて一時命が危ないと言われましたが、幸い2日後には落ち着き3月19日に退院する事ができました。しかし退院後も自宅療養が必要でまだ一人で買い物にも行けない状態でした。そんな妻を後にしてカウンセラーを引き受けるか辞退するか迷いました。しかしライラ直前にはだいぶ妻の状態も回復しましたので思いきって関西急行フェリーに乗り込みました。船に乗ってしまうと妻には悪いのですが心はライラ一色となっていました。今度はどんな出会いがあるのか、どんな講義が聞けるかとても楽しみでした。

1日目のキャビンタイムで、103号室にC班の受講生が集まり、自己紹介が始まりました。みんな緊張しています。私も緊張しています。何かを話し合うにもまだ共通のテーマがないのです。午後11時頃解散し、その日は就寝いたしました。

3月29日は松原住職の2時間の講義を聞きました。話がおじょうずで内容もすばらしく自分が今生かされている、その自分の命を大切にしていかなければと再確認致しました。講義の途中3回涙が出てきました。

2回目のキャビンタイムではみんなでゲームをし、ビールを飲んで親睦を深めました。受講生の本音を少し聞く事ができました。就寝午前3時。

参加者感想文

3月30日シスター渡辺の講義を聞きました。上品で若々しいお声でお話をされました。幸せは外から与えられるものではなく、自分が作っていくものであるという言葉が強く記憶に残りました。又シスターの講義態度が堂々とし、信念を持った方だなあと感心致しました。

3回目のキャビンタイム、バズセッション、フォーラムを通して受講生達はもうすっかり打ちとけておりますので何も注意する事はありません。就寝午前3時。

3月31日連日の睡眠不足の中で梶浦先生・今井先生のお話を聞きました。去年もカウンセラーをして思った事ですが3泊4日のセミナーが終了した時に、体力的には疲れがピークであっても何か心の中にあたたかい貯金ができたなあという気持ちが湧き出てきました。弘光カウンセラーを初め、お世話になった皆様ありがとうございました。

C班カウンセラー　弘　光　妙　子

初めてカウンセラーとして出席させていただきました。4泊5日とお聞きしたときは正直なところ気が重かったのです。でも有意義な日々でした。島では日常のさわがしさからのがれることが出来、心にのこるお話を聞くことが出来、命の洗濯をさせていただきました。これからの人生も、この様に心おだやかに過ごすことが出来れば……と思っております。セミナーをささえて下さった方々に感謝しつつ、島を離れますことを幸せに思っております。ありがとうございました。

木　谷　昭　宏

私は西宮でボーイスカウトに所属しており、今回のライラセミナーに参加させていただくことになったのですが、その内容や雰囲気について何も知らず、少しの不安と多くの期待を持って余島まで来ました。

「こころとは」というテーマのもと、松原哲明師、渡辺和子氏、今井鎮雄氏、梶浦暲一氏の講演は、今までの20数年を振り返り、これからの自分の生き方を考える機会を与え、その大切さを気づかせるすばらしいお話でした。また「リーダーの心とは」というテーマでのバズセッションやフォーラムは、ボーイスカウトの活動やそれ以外の生活において、これから身につけていくべき多くのことがわかりました。様々な地域から様々な仕事を持つ人たちとも、キャビンタイムなどを通じて、親しくできました。

今回のセミナーはもう終わってしまいますが、これからこのセミナーで得たものを持ち帰り、今後の活動や生活に生かしていきたいと思います。

最後にセミナーを運営されていたスタッフの方、カウンセラーの方などお世話をしていただいた方々に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

西　口　　泰

終わってみればやはり早かった3泊4日。今は、満足感にひたっている。有名な講師のお話は、もちろんのこと今回のセミナーで知り合った皆さんとの会話は、心に刻み込まれたように思う。心とはという非常に漠然としたテーマではあったが、何を我々に伝えようとしているのかということがロータリアンの方々から常に発散されていてそれらを体でうけとめることができた。日常生活ではややもすると同一世界の者としか顔を合わせず、話題も共通性の高い物になりがちであるが、今回のセミナーでは、立場の違い、年齢の違い、地域の違いがある者の集まりなので常に刺激的であった。側面や背面からばかり色々な心が自分に向かってとんできたような気がしている。心そして人間にとって成長の限界というものはなく、無限の可能性を秘めておるものだということを改めて考えさせられた。もちろんそれを（成長を）させるもさせないも自分の心掛け一つである訳だが……。

松原住職（トビ職）のお言葉にもあったが、自分は何をしに生きてきたのか。又これから先の人生をどうやって生きていくべきかということをこのセミナーの後、考えてみたい。もっと深く、もっと前向きに、もっと真剣に考えるべきときがきているような気がしている。自分、そして家族みんなが本当の意味で幸せになれるよう考え、実行をしていきたいと思う。

最後になるがロータリアンの方々のフランクさに感心をすると共にこのような機会を与えて下さった関係者の皆さま方に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

安　岡　稔　晃

まず私が、このライラセミナーに参加するとき、職場の上司から心をみがいてこいと言われてこのライラセミナーに参加しました。日頃は、どうしても仕事におわれて、自分の心をみがいたりするようなことは、まずありませんでしたので私自身このセミナーは、自分自身を伸ばすいい機会だと思っていました。実際このセミナーに参加して、松原哲明師や渡辺和子氏のお話を聞き、大変感動もさせられると同時に、人は心の持ち方一つでどのようにも自分自身を変えていくことができるし、他人を幸せにも不幸にもすることができるのだということを改めて思い知らされました。私は、専門学校で教師という仕事をしていますので、いつも人間と向かいあって何かを行っています。日常の仕事の上でも、どのように学生達に接すればよいのかということをなやんだときも多々あります。しかし、教師になって、何年かたてばやはりなれというものが出て、学生達の心を

分かってやろうとあまりしていなかったのではないかと、このセミナーに参加して感じました。初心にかえってとよく言いますが私も、もう一度初心にかえって学生達と接してみなくてはならないと、今強く思っています。

また、2日目の松原哲明師のお話の中で人生の導師（コーチ）を見つけなければならないということを言っておられました。私自身自分の師とあおげる方に今まで出会ったことがなく、そのような私が教師という仕事をしているのも不思議な気持ちがしますが、それでも学生達に導師とまでは思われなくても、学校と卒業して、就職し年をとったときに、専門学校であの先生と出会えて良かったと思ってもらえるような人間になりたいものだと思います。

最後に4日間大変ありがとうございました。

福　岡　恒　美

小豆島での3泊4日、あわただしい生活からタイムスリップしたような、主婦をわすれ、母親をわすれ、仕事をわすれ、自分自身をみつめ自分自身のこれからの人生をじっくり真剣に考えられた4日間です。

松原住職・渡辺シスター両氏の講演を聞き、ぼんやりして、うまく表現できなかった、将来設計の整理ができたような気がします。

ガールスカウト高校生部門のリーダーを10年余りしています。時代はどんどん変化していき、リーダーの役割も大きく変わってきている時、本当にこのセミナーに参加してよかったこと、『人間銀行』に加入できました。すばらしい情報ネットワーク・人的ネットワークを持たれているロータリークラブ、私もこの銀行の大富豪をめざして、答えのない時代だからこそ自分で考えて答えを見つけて歩けるリーダーを育成していくために、がんばります。

最後に私のすきな、ガールスカウト創始者のことば

「とにかく自分は時を無駄にすごさず、

最善を尽くしたのだという満足感をもって」死にのぞめるために」！

「そなえよつねに」！

ロータリアンのみなさま、お世話になりました。ありがとうございます。

原　口　志　保

ライラセミナーに参加させてもらって、私は本当によかったと思います。

班員の方にも恵まれて、キャビンタイムやバズセッションの時など、年齢も仕事も、立

場もちがう人達のお話は、本当にためになったし、新しい発見も多かったです。

講義の方も、とっても良くて、人を引きつけるパワーは、どの講師の先生も、すごいなぁと感心したり感動したりの連続でした。

海や緑といった、余島の自然の中で、初めて経験することも多く、レクリエーションの時間に作ったコーヒーカップで、早くコーヒーを飲みたくて、送られてくるのが、今からとても楽しみです。

私は香川県で生まれ育ったにもかかわらず、小豆島へ来たのは初めてで、しかも余島という島があることさえ知りませんでした。

今回、私と同じC班だったみなさんとは、今回きりと言わずに、また集まって、お話したり、さわいだりできたらいいなと思います。

私は今、福祉について学んでいます。将来も、やはり福祉の仕事につきたいと思っています。

やりたいことを、やりたいようにやるというのは、本当に難しい事だけど、やりたい事は、もう見つけているから、今からは、やりたいように、どう進んでいくかを考えて、今からかわかない心で、自分を見つめながら、やっていこうと思います。

最後に、お世話してくださった、ロータリアンの皆さん、余島の職員の皆さん、とてもいいお話を聞かせてくださった講師の方々、それから、私をライラへ参加させてくれた、地元のロータリーの方々、そして4日間、私と仲良くしてくださったC班の皆さんに、心から、ありがとうございましたと言いたいです。

小　野　　努

参加する前は、この慌ただしい時に研修にいくのはしんどいなと思っておりました。しかし余島について、部屋に入って、ルームメイトと話をしていく内に、何か研修というより半分遊びみたいな気持ちでいいんとちがうかと思うようになりました。

研修の講義を聞き、正直とまどいました。今まで自分が生きてきた生き方をまったく否定されてしまったと思いました。自分なりに後悔せんようにがんばってきたつもりでしたが、それは所詮自分のエゴのためでしかなかったのだということに気付き、がくぜんとしました。松原老師の話にあったように私は何をしに生まれてきたのだろうと考えてみましたが答えが出て来ませんでした。命を使うために生まれてきたのだと言われても、どうやって使っていけばいいのだろうと今も悩んでいます。でも、もしこのセミナーに参加することがなかったら、私はそんなことを考えることはなかったでしょう。これから先の人生は今まで生きてきたよりはおそらく長いものだと思われます。残りの人生における自分の命の使い方をじっくり考えながら、これから人生をすごしていきたいと思

います。人間は一人で生きているのではないということを実感することができました。

3泊4日があっと言う間にすぎました。すばらしい師にめぐまれ、すばらしい友人に出会うことが出来ました。本当にライラセミナーはすばらしいと思いました。もし自分が人生で迷うことがあったなら、もう一度ライラセミナーに参加したいと思っております。本当に楽しかったし、充実しておりました。

これからの人生でこの経験を思い出としてとっておくのではなく、生かしていきます。

萩　山　房　男

たいへんなセミナーでした。ロータリーの活動内容も少ししか知らなかったので初めは、受講生にも変な気を使っていました。初日のキャビンタイムも盛り上がらなかった。でもC班の全員の自己紹介や、今のかかえている問題などを聞いて、「みんな、何かがにてるな。」と思いました。今までで経験のなかったような、すばらしい講演を聞かせてもらい、今まで自分が持っていた、「こいつ、何考えてんやろ。」とか「それははずかしい。」とか「おとなしくしとこ。」とかいう気持ちがなくなり、朝食の時も講演の時もキャビンタイムの時も、楽しくなりました。でも、一日ごとに、何かすごくつかれてきました。夜、あまり寝てないからかと思っていたのですが、何か、日常生活の時よりもやたらと頭を使っていたのです。いつもの仕事とは違う、頭を。それが、あまりいやじゃないのが不思議ですが、なぜか、わからない。また今度セミナーに参加したらわかるのかもしれないし、わからないのかもしれない。学生時代も勉強とか恋愛とかに頭を使っていたと思うのに。日常生活に返って、またこんな気持ちになることがあるのか？　つかれた。

内　藤　　浩

あっという間の4日間だった。

セミナーに来る前は、4日も、しんどいなぁと思っていたけど、今思えば、短い期間だったと思う。

正直な所、“心とは”というテーマだったので、かたい話ばっかりでつかれるだろうなぁと思っていたけど、講師の先生方の講義はとてもわかりやすく、あきないものだったと思う。人間は気持ちのもちよう一つで、がらっと変わるものなんだということを教えられたような気がします。

松原住職の話の中で、「なにをするために生きてきたんだ！」といわれた時は、なぜかどきっとしました。今まで、何も考えず生きてきた僕にとっては、心にささるひとことでした。これからは、自分なりに命の使い方というものを考えながら暮らしていけたら

いいなぁと思いました。

先生方の話も、感動しましたが、キャビンタイムで語り合った班の人達の話にも、同じように感銘する所もありました。

普段では聞けない他人の仕事の苦労話や、おもしろさとか、いろいろと聞けてよかったと思っています。

本当にこのセミナーに参加してよかったと思います。

坂　野　幸　広

今年1月末にライラセミナー参加を聞かされ、セミナースケジュール及び開催要項を見たとき、目の前が暗くなりました。3泊4日、缶詰状態での講義、他の受講生とのコミュニケーション等不安だらけになりました。

しかし、参加してみると同室の受講生とはすぐ打ちとけ、4人の先生の講義についても時には笑い、泣き、また自分自身多く考えさせられるものがあり、「心」について新しい発見ができたと思います。

グループによるバズセッションのテーマの「リーダーの心」については、自分自身リーダーの経験もなく、ボランティア活動について参加した事もない私にとってみんなの足手まといになると思っていましたが、ゲーム感覚での討論、様々な職種、体験談などを聞いていると何も知らなかった私でも意見をいえたと思います。

このライラセミナーに参加して一番に感じた事は、人として命の使い方と自分自身を見つめなおすこととロータリーの精神のすばらしさを学べたと思います。

今後職場に帰り、後輩にライラセミナーの受講をすすめ、このセミナーで学んだ事を忘れないよう自らを成長させていきたい。

中　田　泰　代

漠然としたプログラムを初め見、予想のつきにくいセミナーと印象をもった。私が今まで参加したことのあるセミナーとは一味違ったからだ。個に責任と自覚を感じさせるプログラムだと思った。

講義では「心」をテーマにすばらしい講師の方の話が聞け、納得、考え直させられることが多かった。特に渡辺先生の講義の中に人間の心のトゲについての説教は私の現在の生活にあてはめて考えることが出来、自分の性格を振り返ることが出来た。誰もが心のトゲを持っているところ、それを外に向けているか内に向けるかによって仲間への接し方が変わってくる。ということは、その仲間からの印象も変わるし、それ以後の関係も

変わってくる。人からぶじょくされると腹立たしいものでつい心のトゲを外に向け、しかえしの様な態度、行動をとってしまう。しかし、ここで外に向きそうなトゲをギュッとおさえて内に向けてみるとどうだろうか。まだ私の頭の中で整理がつけることが出来ていないからよく分からないが、きっと2人の関係はトゲを外に向けた時とは違ったものになっていると思う。この講義を聞いて、少しずつでも心のけだかさや高貴さを身につけ、自分とたたかい、心にゆとりをもって自分の知っていることを人にどんどん伝えていけるリーダーになろうと思う。

最後に、セミナーをお世話してくださったロータリーの方々、カウンセラー、講師の方々、余島のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。

1996年3月31日

高　村　祐　子

最初、パンフレットを見て、「私のようなものが参加してよいのだろうか。」と不安でいっぱいでした。しかし、余島へ来て、自由なゆとりのあるプログラムの中にも、規律正しいものがあり、さまざまな年齢、職業、立場をもつ、すばらしい班員にも巡りあえて、本当にこのセミナーに参加してよかったと思いました。

講義では、さまざまなお立場におられる人をあきさせることのない、それでいて、とてもすばらしい、はっとさせるようなお話で、あらためて、自分をみつめなおす機会を得ることができ、よかったと思います。私がとくに印象に残った話は、松原哲明師の「なんのために生まれたか。」ということです。他の植物などには、ちゃんと、花を咲かせ、実をみのらせ自分を完成させる、それなのになぜ人間は、なにもしないのかとおっしゃられたときはっとする思いでした。一体何のために生まれてきたのだろう。と、命を預かり、その使い方の勉強をするために生まれてきたとおっしゃられたとき、自分の中でなにかが生まれたような気がしました。

この3日間の講義の中で私は、これからはさまざまな経験をつみ、忙しい中にもゆとりをもち、常に自分を見つめなおし、前向きな姿勢で、物事に取り組んでいこうと思いました。

長谷川　いづみ

慌ただしい世間の流れに乗ろうとするあまり、私の心の目や耳は輝きを失っていたような気がします。

参加者の皆さんから頂いた、強さに裏付けされたやさしさや、すばらしい先生方から頂

いた教えを胸に、心のろうそくの炎を多くの人にともしてあげられるような人間になるよう努力していきたいと思います。

このセミナーで学んだ多くの事は、私の貴重な財産です。

関係者の皆さん、高松南ロータリークラブの皆さんとC班のゆかいな仲間達に心より感謝致します。ありがとうございました。又会える日を楽しみにしています。

森　本　真　里

私は、重症心身障害児施設で働いています。毎日、時間に追われる生活をしている中で、施設は、利用している方の生活の場であり、その生活場面において利用している方がハンディにより、手をかして欲しいというサインの上で、サポートしていくのが私達の役割であるのですが、実際は、利用者のペースでなく、私たち職員のペースに巻きこんでいる。人と人との中で仕事をしているので、沢山の心とぶつかり、又考えさせられます。がこのセミナーに参加して、これからの自分にチャレンジする気持ちを与えて頂きました。沢山のいい仲間と出会えた事にも感謝しております。本当にありがとうございました。

菊　川　享　祐

今回のライラセミナーに自分が参加する事が決まってから、3月28日がやって来るまで、毎日、毎日、不安がつのってきた。「本当に自分は3泊4日も耐えられるのか。」

いざ始まってみると、けっこう楽しく、みんなともすぐ打ちとけれて、自分の意見もけっこう話しやすくて安心した。

このセミナーのいい所は、一回りも二回りも年の離れている人や、自分とは全く違った生き方をしている人達がお互いの意見をぶつけあったりできる所だと思った。

今回の参加者の中で自分が一番年齢が低く、とまどっていた場面もあったが、自分の親ぐらいの年代の方々と、真剣に討論し合ったことは、いい経験となった。

ライラセミナーを受け、一番感じたことは、自分の知らない世界、知らない生き方が、そういった話を聞き、「自分はまだまだ何かやれることがある、やらなければならない事がある。」と思った。「自分は本当に無知なんだ。」と思いしらされた。

このセミナーを受け、自分の無力さがくやしかった。毎日、毎日が新鮮な感じがして、本当に勉強になった。本当に来てよかった。

講師の話や、仲間の話を聞き、今までとは違った世界が見えてくるようなきがした。

今回学んだ事を、生活に役立てて行こうと思う。

参加者感想文

土　居　安　子

一生の間に、高名な方の講演を聴く機会は今後も幾度かあると思いますが、このライラセミナーでの講演会のことは、これから先も大切に心に留めておくつもりです。

特に、渡辺和子先生の“小さきは、小さく咲かん、小さなままに”という言葉が、心に残っています。『小さな花は、小さいなりに一生懸命咲けばいい。人は、他人と自分を見比べがち。どうして私は、小さいのだろう。どうしてもっと、いいかおりがしないのだろうと思いがちだが、自分には、自分にしかない価値がある。それを心に秘めて生きなさい。』医療ソーシャルワーカーとして、5年目になりますが、患者さんと向き合う時、いつも自分というものを問われている気がします。これまで、前向きに、正直に、そして患者さんからも、自分からも逃げないように歩んで来たつもりですが、今後は、患者さんを取りまく様々な環境の中に、その人らしさをしっかりと据え、そして、私自身が自分の価値を認めて関わっていきたいと思います。

また、今回のセミナーで、多くの若い方々が、10代からボランティア活動に積極的に取り組んだり、しっかりした目標を持って生きておられる姿に触れ、とても感動しました。ありがとうございました。

最後に、スタッフの皆様、本当にお世話になり、ありがとうございました。

竹　瀬　礎　子

遠くまで続く道を歩いていた。
でも、あてもなく歩いてたから
もう歩くのも嫌になってた。
けどね、今日　夢という名の種をもらった。
何の花が咲くのかな
考えたら楽しくなって
もう少し歩いてみる気になった。
「きっとこの花を育ててみせる。」
芽を出し、根をはる、この花が
私の情熱なのだ。
花が咲くまで。実を結ぶまで。
道の終りは見えなくても
種をまきながら歩こう。

心に残る愛のある島。
とても勇気付けられました。
ライラセミナー万歳!!

D　班

D班カウンセラー　永　田　光　春

今回1泊2日の予定で参加する計画でしたが伊予RC菊澤健明氏より電話が有りカウンセラーをやってほしい3泊4日。1日考えてOKの返事をした。初めてのことで1週間前くらいより心配でした。セミナーの講師がすばらしいので夫婦で参加した。本当は前日に来てカウンセラーの説明を受けなければならなかったが時間がとれなくて3月28日11時現地着。余島でのやさしいもてなしを受け安心をした。菊澤氏よりさっそくカウンセラーとしての仕事を教えられた。17名中女性8名。男子9名。計17名のD班である。私のパートナーはベテランの水谷淑子氏で今回ほんとうにたよりになり指導を受けたありがとうございました。私のD班は。みんな各グループ。団体当の指導者ばかりで、個人個人は自分の役割を自覚しており、そして行動もでき能力もあり、私としては見守るだけという仕事でした。あっというまの3泊4日でした。強く印象にのこった事は、このライラ研修に大先輩が初めから最後まであたたかい目で見守って下さった事。この良質なエネルギーが余島ライラを最高の研修にしていると感動いたしました。我が新居浜ライラ第5回が5月23日～25日まで行われますが、多くの反省点があると思いました。来年も是非参加させていただきたいと思いますが。私の友人であるロータリアンもさそい、新居浜ライラが今後共意義ある研修になりますよう、ご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。今回おさそいをいただいた伊予RC菊澤健明氏深く感謝申し上げ報告とさせていただきます。ありがとうございました。お世話をいただいた全員のみなさまに。

参加者感想文

D班カウンセラー　水　谷　淑　子

数回のライラ参加になりましたが、今年も又新しい出会いが出来ました。初めの新鮮な気持ちと、不安を少し持っていた自分が変わりがないだろうかと……思いましたが、参加する受講生の受付が始まる頃には、D班の人の顔ばかり追っていました。こうして、開講式の後の、キャビンでの全員集合です。心の中で、私の班が最高と、勝手に思います。1日目の松原哲明師の自己の晩年をイメージし生きる、信念を持ち人間として生きるの講義に感動し、2日目の渡辺先生の心にゆとり人間の自由、人生も雑に暮すと価値のない人生になる等、一つ一つが胸にしみるお話に私の年になっても、今自分が何が出来るのかを真剣に考えたいと思いました。

受講生の若さが、うらやましいとさえ思いました。きっと彼らはすばらしい人生を送ることでしょう。

D班カウンセラー　永　田　志津子

急きょ主人がカウンセラーを御受けさせて頂き、プログラムに、松原哲明老師講話の欄を見つけ、老師のお話だけ聞かせていただこうと虫の良い考えで主人といっしょに余島へやって来ました。ライラセミナーのお世話をされておられる皆様の温かい心遣いで、受講生の皆さんといっしょのキャビンに宿泊させて戴くことになり、D班のカウンセラーを主人と共にされる水谷さんのお世話になりました。ほとんどライラに対しての知識の無い私をつれて水谷さんは足手まといだったのではなかったかと申し訳なく思っています。初めてのライラでまるで受講生そのもので、フワフワとしている間に手際良く受講生達を見守りながら良い方向にと指針を持っておられる水谷さんは頼もしい限りでした。時間に追いまくられ、テレビやCDの音の中でのあわただしい世俗を離れ、四方海に囲まれた自然そのままに近い余島でのセミナーは、普段世間の顔をして、内側に押し込められている本来の自分を取り出し、ほめたり、なぐさめたり、励ましたり、感心したりして、新しい自分を発見したりして、又今からの自分の人生を、勇気と希望とに満ちて前向きに生きていけるものを与えてくれるセミナーでした。受講生の皆さんもきっと、今から歩いて行く道のなかで、いつかきっと、この余島での経験が力になり、励みになり素晴らしい人生舞台での役割を果たすことが出来る。出来てほしいと感じています。こんな素晴らしいセミナーを運営される皆々様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

何の役にも立たない私ですが、これからも末永くよろしくおつき合いお願いします。

大　西　由　紀

私はこのセミナーを受講した事で、たくさんの事を根底から深く考えることが出来たように思います。忙しい日常をただ時間のムダに過ごしていた事に気付いたこと。職場でのトラブルで「あの人がいなければ良いのに」と思ったりしていた事。リーダー活動をしている中で、「自分は何をモットーとして活動しているのだろう」と考えた事。先生方のお話された事全てが、私にあてはまっているのでつくづく、自分の未熟さにため息をつく思いがしました。これからは、職場でもリーダー活動をしている時でも家庭でも友人とでも常に考えながら、自分を燃やして生きてみたいと考えました。今までの自分を思い返して「今まで私はこんな風に相手や物事を受け止めていたけれど、これからはまた違った方向からとらえてみよう」と、前向きに歩いていきたいと思います。いえ、歩いて行けると信じます。今までの自分というカラを打ち破り新しい自分というものが誕生する日も近いと思います。

それから、このセミナーのとても良かった事は、誰とでも気楽に話ができる雰囲気がどこに居ても感じられた事でした。初めて出会った人達と心を開いて話し合い、打ちとけ合った喜びは、本当に大きなものでした。ルームメイトとは楽しく過ごせるだろうかという不安を胸に抱きながら、参加したはずなのに今では、なごりおしいと心から思っています。

4日という短い期間の中で、得たものは大きかったと思います。また、心の元気がなくなってくる時は、セミナーで気付かされた事を思い返し、炎を燃やしていきたいと思います。貴重な体験をありがとうございました。

数　元　彩　子

3月28日、余島に着いた時、非常に不安でした。実際YMCAで活躍しているわけでもなく、地元の青年団のリーダーをしているわけでもありません。周囲を見まわすと私とは正反対のタイプばかりでした。短大を卒業して一年が過ぎ、仕事にも慣れ毎日ダラダラと生活していた私には、自分に厳しく、前向きで真剣に子供たちのためになるように。といつも考えている人たちとの出会いはまさにカルチャーショックでした。職場でも家庭内においても何て私はいいかげんな考え方をしていたのだろう。そう思いました。松原先生や渡辺先生のお話にもありましたが、自分は何のために生まれてきたのか。何をして命を使っていけば良いのか。本当の自分の存在を考えるというチャンスにめぐり合えた事に感謝したいと思います。そしていつもそういった事を考えていれば答は見つからなくても、今までとは違った自分になれそうな気がします。

参加者感想文

忙しい毎日の中で一日に5分でも10分でも自分を見つめ直すことで、心にゆとりを持ちおごる事なく、一つでも誰かの役に立てたらとてもうれしいと思います。

最後に今回のセミナーに参加し、こんなにも素敵な方々に出会えた事が私の中では一番の収穫です。私を推薦して下さった方々に感謝したいと思います。

松　本　明　子

“人とのめぐりあいの不思議に手をあわせよう”最終日の4日間にディーンから聞いたこの言葉に強く共感をおぼえました。みんな四国・関西といろんな地域からたまたま顔を合わせた仲間とここまで親しくなれると思ってもみませんでした。専門学校の先生にインストラクターならぬインチキラクター、またOLにうどん屋の大将。みんなプラス志向でこのセミナーで何かを得ようとキラキラしていました。私もみんなの強いパワーをもらいながら、できる限りチャレンジしてみようと頑張れたんだと思います。またセミナーの内容も思っていた以上にすばらしいものばかりでした。ふだん考えるのを忘れがちになる命の使い方を教えて下さった松原先生、心のゆとりについてのお話を頂いた渡辺先生、さらにフォーラムでははじけながらも真剣に取り組めました。本当に中身の濃い、充実した4日間を美しい余島で過ごすことができてよかったと思います。大学生活では得られないことをこのセミナーで学ぶことができたと思っています。ただ忘れてならないのが、このセミナーで出会った友人、またここで学んだことがこれで終るんじゃなくて、これから始まるんだということです。4日間で終わらしてしまうのはもったいない！ 必ずまたみんなで会いましょう。

三　谷　敏　幸

このセミナーを受講して、色々な事を学び、また色々な事に気づきました。団体生活の中における自分の行動・発言・態度、考えてみれば、やはり、日常生活と同じような態度・行動であった様に思います。ただ、この自然の中で、初めて会う仲間の中で、ありのままの自分を出せた様に思います。多くの出会いの中にも、色々な気づきがありました。楽しい人だなあ、すごい人だなあ、ちょっと苦手な人だなあ、等々、たくさんの人に出会いました。でもそれは、ただ単に人に出会ったのではなく、その人に出会った時に、色々な考え、印象を持った、自分に出会った様に思います。

講演の中でも、多くの学びがありました。特に、渡辺和子先生の「人間の自由とは、諸条件からの自由ではなく、諸条件に対して自分が決める自由である。すなわち、諸条件は変わるものではなく、のがれる事もできない与えられた諸条件に対して、自分がどう

するのか、自分のあり方を決める事は自由に行える。」という話が強く印象に残り、今まで自分自身の頭の中で、もやもやしたものが、パッと晴れた様に思います。

これから、実生活へともどる訳ですが、このセミナーで学んだ事を生かし、そして、「リーダーの心」を充分に自覚し、家庭・会社・地域社会の中で、発揮してゆきたいと思います。

遠　藤　貴　雄

僕は、このセミナーに参加していろいろな事が学べたと思います。講師の先生の話や、フォーラムなどの討論会、また人との出会いなどたくさんいい経験ができました。

3日間の夜のフォーラムでは、「リーダーの心」と題し、各班が一生懸命話し合い、それを発表していろんな意見が交わされました。この討論会は、すごいなあと思いました。

それは、一つの課題に対して、ものすごく真けんに、そして、徹底的に追及するからです。

また、キャビンタイムを通じて、いろいろな人と出会い、学び、そして遊びました。はじめて会った時は、みんなきん張してあまり話さなかったけど、だんだん話しているうちにいつの間にか打ちとけあっていました。ゲームをしたり、毎晩遅くまで酒を飲んだりとすごくいい経験になりました。

僕は、このセミナーにきて、本当によかったと思います。これから、家に帰りますが、このセミナーで学んだことを生かしていきたいと思います。

渡　辺　　暁

今回、参加させていただきありがとうございました。近頃、自然にふれることや、普段の生活からかけ離れて過ごす時間をもっていなかったので、この4日間満喫できた時間を過ごせることができました。

「心」についての講義では、松原哲明さんや、渡辺和子さんは、命を有効に使うようにおっしゃられた。その他にも、ゆとりや、時間の質などのことを気にかけて過ごすようにおっしゃられた。講義の中身もがちがちな、弁論ではなく、誰にでもわかるような言葉で言われたのでよかった。今までに聞いたことのある講義の中にはとてもひどくわかりづらいこともあった。しかし、今回は、全くそういうことはなく、講義を聞いていて心のゆとりというものを持てたような気がした。

レクリエーションの時は、同じグループの方々と一緒に行動した。印象に残ったものは、カヌーに乗れたことだった。以前にも乗ったことはあったが、小学校3年位の時だっ

たのでその時の印象は、乗ったということだけしか印象に残っていない。カヌーに乗った時も心のゆとりをもてたような気がする。

バズセッションとフォーラムの時間は、大変に忙しく思えた。日頃の忙しさでなく、この4日間の中で一番忙しいという意での忙しさである。フォーラムができてよかったと思う。特に「LEADER」という一文字一文字の意味を拾って、日本語での解釈を出せたのが印象に残った。

川　井　富美枝

3泊4日のプログラムは分かっていたが、具体的にどんな内容か等、分からない事ばかりで期待と不安でいっぱいだった。

当日は仕事上の理由で皆さんよりもかなり遅れてよりの参加だったが、何とか輪の中に入れる事も出来た。

講義でいちばん興味深く聞いたのは第1日目の松原哲明氏の話だった。堅苦しいところがなく聞き易く、寝る暇もない（?!）程だった。自身の人生経験の中での悟りを教えて頂き、私にとっても大変プラスだった様に思う。

そして何といってもこの4日間の中でのメインはグループ毎で行う数々の事柄だ。特に自分たちの班は楽しい人たちの集まりだったと思う。毎晩のキャビンタイムでのディスカッション、というより雑談・ゲームは堅苦しくなくて皆が楽しめた様に思う。

後悔しているところが有る。この四日間の中で「自分」が出し切れなかった、という事。消極的だった様に思う。普段の有りのままの自分が出ずに苦しかった。

悔いの残る事は有るが、それでも吸収する部分が沢山有り、学ぶ事が出来た。

もう一つ、自然の雄大さに驚かされた事。海の無い所で生まれ、生活してきた私にとって、この余島の海はドキドキさせられた。

素晴らしい3泊4日の体験だった。

横　目　みどり

私は学校の用事があったので、2日目の朝からこのセミナーに参加させて頂きました。そして一人での参加という事もあって最初はとても不安でした。でも実際に同じ部屋の人や同じグループの人と話をしているとその不安がどこかへ消えていきました。参加者の中には同じ年代の方や、働いている方もいて、学生である私の悩みも聞いてもらい、様々なアドバイスを受けました。そして3日間の講義はどれも考えさせられる事が多く、改めて自分自身の有り方、生命の大切さについて考えさせられました。そして私達はも

のすごい確立この世の中に生命を授かって生きているんだ、決して無駄にはできないという事を強く感じました。又、思索の時間では一人で考え、バズセッションの時間ではグループの中で一つのテーマについて互いに意見を述べたりと、とても内容の濃いセミナーであったように思います。そして、多くの方と知り合えたこと、全く知らなかった方と同じ時間を共有できたことも私にとってプラスになりました。この3泊4日のライラセミナーは、みんなと楽しく話をしたり、時には討論したりと多様な特色を持ってどれもがとても素晴らしいものであったように思います。私はこのセミナーの中で感じたこと、考えたことを帰ってもう一度自分の中で整理して考えてみようと思います。こういう機会を与えてくれた方々に対し、感謝したいと思います。

太　田　俊　児

3月28日～31日の4日間、この余島のYMCA野外活動センターにおいて、セミナーに参加させていただく機会を与えていただきました。松原哲明老師、渡辺和子シスターの講話を拝聴する中で、いかに自分が今まで何も考えずに、無駄な時間を費やしてきたかということを大いに反省し、感じさせられました。また、多くの仲間と夜を徹し語り合ったキャビンタイム。この4日間で学んだことは私のこれからの人生において、かけがいのないものとなりました。「一人は万人のために、万人は一人のために」この精神で、少しでも人の為、世の中の為に役立つ人間形成を目指して命を人生を燃焼させてみたいと思っております。最後になりましたが、お世話いただきました四国・兵庫地区ロータリーの皆様、本当にありがとうございました。

宇加地　泰　輔

このセミナーに参加できた事を非常に嬉しく、また誇らしく思います。私は兵庫県川西地区のボーイスカウトから参加しましたが、これほど様々な職種から、様々なリーダーと呼ばれる人々と時間を過ごすことができ、大変勇気づけられました。普段なにげなく日常生活を送っている中で、何か、自分でもわからない、もやもやとしていたものが、大勢の講師の先生方、また、同じ仲間達のおかげですっきりと解決する糸口を見つけられたように思います。特に印象に残ったのは、フォーラムの中での「良い背中を持つ人が良いリーダーである」。ということでした。難しい専門用語を使うのではなく、本当に簡単な表現で、これほど説得力のある言葉は、私はかつて、経験したことがありませんでした。また各班ごとの意見をまとめる際、本当に心の底から熱く語り明かすことができ、非常に嬉しく思いました。ほんの3泊4日の短い期間でしたが、特にD班の仲間達とは昔

からの親友のように接していただき、感謝しております。明日からは、また私は現実の世界へ戻ります。しかし、今回のセミナーで得た経験は、ボーイスカウトはもちろん、これから生涯を通じて、必ず役立つものだと信じてやみません。初心貫徹という言葉が表すように、今のこの熱い気持ちを生涯貫き通す覚悟で私はこの余島から離れます。そしてまた、このD班の仲間と、必ず再会します。その時に成長している自分を見てもらう為に。

岡　村　紀　子

私は、このライラセミナーの事を全く知りませんでした。まず、名前にしても何の事が、どんな人達が何をしに集まるのか等、いろんな事を考えました。参加するのに不安がありました。けれども、来てみてびっくり、こんなすばらしい体験は初めてと思いました。全く知らない人の中で、自分がこれだけの事ができたのも不思議に思いました。

人それぞれに個性があるにもかかわらず協力し合えた事がとてもうれしいです。バズセッションの時、いろんな意見があり、一人一人考えていることが、違うんだなあと思い、私ももっと視野を広め、聞く耳を持っていろんな事にチャレンジしていこうと思います。

私は、この班の一員でとてもよかったです。カウンセラーの方には心配をかけましたが、(ゲームのしすぎ) 遊ぶ時は遊ぶ、勉強する時は勉強する、誰一人欠けることなく協力し合えたすばらしい仲間と思っています。今思えば、3泊4日が長いと思った事がくやしいです。もっとこの仲間達と一緒に過ごせたらという気持ちでいっぱいです。

シスターの言葉で、「幸せは、相手にしてもらうものではない。自分自身が変わらなければ、幸せにはならない」この言葉が、ライラセミナーには、ぴったりと思います。これからもこの言葉を胸に、多くの仲間を増やしていきたいと思います。

4日間、貴重な体験をさせていただいて、有り難うございました。

谷　岡　史　和

私は今回のセミナーを受講するのにあたって、本当に何も知らなかった。会社の方から行ってきてくれといわれ、しかたなしにきたようなものだった。そして、この余島で他の受講生と集まったときも、ボーイスカウト及びYMCAなどの方が多い中で自分はなぜいるのだろうかとも思った。

しかし、そんな心配はしなくてよかったんだなと1日目で感じた。キャビンで他の3名と、そしてD班全員とあって、話して、仲よくなることができた。

2日目からの講義も、この余島まできて聞いてよかったと思う話だった。老師のユーモアをまじえての、宗派的ではない人間哲学としても話は、宗教というものを考えなおすものだった。人の心を助ける、人を導くということのできる人だと思った。そして、自分もそういう人間にならないといけないと感じた。

3日目のシスターの話もまた、心にひびくものだった。とくに職業に必要でないものはないという言葉は、会社で部所のかわったことがある私にとって、心のささえとなっていたものなので、あらためてその考えがまちがってなかったのだと思った。

レクリエーション、バズセッションなども初めて会った者同志でも中味のある時間をすごせた。

このセミナーにて、リーダーとしての心を学べ、なおかつ、また今度みんなで集まろうといえるような仲間を作れて、受講できたよろこびを帰ってから広めたいと思います。

森　田　和　人

今回、私は、このセミナーに参加する事が決まった時、正直言ってあまり気乗りがしませんでした。仕事も年度末という事で、忙しい時期でしたし、土日がつぶれてしまい、休みがなくなってしまうからです。また、前回参加した人に話を聞いても、けっこうおもしろかったとか、夜は酒飲んでばかりだとかいう話で、私、酒が少しも飲めませんのでそれを聞かされてから、以前にも増して参加するのがイヤになりました。

内容も全く知らず余島へ着き、同室だったカウンセラーの方からセミナーの内容を聞かされ、私はとても驚かされました。なぜなら、スケジュールの大半が自由時間だった為、本当にこれでいいのかなァと思いました。ちょうど半年前、私は、仕事の関係で3カ月の訓練に行っておりました。その訓練の内容は、海洋性スポーツの指導者養成の為の訓練で朝6時30分起床、夜10時消灯でとにかく時間に追われるスケジュールでした。そのイメージが、多少あった為このゆったりしたスケジュールを聞かされ、私自身、かなりとまどいがありました。

しかし、松原哲明師、渡辺和子氏等のお話をお聞きして、私は、心の奥の深い所を、針のような物で刺されたような思いがし、また、今までにない感動をしました。そして、心の底から、今回、このセミナーに参加できた事が幸運であり、感謝の気持ちでいっぱいになりました。本当にお世話になりました。このセミナーのすばらしさを、必ず次の参加者へ伝えたいと思います。また、私も機会があればもう一度参加したいと思います。

参加者感想文

大久保　光　洋

私は専門学校の教員をしております。今回のセミナー参加について上司から話があった時には、セミナーの開講時期には授業があり、参加できないと思っておりました。

また、内心忙しいのに何で自分が行かなければならないのかとさえ思っており、あまりのり気ではありませんでした。

しかし、今はこの4日間のセミナーに参加させて頂いたことに対して大変感謝しております。

未熟ながら、私もクラスの担任として数人の学生の指導をしておりますが、今回のセミナーを通して反省することばかりで、自分の人間としての小ささが恥ずかしく思いました。

また、短期間でしたが集団生活においてのふれ合いや、講演により、人間としての自分自身を見つめ直すことができ、より成長して行けるように思えました。

そして、このセミナーは4日間ではなく、この日から始まったのだと私は思いました。

「リーダーの心とは」のフォーラムでは、色々な意見が出ましたが、自分なりに考えて見るとそれは、人間としての心ではないかと思います。

これから、職場に戻り仕事をして行くのですが、自分自身が得たものはすぐには表には出てこないと思いますが、今回のセミナーで得たものを、忘れず自分自身を成長させ今後に役立てて行き、そして、人間の心とはを、これからも追及して行きたいと思います。

4日間という短い期間でしたが、とても良い経験をさせて頂き本当にありがとうございました。このセミナーでグループになった仲間とも今後会い共に生活し考えたことを忘れずに大切にして行きたいと思います。

永　井　道　子

今回のセミナーへの参加は、本当に不思議な縁でした。昨年の夏、父の代理として参加させていただいたロータリーの青少年交流プログラムでお出会いした方のすすめでした。

参加以前は、ただただ本当におもしろいセミナーで、参加者全員が思い思いに語り、共に数日間をすごすものとだけしか知りませんでした。いざセミナーが始まると、私の想像以上で、日々私が私生活で、職場で、思い悩むものの導きが多くありました。私は自分の時の使い方についてよく考えていました。また、仕事上、人との接し方について悩んでいました。仕事とやりたい事と両方のいそがしさの中で、爆発しそうになるのをおさえていました。そんな折、今回のセミナーがありました。

講義では私の求めているものの答えをいくつか見つけることができました。友と過ご

す時間では、自分の未熟な部分を発見し、また、友の素敵な部分を発見することができました。私達と一緒に参加されたロータリーの皆様からは、いつも守られている心地よさを感じておりました。私は、縁があり、学生時代からYMCAで学び、今回も同じ場で学んでおります。とても多くの目に見えないものに支えられている、守られていることを強く感じております。私が今、感じていることを、持ち続け、他の人々とも共有していくことができれば、と思います。またいそがしい中に戻りますが、日間を大切にしていきたいと思います。

関　　圭　吾

日常の仕事、及び家庭を離れて4日間という短い間ではありましたが、自分、特に日頃の生活を考え、そして見つめなおすよい機会であったと思われます。特に両講師の話には、かなりドキッとさせられる所が多々あり、今現在の自分の生活がいかに目的・考えのないものであるかを痛感させられました。私は会社員で昨年の就職難の時に職を見つけることができましたが、それとて自分がぜひともやりたい仕事という訳で就職してはおりませんでした。そのため社内において納得のいかない所を見つける度に落胆をし、仕事の内容に不満を感じることさえありました。しかし、それでは会社に欠点があるのではなく、自分の心に問題があったということを渡辺氏の講演の中で認識されました。ほんの一年前に入社した時には、自分はどんな気持ちでいたかということを考えた場合、非常に恥ずかしい思いを致しました。また、日常の忙しさにかまけて、自分を振り返ることもせずにいたことが、そして時間を浪費していたということが残念に思えてまいりました。これからは毎日、時間や命の使い方について考えることは難しいと思いますが、本当の意味で少しでもいいから、日間をつくり自分についてよく振り返ってみたいと思います。

そして、新たな友人をつくることができ、年齢、職場、そして様々な生活環境の異なる人達と意見をかわすことができたということは貴重な体験であったと思います。余島を離れて元の生活に戻って、すぐ何かできるとは思いませんが、私にとって今回のセミナーは心の糧、エネルギーになりえたと思われます。諸先輩方、講師の方々、又、スタッフの方々、そして私を推せんして下さったロータリアン、共に過ごした仲間たちにこの場においてお礼を申し上げたい、どうも有り難う。

参加者感想文

今、私は人生の展望台に立たされてしまった。そこに見えるのは世界である。広すぎる。大きすぎて圧倒されている。

まるで、迷路に迷っている者が、その迷路を一望できた気分である。正しい方向が見えない、小さな事にとらわれていた。目先の物しか考えていなかった過去の私がいた場所。この迷路の全貌が見えた。

つまり、人生が見えた。進学のための受験勉強に熱中していた過ぎた日。その時は入学する目標しか見ていなかった。人生の中では、小さな点である。それを、全ての目的と思い込んでいた。狭い視点であった。今は人生が見える。生から死までの一路がある。

人生を大きく見る。小さな視点にとらわれすぎないようにする心構えが必要である。どのような心で生きるか。与えられた命をどう使うか。人生全般を見る広い視野が、私の身に備わった。

大きく世界を見なくてはならない。知識に判断を加えて行動しなくてはならない。今まで、このような広い視野でなかった。そのため、世界の大きさに私は驚いてしまった。それを材料に決断しなくてはならない重さに、私はたえられない。

4日間で、私の視点は大きく変わった。今まで、目前の物ばかり見ていた。全体が見えなかった。人生全体が見えた今、この時から私の人生は新しくスタートする。真に始まる人生である。

地上を歩いていた私は、今上空から地形を見ている。このように私は自分の人生を大きくとらえられた。そこには、より正しく生きるための指針が必要である。その方向のあり方を知った今、私の人生は真に始まったのである。

第18回 RYLA 委員会

ガバナー	第2680地区ガバナー	松岡通夫	(神戸RC)
	第2670地区ガバナー	佐藤成俊	(徳島西RC)
顧問	RI理事	今井鎮雄	(神戸西RC)
	第2670地区パストガバナー	梶浦暲一	(松山RC)
ディーン	第2670地区	篠原成行	(北条RC)
副ディーン	第2680地区	小池弘三	(神戸須磨北RC)
カウンセラー アドバイザー	第2680地区パストガバナー	石井澄	(明石RC)
	第2670地区パスガバナー	佐々木善尭	(西条RC)
セミナー アドバイザー	第2680地区パストガバナー	深川純一	(伊丹RC)
	第2680地区	安平和彦	(姫路RC)
	第2670地区	菊澤建明	(伊予RC)
	第2670地区	吉本功	(高知東RC)

第2680地区

青少年奉仕委員長
井奥寛泰 (姫路南RC)
ライラ委員長
小池弘三 (神戸須磨北RC)
ライラ委員
大村泰司 (高砂RC)
三木明 (姫路RC)
三木且視 (龍野RC)
坂本憲亮 (明石RC)
山口徹 (神戸RC)

第2670地区

青少年奉仕委員長
阿部啓治 (徳島東RC)
ライラ委員長
中島萬里 (徳島西RC)
ライラ委員
杉野温 (高松南RC)
平地保治 (小豆島RC)
中川洋助 (安芸RC)
菅泰博 (新居浜南RC)
有光和雄 (松山南RC)

カウンセラー

赤穂哲 (姫路南RC)
福井博文 (神戸須磨北RC)
山路喜代子 (芦屋川RC会員夫人)
水谷淑子 (神戸垂水RC会員夫人)
塩出卓一 (松山南RC)
永田光春 (新居浜RC)
有光洋子 (松山南RC会員夫人)
弘光妙子 (高知東会員夫人)
三宅文恵 (2670地区GN夫人)
永田志津子 (新居浜RC会員夫人)

主催

R.I.第2680地区

R.I.第2670地区

RYLA運営委員会

RYLA運営事務局

〒650　神戸市中央区港島中町6丁目10－1
神戸ポートピアホテル7階721号室
TEL：078-306-2680　FAX：078-302-8888

〒771-11　徳島市応神町吉成字西吉成43
東光㈱内
TEL：0886-41-4086　FAX：0886-41-4437